

マタイの福音書14章22節～36節「神の子イエス」

1. 人生の嵐

今日の箇所は、先週見た 5000 人の給食の奇跡の後の出来事です。群衆が食べて満腹した後、22 節で「イエスは弟子たちを舟に乗り込ませて、自分より先に向こう岸に向かわせた。そしてその間に群衆を解散させられた。」なぜイエスはそのようにされたのでしょうか。ヨハネ 6 章 15 節を見ると、イエスの奇跡を経験した群衆が、イエスを自分たちの王にしようとしたからです。当時の人々は、救い主とはローマの圧政から自分たちを救ってくれる政治的な王となる人と考えていました。しかし、群衆が考えるような地上の王となるために、イエスはこの世に来られたのではありませんでした。

もし弟子たちがこの場に留まると、群衆の考えに同調してしまう誘惑があることをイエスは覚えられました。そこでイエスは弟子たちを群衆から引き離し、先に舟に乗り込ませました。しかしその結果、弟子たちの舟は一晩中向かい風に悩まされました。24 節「舟はすでに陸から何スタディオンも離れていて、向かい風だったので波に悩まされていた。」1スタディオンは 185 M ですから、舟は 500 M 以上沖合にいました。さてこの時の弟子たちが経験した嵐は、イエスに従ったことによって経験しました。

聖書には二種類の人生の嵐が記されています。一つは神の御心に従わない結果受ける、神懲らしめとしての人生の嵐です。旧約聖書のヨナが経験した嵐はこれです。ヨナは神の命令に逆らい、ニネベに行くことを拒み、舟に乗ってタルシシュに逃れようとした結果、嵐に遭いました。しかし、この神を懲らしめとしての試練を通して、ヨナは悔い改めて、再び神からニネベに行くように言われたとき、神に従いました。私たちも神の御心に従わない結果受ける、神懲らしめとしての試練を受けることがあります。その時には、試練の中で神の前に悔い改め、主の御心の道に戻ることが大切です。

もう一つの人生の嵐が神のみ心に従った結果受ける人生の嵐です。この時のイエスの弟子たちが経験した嵐です。この人生の嵐、試練は、私たちの信仰を成長させるための神の訓練です。イエスは弟子たちがこの後、嵐に会うことは知っておられました。しかしその嵐を通して、弟子たちはイエスへの信仰を成長させることができたのです。そして最後には、33 節で「まことにあなたは神の子です」と言ってイエスを礼拝しました。

実は8章でも、弟子たちはガリラヤ湖の嵐を経験しました。その時イエスが風と湖を叱りつけると、嵐になりました。そのとき弟子たちは驚いて言いました。「風や湖までが言うことを聞くとはいったいこの方はどういう方なのだろうか。」1 回目の嵐の経験では、イエスに対する驚きで終わっていますが、2 回目の嵐の経験を通して、イエスに対する信仰の確信に成長しました。そしてイエスが神の子であるという信仰の確信が、マタイ 16 章 16 節の「あなたは生ける神の子キリストです」という、ペテロのイエスへの信仰告白に繋がっていきました。

イエスは私たちにも、信仰の成長のための訓練としての試練を与られます。その時には、私たちを成長させるための神の訓練であることを覚え、主の助けを頂いて成長していく者となりましょう。

2. イエスと弟子たち

23「弟子たちを解散させてから、イエスは祈るために、一人で山に登られた。夕方になっても、一人でそこにおられた。」イエスはこの時、何を祈っておられたのでしょうか。まずご自分のために祈られました。自分のことを理解しない群衆に対して、どのように接していけばいいのか、また、これから十字架の死に至るまで、どのような働きを続けていけばいいのかについて、父なる神にみ心を求めて祈られました。さらに弟子たちのためにも祈られました。イエスが一人山の中で祈っている間、弟子たちは向かい風の波に悩まされていました。その弟子たちのために祈られたのです。

この光景は、今のイエスと私達の間を表現しています。私たちが地上で人生の嵐に遭い、様々な試練の中にある時、イエスは天で私たちのためにとりなし、私たちが試練で弱り果てることがないように、むしろ試練を通して時には悔い改め、時には主の素晴らしさを発見して成長するように祈っていただきます。そしてイエスは私たちに必要な助けをイエスのみ心の時に与えていただきます。

この時もそうでした。25 節「夜明けが近づいたころ、イエスは湖の上を歩いて弟子たちのところに来られた。」弟子たちは嵐の中で一晩中悩まされていました。ベツサイダから到着するゲネサレまでは、直線距離で 15 km ほどです。しかし舟は向かい風のために、なかなか進まず、陸に戻ることもできませんでした。もっと早くイエスが助けに来られたらいいのと思うかもしれませんが、夜明けが近づいた頃が、イエスの時だったのです。この時何とイエスは湖の上を歩いてこられました。26 節「イエスが湖の上を歩いておられるのを見た弟子たちは、『あれは幽霊だ』と言って怯え、恐ろしさのあまり叫んだ。」弟子たちは、まさかイエスが湖を歩いてこられるとは予想もしていなかったもので、幽霊かと思

ったのです。すると 27 節「イエスはすぐに彼らに話しかけ、『しっかりしなさい。わたした。恐れることはない』と言われた。」このことばで弟子たちは、イエスが助けに来てくださったのだと知って安心しました。

今もイエスは、私たちに同じように語りかけてくださいます。試練の中で恐れ不安に思うとき、イエスは私たちに「しっかりしなさい。わたした。恐れることはない」と言って、イエスが共にいて助けてくださることを知らせてくださいます。イエスは今も、天で私たちのためにとりなし、そしてイエスがよしとされる時に、私たちを必ず助けてくださいます。

3. 信仰のチャレンジ

湖を歩いて舟に来られるのがイエスだと分かったと、ペテロは言いました。28 節「するとペテロが答えて、『主よ。あなたでしたら、私に命じて水の上を歩いてあなたの所に行かせて下さい』と言った。」ペテロは時々、突拍子もないことを言い出します。この時もそうでした。ペテロはイエスが命じてくだされば、自分も湖の上を歩けるのではないかと考えました。これはペテロにとっての信仰のチャレンジでした。他の弟子たちは、そんな危なっかしいことをしようともしませんでした。舟の中にとどまるほうが、よっぽど安全なのです。

イエスはペテロの求めに対して 29 節で「来なさい」と言われました。ですから、イエスはペテロの求めを、信仰から出たこととして、前向きに受け止められたのです。29 節で「そこでペテロは舟から出て水の上を歩いて、イエスの方に行った。」すごい奇跡が起こりました。なんとペテロも嵐の湖の上を歩くことができたのです。30 節「ところが恐怖を見て怖くなり沈みかけた。」イエスを見ている間は歩けたのに、強風を見ると途端にこわくなり、不信仰になって疑いが生じ、沈みかけたのです。

私たちもそうです。「信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい」と今年のみことばにあります。イエスから目を離さなければ大丈夫なのです。しかしイエスから目を離し、私たちが置かれている状況や、自分自身の弱さなどに目を向けると、途端に恐れと不安で沈みかけてしまいます。しかしそんな時には、ペテロのように「主よ、助けてください」と叫べばいいのです。ペテロが「主よ、助けてください」と叫んだとき、31 節「イエスはすぐに手を伸ばし、彼を掴んでくださった。そして言われた。『信仰の薄い者よ。なぜ疑ったのか。』」

ペテロは失敗しました。しかしこの失敗を通していくつかのことを学びました。まず周りの嵐の状況を見、それに心を奪われると不信仰になって、疑いが生じ、沈んでしまうこと。しかし、どんな試練の時でも、イエスから目を離さなければ、歩き続けることができること。そして、「主よ、助けてください」とイエスに助けを求めるなら、イエスが助けてくださるということを経験しました。

32 節「そして二人が舟に乗り込むと、風はやんだ。」ペテロはイエスに手を握られ、イエスと共に水の上を歩くという経験まで出来ました。ペテロは信仰のチャレンジをし、失敗もしたけれど、チャレンジしなければ経験できなかったことを経験し、学べなかったことを学んだのです。ですから私たちも、自分の常識や自分の限界の中に留まるのではなく、主の御心を確認したならば、信仰を持ってチャレンジしていくことが大切です。そうすれば、失敗しても、失敗は成功のもととなり、さらに信仰の成長をしていくことになります。

舟の中にいた弟子たちもこの出来事を目の当たりにして、33 節「舟の中にいた弟子たちは、『まことにあなたは神の子です』と言って、イエスを礼拝した。」ペテロも、そして舟の中にいた弟子たちも、一歩前進の信仰の成長の時となりました。

今世界中の人たちが、新型コロナウイルスという逆風の中を歩んでいます。私たちの教会も、この逆風を受けて、今日から礼拝はしばらくの間、ひとりひとり自宅で持つことになりました。この試練の中で、私たちは何を主から学ぶことができるでしょうか。まず、イエスは天で、私たちのために今日もとりなしてくださるということ。次に、「しっかりしなさい。わたした。恐れることはない」と今日も私たちに語ってくださっていること。さらに私たちも「主よ、助けてください」と主の助けを祈り求めることができること。そして、「まことにあなたは神の子です」と言って、イエスを礼拝することができます。今週も「しっかりしなさい。わたした。恐れることはない」と語ってくださるイエスから目を離さずに、「来なさい」と言われるイエスのもとに行き、イエスと共に歩む者となりましょう。

マタイ15章1節～20節 「罪をきよめるイエス」

1. 神のことばと人間の言い伝え 1—9

ガリラヤ地方で伝道するイエスのことは、エルサレムの宗教指導者たちの耳にも入りました。宗教指導者たちが問題にしたのは、自分たちが教えるユダヤ教の教えをイエスが否定し、律法に従わないことでした。そこでイエスの働きを調査するために、ユダヤ教の中心エルサレムからパリサイ人や律法学者たちがやってきました。そして彼らは、律法に違反するイエスの弟子たちを見て、イエスを非難したのです。2 節「なぜあなたの弟子たちは、長老たちの言い伝えを破るのですか。パンを食べる時、手を洗っていません。」現在新型コロナウイルス感染予防のために、効果的な手洗いの方法が教えられています。石鹸を手のひらで泡立て、手のひらも甲も指も爪も 30 秒ぐらいかけて洗うのが良いとのこと。一方、律法学者が指摘したイエスの弟子たちが食前に手を洗っていないというのは、衛生的な手洗いのことではありません。そうではなく、ユダヤ教のきよめの儀式に則った手洗いのことです。

ユダヤ教では、人々が日常生活の中で、気づかずに汚れた物や汚れた人、罪人、異邦人と接触して、汚れが自分の身についているかもしれないと考えました。そして、もし汚れがついたままで食事をすれば、自分の内側も汚れると考えたのです。ですからそのようなことがないように、食事の前には汚れを取り除くきよめの儀式としての手洗いが必要とされたのです。そして人々は、ユダヤ教の教えに基づいたきよめのための手洗いを行っていたのです。ところがイエスの弟子は、そのような汚れをきよめる手洗いの儀式をしていませんでした。

イエスは 3 節で答えられました。「なぜあなたがたも自分たちの言い伝えのために、神の戒めを破るのですか。」ユダヤ教の教えには、律法と言っても 2 種類あります。一つは旧約聖書、それは神の戒めであり神のことばです。もう一つは長老たちの言い伝え、自分たちの言い伝えです。言い伝えとは、旧約聖書の律法をより厳格に守るために、律法学者たちが作ったさらに細かい規則のことです。その結果、ユダヤ教はその言い伝えの教えを厳格に守る宗教となったのです。その言い伝えは 2 世紀にはミシュナーという文書にまとめられ、さらに 6 世紀にはその解説も加えられてタルムードという書物となりました。この書物が旧約聖書とともにユダヤ教の聖典となり今日に至っています。

イエスはここで律法学者たちに対して、人間が作った言い伝えを重んじ守ることによって、神のことばを破るという本末転倒になっているのではないかと逆に非難しました。そして、4 節 5 節でその一例を挙げられました。「神は父や母を敬え。また父や母をのしる者は必ず殺されなければならないと言われました。それなのにあなたがたは言っています。誰でも父または母に向かって、私からあなたに差し上げるはずのものは、神へのささげものになりますと言う人は、そのものをもって父を敬ってはならないと。」すなわちユダヤ教の言い伝えが、神のことばを守らなくてもよいという抜け道になっていたのです。イエスは律法学者たちの偽善は、イザヤが預言したことだと言われ、イザヤ書 29 章 13 節を引用して語られました。8 節 9 節「この民は口先で私を敬うが、その心は私から遠く離れている。彼らが私を礼拝してもむなしい。人間の命令を教えとして教えるのだから。」

私達はどうでしょうか。ユダヤ教のような言い伝えは持っていないかもしれませんが。しかしもし私たちが、聖書信仰と言いながら、聖書は建前であり、本音はこの世の価値観や自分の考えが中心の生活をすれば、自分たちの言い伝えのために神のことばを無にしてしまう生き方となります。そのようにならないように、神のことばを私たちの人生のすべての領域を支える土台として歩んでいきましょう。

2. 霊的盲人 10—14

イエスが群衆を呼び寄せて話し始めると、12 節で弟子たちが寄ってきてイエスに言いました。「パリサイ人たちがおことばを聞いて腹を立てたのをご存知ですか。」弟子たちはエルサレムからのお偉いさんを怒らせてしまい、大変なことになったのではないのでしょうか。それに対してイエスは 13 節 14 節で言われました。「わたしの天の父が植えなかった木はすべて根こそぎにされます。彼らのことは放っておきなさい。彼らは盲人を案内する盲人です。もし盲人が盲人を案内すれば、二人とも穴に落ちます。」

なぜパリサイ人はイエスに対して腹を立てたのでしょうか。それは彼らが霊的盲人だったからです。霊的盲人とは霊の目が見えない状態の人のことです。すなわち神から離れ、神と神のみこころがわからない人のことです。彼らは霊的盲人だったので、イエスが、神が人となられた真の救い主であることが分からず、イエスのことばを素直に聞くことができず、腹を立てたのでした。一方パリサイ人たちは、自分たちは霊的によく見えていると考えていたので、人々を教え導こうとしました。しかし彼らの案内に従えば、案内する者も案内される者ともに穴に落ちてしまいます。すなわち永遠の滅びに至るということです。

私たちはどうでしょうか。聖書はすべての人は生まれながら罪人であると教えています。ですから私たちも皆以前は霊的盲人だったのです。そのような罪によって滅びに向かう私たちを主は憐れんでくださり、神の恵みによりみことばの光で私たちの心を照らしてくださいました。そして救い主イエスを信じた時に、私たちの霊の目が開かれ、信仰の目をもって神と神のみこころが見えるようになりました。そして私たちがイエスの死と復活の証人として歩み始めると、まだ霊の目が閉じている人にとっては、私たちが伝える福音も、クリスチャンとしての生き方も目障り耳障りに感じるがあります。

今、34年前の朝ドラ「はね駒」が再放送されていて見えています。その中で福島県の相馬に牧師家族が引っ越してきて、仙台からのミッションスクールの教師も時々来て、開拓伝道を始めます。すると明治時代の伝道なのでキリスト教はヤソ教と言われ、ヤソ教を嫌う人達が、路傍伝道をする伝道者に石を投げることもあります。しかしそのような嫌がらせに負けずに伝道していくのです。イエスは言われました。「彼らのことは放っておきなさい。」その意味は、反対する人がいたとしても、神に委ねて信仰に立って歩みなさいということです。あの反対者パウロも、復活のイエスに会って霊の目が開かれました。私たちもそうでした。ですから今反対している人がいても、神の恵みによって、いつ霊の目が開かれるか分からないのです。私たちは他の人のことは気にせず、神に委ねて神に信頼して歩むことが大切です。

3. 心から出るもの 15—20

15 節でペテロがイエスに「私たちにそのたとえを説明してください」と言いました。そのたとえとは、11 節のイエスのことばです。「口に入るものは人を汚しません。口から出るもの、それが人を汚すのです。」そして 16 節からイエスはこのたとえを説明されました。17 節「口に入るものはみな腹に入り、排泄されて外に出されることがわからないのですか。」律法学者たちの教えでは、外についた汚れが口の中に入ってきて人を汚します。ですから外面的な汚れをきよめる儀式が必要となりました。しかしイエスは、汚れ、すなわち罪とは、外側から人の内側に入るものではなく、人の内側すなわち人の心の中から出てくるものだと教えられました。18 節「しかし、口から出るものは心から出てきます。それが人を汚すのです。」人間の罪とは心の中にあり、それが口から出て悪口となり、行いとなって悪い行いをします。19 節 20 節「悪い考え、殺人、姦淫、淫らな行い、盗み、偽証、ののしりは心から出てくるからです。これらのものが人を汚します。しかし洗わない手で食べることは、人を汚しません。」心の中の憎しみや殺意が外に出て殺人となり、心の情欲が外に出て姦淫となります。ですから、いくら外側をきよめても、私たちの罪がきよめられることはありません。

では私たちの心の中の罪はどうしたらきよめられるのでしょうか。それは私たちの罪のために死なれたイエスの血によるきよめ以外にはありません。それ以外にどんな人間の努力やきよめの儀式をしても、私たちの心の中の罪はきよめられません。第 1 ヨハネ 1 章 7 節「御子イエスの血が、すべての罪から私たちをきよめてくださいます。」ヘブル 9 章 14 節「ましてキリストが傷のないご自分を、とこしえの御霊によって神におさげになったその血は、どれだけ私たちの良心をきよめて、死んだ行いから離れさせ、生ける神に仕える者にすることでしょうか。」先日教会台所の作業台をクレンザーで磨いたところ、随分きれいになりました。このクレンザーという英語の動詞クレンジが、英語の聖書の「きよめる」という言葉になっています。私達の心の罪をきよめる、クレンジするのは、イエスの血潮だけです。そのためにイエスは、私たちの罪のために死に、葬られ、三日目によみがえられました。私たちのすべての罪をきよめ赦してくださった救い主イエスに感謝し、今週も十字架を見上げて主と共に歩んでいきましょう。

マタイ15章21節～39節 「立派な信仰」

1. 立派な信仰 21—28

今日の箇所には、イエスの異邦人伝道が記されています。まず 21 節から 28 節は、イエスがガリラヤの北側、地中海沿いにある異邦人の地、ツロとシドンに行かれた時の出来事です。21 節で「ツロとシドンに退かれた」とあるので、積極的に伝道のために行かれたというよりも、しばしパリサイ人たちとの対決を避け、弟子達と静かな時を持つためにこの地に行かれたのでした。すると 22 節で、そこに住むカナン人の女が、イエスが来たことに気づきました。異邦人のカナン人はイスラエル人からは嫌われていました。しかし、カナン人の女は「主よ。ダビデの子よ。私を憐れんでください。娘が悪霊につかれてひどく苦しんでいます。」と言って、叫び続けました。彼女はイスラエルでのイエスの働きをう

わさで聞いて、イエスが救い主だという信仰を持って、イエスのもとに出てきたのでした。彼女は叫び続けました。けれども 23 節「しかしイエスは彼女に一言もお答えにならなかった。」のです。弟子たちは彼女が叫び続けるので、みもとに来てイエスに願いました。「あの女を去らせてください。後について来て叫んでいます。」すると 24 節でイエスは沈黙を破って彼女に答えられました。「わたしはイスラエルの家の失われた羊たち以外のところには遣わされていません。」

確かにイエスの地上での働きには優先順位がありました。それは旧約時代に神の民として選ばれたイスラエル人にも福音を伝えることでした。しかし彼女は諦めませんでした。25 節～26 節「しかし彼女は来てイエスの前にひれ伏して言った。『主よ。私をお助けください。』するとイエスは答えられた。『子供たちのパンを取り上げて、子犬に投げてやるのは良くないことです。』子供たちとはイスラエル人のことで、子犬はカナン人の女のことで。なぜイエスはそのような冷たい態度を彼女に示し続けられたのでしょうか。それは彼女の信仰を試すためでした。イエスは信仰のテストを彼女に与えておられたのでした。そして彼女は、信仰のテストに見事合格しました。イエスのテストに合格した彼女の答えが 27 節「しかし彼女は言った。『主よ。その通りです。ただ子犬でも主人の食卓から落ちるパン屑はいただきます。』」彼女は「自分は異邦人なので、イスラエル人と同じ祝福を頂くことはできません。しかし子犬でも食卓から落ちるパン屑はいただきます。私もイスラエルの祝福のおこぼれを頂きたいのです」と答えたのです。28 節「その時イエスは彼女に答えられた。『女の方、あなたの信仰は立派です。あなたが願う通りになるように。』彼女の娘はすぐに癒された。」

イエスが褒められた彼女の立派な信仰は、私たちも模範にすべき信仰です。では彼女の立派な信仰はどのような信仰だったのでしょうか。一つは「求め続ける信仰」でした。彼女にとっては、イエスを求め続けるには不利な状況が重なりました。まず異邦人であること、次にイエスの弟子たちが「あの女を去らせて下さい」と言っていること。さらにイエスも冷たい態度をとられたこと。それでも彼女は諦めずにイエスに求め続けました。二つ目は「揺るがない信仰」でした。彼女には、イエスは主であり、救い主であり、癒し主であるという揺るがない信仰がありました。その結果、何があっても、何と言われようとも信じ続け、求め続けることができたのです。三つ目は「謙遜な信仰」でした。イエスの前にひれ伏して、子犬と言われてもそれを受け入れ、食卓から落ちるパンくずを下さいと言えるへりくだった信仰を持っていました。その結果、イエスの祝福と恵みが彼女と彼女の娘に注がれたのです。私たちも彼女の信仰に倣い、イエスに求め続け、何があっても揺るがず信じ続け、へりくだってイエスのもとに行く信仰者となりましょう。そしてイエスから、あなたの信仰は立派ですと褒めていただける信仰へと成長していきましょう。

2. 神をあがめる信仰 29—31

29 節から 39 節の箇所も、イエスの異邦人伝道について記されています。29 節「それからイエスはそこを去ってガリラヤ湖のほとりに行かれた。」この出来事の並行箇所マルコ 7 章 31 節を見ると、イエスはデカポリス地方を通り抜けてガリラヤ湖に来られたとあります。ですからイエスはこの時、ガリラヤ湖東側のデカポリス地方の岸辺の丘に来られたことがわかります。実はマタイ 8 章 28 節以下で、イエスはこの地の墓場に住む悪霊につかれたガラタ人(マルコではゲラサ人)を癒されたことがありました。その時悪霊が豚の群れに乗り移って、湖で溺れ死にました。マルコの 5 章によると、その時癒された人は、イエスにお供したいと願いましたが、イエスはそれを許さず、自分の家に帰って主の恵みを知らせなさいと言われました。彼はその通りにし、イエスがどれほど大きなことをしてくださったかを、デカポリス地方で言い広めたのでした。その結果、デカポリス地方の異邦人も、イエスのことを知るようになりました。そのため、イエスが来られたことを知った、男だけでも 4000 人の大勢の群衆がこの時集まったのでした。(38 節)人々は体の不自由な人たちをイエスのみもとに連れてきました。イエスはイスラエルで行ったと同じように彼らを癒されました。その結果 31 節の後半で、人々は「イスラエルの神をあがめた」のでした。

この箇所で覚えたいことは、まず一人の人の証しの影響力の大きさです。墓場で悪霊につかれた人が癒され、彼がイエスの証人となって語った証しが、デカポリス地方の多くの人々がイスラエルの神をあがめるという結果となったのです。私たちの証しも、どのように用いられるか分かりません。イエスが私にこんなに素晴らしい救いを与えてくださったという個人的な証しを主は用いてくださり、人々をイエスのもとに導いてくださることを覚えて、私達も喜びをもって主の救いの恵みを証ししていきましょう。

もう一つの事は、イエスが来られたことによって、神の救いが異邦人にも広がっていったことです。実は旧約時代に神がイスラエルの民を選ばれたのも、イスラエルを通してすべての人が真の神を知り、真の神のもとに帰って来るためでした。しかしイスラエル人は、自分たちこそ神の民だと誇った結果、異邦人を蔑み、異邦人に証しする使命を忘れてしま

いました。しかしイエスは今回の異邦人伝道を通して、神の救いはユダヤ人にも異邦人にも与えられることを教えられました。そしてやがて聖霊が降り、教会が誕生すると、教会は全世界に福音を宣べ伝えるという使命をイエスから与えられました。いま、世界中の人たちが困難な状況にある中で、クリスチャンの証しが、人々に揺るがない希望を与えることを覚えて、私達のできる証しをしていきましょう。

3. イエスのあわれみ 32－39

この箇所は「4000 人の給食の奇跡」と呼ばれる箇所です。14章の「5000 人の給食の奇跡」とは別の出来事です。32 節「イエスは弟子たちを呼んで言われた。かわいそうに、この群衆はすでに三日間わたしと共にいて食べるものを持っていないのです。空腹のまま帰らせたくはありません。途中で動けなくなるといけないから。」「かわいそうに」という言葉は、9 章 36 節で「深くあわれむ」と訳されているのと同じ言葉です。イエスはイスラエル人を深く憐れまれたと同じように、異邦人も深く憐れんでくださいました。そしてこの時、群衆の空腹を満たしたいと願われました。それに対して 33 節「弟子たちは言った。この人里離れたところでこんなに大勢の人に十分食べさせるほどたくさんのパンをどこで手に入れることができるでしょう。」弟子たちは 5000 人の給食の奇跡をもう忘れてしまったのでしょうか。あるいは弟子たちは異邦人に対して未だ偏見を持っていたので、イエスが異邦人に対しても同じ奇跡をされるとは思えなかったのかもしれませんが。弟子たちはこの時、消極的な態度を取りました。しかしイエスは違いました。34 節「パンはいくつありますか。」と尋ね、「7 つです。それに小さい魚が少しあります」と弟子たちが答えると、群衆を地面に座らせました。(35 節)そして 36 節「そして 7 つのパンと魚を取り、感謝の祈りをささげてから、それを弟子たちにお与えになったので、弟子たちはそれを配った。」すると奇跡が起こりパンと魚は増え、37 節「人々は皆食べて満腹した。そして余ったパン切れを集めると、7 つのかごがいっぱいになった。」

イエスの憐れみ、イエスの愛は、全ての人に与えられています。そして私たちがイエスのもとに信仰によって行くなれば、イエスの愛を心の満腹状態になるまでいただくことができます。お腹の満腹は、時間が過ぎるとまた空腹になりますが、イエスの愛を心にいただくとき、私たちの心は生涯、イエスの愛で満たされます。イエスの愛は十字架の愛です。私たちが愛し、私たちを救うために、私たちの罪のために死んで救いを成し遂げてくださった愛です。このイエスの愛を知るとき、私たちもあのカナン人の女のように、イエスに求め続け、揺るがない信仰で信じ続け、へりくだる信仰を持って歩んでいくことができます。「主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。」(哀歌3:22, 23)今週もイエスを見上げ、私たちがどんなに主に愛されているかを覚えながら、イエスの証人として遣わされて行きましょう。

マタイ16章1節～12節 「時のしるし」

1. 時のしるし 1—4

15 章 39 節を見ると、イエスはガリラヤ湖東岸から、舟で西側のマガダン地方に行かれました。すると、待ってましたとばかりに、パリサイ人とサドカイ人たちがイエスを試すために近づいてきました。ここで初めてサドカイ人が登場します。サドカイ人とはサドカイ派に属する人たちで、祭司の家系の上流階級の人達でした。彼らはパリサイ人が信じる律法学者の言い伝えを認めず、み使いや霊の存在、神のさばきや肉体の復活も信じませんでした。最高法院の議員にもサドカイ人がいて、宗教的政治的にも、パリサイ人と対立していました。ところが、イエスに敵対する点は共通していたので、パリサイ人とサドカイ人は協力して、イエスを試み、捕らえる口実を得ようしました。

彼らは1節でイエスに、「天からのしるしを見せて欲しい」と求めました。しるしとは脚注にあるように、証拠としての奇跡という意味です。ここではイエスに、救い主である証拠としての奇跡を見せてほしいと言ったのです。彼らはイエスが行った病人や悪霊につかれた人の癒しは、ベルゼブルすなわちサタン力によるものだと、救い主のしるしとは認めませんでした。そこでもっと大きな天からのしるしを求めたのです。それに対してイエスは 2 節 3 節でこう言われました。「夕方になるとあなたがたは夕焼けだから晴れると言い、朝には朝焼けでどんよりしているから、今日は荒れ模様だと言います。空模様を見分けることを知っていながら、時のしるしを見分けることはできないのですか。」

イエスはここで、すでに時のしるしが与えられていると言われました。時のしるしとは、イエスが救い主としてこの世に来られたことを示すしるしです。それはイエスの奇跡のわざだけではなくありません。旧約聖書の預言の成就としての、

バプテスマのヨハネの働きや、イエスの生涯とイエスの教えや働きのすべてです。そのような時のしるしがすでに示されているのに、まだイエスが救い主であることがわからないのかとイエスは言われたのです。そしてさらに 4 節で言われました。「悪い姦淫の時代はしるしを求めます。しかし、ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられません。」ヨナのしるしについては、既に 12 章 39 節 40 節でイエスが教えられました。それはヨナが三日三晩大魚の腹の中にいたように、イエスも三日三晩地の中にいるという、イエスの死と葬りと復活のしるしです。これがイエスが真の救い主であるという最大で最終的なしるしです。これ以上のしるしはありません。

私達はイースター礼拝で第 1 コリント 15 章からこのしるしを覚えました。「キリストは、聖書に書いてある通りに、私たちの罪のために死なれたこと、また葬られたこと、また聖書に書いてある通りに、3 日目によみがえられたこと」これが聖書の中で最も大切な福音のメッセージです。イエスが真の救い主であるという時のしるしは、聖書の中にたくさんありますが、最終的なしるしはイエスの死と復活です。そしてイエスの死と復活によって成し遂げられた救いこそ福音なのです。この福音を信じる時に、私たちは誰でも救われます。今日もイエスの死と復活によって成し遂げられた罪と死からの救いが、私たちに与えられていることを心から感謝しましょう。

2. 信仰の薄い人たち 5—12

5 節でイエスは再びガリラヤ湖の向こう岸東側に渡りました。それは急なことだったようで、弟子たちはパンを持つてくるのを忘れてしまいました。その時イエスは 6 節で言われました。「パリサイ人たちやサドカイ人たちのパン種にくれぐれも用心なさい。」7 節「すると彼らは『私達がパンを持ってこなかったからだ』と言って、自分たちの間で議論を始めた。」弟子たちの関心が、今の状況、すなわちパンを忘れたことのみに向かっていたので、イエスの言葉を早とちりしたのです。そして、イエスがパンを忘れたことを言っておられると思い、誰の責任かと議論し始めたのです。それに気づいて、イエスは 8 節から言われました。「信仰の薄い人たち。パンがないからなどと、なぜ論じ合っているのですか。」

まだわからないのですか。5 つのパンを 5 千人に分けて何かご集めたか、覚えていないのですか。7 つのパンを 4 千人に分けて何かご集めたか、覚えていないのですか。わたしが言ったのはパンのことではないと、どうしてわからないのですか。パリサイ人たちとサドカイ人たちのパン種に用心なさい。」「その時彼らは、用心するようにとイエスが言われたのはパン種ではなく、パリサイ人たちやサドカイ人たちの教えであることを悟った。」パリサイ人やサドカイ人の教えに用心すべきことについては 第 3 の点で学びます。第二の点では、弟子たちがパンの奇跡から学んだことを、この時生かすことができなかったことを見たいと思います。イエスは 9 節から 11 節で「まだわからないのですか。覚えていないのですか。覚えていないのですか。どうしてわからないのですか」と繰り返し言われました。またイエスはここで弟子たちのことを「信仰の薄い人たち」と言われました。彼らはイエスに対する信仰を持っていました。しかしその信仰は薄かった、すなわち未だ十分な理解と実生活への適用に欠けていたのです。そのような状態が「わからない、覚えていない」という信仰の薄い状態だったのです。覚えていないとは、イエスに指摘されれば確かに覚えていますが、自分からは思い出せなかったのです。分からないとは、過去の経験から教えられたことを、今の状況に適用して生かすことができなかったということです。この時、もし弟子たちがパンの奇跡を思い出し、イエスは奇跡によってパンを与えることができるお方だから、心配する必要はないと分かっていたら、イエスの言葉を早とちりすることはなかったでしょう。しかし弟子たちはそれができませんでした。

私達も同じようなことはないでしょうか。みことばは知っています。しかし、様々な日常の出来事や困難な状況の中で思い出せず、適用することができない。あるいは過去に経験したことから学んだ教訓、神から受けた信仰のレッスンから得た知恵を、今日の出来事に生かすことができないという、覚えていない、分からない状態に陥ってしまうことがあるのではないのでしょうか。そうであれば、私達も信仰の薄い人々です。では、覚えている、わかるためには、どうしたらいいのでしょうか。いくつかのことを覚えることができます。一つは、今置かれている自分の状態だけに目を向けて、慌てて判断しないことです。二つ目は、まず神に祈って考える時を持つことです。覚えていることはないか、分かることはないかと、主の知恵を求めることです。三つ目は、思い出したみことばや過去の経験を通して神から教えられた知恵を、今の状況に適用して生かすことです。これらのことはだれにでも必要ではないのでしょうか。私達も、イエスの「覚えていないのですか」「分からないのですか」という御声を聞いて、思い出し、分かる、と言える信仰者に成長していきましょう。

3. 用心すべき教え

弟子たちは、イエスがパリサイ人やサドカイ人の教えに用心するようと言われたことがわかりました。そしてそれは今日の私たちに対しても教えられているイエスの教えです。イエスはここで彼らの教えをパン種と言われました。それは少量のパン種がパン生地を大きく膨らませるように、彼らの教えも気をつけなければ、あつという間に広がっていくということです。パリサイ人やサドカイ人の教えも聖書を用いていますが、イエスの教えとは似て非なるものです。ルカの福音書 12 章 1 節では、イエスはパリサイ人の教えは偽善だと言われました。サドカイ人の教えも同じです。しかも両者とも、イエスを救い主と認めず、協力してイエスを殺すことを計っていたのです。そのような彼らの教えにはくれぐれも用心しなければなりませんでした。

教会の歴史を振り返ると、異端の教えから教会を守るという大切な働きがありました。どの時代にも聖書を用いながらもキリストの福音を否定する教えがありました。教会はその都度、聖書が教える正しい福音、正しい教理を確認しながら、異端の教えの誤りを指摘してきました。今日もエホバの証人、モルモン教(正式名は末日聖徒イエスキリスト教会)、統一協会(正式名は世界平和統一家庭連合)などのキリスト教の異端があります。韓国のテグでクラスターが発生し、一躍有名になった新天地イエス教もキリスト教の異端です。これらの異端は、聖書を用いながら、一方で別の聖典や指導者の教えを信じているので、全く別物の信仰になっています。私たちはこれらの異端の教えには用心しなければなりません。

その他にも用心しなければならない様々な教えがあります。戦前戦中の日本の教会は、当時の国家主義を受け入れ、戦争協力と神社参拝という偶像礼拝の罪を犯しました。当時は国家による宗教統制と従わない者への厳しい弾圧があったとはいえ、教会の中にこれらの教えが入ってきて、教会は罪を犯す結果となりました。今日は憲法記念日です。現在の憲法は、国民主権、基本的人権の尊重、平和主義の原則のもと、政教分離や信教の自由などが定められています。これらの憲法の原則や条文は、聖書の教えや歴史の反省から見ても大切に守るべきものです。私たちは再び戦前の状態に逆戻りすることがないように、くれぐれも用心しなければなりません。そのためにも私たちは聖書にますます精通し、主のみこころを知り、それを私たちの生活と今日の社会に適用することができるよう、信仰の成長を共にしていきましょう。

今週も死からよみがえられ、今も生きて私たちを救い、日々助けてくださる主イエスに信頼して歩んでいきましょう。

マタイ 16 章 13 節～20 節「生ける神の子キリスト」

1. イエスへの信仰告白 13～17

イエスは弟子たちとガリラヤ湖から 40 km 北にあるピリポ・カイサリアに行かれました。この町はギリシャ文化の影響が強く、ギリシャの神パンの祭壇がありました。さらにはローマ皇帝の像を祭った神殿があり、皇帝崇拝が行われていました。そのような偶像礼拝が行われている町で、イエスはペテロの信仰告白を引き出され、ご自分が生ける神の子キリストであることを明らかにされたのです。イエスはまず弟子たちに対して 13 節で、「人々は人の子を誰だと言っていますか」と尋ねられました。すると 14 節で弟子たちは人々の意見を伝えました。①バプテスマのヨハネ:バプテスマのヨハネを殺した領主ヘロデもバプテスマのヨハネがよみがえったと考えました。②エリヤ:旧約聖書マラキ書には救い主が来られる前にエリヤが来ると預言されています。③エレミヤ:旧約外典と呼ばれる書物の記述から、エレミヤが救い主の前に来ると人々は信じていました。④預言者の一人。このように人々はイエスが誰かについて様々な意見を持っていました。

次にイエスは 15 節で弟子たちの考えを聞かれました。「あなたがたはわたしを誰だと言いますか。」すると 16 節でシモン・ペテロが弟子たちを代表して答えました。「あなたは生ける神の子キリストです。」17 節 するとイエスは彼に答えられた「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかにしたのは、血肉ではなく、天におられるわたしの父です。」イエスは、ペテロがご自分に対するこの信仰告白ができたのは、人間の理解や判断に依ったのではなく、神が教えてくださったからだと言われました。そしてイエスに対する信仰告白をしたペテロは幸いだと言われたのです。

ではペテロが告白したイエスへの信仰はどのようなものだったのでしょうか。①イエスは生ける神であるという信仰です。いのちのない偶像ではなく、人間の皇帝でもなく、預言者の一人でもなく、イエスは天地を造られ今も生きておられる創造者なる神なのです。②イエスは神の子であるという信仰です。イエスは父、子、聖霊の三位一体の神のうちの子なる神なのです。③イエスはキリストであるという信仰です。キリストとは救い

主という意味です。イエスは子なる神が人となってこの世に来られた救い主なのです。これこそイエスとは誰かを明らかにしている確かな答えであり、私達が救われるために持つべき信仰です。

イエスは今日も私たちにも同じように聞かれます。「あなたはわたしを誰だと言いますか。」今日皆さんはこのイエスの問いかけにどのように答えるでしょうか。今も人々はいろんな意見を持っています。イエスはキリスト教の創始者、偉大な宗教家、道德家、博愛主義者。教会に来る前は、私達もそのように思っていたかもしれませんが。しかし教会に来て、聖書を読み、イエスのことを聖書を通して知ると、神が私達にもイエスとは誰かを教えてくださいました。それはペテロがこの時告白したと同じ「あなたは生ける神の子キリストです」というイエスへの信仰です。偶像に満ちている日本で、「イエスは生ける神の子キリストです」という信仰を告白することができたのは、神が私たちに聖書を通して個人的に教えてくださいましたからです。その結果私たちは救われました。私たちもペテロと同様になんと幸いな者でしょうか。

2. この岩の上に 18

イエスはペテロの信仰告白に対する応答として、教会についての真理を教えられました。18節で初めて教会という言葉が出てきます。18節「そこでわたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。よみの門もそれに打ち勝つことはできません。」ペテロとは聖書のギリシャ語で石という意味で、イエスがシモンに付けられた名前です。イエスはここで石を意味するペテロと、岩を意味するペトラを語呂合わせして語られました。「わたしはこの岩(ペトラ)の上にわたしの教会を建てます。」ではこの岩とは何のことでしょうか。カトリック教会は、岩はペテロのことだと理解し、ペテロの上に教会が建つと考えて、ペテロを最初の教皇としました。そしてその後の教皇をペテロの後継者としています。しかし、日本語でも小さい石と大きい岩を同じ意味で用いないように、ギリシャ語でも石を表すペテロが、岩を表すペトラに用いられることはありません。

ではイエスがここで言われた「この岩」とはいったい何のことでしょうか。二つのことが考えられます。

①ペテロが直前に語った「あなたは生ける神の子キリストです」というイエスへの信仰告白です。教会は「イエスが生ける神の子キリスト」であるという信仰告白の上に建つということです。②ペテロが信仰を告白した「生ける神の子キリスト」の上に教会は建つということです。どちらも直前のペテロの信仰告白から教えられる教会の土台としての岩です。プロテスタント教会はこの二つの理解をしています。さらにイエスはここで教会を「わたしの教会」と言われました。教会とはイエスがご自身の血をもって贖われた人々の集まりであり、イエスのものです。決して人間の所有物ではありません。私たちは自分の教会を親しみをもって「私の教会」と言いますが、私の教会はイエス・キリストの教会です。イエスが教会のかしらであり、教会の主です。またイエスが教会の土台です。私たちはこのイエスによって招かれ、贖われ、キリストのからだなる教会の一員とされました。さらにイエスは、「よみの門もそれに打ち勝つことはできません」と言われました。よみとは死者の魂が行く場所です。使徒信条では「キリストは…死んで葬られ、よみにくだり、三日目に死人のうちからよみがえり」と告白します。イエスが復活してよみの力に打ち勝たれた結果、イエスを信じる者も、よみの力に打ち勝つ者とされました。ですからイエスの救いをいただいた者の魂は、死後よみに行くことはなく、直接天国、パラダイスに行くことができるようになったのです。そのようなよみに打ち勝ったキリストの教会の一員とされた救いの恵みに心から感謝しましょう。

3. 天の御国 19

皆さんは家の鍵を持っていることでしょう。そしてその鍵でドアを閉め、帰宅した時には鍵でドアを開けて家の中に入ります。もし鍵をなくしたら家に入れなくなり大変です。イエスは19節で天の御国の鍵について教えられました。天の御国の鍵はどのような鍵でしょう。19節「わたしはあなたに天の御国の鍵を与えます。あなたが地上でつなぐことは天においてもつながれており、あなたが地上で解くことは天においても解かれます。」つなぐは禁止する、解くは許可するという意味の言葉です。天の御国の鍵は、地上で人々が天国に入れるかどうかを決定する力があるものなのです。

では天の御国の鍵とは具体的に何のことでしょうか。それは人々を救うキリストの福音のことです。イエスはこの福音をペテロに与えると言われました。そしてそれはペテロだけでなく、ペテロが代表する使徒たちに、さらにはイエスを信じるすべてのクリスチャンに、すなわち教会に与えられました。私たちが宣べ伝える福音を信じて、イエスを自分の救い主と信じ心に受け入れる人は、信じた瞬間に天の御国に入り、御国の一員とされます。そしてその人が死ぬ時には、よみに入るのではなく、永遠の天の御国に入ることができるのです。しかし、天の御国の鍵である福音を信じず、受け入れないなら、その人は神に受け入れられず、天の御国はその人に対して閉じられます。福音こそ天の御国の鍵なのです。私たちの地上での生涯に対する神の祝福だけでなく、永遠の祝福を与えるものであることを覚えるとき、天の御国の鍵である福音を信じるのがどんな

に大切であるかを覚えます。さらに救われた者にとっては、私たちに委ねられている天の御国の鍵である福音を人々に伝えることが、どんなに大切な働きであるかも覚えることができます。

今日は母の日です。子供の成長において母親の影響は本当に大きいものがあります。誰も完全な母親はいません。皆いろいろと失敗し、試行錯誤しながら子育てをしています。そんな中でクリスチャンの母親にとって大切なことは、まず自らが日ごとの霊の糧を神様から十分いただくことです。聖書を読み、祈って、神との交わりを深め、神の愛と知恵と力を日々十分にいただくことです。次に大切なことは、子供たちに天の御国の鍵である福音を伝えることです。子供とともに祈り、みことばを伝え、イエスを信じることの幸いを分かち合うことです。そしてやがて子どもたち自身がイエスに対して「あなたは生ける神の子キリストです」という信仰告白ができるように励ましてあげることです。第二テモテ1章5節でパウロは、テモテの信仰は祖母ロイスと母ユニケから受けたものであると言っています。母親と祖母がテモテにイエスへの信仰を伝えたことによって、テモテも天の御国の鍵を受け取ることができました。さらに天の御国の鍵である福音を人々に伝える者となりました。子供たちや次の世代に福音を伝えることは、母親に限らず、父親にとっても、そしてすべてのクリスチャンにとって大切なことです。

今日私達は、イエスを生ける神の子キリストと信じ、天の御国の鍵を受けて救われた幸いを覚えましょう。そしてさらに、天の御国の鍵である福音を伝える使命が与えられている幸いも覚えて、今週も主の証人として遣わされていきましょう。

マタイ16章21節～28節「イエスの弟子」

1. 死と復活の予告 21

今日の箇所は先週に続きピリポ・カイサリアでの出来事です。ペテロのイエスに対する信仰告白への応答として、イエスはご自分の死と復活をここで初めて予告されました。21節「その時からイエスは、ご自分がエルサレムに入って、長老たち、祭司長たち、律法学者たちから、多くの苦しみを受け、殺され、三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。」長老、祭司、律法学者はユダヤの最高法院のメンバーで、祭司長はサドカイ人、律法学者はパリサイ人、長老はその他の議員です。やがて、イエスは最高法院によって死刑に定められ、最終的にローマ総督ピラトの決定によって十字架につけられました。イエスはあらかじめ弟子たちに、ご自分の苦しみと死と復活があることを告げられたのです。「なければならない」とイエスは言われましたが、それはイエスが救い主として、人類の救いを成し遂げるための神の計画であり、十字架の死と復活は、救いを成し遂げるためにどうしても必要だったのです。

イースター礼拝の時に、第一コリント15章から聖書の中の最も大切な福音について学びました。それは「キリストは聖書に書いてある通りに、私たちの罪のために死なれたこと、また葬られたこと、また聖書に書いてある通りに、3日目によみがえられたこと」です。イエスは公生涯の中で、いつも心はご自分の死と復活に向けられていました。なぜなら、これこそイエスが救い主として、どうしてもしなければならないことだったからです。

先日、三浦綾子の「千利休とその妻たち」という本を読みました。利休は有名な戦国時代の茶人です。この小説の中で、利休の後妻と娘はキリシタンでした。ある時利休は一緒に教会に初めて行きました。すると正面に十字架につけられたキリスト像がありました。それを見た時利休は、「キリシタンは、自分たちの信じるキリストの恥をさらして何とも思わぬのか」と思いました。なぜなら、十字架刑はこの上ない恥辱の姿であり、日本人にとって、恥をこうむるほど大なる屈辱、無念はないからです。利休は、キリシタンは一体恥を何と心得ているのかと不審に思いました。しかし、司祭の説教を聞いて納得しました。「なるほど、十字架にさらされねばならなかったのは、キリストではなく人間であった。人間の身代わりになって、キリストが十字架にかかってくださったということなのだ。」これは三浦綾子が、小説の中で利休を通して語る福音の証しのことばです。

今朝も、私達は十字架の主イエスを仰ぎましょう。本来なら、十字架にさらされなければならなかったのは、キリストではなく罪人の私たちでした。それなのに、私たちの身代わりに、イエスが十字架にかかり、私達の罪を贖ってくださいました。さらに三日目によみがえり、死とよみに打ち勝ち、私たちにも死とよみに対する勝利を与えてくださ

いました。第一コリント 1 章 18 節「十字架のことは、滅びに至る者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力です。」今日も、神の力である十字架のこばによって救われた恵みを、心から主に感謝しましょう。

2. 神の思いと人の思い 22-23

イエスから死と復活の予告を聞いた時、ペテロがすぐに反応しました。22 節 するとペテロはイエスを脇にお連れして諫め始めた。「主よ。とんでもないことです。そんなことがあなたに起こるはずがありません。」ペテロにとって、イエスが殺されるなどとは考えることもできないことでした。ですから「イエス様に限ってそんなことは起こるはずがないのですから、そんなことは言わないでください」とイエスをいさめ始めたのです。それに対するイエスの反応が 23 節です。しかしイエスは振り向いてペテロに言われた。「下がれサタン。あなたはわたしをつまずかせる者だ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」これはペテロに対するイエスの厳しい叱責のことばでした。ペテロは自分がサタンと言われたのに驚いたに違いありません。少し前にイエスに対する信仰告白をした時、ペテロはイエスから「あなたは幸いです」と褒められました。ところが今度は「下がれサタン」と言われたのです。このイエスのことばに、ペテロの高くなった鼻はへし折られたことでしょう。イエスのことばによれば、ペテロは神のことを思わないで、人のことを思っていたのです。ペテロはまず、イエスに対する愛情からイエスが殺されるなどあってはならないと考えました。さらに、ペテロの救い主に対する理解が未熟だったのです。つい先ほどペテロは、イエスは生ける神の子キリストと告白しました。しかしペテロには、苦難と死と復活というキリストの理解は未だなかったのです。そしてそれはペテロだけでなく、当時のユダヤ人にとっても同じでした。しかしそれは神の思いではなく、人の思いだったのです。サタンにとっては、キリストが十字架で死んで人類の罪を贖い、復活して死に打ち勝つという神の救いの計画を、何としても止めたかったのです。そこでイエスの愛弟子の思いを用いて、神の救いの計画を止めさせようとした。イエスはそのサタンの策略を知り、ペテロをしかり、十字架の道を全うするために、やがてエルサレムに向かって行かれるのです。

私たちが気をつけないとペテロと同じ失敗をすることがあります。私たちが様々なことを考えて決める時に、神のことを思っているのか、あるいは人のことを思っているのか、別の言い方をすれば、神の思いを求めているのか、あるいは自分の思いを求めているのかを考えなければなりません。そして神の思いに従うためには、どんなことでもまず立ち止まって、祈って主のみこころを求めることが大切です。人の思いではなく、神の思いを行う者となりましょう。

3. イエスの弟子 24-28

イエスは、ご自分の死と復活を予告された後、イエスに従う弟子としての生き方を教えられました。24 節「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」「自分を捨てる」とは、自分第一、自己中心の生き方を捨て、神第一、神中心の生き方をすることです。次の「自分の十字架を負う」とは、一つには「自分を捨てる」と同じ意味があります。ガラテヤ 2:19 でパウロが「私はキリストとともに十字架につけられました」と言っているように、私たちが自己中心の古い人に死に、神中心の新しい人に生きることです。もう一つの意味はイエスの弟子として、イエスのための苦しみを負って生きることです。イエスの弟子たちは、この後イエスを信じて伝道した結果、様々な苦難を経験し、殉教し、あるいは島流しに会います。それは 25 節のイエスのことばに通じます。25 節「自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者はそれを見出すのです。」殉教者は地上のいのちを失っても永遠のいのちを見出しました。私たちは信仰のゆえに殉教することはないかもしれませんが、しかし、イエスに従う道を選ぶなら、信仰のために喜びだけでなく、苦しみや苦労も経験するのです。それは避けて通れないイエスの弟子の生き方です。そのためには古い肉の思いに死に、神のみこころを第一に求めてイエスについていく信仰が必要です。26 節「人はたとえ全世界を手に入れても、自分のいのちを失ったら何の益があるでしょうか。そのいのちを買い戻すのに、人は何を差し出せば良いのでしょうか。」今日の世界は、少しでも多くの利益や収入を得ようと多くの人が励んでいます。しかし、たとえ全世界を手に入れたとしても、永遠のいのちを失えば何の益があるでしょうか。死ねば地上の富はその人に何の益ももたらしません。死後に価値があるのは永遠のいのちだけです。その永遠のいのちをイエスから頂くこと

に無関心で生きてはいけないのです。27 節「人の子はやがて父の栄光を帯びて御使いたちとともに来ます。そしてその時には、それぞれの行いに応じて報います。」イエスを信じて永遠のいのちをいただく者は、天国に行くことができます。しかしそれだけではありません。イエスが再臨され、私たちの肉体が復活し、天にある魂と再び一つとされて、新しい天と新しい地に入る時、イエスは私たちの地上での生涯に対する報いを与えて下さるのです。その時、自分を捨て、自分の十字架を負って、イエスに従っていく人生は報われます。イエスのために殉教した人の苦しみと死に対して、イエスは報いてくださいます。イエスのために苦勞した人のその苦勞に、イエスは報いてくださいます。自分の思い、自分の願いではなく、神の思い、神のみこころに従って生きた人に、イエスは報いてくださいます。イエスはご自分の弟子に、永遠のいのちとともに、報いという追加の祝福を与えてくださるのです。そのために、イエスは私たちのこの世の苦勞や犠牲をちゃんと覚えていてくださるのです。私たちが忘れていることも、周りの人が知らないことでも、ちゃんと覚えて報いてくださいます。そのことを覚える時に、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい」というイエスの招きに対して、喜んで「イエス様。あなたに従って行きます」と応答できるのではないのでしょうか。今週も十字架の主を見上げながら、イエスに従う弟子として遣わされていきましょう。

マタイ17章1節～13節 「イエスの栄光」

1. イエスの栄光 1ー4

イエスはピリポ・カイサリアで、ご自分が「生ける神の子キリスト」であることを、ペテロの信仰告白を通して現されました。その後の出来事が 17 章に記されています。1 節「それから 6 日目に、イエスはペテロとヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。」この高い山とは、ピリポ・カイサリアからさらに 20 キロ北にあるヘルモン山だと考えられています。ヘルモン山は標高2814mで、山頂は一年のほとんどが雪で覆われています。その雪解け水がヨルダン川の源流となっています。イエスはペテロとヤコブとヨハネの 3 人の弟子だけを連れて、山に登られました。2 節「すると、弟子たちの目の前でその御姿が変わった。顔は太陽のように輝き、衣は光のように白くなった。」突然、イエスの姿が変わり、神の栄光の姿となり、顔は太陽のように輝き、衣は光のように白くなったのでした。この出来事はキリストの変貌と呼ばれます。それはイエスの地上の生涯で、ただ一度この時だけ、イエスがもともと持っておられた神の栄光を現された出来事でした。

3節「そして、見よ、モーセとエリヤが彼らの前に現れて、イエスと語り合っていた。」さらに驚くべきことに、旧約時代のモーセとエリヤが現れ、イエスと語り合ったのでした。これはまさに天国の一場面を見ているようでした。モーセは神から律法を与えられた人であり、エリヤは預言者の代表です。すなわち、律法と預言者という旧約聖書が預言した救い主がイエスであることを、2人が現れて証言したのです。モーセとエリヤがイエスと何を語り合ったかが、ルカ9:31に記されています。「イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について、話していたのであった。」旧約聖書の救い主の預言は、イエスが十字架で死に、人間の罪を贖うことによって成就することが、ペテロとヤコブとヨハネの 3 人に対して示されたのです。4節「そこでペテロがイエスに言った。『主よ、私たちがここにすることはすばらしいことです。よろしければ、私がここに幕屋を3つ造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。』」ペテロはこの天国のようなすばらしい状況が続いてほしいと願って、幕屋を造りますと申し出ましたが、それは神のみこころではありませんでした。イエスの栄光の姿は、この後すぐに見えなくなり、元の姿に戻ります。しかし、ペテロはこの出来事のすばらしさを生涯忘れることはありませんでした。

地上で、イエスの神としての栄光の姿を見たのは、ペテロとヤコブとヨハネの3人だけでした。イエスは、ご自分が生ける神であることを、3人の弟子たちに示されたのでした。この出来事を通して、私たちもイエスの栄光の姿を覚えることができます。ピリピ2:6ー7には、「キリストは、神のみ姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられなかったと考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。」イエスは、栄光の神がへりくだって人となられたお方なのです。私たちもやがてイエスの栄光の姿を見ることができます。イエスが再臨されるとき、イエスは栄光の姿で

この世に来られます。また私たちが天国に行くとき、イエスは栄光の姿で私たちを迎えてくださいます。今日私たちは信仰によって、人となられた栄光の神であるイエスを仰ぎ見、栄光の主イエスを心からほめたたえましょう。

2. イエスに聞き従う 5－8

5節「彼がまだ話している間に、見よ、光り輝く雲が彼らをおおった。すると見よ。雲の中から『これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。彼の言うことを聞け』という声がした。」雲は神の臨在の象徴です。ペテロがまだ話している間に、父なる神が光り輝く雲を通して現れ、弟子たちをおおったのです。そして、雲の中から父なる神の声がしました。「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。」は、イエスがバプテスマを受けた時の天からの声と同じ内容です。父なる神は、「イエスが父なる神が愛し喜ぶ、子なる神」であることを、弟子たちに示されました。さらに、「彼の言うことを聞け」と言われました。父なる神は、イエスがエルサレムで苦しみを受け、殺され、よみがえらなければならないと言われたことに、弟子たちは聞き従うべきだと教えられたのです。さらにはイエスが言われるすべてのことに聞き従うことが、イエスの弟子としての生き方であることを、教えられたのです。

6節「弟子たちはこれを聞いて、ひれ伏した。そして非常に恐れた。」弟子たちは、神の臨在に触れ、非常に恐れました。なぜなら、罪人が聖なる神の前に出れば滅んでしまうからです。イザヤ6章で、イザヤが神を見た時、「ああ、私は滅んでしまう」と言いました。しかし、その時、御使いが飛んできて、祭壇の上から取った罪のためにいけにえの炭を取って、イザヤの口に触れて言いました。「見よ。これがあなたの唇に触れたので、あなたの咎は取り除かれ、あなたの罪も赦された。」祭壇の上から取った罪のためにいけにえの炭は、イエスの十字架の死による罪の贖いを表していました。弟子たちが神の臨在に触れて恐れていると、7節「するとイエスが近づいて彼らに触れ、『起きなさい。恐れることは不要』と言われた。」8節「彼らが目を上げると、イエス一人のほかには、だれも見えなかった。」十字架で、弟子たちの罪を贖ってくださるイエスが触れてくださったので、弟子たちのすべての罪が赦され、その結果、恐れることなく、神に近づくことができるようになったのです。今日も私たちが大胆に恵みの御座に近づき、神を礼拝することができるのは、イエスが私たちに触れてくださったからなのです。私たちがイエスを自分の救い主として信じるときに、十字架で私たちの罪を贖い、よみがえって今も生きておられるイエスが、私たちの心にご自身の血をもって触れてくださいます。その結果、私たちのすべての罪が赦され、イエスを通して聖なる神を恐れることなく、大胆に近づき、私たちの愛する天のお父様として礼拝することができるようになったのです。その神が私たちにも言われます。「彼の言うことを聞け。」私たちもイエスの弟子として、イエスの言われることをよく聞き、そして信じて従っていきましょう。

3. 礼拝から生活へ 9－13

私たちは週の初めの日曜日に神を礼拝し、一週間の生活に遣わされます。今は教会に来ることができない中で、礼拝から生活に遣わされることをいつもよりも意識的に持つ必要があります。新型コロナウイルスが徐々に収束に向かっていく中で、再び教会に集って礼拝できる時を待ち望みたいと思います。さて、弟子たちもキリストの栄光の姿を見、父なる神の声を聞くというすばらしい出来事を経験した後、山を下り、通常の生活に戻っていきます。その際に注意すべきことをイエスは言われました。9節「彼らが山を下るとき、イエスは彼らに命じられた。『あなたがたが見たことを、だれにも話してはいけません。人の子が死人の中からよみがえるまでは。』」もし、弟子たちがイエスの栄光の姿を人々に話せば、人々はイエスを自分たちの王にしようと騒ぐからです。イエスはこの世の王になるために来られたわけではありません。3人はそのイエスの言葉に聞き従いました。そして、イエスの復活後、ペテロはこの出来事をⅡペテロ1:16－18でこのように証ししています。「私たちは、キリストの威光の目撃者として伝えたのです。この方が父なる神から誉れと栄光を受けられた時、厳かな栄光の中から、このような御声がありました。『これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。』私たちは聖なる山で主と共にいたので、天からかかったこの御声を自分で聞きました。」さらに今度は弟子たちから、通常の生活に戻る際に確認しておきたいことをイエスに尋ねました。10節「すると弟子たちはイエスに尋ねた。『そうすると、まずエリヤが来るはずだと律法学者たちが言っているのは、どういうことなのか。』」自分たちはイエスが救い主であることが良く分かった。しかし、ガリラヤに戻るとイエスを信じない律法学者が、「救い主が来る前にエリヤが来ることがマラキ書に預言されている。エリヤがまだ来ていないのだから、イエスを救い主と信じることはできない。」と言っている。この律法学者の主張に対してどう答えたらよいのかをイエスに聞いたのです。それに対するイエスの答えと弟子たちの理解が11－13節に記されています。「イエスは答えられた。『エリヤが来て、すべてを立て直します。しかし、わたしはあなたがたに言います。エリヤはすでに来たのです。ところが人々はエリヤを

認めず、彼に対して好き勝手なことをしました。同じように人の子も人々から苦しみを受けることになります。』その時弟子たちは、イエスが自分たちに言われたのは、バプテスマのヨハネのことだと気づいた。」イエスはすでに弟子たちに11:14で、エリヤとはバプテスマのヨハネのことだと教えられていました。そのことを弟子たちは改めて理解したのです。今日私たちは、聖書を通して、バプテスマのヨハネが来るべきエリヤであったことも、イエスが苦しみと死と復活によって救いを成し遂げてくださった生ける神の子キリストであることも、信仰によって知っています。そして、イエスによって救われたことを感謝し、日曜日ごとに神を礼拝し、一週間の生活に遣わされていきます。礼拝から生活に遣わされるときに心がけることは、日々の生活の中でも、聖書を通してイエスの言うことを聞き、御声に従って生きることです。イエスはいつも私たちと共にいて、私たちの罪を赦し、「恐れることはない」と言って、神とともに生きる生活へと招いてくださっています。今週も栄光の主イエスをあがめ、主の御声に聞き従う一週間の生活に遣わされていきましょう。

マタイ17章14節～27節 「からし種の信仰」

1. からし種の信仰 14-20

栄光の姿を現されたイエスは、ペテロとヤコブとヨハネを連れて山から下りてきました。その時の出来事が、14-20 節に記されています。14-16「彼らが群集のところに行くと、一人の人がイエスに近寄ってきて御前にひざまずき、こう言った。『主よ。私の息子をあわれんでください。てんかんで、大変苦しんでいます。何度も火の中に倒れ、また何度も水の中に倒れました。そこで息子をあなたのお弟子たちのところに連れて来たのですが、治すことができませんでした。』」イエスのもとに来た人の息子は、てんかんで長い間苦しみ、何度も火の中や水の中で倒れ、死の危険と隣り合わせの状態でした。18 節を見るとてんかんの原因は悪霊によるものでした。山のふもとに残っていた 9 人のイエスの弟子は、悪霊を追い出してこの息子を直そうと試みました。イエスの弟子たちは10:1で、イエスから悪霊を追い出し、病を癒す権威をすでに与えられていました。そして、イエスから遣わされて、実際に悪霊を追い出し、病を癒す働きをしたのです。(マルコ6:13)しかし、この時はできませんでした。

17-18節「イエスは答えられた。『ああ、不信仰な曲った時代だ。いつまであなたがたといっしょにいないといけないのか。その子をわたしのところに連れて来なさい。』そして、イエスがその子をお叱りになると悪霊は出て行き、すぐにその子は癒された。」イエスは、人々の不信仰を嘆かれました。と同時に、人々の悩み苦しみをよく理解してくださいました。そして、この時、イエスがその子を叱ると、悪霊は出て行き、すぐにその子は癒されたのでした。それはこの親子にとってどんなにうれしい出来事だったのでしょうか。「もろびとこぞりて」の讃美歌の歌詞に、「悪魔の牢獄(ひとや)を打ち砕きて、捕虜(とりこ)を放つと主は来ませり」と歌われます。イエスは悪魔の支配の中にある者を解き放ち、救うために来て下さったのです。イエスの時代は悪魔の働きは目に見える形で起こっていました。今日は悪魔の働きははっきりとはわからないかもしれません。しかし、聖書は神から離れた罪人は悪魔の支配下にあると教えています。イエスは私たちを悪魔の支配下から解き放ち、神の支配下に、すなわち神の国に私たちを入れるためにこの世に来て下さったのです。

19節「それから、弟子たちはそっとイエスのもとに来て言った。『なぜ私たちは悪霊を追い出せなかったのですか。』弟子たちは、以前はできたのに、なぜ今回はできなかったのかわからなかったのです。20節「イエスは言われた。『あなたがたの信仰が薄いからです。まことに、あなたがたに言います。もし、からし種ほどの信仰があるなら、この山に「ここからあそこに移れ」と言えば移ります。あなたがたにできないことはありません。』」イエスは弟子たちが今回悪霊を追い出せなかった理由は、彼らの信仰が薄かったからだと言われました。弟子たちの信仰が薄いと言われたのはこれで3回目です。1回目は8:26で嵐に遭遇し、恐れた弟子たちに対して。2回目は14:31で湖を歩いたペテロが沈みそうになった時に。信仰が薄いとは、イエスよりも周りの状況を見て恐れや不安や疑いを持つ結果、イエスに対する全幅の信頼に欠けている状態です。山のふもとで待っていた9人の弟子たちの信仰は、イエスのいない不安や、或いは自分たちが留守番することになった不満でイエスへの全幅の信頼に欠けが生じていたのです。からし種とはイスラエルで最も小さい種です。また、「山を移す」とは「困難な問題を解決する」という意味のイスラエルのことわざです。イエスは信仰とは大きさの問題ではなく、どんな小さな信仰であっても疑わずに主に100%信頼していけば、どんな困難な問題も主にあって必ず解決することができる教えられたのです。私たちはどうでしょうか。私たちもイエスから「信仰が薄い」と言わ

れるかもしれません。その時には、周りの状況によって自分の心に不安や不満や恐れや疑いが生じ、その結果、信仰に欠けが生じていないかを点検をしましょう。そして、「100%イエス様に信頼します」と信仰の宣言をしましょう。そして主は、私たちのからし種ほどの信仰を用いて、ご自身の大いなるわざを成してくださることを期待しましょう。

2. イエスの死と復活の予告 22-23

イエスと弟子たちは再びガリラヤに戻ってきました。その時、イエスは第2回目の死と復活の予告を弟子たちにされました。22-23節「彼らがガリラヤに集まっていた時、イエスは言われた。『人の子は、人々の手に渡されようとしています。人の子は彼らに殺されるが、3日目によみがえります。』すると彼らは大変悲しんだ。」「人の子は、人々の手に渡されようとしています。」は16:21の第1回目の予告にはない言葉で、イスカリオテのユダによる裏切りがほのめかされています。しかし弟子たちにはそのことは隠されています。弟子たちはイエスが人々によって殺されると聞いて大変悲しみます。ペテロもこの時は前回と違って何も言わず、ただ悲しんだのでした。悲しむ彼らの心には、イエスの復活の予告が全く入ってこなかったのです。私たちも様々な出来事の中で、悲しみや苦しみの中にいると、イエスにある救いの喜びや希望が見えなくなることがあります。初代教会は、なぜそれまでの土曜日の安息日の礼拝から、日曜日の主の日の礼拝に切り替えたのでしょうか。それは、日曜日に主がよみがえられたからです。金曜日のイエスの十字架の死の大切さと言うまでもありません。

イエスの十字架によって私たちの罪が贖われたのです。しかし、金曜日で終わっていただ、弟子たちにとっては悲しみで終わっていたのです。しかし、日曜日にイエスがよみがえり、弟子たちは復活のイエスとお会いすることができたので、彼らの悲しみは喜びに変えられたのです。そして、復活から50日目の日曜日のペンテコステの日に聖霊が下られました。その結果、弟子たちはイエスの十字架の死の意味がはっきりと分かり、恐れることなく福音を宣べ伝えました。初代教会も迫害の中で、日曜日に復活の主を礼拝することによって、主とともに生きる喜びと希望が与えられて、信仰の励ましを受けました。私たちも新型コロナウイルスによって、信仰生活も日常生活も試みを受けています。しかし、日曜日に生ける主を礼拝することによって、喜びと希望が湧いてきます。今週もよみがえられ今も生きておられる主とともに、主にある喜びと希望をもって遣わされていきましょう。

3. 最初に釣れた魚 24-27

イエスの一行はカペナウムの町に戻ってきました。すると24節「彼らがカペナウムに着いたとき、神殿税を集める人たちがペテロのところに近づいて来て言った。『あなたがたの先生は神殿税を納めないのですか。』」神殿税とは出エジプト30:11-16を根拠とした神殿維持のために納める税金でした。それは一人2ドラクマと決まっていた。神殿税を集める人たちはイエスは律法を守らないのかと問うているのです。それに対して25-26節「ペテロは『納めます』と言った。そして家に入るとイエスのほうから先にこう言われた。『シモン、あなたはどのように思いますか。地上の王たちはだれから税や貢ぎ物をとりますか。自分の子たちからですか、それとも、ほかの人たちからですか。』ペテロが『ほかの人たちからです』と言うと、イエスは言われた。『ですから、子たちにはその義務がないのです。』」王の子どもは税金を王に納める必要はありませんでした。同様に神殿は父なる神の家なので、子なる神であるイエスは税金を納める必要はないのです。ペテロは「納めます」と言った手前、一瞬困ったと思ったかもしれません。しかし、イエスは続けて言われました。

27節「しかし、あの人たちをつまずかせないために、湖に行って釣り糸を垂れ、最初に釣れた魚を取りなさい。その口を開けるとスタテル銀貨一枚が見つかります。それを取って、わたしとあなたの分としなさい。」この箇所は唯一、奇跡の結果が書いていない箇所です。この後どうなったのでしょうか。書いていない意味は、その通りになったことを意味しています。ペテロは漁師ですから、魚釣りはお手の物でした。しかし、魚の口から銀貨が出て来るなど経験したことはありません。しかし、ペテロはイエスが言われたとおりにしたのです。そして、結果はイエスが言われたとおりになり、最初に釣れた魚の口を開けるとスタテル銀貨1枚がありました。これは4ドラクマの価値で2人分の神殿税にあたります。ペテロはこのことを通して、改めて主の言われたことに聞き従うことのすばらしさを経験したに違いありません。私たちも、信仰のすばらしさを経験するためには、単に頭の中で理解するのではなく、みことばを実行する人になることが必要です。実際に主に従っていくときに、主の真実を、経験を通して知ることができるのです。

もう一つ覚えないことは、イエスは小さなことで人々をつまずかせたくなかったのです。本来治める必要のない神殿税を、律法に従って納められたということです。しかし、それでも人々はイエスにつまずきます。最も大きなつまずきとなったのは、イエスの十字架の死と復活でした。イエスの復活後、弟子たちがイエスの復活を宣べ伝えると、ユダヤの宗

教指導者たちはイエスの復活を信じず、弟子たちを迫害しました。しかし、聖書は言います。「見よ。わたしはシオンに、つまずきの石、妨げの岩を置く。この方に信頼する者は失望させられることがない。」ローマ9:33 そしてイエスも言われました。「だれでもわたしにつまずかない者は幸いです。」マタイ11:6 イエスの死を私の罪のためと信じ、よみがえりの主に信頼して生きる人は失望させられることはありません。今週も、死からよみがえられ今も生きておられる主イエスに信頼して歩みましょう。

マタイ18章1節～14節 「天の御国で一番偉い人」

1. 天の御国で一番偉い人 1-5

今日の箇所は、イエスと弟子たちがガリラヤ湖のほとりのカペナウムの町に戻ってきた時の続きです。1節「そのとき、弟子たちがイエスのところに来て言った。『天の御国では、いったいだれが一番偉いのですか。』」この世の価値観では、組織のトップに着くことが一番偉いと考えます。イエスの弟子たちも同じでした。彼らは天の御国でも出世を願い、一番偉い人になりたいと願っていたのです。そこで、イエスに「天の御国では、いったいだれが一番偉いのですか」と尋ねたのです。それに対してイエスは一人の子どもを呼び寄せ、弟子たちに対して実物教育をされました。

2-3節「イエスは一人の子どもを呼び寄せ、彼らの真ん中に立たせて、こう言われた。『まことに、あなたがたに言います。向きを変えて子どもたちのようにならなければ、決して天の御国に入れません。』」「向きを変えて」とは脚注を見ると「悔い改めて」とあります。聖書の「悔い改めて」とは、向きを変える、すなわち方向転換という意味です。天の御国に入るためには、今まで神に背を向けて自分勝手に生きていた生き方を方向転換させて、神に心を向ける必要があります。そして、そのために自分の罪を悔い改めて、十字架で私たちの罪を贖ってくださったイエスを自分の救い主として信じる必要があります。イエスはここで「子どものようにならなければ」と言われました。子どもは親に自分の全存在をゆだね、親に信頼して生きています。そのように、私たちも神と救い主イエスに全幅の信頼を寄せることが、天の御国に入るために必要なのです。

4節「ですから、だれでもこの子どものように自分を低くする人が、天の御国で一番偉いのです。」次にイエスは天の御国に入った人の中で、一番偉い人はだれかを教えられました。子どもは、大人の世界から見ると、小さい存在であり、低い立場にあります。イエスはそのような子どもの立場を通して、謙遜を教えられたのです。すなわち、天の御国で一番偉い人は、人の上に立つ人ではなく、自分を低くし、謙遜に人に仕える人なのです。

5節「また、だれでもこのような子どもの一人を、わたしの名のゆえに受け入れる人は、わたしを受け入れるのです。」この世の価値観では、様々な能力のある人やいろんな仕事ができる人を受け入れようとします。しかし、天の御国の価値観はこの世の価値観とは異なります。子どもは多くのことはできず、大人の世話を必要とします。しかし、イエスはそのような小さな存在を愛しておられ、大切にしておられるのです。「わたしの名のゆえに受け入れる人」とは、イエスを信じ、愛するゆえに、イエスが愛される小さな存在である子どもを受け入れ、子どもに仕える人のことです。そのような謙遜な人は、実はイエスを受け入れ、イエスに仕えている人なのです。教会は、地上にあって天の御国を表す交わりです。もちろん教会は救われた罪人の集まりなので、天の御国としてはまだまだ未完成の状態です。しかし、教会は神のことばに従うことを何よりも大切に、天の御国の価値観に根差し、それを目標として生きる群れです。ですから、互いにへりくだって、仕え合う交わりを大切にいきましょう。私たち自身が子どもたちから学び、子どもたちを喜んで受け入れ、子どもたちに仕える群れとなりましょう。

2. つまずきを与えない者 6-10

6節から10節は、子どもから大人を含めた「小さい者」を受け入れることの大切さが教えられています。イエスは、受け入れることの正反対が「つまずかせる」こと、また「軽んじる」ことであると教え、小さい者をつまずかせたり、軽んじてはいけないと教えられました。5-6節「わたしを信じるこの小さい者たちの一人をつまずかせる者は、大きな石臼を首にかけて、海の深みに沈められる方ほうが良いのです。つまずきを与えるこの世はわざわざいす。つまずきが起こることは避けられませんが、つまずきをもたらす者はわざわざいす。」小さい者とはだれでしょうか。それは私たちを含むすべての人のことです。神の前にはすべての人は小さな存在です。しかし神は、その小さい者を愛しておられるのです。

ですから、人をつまずかせることは大きなわざわいであると、イエスは厳しい言葉で教えられました。ここでは2種類のつまずきを与える者が挙げられています。まず7節の「この世」です。この世とはこの世に生きる人々のことです。この世は、イエスにつまずくための様々なものを与えます。お金、快樂、地位名誉、罪の誘惑、不信仰などをもって、人々がイエスにつまずくように仕向けます。もう一つのつまずきを与える者とはクリスチャン自身です。兄弟姉妹同士でつまずきを与える可能性があるのです。

10節「あなたがたは、この小さい者たちの一人を軽んじたりしないように気をつけなさい。あなたがたに言いますが、天にいる、彼らの御使いたちは、天におられるわたしの父の御顔をいつも見ているからです。」人を軽んじることによって、その人をつまずかせてしまいます。だから気をつけなさいと、イエスは弟子たちに対して言われました。クリスチャンである私たち自身が気をつけていないと、他のクリスチャンをつまずかせてしまうのです。「天にいる彼らの御使いが、父なる神をいつも見ているから」とイエスは言われました。見ているとは仕えるという意味です。小さい者を守るために御使いが神に仕えているほど、神は小さい者を愛しておられるのです。それなのに、もし私たちが小さい者である他のクリスチャンをつまずかせるなら、神を悲しませることになるのです。

また8、9節は自分自身を躓かせてはならないと教えています。「あなたの手か足があなたをつまずかせるなら、それを切って捨てなさい。片手片足でいのちに入るほうが両手両足そろったままで永遠の火に投げ込まれるよりよいのです。また、もしあなたの目があなたをつまずかせるなら、それをえぐり出して捨てなさい。片目でいのちに入るほうが、両目そろったままゲヘナの火に投げ込まれるより良いのです。」イエスは非常に厳しい言葉で、私たちが信仰のつまずきとなる罪の誘惑を徹底的に捨てなければならないと教えられました。私たちは、自分自身がつまずきとなるものを捨てることによって、人をつまずかせない生き方の第一歩を始めることができます。またどんなに気をつけていても、人をつまずかせることが時にはあるでしょう。そのような時の私たちの慰めは、十字架の主の赦しがあることです。主の赦しを求める時、主は私たちをあわれみ赦してくださいます。私たちは人をつまずかせるのではなく、喜んで人を受け入れるイエスの弟子となりましょう。

3. 大切な一人 12-14

12節から14節は、有名なイエスの「迷える羊のたとえ話」です。12-14節「あなたがたはどう思いますか。もしある人に羊が百匹いて、そのうちの一匹が迷い出たら、その人は九十九匹を山に残して、迷った一匹を捜しに出かけないでしょうか。まことにあなたがたに言います。もしその羊を見つけたなら、その人は、迷わなかった九十九匹の羊以上にこの一匹を喜びます。このように、この小さい者たちの一人が滅びることは、天におられるあなたがたのみこころではありません。」羊飼いににとっては、迷子の一匹の羊は百分の一匹はなく、大切な大切な一匹なのです。だから、99匹を残して一匹を捜しに出かけるのです。そして、その羊を見つけると、その一匹の羊が助かったことのゆえに大喜びするのです。同様に、神にとっては一人ひとりが大切でかけがえのない存在なのです。今日の箇所では一人や一匹という言葉が何回も出てきます。「一人の子ども」「子どもの一人」「この小さい者たちの一人」「迷った一匹」とは、神がそのひとり子イエスをお与えになったほどに愛しておられる一人ひとりのことなのです。

しばらく前にアメリカのある新聞の一面全体で新型コロナウイルスで亡くなった千人の名前とその人がどのような人だったかを短く紹介しました。アメリカでは死者が10万人を超えましたが、新聞は「この千人は全体のわずか1%しか反映していないが、誰一人として単なる数字ではない」と指摘しました。ある79歳の女性は「教会の聖歌隊で49年間歌った」と紹介されていました。この記事は新型コロナウイルスで多くのいのちが失われたことを伝えるとともに亡くなった一人ひとりが単なる数字ではなく大切な人であったことを伝えています。そして、そのことは神が一番よくご存じなのです。現在、世界人口は77億人に達しました。しかし、私たち一人ひとりとは77億分の一という小さな数字ではなく、神に愛されているかけがえのない大切な一人なのです。神は私たち一人ひとりに対して、あなたや私に対して言われます。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」(イザヤ43:4) またイエスは言われます。14節「このように、この小さい者たちの一人が滅びることは、天におられるあなたがたのみこころではありません。」イエスは迷子の羊である私たち一人ひとりを捜して救うために、この世に来て下さいました。そして、私たちに罪の赦しと永遠のいのちの救いを与えるために、十字架でご自身の尊いいのちを捨てて下さいました。私たちは今日、私たち一人ひとりに注がれた神の愛と、イエスのすばらしい救いを覚え、神に感謝しましょう。そして、このすばらしいイエスの救いに対してつまずきを与える者となるのではなく、人々をイエスのもとに導く一人ひとりとなりましょう。

マタイ18章15節～35節 「無限の赦し」

1. 兄弟への忠告 15－18

マタイの福音書では、教会という言葉が3回出てきます。1回目は16:18です。「わたしは、この岩の上にわたしの教会を建てます。」そして、後の2回が今日の箇所に出てきます。イエスを神の子キリストと信じる者は、イエスの教会の一員に加えられます。教会は神の子どもとされたクリスチャンのすばらしい交わりであり、地上における天国のひな型です。その一方、残念ながら、教会は天国とは程遠い、救いが未完成の神の民の集まりでもあります。クリスチャンは罪赦された罪人です。ですから、実際に罪を犯してしまいます。イエスもそのような教会の現実をご存じでした。そこで今日の箇所では、教会の聖い交わりを壊してしまうような罪を兄弟が犯した場合、どのように教会が対応したらよいかについて教えられたのです。

私たちが罪を犯した場合、どうしたらよいのでしょうか。自分が罪を犯したことに気づいたなら、まず個人的に罪を悔い改め、十字架の赦しをいただくことです。Ⅰヨハネ1:9「もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。」たいていの問題はその段階で解決します。そして、人との関係で問題を解決必要がある場合は、解決を求めることが大切です。さて今日の箇所は、本人が罪を悔い改めない状況にある時の対処についてです。イエスはここで3つの段階を教えられました。

15節は第1段階です。「また、もしあなたの兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところで指摘しなさい。その人があなたの言うことを聞き入れるなら、あなたは自分の兄弟を得たことになります。」第1段階は個人的にその人のところに行って、罪を指摘して悔い改めを伝えることです。その人が自分の罪を認め、悔い改めるなら、忠告した人は兄弟を得たことになります。ダビデが姦淫と殺人の罪を犯した時、預言者ナタンがダビデのところに行って、罪を指摘しました。その時、ダビデは自分の罪を認めて悔い改めました。その結果、ダビデは罪に対する結果を刈り取らなければなりませんでした。神はダビデの罪を赦されたのです。(Ⅱサムエル12章)

次に16節は第2段階です。「もし聞き入れないなら、ほかに一人か二人、一緒に連れて行きなさい。二人または三人の証言によって、すべてのことが立証されるためです。」複数で行くことによって、この忠告が個人的な非難ではなく、事実に基づいたものであり、兄弟愛から出たものであることを証言してもらうことができるのです。しかし、それでもその人が悔い改めない場合は、17節の第3段階に向かうようにイエスは言われました。17節「それでもなお、言うことを聞き入れないなら、教会に伝えなさい。教会の言うことさえも聞き入れないなら、彼を異邦人や取税人のように扱いなさい。」教会の言うことをその人が受け入れて悔い改めるなら、教会はその人を交わりの中に受け入れることができます。しかし、教会の言うことさえも聞き入れないなら、教会の交わりから除名するようにイエスは教えられました。それは、その人をイエスの御手にゆだねることを意味しています。イエスは異邦人や取税人を愛されます。そこで、教会はその人が真に悔い改めて教会の交わりに立ち返ることを願って、イエスの愛の御手にゆだねるのです。

教会はこのイエスの教えを戒規の制度に適用してきました。戒規は罪に陥った兄弟姉妹を悔い改めに導くための愛の訓練であり、同時に教会を罪から守り、教会の聖さを保つためのものです。戒規は教会のかしらであるイエスが教会に与えられた権限によって行います。18節「まことに、あなたがたに言います。何でもあなたがたが地上でつなぐことは天でもつなぐがれ、何でもあなたがたが地上で解くことは天でも解かれます。」ですから、戒規を行う教会は神の前に謙虚に、罪を犯した兄弟に対しては愛をもって行うことが大切です。また戒規を受ける者も戒規をないがしろにせず、神の前で自分の罪と向き合い、悔い改めていくことが大切なのです。そしてもちろん、戒規に至る前に、罪は小さいうちに、すぐに悔い改めて、聖い生涯を目指して歩むことが大切なのです。

2. 心をついにした祈り 19－20

祈りは一人で神の前に祈ることが基本ですが、また2人、3人の祈りも大きな祝福があることをこの箇所から教えられます。19-20節「まことに、もう一度あなたがたに言います。あなたがたのうちの二人が、どんなことでも地上で心をついにして祈るなら、天におられるわたしの父はそれをかなえてくださいます。二人か三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのです。」このイエスの教えを文脈から読むと、19節の二人の祈りは、先ほどの兄弟への忠告の第1段階に対応しています。また20節の二人か三人がイエスの名によって集まるとは、忠告の第2

段階に対応していることがわかります。すなわち、罪の悔い改めを伝える忠告や戒規は、祈りが必要であり、罪を犯した兄弟が心をつにして祈るなら、神はその祈りを聞き、罪を赦してくださるのです。

またこの祈りの教えは通常の祈りにも適用できます。今月から祈禱会が再開されました。祈禱会がお休みの間は個人で祈っていましたが、再び一緒に祈る幸いを覚えています。以前は最後の祈りの時に、2～3人に分かれて祈っていましたが、今は新型コロナウイルス感染予防のために、全員で小さな声でその場で一斉に祈るようにしています。

教会の交わりはイエスの名によって集まる交わりです。私たちの共通は、趣味でも好みでもなく、イエスへの信仰です。この信仰によって、すなわちイエスの名によって、私たちは一つの神の民として集まります。そして、その教会の交わりにはイエスがともにいてくださるのです。それは教会堂に集まるときだけではなく、どこにあってもクリスチャンが集まる場所、そこにはイエスも共にいてくださいます。そして、心を合わせてイエスの名によって祈るとき、父なる神は私たちの祈りを聞いてくださるのです。教会は祈りの共同体です。一緒に心を合わせて祈るとき、私たちは兄弟姉妹の祈りに励まされ、自分の祈りを成長させることもできます。主はともに心を合わせて祈る祈りを祝福し、祈りを聞いてくださいます。これからも心をつにしてともに祈りましょう。

3. 無限の赦し 21－35

イエスの兄弟への忠告と戒規の教えを聞いたペテロは、21節で「主よ。兄弟が私に対して罪を犯した場合、何回赦すべきでしょうか。7回まででしょうか」とイエスに問いました。当時のユダヤ教の教師は3回まで赦すようにと教えていたので、7回は相当ハードルが高い回数でした。ペテロは、これ以上は無理と思ったかもしれません。それに対してイエスは言われた。22節「わたしは7回までとは言いません。7回を70倍するまでです。」これは490回まで赦すということではなく、無限に赦しなさいという意味です。そして、無限の赦しを教えるために23節からたとえて教えられました。

ここでの王は父なる神を表し、家来たちは人間を表しています。1万タラントの負債のある家来が王のところに連れてこられました。1 タラントは 6000 デナリで 1 デナリは 1 日の賃金です。ですから、年間 300 日働くとなると、1 万タラントとは 20 万年分の賃金ということになります。1 デナリを 1 万円とすれば、1 万タラントは 3 千億円となり、到底返済できない金額です。王はこの家来に自分自身も妻子も、持っている物もすべて売り払って返済するように命じました。それに対して家来が返済の猶予をひれ伏して王にお願いしました。王はかわいそうに思って、負債を全部免除してやりました。家来はその時飛び上がるほど喜んだのではないのでしょうか。ところが彼は自分がどれほど大きな負債を赦されたかをすぐに忘れてしまったのです。そして、王のもとから帰る途中に、自分に 100 デナリの借りがある仲間の一人に出会いました。100 デナリは 100 日分の賃金で、1 デナリ 1 万円なら 100 万円です。決して小さい金額ではありませんが、1 万タラントに比べれば、比べ物にならないほどの少額です。ところが彼は仲間の首を絞めて「借金を返せ」と迫り、仲間が返済の猶予を願っても聞き入れず、牢に投げ込んだのでした。王は彼のしたことを知って怒り、彼を呼び出し、「私がおまえをあわれんでやったように、おまえも自分の仲間をあわれんでやるべきではなかったのか」と言って、彼を牢に入れたのでした。

この譬えは、すべての人は神に対して返済不可能な大きな罪の負債を負っている罪人であることを教えています。ところが、そのような罪人の私たちを神はあわれんでくださいました。そして、イエスが十字架でご自分のいのちの代価をもって、私たちの負債をすべて支払ってくださったのです。その結果、イエスを信じるだけで私たちの大きな罪の負債は全部免除されました。この神の恵みによる罪の赦しを経験した者が、自分の仲間を赦さないことほど道理に合わないことはないのです。また、何回まで赦すべきかとのペテロの質問は、人間の努力によって人を赦すということを意味しています。それに対して、イエス様は、クリスチャンが人を赦すのは、自分が神に赦されたという神の恵みに対する信仰の応答であることを教えられたのです。十字架の恵みに対する応答こそ、隣人に対する愛と赦しの原動力なのです。私たちは主の祈りで、「私たちの負い目をお赦しください。私たちも私たちに負い目のある人たちを赦します」と祈るとき、自分が神に赦されたという十字架の恵みに応答して、人を赦す者となりましょう。今週も十字架の恵みに応答する一週間を歩みましょう。

マタイ19章1節～15節 「結婚についての教え」

1. 結婚と離婚についての教え 1－9 19 章から 20 章は、イエスがガリラヤ伝道を終え、エルサレムに向かう途上での出来事です。3～9節は離婚についてのパリサイ人の質問とイエスの答えが記されています。3節「パリサイ人たちが

みもとに来て、イエスを試みるために言った。『何か理由があれば、妻を離縁することは律法にかなっているでしょうか。』これは申命記24:1についての質問です。そこにはこうあります。「人が妻をめとり夫となった後で、もし、妻に何か恥ずべきことを見つけたために気に入らなくなり、離縁状を書いてその女の手に渡し、彼女を家から去らせ」当時、どのような恥ずべきことを妻のうちにみつけたら、夫は妻を離縁できるのかが議論されていたのです。シャンマイ学派と呼ばれる人たちは、これを姦淫と理解しました。一方、ヒルレル学派の人たちはこれを拡大解釈し、料理の失敗など、どんな些細なことでもみつけたら、離縁してよいとしました。パリサイ人は、イエスをこの議論のテーブルに載せ、イエスを試みようとしたのです。

それに対して、イエスは彼らの議論に載らずに、神がもともと造られた結婚とは何なのかについて創世記から教えられました。4～6節「あなたがたは読んだことがないのですか。創造者ははじめの時から、『男と女に彼らを創造され』ました。そして、『それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである』と言われました。ですから、彼らはもはやふたりではなく一体なのです。そういうわけで、神が結び合わせたものを人が引き離してはなりません。」神は人を男と女に創造されました。それは、男と女が結婚して家庭を築くことを、神が願われたからです。ですから、結婚は人間が造った制度ではなく、神が造られた制度なのです。では神が造られた結婚とはどのようなものでしょうか。それは、男と女が神によって結ばれ、二人が一体となることです。夫婦ほど不思議な関係はありません。今まで他人同士であった者が、結婚すると一番親しい関係を持つようになります。夫婦は肉体的にも、精神的にも、社会的にも、経済的にも一体とされて、一つの家庭を築き、喜びも悲しみも共にして生きるものとされます。この一体性は神が結び合わせた結果、夫婦に与えられたものなのです。そして、神が結び合わせたものを人は引き離してはならない、これが神が制定された結婚なのです。

このイエスの結婚についての教えに対して、7節でパリサイ人は反論しました。「それでは、なぜモーセは離縁状を渡して妻を離縁せよと命じたのですか。」8節「イエスは彼らに言われた。『モーセはあなたがたの心が頑ななので、あなたがたに妻を離縁することを許したのです。しかし、はじめの時からそうだったのではありません。』」イエスは、まずモーセの教えは命令ではなく、許したのだと言われました。ではなぜ離婚を許したのかというと、それは「あなたがたの心が頑な」だったからであり、初めからそうだったのではなかったのです。すなわち、人間が罪を犯して墮落した結果、心が頑なになり、自己中心になったので、夫婦の間に問題が起こるようになったのです。その結果、結婚生活を続けることによって、ますます不幸になることを避けるために、どうしても難しい場合に限って、離婚を許したのです。イエスは9節で離婚が許される場合について教えられました。「あなたがたに言います。だれでも、淫らな行い以外の理由で自分の妻を離縁し、別の女を妻とする者は、姦淫を犯すことになるのです。」イエスの教えは、もともとの神の定めた結婚から考えて、夫婦が互いを裏切る行為をする場合にだけ離婚が許されると教えられたのです。しかも、これは命令ではなく、許されるということであり、悔い改めと相手の罪を赦すことによって、結婚を継続することもできるのです。

今日、離婚する人が増えてきました。そこには様々な理由があるでしょうが、その根底に心の頑なさがあるのではないのでしょうか。クリスチャンは神が二人を結び合わせて夫婦としてくださったことを覚え、問題が小さいうちに解決することが大切です。夫婦だけで解決することが難しい問題は、信頼できる人に相談し必要な助けを得ることも必大切です。主の十字架のもとに心の頑なさを捨てて、夫婦仲良くすることが、夫婦と子どもの幸せになることを覚えましょう。

2. 独身についての教え 10-12 イエスの教えを聞いた弟子たちは、当時の人々の結婚と離婚についての理解に比べて、あまりにも厳しいのに驚き、10節で言いました。「もし夫と妻の関係がそのようなものなら、結婚しないほうがましです。」それに対して、イエスは11～12節で独身について教えられました。「しかし、イエスは言われた。『そのことばは、だれもが受け入れられるわけではありません。ただ、それが許されている人だけができます。母の胎から独身者として生まれた人たちがいます。また、人から独身者にさせられた人たちもいます。また、天の御国のために、自分から独身者になった人たちもいます。それを受け入れることができる人は、受け入れなさい。』」

パウロはⅠコリント7:7で次のように教えています。「私が願うのは、すべての人が私のように独身であることです。しかし、一人ひとり神から与えられた自分の賜物があるので、人それぞれの生き方があります。」パウロは天の御国のために、自分から独身者になり、使徒としての奉仕に専念しました。パウロの伝道旅行を覚える時、パウロが独身だったのでできたのではないかと思います。パウロは自分のような働き人の必要性を覚えたのでした。けれども独身か結婚かは、神が一人ひとりに与えられた賜物によるのであり、だれもがパウロのように独身でいられるのではないと教えたの

です。それはイエスの教えに通じます。結婚は神が人間のために備えられた祝福です。一方で独身にも神の祝福は備えられているのです。20 世紀後半に活躍した福音派の牧師であり神学者であったジョン・ストットは生涯独身でした。彼の多くの著書は今も読み継がれています。また同じ時代に活躍した伝道者ビリー・グラハムは結婚していました。彼の伝道によって世界の多くの人々がイエスを救い主と信じることができました。この2人は協力して、ローザンヌ世界伝道会議を導き、そこで出された宣言文はその後の世界の福音派教会の確かな道しるべとなったのでした。一人ひとりが神に与えられた賜物を生かして生きるなら、独身、結婚に関わらず、神はその人の人生を大いに祝福してくださるのです。

3. 子どもについての教え 13－15 結婚、離婚、独身の教えの後、13～15節は子どもについての教えです。13～15節「そのとき、イエスに手を置いて祈っていただくために、子どもたちがみもとに連れて来られた。すると弟子たちは、連れてきた人たちを叱った。しかし、イエスは言われた。『子どもたちを来させなさい。わたしのところに来るのを邪魔してはいけません。天の御国はこのような者たちのものなのです。』そして手を子どもたちの上に置いてから、そこを去って行かれた。」

イエスのもとに子供達を連れてきた人達が誰であったかは記されていませんが、たぶん子どもたちの親でしょう。クリスチャンの親が子育ての中で、大切にしなければならないことは、子どもをイエスのところに連れてくることです。イエスの弟子たちは、イエスの忙しさを覚え、子どもに時間を取られてはいけなくとて、連れてきた人たちを叱りました。しかしイエスの願いは、親が子どもたちをご自分のところに連れてくることでした。「天の御国はこのような者たちのものなのです。」子どもは素直な心で、イエスを信じて受け入れます。イエスは子どもたちが、ご自分を信じ、神の子どもとして歩むことを願っておられるのです。伝道者の書12:1にも「あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ」とあります。

ある人は信仰は子どもの自由意思に任せるべきだと言います。確かに信仰は強制ではなく一人ひとりの自由意思によって信じるものです。ですから親は子供の人格を尊重し子どもが自分の意思でイエスを信じることができるように配慮しなければなりません。一方、親は子どもが小さい時から、まことの神とイエスのことを聖書から教えることが必要です。親が聖書を子供に教えないならば子供は他の事を学んでいき、結果としてイエスから離れてしまうことになります。イエスは「子どもたちを来させなさい。わたしのところに来るのを邪魔してはいけません。」と親達に言っておられるのです。

またこのイエスの教えは、教会に対して教えられています。教会は神の家族です。ですから教会の交わりの中で、大人は子どもたちがイエスのもとに来るのを邪魔してはいけません。むしろ、子どもたちが教会に来るのを喜び、また子どもたちが喜んで教会に来ることができるように励ましてあげることが大切です。ある人は教会学校で子どもたちにイエスのことを教え、イエスのもとに導く働きをすることができるでしょう。またある人は、教会に来た子どもたちに声をかけ、歓迎の気持ちを伝えることができるでしょう。またすべての大人は教会の子どもたちのために祈ることができます。私たちは「子どもたちを来させなさい。」というイエスのみことばを心に留めましょう。そして、大人も子どももイエスの祝福をいただいて、神の家族としての幸いな交わりを築いていきましょう。

マタイ19章16節～30節 「永遠のいのちを得るために」

1. 永遠のいのちを得るために 16－22節 今日の箇所では、一人の富める青年がイエスのもとに来て、質問しました。16節「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをすればよいのでしょうか。」永遠のいのちを得るとは、救われると同じ意味です。今日の箇所では、天の御国に入る、神の国に入るとも言われます。青年は良い行いをすれば、永遠のいのちを得ることができると考えていました。しかし、彼は良い行いをしても、まだ永遠のいのちを持っていないことがわかっていました。そこで、彼はイエスのもとに来て、質問したのです。するとイエスは17節で彼に言いました。「なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方はおひとりです。いのちに入りたいと思うなら戒めを守りなさい。」イエスは、「良い方はおひとりです」と言って、良い方である神だけが良いことを教えると言いました。そしてイエスが良いことを教えることにより、ご自分が神であることを暗に示されたのです。そして、神が教える良いことは聖書の戒めに記されているからそれを守りなさいと、青年に言ったのです。

青年は18節で「どの戒めですか」と尋ねました。そこでイエスは、十戒の後半の戒めを教えられました。「殺してはならない。姦淫してはならない。偽りの証言をしてはならない。父と母を敬え。」そしてこれらの人との関係の戒めをまとめる教えである、レビ記19:18の「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」も加えて教えました。すると青年は20節でこう言います。「私はそれらすべてを守ってきました。何がまだ欠けているのでしょうか。」青年は律法学者が教えるように表面的には守っていたのでしょう。しかし、イエスが山上の説教で教えたように、心の思いや言葉を含めて守っていたのかというと、そうではありませんでした。しかし、彼はイエスの教えがわからず、「守っています」と断言したのです。

しかし、彼はまだ自分が守っていないことがあると気づいたので、「何がまだ欠けているのでしょうか。」とイエスに尋ねました。イエスは21節で彼に言いました。「完全になりたいのなら、帰って、あなたの財産を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を持つことになります。そのうえで、わたしに従ってきなさい。」22節 青年はこのことばを聞くと、悲しみながら立ち去った。多くの財産を持っていたからである。

イエスはここで、青年が財産を売り払い、貧しい人に与えるという良い行いをすれば、永遠のいのちを得ることができることを教えたわけではありません。そうではなく、もし人が行いによって救いを得ようとするならば、神のすべての戒めを完全に守らなければならないことを教えたのです。イエスがこのように言われたのは、富める青年が金銭を愛するという自己中心の罪があることに気づくためでした。そして、自分は罪人であることを認めて、イエスに救いを求めることを願われたのです。しかし、彼は自分の罪を認めず、悲しんでイエスのもとから立ち去ったのでした。

この出来事は、「永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをすればよいのでしょうか。」という質問自体が間違っていることを私たちに教えています。人は行いによっては、だれも救われないのです。もし、この青年のように、行いによる救いを求めるならば、私たちは聖書のすべての教えを完全に守らなければならないのです。しかし、そのようにできる人は誰一人いません。三浦綾子の小説「塩狩峠」にこのような場面があります。ある時、主人公の永野青年が路傍伝道をしていた伝道者と出会い、自分が罪人だということがはっきりわからないと伝道者に言いました。その時、伝道者は「聖書の中のどれか一つを徹底的に実行してみませんか。そうすれば自分があるべき人間の姿から遠く離れた人間であることがわかるから」と言いました。主人公はその時から、困っている友人に対して、良きサマリヤ人のようになろうとしました。しかし、どんなに頑張ってもできないことがわかり、自分の罪深さを知ったのでした。そして、イエスの十字架の救いを信じて洗礼を受けたのです。

ガラテヤ3:24にはこうあります。「こうして、律法は私たちをキリストに導く養育係となりました。それは、私たちが信仰によって義と認められるためです。」イエスはこの富める青年に律法を示し、律法を完全には守ることができない罪人であることを悟らせて、イエスに救いを求めさせようとしたのです。永遠のいのちを得るためには、神の前に自分の罪を認め、悔い改めてイエスを信じる信仰が必要なのです。

2. 救いは神のみわざ 23-26節 イエスは青年が立ち去った後、弟子たちに言いました。23-24節「まことに、あなたがたに言います。金持ちが天の御国に入るのは難しいことです。もう一度あなたがたに言います。金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうが易しいのです。」「らくだが針の穴を通る」とは当時のことわざで、難しく不可能なことを意味しました。25節 弟子たちはこれを聞くと、大変驚いて言った。「それでは、だれが救われることができるでしょう。」当時のユダヤ人は、富は神からの祝福であると考えていたので、富んでいる人は神の救いに最も近いと考えていました。しかし、イエスは逆のことを言われたのです。富んでいる人は、あの青年のように富に頼り、神よりも富を愛し、富に仕えることが多いからです。しかし、富を愛することは、富んでいる人だけでなく、すべての人にとっての誘惑です。イエスは弟子たちの質問に対して、彼らをじっと見つめて、26節で言いました。「それは人にはできないことですが、神にはどんなことでもできます。」

救いは人間のわざではなく、徹頭徹尾神のみわざなのです。人間はどんなに努力しても自分の力で完全に神の律法を守ることはできません。それは不可能なことなのです。そこで、神が私たちにできないことをしてくださったのです。神は私たちの罪を贖うために、ひとり子イエスをこの世に送ってくださいました。そして、イエスが私達の身代わりとなって、十字架で死ぬことによって、罪からの救いを成し遂げてくださいました。その結果、私たちは行いによらず、イエスを救い主と信じる信仰によって、すべての罪が赦され、永遠のいのちを受けて、天の御国に入るといふ救いをいただくことができるのです。私たちも「それは人にはできないことですが、神にはどんなことでもできます。」というみことばどおり、神によって救っていただきました。この神の救いのみわざに心から感謝しましょう。

3. イエスに従う者 27-30節 ペテロは、イエスの一連の教えを聞いて、27節でイエスに言いました。「ご覧ください。私たちはすべてを捨てて、あなたに従ってきました。それで、私たちは何をいただけるのでしょうか。」ペテロは、「自分たちはあの富める青年とは違い、すべてを捨ててイエスに従ったので、天に宝を積むことができたと思います。それで私たちはどのような報いをいただけるのでしょうか」とイエスに問うたのです。ペテロのいかにもこの世的な質問に対しても、イエスは何を受けることができるかを肯定的に教えられました。

28節「まことに、あなたがたに言います。人の子がその栄光の座に着く時、その新しい世界で、わたしに従って来たあなたがたも12の座についてイスラエルの12部族を治めます。」イスラエルの12部族は、天の御国のすべての神の民を表しています。また12の座は、イエスとともに治める立場に着くことを象徴的に表しています。イエスの弟子たちをはじめ、イエスに従うすべての者には、この世が終わり、新しい天と新しい地が始まる時には、イエスとともに新しい天の御国を治める特権が与えられるのです。さらに29節「また、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子ども、畑を捨てた者はみな、その百倍を受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。」次にイエスのために地上で犠牲にしたものに対する百倍の報いを新天新地で受けることができます。そして、なによりもイエスに従う者は永遠のいのちを受けて、永遠に神とともに歩むことができます。イエスは、地上におけるイエスのための犠牲に対して、天において豊かに報われると弟子たちを励まされました。

そして、最後に30節で言われます。「しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になります。」すなわち、救いも報いもすべて神の恵みによって与えられるものなので、それを働きに対する報酬として受けようとするのは間違っていると、弟子たちに教えたのです。そして、そのことを来週見るぶどう園のたとえでさらに詳しく教えられました。私たちがイエスを信じるのができたのも、イエスに従うのができたもの、イエスのために献げ、イエスに仕え、イエスのためにこの世のものを犠牲にしたとしても、すべては神の恵みなのです。私たちは自分の力で何もすることはできません。「それは人にはできないことですが、神にはどんなことでもできます。」私たちにはできないことを、神は私たちの人生に成してくださしました。ですから、すべては神の恵みです。この一方的な神の恵みのみわざこそ、私たちが誇るべきものであり、自分のうちには何も誇るものはありません。主の成してくださった救いのみわざに心から感謝し、これからもイエスに従っていく者となりましょう。

マタイ20章1節～16節 「主のぶどう園」

1. 主の招きと私たちの応答

今日の箇所は、19:27のペテロの質問に対するイエスの答えの続きです。19:27でペテロは、自分たちは富める青年とは違い、すべてを捨ててイエスに従ってきたのだから、「私たちは何をいただけるでしょうか。」とイエスに聞きました。それに対して、イエスはまず、ご自分に従ってきた弟子たちは、天において多くの報いと永遠のいのちを受けることができると教えられました。そして、今日の箇所ではイエスは、ペテロの質問にひそむ誤りを正されました。イエスは地上での良い行いに対する報いが天に備えられているけれども、天において私たちが受ける祝福は、すべて神の恵みであることを教えられたのです。

まず、このたとえ話の内容を見てみましょう。ぶどう園の主人は朝早く労働者を見つけるために市場に行きました。そして、労働者たちと1日1デナリの約束をして、彼らをぶどう園に送りました。1デナリは当時の1日の賃金です。ぶどう園の主人はさらに労働者を必要としていたようで、9時頃市場に行き、労働者を雇いました。さらに12時にも3時にも行き、労働者を雇いました。そして、不思議なことに5時にも行き、一日中市場にいた人たちを雇って、ぶどう園に送りました。さて夕方6時になり、最後に来た人から順番に賃金が支払われました。まず5時に来た人が1デナリを受取りました。彼らは1時間しか働いていないのに、1デナリもらったので、驚きとともに感謝と喜びをもって受取ったでしょう。

最初から働いていた人はそれを見て自分達はもっともらえるだろうと思いました。ところが、全員1デナリの賃金が渡されたのです。そこで、彼らは主人に不満を漏らして言いました。12節「最後に来たこの人たちが働いたのは、1時間だけです。それなのにあなたは、1日の労苦と焼けるような暑さを辛抱した私たちと、同じように扱いました。」それに対して主人は13節～15節で答えました。「友よ。私はあなたに不当なことはしていません。あなたは私と、1デナリで同意したではありませんか。あなたの分を取って帰りなさい。私はこの最後の人にも、あなたと同じだけ与えたいのです。自分のもので自分のしたいことをしてはいけませんか。それとも、私が気前がいいので、あなたはねたんでいるのですか。」

さて、このイエスのたとえ話を通して教えられる天の御国とはどのようなところでしょうか。まず第1の点で教えられることは、天の御国は、主の招きとそれに対する私たちの応答によって入ることができるということです。市場で仕事を求めている人がぶどう園に行き働くためには、「あなたがたもぶどう園に行きなさい」という主人の招きがまず必要でした。これは天の御国においても同じです。イエスが私たちをまず招いてくださることから、私たちの救いが始まります。しかも、イエスが私たちを天の御国に招くために、イエスが罪の贖いと死に対する勝利を十字架の死と復活によって備え

てくださったのです。ですから、救いはすべて神の主権によるのです。神が私たちをあわれみ、イエスの救いのみわざを根拠に、私たちを招いてくださることが救いの始まりなのです。5時に招かれた人たちの姿には、罪人を愛する神の深いあわれみが示されているのです。

次に救いに必要なのは、神の招きに対する私たちの応答です。労働者はみな主人の招きに応答して、ぶどう園に行き働きました。もし、5時から雇われた人が、主人に声をかけられた時、「1時間しか働けないので申し訳ないので結構です」と断ったならば、彼はぶどう園で働けず、思いがけない1デナリの賃金を得ることもできなかったのです。しかし、彼はあわれみ深い主人に「ありがたいことです」と応答して、ぶどう園に行き、1デナリをいただくことができました。これはイエスの救いにおいても同じです。神はすべての人をご自分の救いに招いておられるのです。朝6時から夕方5時までの人は、すべての人を表しています。この神の招きに私たちが応え、イエスを救い主と信じる時に、私たちはぶどう園が表す天の御国に入ることができるのです。イエスは今日も「あなたがたもぶどう園に行きなさい」と言って、私たちを招いておられます。その主の招きに一人ひとりが応答し、イエスを信じて、天の御国に入りましょう。

2. 同じデナリの祝福

第2の点では朝から働いた人も夕方から働いた人も同じ1デナリの賃金をもらったことの意味を考えてみましょう。もし、地上でこのことが行われたら、確かにひどい話です。朝6時から働いた人が主人に不満を漏らしたことは当然と理解できます。もし、ある店で「アルバイト募集中、1時間働いても10時間働いても同じ賃金を支払います」と広告を出せば、応募する人はみんな1時間働きますというのではないのでしょうか。この世にあっては、たくさん働けば、少しだけ働く人よりも多くの収入を得ることができるので、人はたくさん働くことができるのです。これがこの世の公平性です。ペテロの「私たちは何をいただけるでしょうか」との考えには、自分たちは多くの犠牲を払い、イエスに従ってきたのだから、天で多くの報いがもらえて当然というこの世の考え方があったのです。しかし、天の御国では違うのです。朝から働いた人も夕方から働いた人も主人からもらった同じ1デナリとは、何を意味しているのでしょうか。それは、イエスを信じた者に与えられる永遠のいのちの救いです。このたとえは、19章の富める青年が「永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをすればよいのでしょうか」という質問から端を発しています。答えは「それは人にはできないことですが、神にはどんなことでもできます」というイエスの言葉にあります。すなわち、永遠のいのちを得るために人は何もできないのです。ただ神がイエスによって成し遂げてくださった救いを信じることによって得ることができるのです。このたとえは、イエスとともに十字架につけられた「悔い改めた強盗の福音」とも呼ばれています。イエスとともに十字架につけられた強盗は自分の救いのために何もできませんでした。ただイエスを信じることでしかできなかったのです。しかし、イエスを信じた強盗に対して、イエスは「あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます」と言って、彼を救ってくださったのです。

ある人は子どもの時にイエスを信じて、永遠のいのちをいただいたでしょう。またある人は高齢になってから、イエスを信じて永遠のいのちをいただいたでしょう。人はいつ信じて、同じ永遠のいのち、同じ救いをいただくことができるのです。なぜなら救いは、人間の行いによるのではなく、すべて神の恵みによって与えられるものだからです。だれにでも同じ永遠のいのちの救いを与えてくださる、恵み深い神に心からの感謝をささげましょう。

3. 不満か感謝か

このたとえ話を解く鍵を第3の点で見えていきましょう。その鍵とは、このたとえの前後にあるイエスの言葉です。まずたとえの前にある19:30「しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になります。」そして最後にある20:16「このように、後の者が先になり、先の者が後になります。」このなぞめいたイエスの言葉は、どのような意味があるのでしょうか。たとえにおいては、先の者は6時から働いた人であり、後の者は夕方5時から働いた人です。後の者は1デナリをもらったときに、感謝と喜びで満たされました。そして1デナリもらえたのは、自分の労働に対する当然の報いではなく、あわれみ深い主人の恵みによることを理解したのです。一方、朝6時から働いた人は、1デナリをもらったときに、主人に対する不満で心が満ち、感謝や喜びは失われたのです。彼は今日一日ぶどう園で働き、1デナリもらえた恵みを忘れてしまったのです。

このことは、私たちの信仰生活に当てはめることができます。ある人は若い時に主を信じ、長い年月を主に仕えて生きて来ました。救われた時は神の救いの恵みに感謝し、喜びで満たされました。ところが、長く信仰生活を過ごし、奉仕を

続ければ、疲れることもあるでしょう。他の人と比べて、自分だけがなぜこんなに奉仕する必要があるのかとの不満が出てくるかもしれません。また、教会に深く関われば関わるほど、教会の問題も見えて来て、不満やつまずきを覚えるかもしれません。そのような中で、神の恵みによって救われたことに対する感謝が少なくなり、不満が心に満ちる危険性があるのです。一方、最近救われた人は、神の恵みによって救われた喜びと感謝で心が満ちているのです。先に救われた者が不満で満ち、後に救われた者が感謝で満ちる、これが後の者が先になり、先の者が後になるという意味です。

このようにならないためには、先に救われた者は、救われてからの様々な苦労も困難もすべては主の恵みであることを覚え、救われた時と同じように、神の恵みに感謝し、主にあって喜んで生きることが大切です。パウロはⅠコリント 15:10 でこう言っています「ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして私に対するこの神の恵みは無駄にはならず私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。働いたのは私ではなく、私とともにあった神の恵みなのですが。」多く働いたパウロは、伝道と教会のために人一倍苦労し、多くの迫害に会いました。しかしパウロの心には不満はなく感謝と喜びで満ちていたのです。それは神の恵みの救いに日々感謝して生きていたからです。私たちも神の恵みによって、今の私になりました。救いもその後の人生も、喜びも苦労も、すべては主の恵みです。あなたの苦労や困難は主がご存じです。ですから、先の者も後の者も、不満ではなく、主の恵みに日々感謝して歩んでいきましょう。

マタイ20章17節～34節「贖いの代価として」

1. 十字架の死と復活の予告 17-19

今日の箇所は、イエスの一行がエリコを通り、エルサレムに向かう途上の出来事が記されています。17-19節で、イエスは12弟子だけを呼んで、3回目の受難の予告をされました。18-19節「ご覧なさい。わたしたちはエルサレムに上って行きます。人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡されます。彼らは人の子を死刑に定め、異邦人に引き渡します。嘲り、むちで打ち、十字架につけるためです。しかし、人の子は3日目によみがえります。」3回目の予告では、今までなかった3つことが明らかにされました。①祭司長や律法学者たち、すなわちユダヤの最高法院がイエスを死刑に定めること。②異邦人、すなわちローマ人に引き渡されること。③ローマ人によって十字架刑に処せられることです。しかし、1回目、2回目の予告同様、今回も、イエスは3日目によみがえることが予告されました。

イエスはこの時初めて、ご自分が十字架につけられて死ぬことを明らかにされます。十字架はローマ帝国の最も厳しい死刑の方法でした。しかし、イエスが十字架につけられることには特別な意味がありました。パウロはガラテヤ 3:13 でその意味をこう説明しています。「キリストは、ご自分が私たちのためにのろわれた者となることで、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。」「木にかけられた者はみな、のろわれている」と書いてあるからです。」「木にかけられた者はみな、のろわれている」は申命記 21:23 の引用です。律法ののろいとは、律法がすべての人を罪に定めたことです。なぜなら、だれも律法を完全に守ることができず、その結果、すべての人が罪に定められたからです。そこで、罪人の私たちを救うために、イエスが十字架で、私たちの代わりに律法ののろいを負い、神のさばきを受けてくださったのです。そして、3日目によみがえって、私たちのための救いを完成させてくださったのです。

ルカ 18:34 を見ると弟子達には、このイエスの死と復活の予告の意味が何一つ分からなかったとあります。弟子達が、イエスの死と復活の意味を完全に理解するのはペンテコステを待たなければならなかったのです。そしてペンテコステの日に聖霊が弟子たちに下るとイエスの死と復活によって成し遂げられた救いの福音を人々に大胆に宣べ伝えます。Ⅰコリント1:23-24でパウロは言います。「しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えます。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かなことですが、ユダヤ人であってもギリシア人であっても、召された者たちにとっては、神の力、神の知恵であるキリストです。」「私たちもこのキリストの十字架によって、律法ののろいである罪の中から贖い出され救われました。この救いを成し遂げるために、イエスがエルサレムに向かわれたことを覚えましょう。

2. 皆に仕える者 20-28

イエスの受難の予告は、この時残念ながら弟子たちには、何一つわかりませんでした。むしろ、イエスがエルサレムに上られると、ついにイスラエルの王となられ、ローマ帝国の支配からイスラエルを開放してくださるのではないかと期待が膨らみました。弟子たちにはまだ天の御国と地上の国の違いが判らなかったのです。そこで、ゼベダイの息子の母、すなわちヤコブとヨハネの母が、二人の息子と一緒に願い事をするために、イエスのところに来てひれ伏しました。

21節でイエスが彼女に「何を願うのですか」と言われると、彼女は言いました。「私のこの二人の息子があなたの御国で、一人はあなたの右に、一人はあなたの左に座れるように、おことばを下さい。」母親は息子の出世を願い、一人が右大臣に、一人を左大臣にしてくださいとイエスに求めたのです。それは母親の願いでもあり、ヤコブとヨハネの願いでもありました。このままではペテロに出世を追い越されと思ったかもしれません。

それに対してイエスは答えられました。22節「あなたがたは自分が何を求めているのか分かっていません。わたしが飲もうとしている杯を飲むことができますか。」イエスが飲もうとしている杯とは、十字架の苦しみです。イエスはヤコブとヨハネに対して、イエスのために苦しむことができるかと尋ねられたのです。それに対して彼らは「できます」と言いました。二人は杯の意味が十分わからずにさりと答えました。それに対して23節で、イエスは言われました。「あなたがたはわたしの杯を飲むことになります。しかし、わたしの右と左に座ることは、わたしが許すことではありません。

わたしの父によって備えられた人たちに与えられるのです。」イエスはヤコブが使徒の中で最初の殉教することも、ヨハネが厳しい迫害に会って島流しになることも知っていました。しかし、天の御国での立場は、父なる神だけが決められることであり、人が願うことではないと戒められたのです。24節 ほかの十人はこれを聞いて、この二人の兄弟に腹を立てた。すなわち、12弟子の全員が我先にと天の御国での出世を願っていたのです。そこでイエスは地上の国と天の御国では、偉い人についての理解が正反対であることを25節から教えられました。25～27 節 そこでイエスは彼らと呼ばせて言われた。「あなたがたも知っているとおり、異邦人の支配者たちは人々に対して横柄にふるまい、偉い人たちは人々の上に権力をふるっています。あなたがたの間では、そうであってはなりません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、皆に仕える者になりなさい。あなたがたの間で先頭に立ちたいと思う者は、皆のしもべになりなさい。」この世では、人の上に立ち権力をふるう人が一番偉い人と考えます。しかし、天の御国では人の下に立って、皆に仕える者が一番偉いのです。そして、イエスご自身が皆に仕えるしもべとなられたのです。28節「人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのと、同じようにしなさい。」

神の子イエスは、地上において人々に仕えられ、最後には十字架で多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えてくださいました。贖いの代価とは、もともとは奴隷を解放するための身代金のことです。イエスは律法ののろいの中で罪の奴隷となっていた私たちを解放し、神のものとするために、ご自分のいのちを贖いの代価としてくださったのです。このイエスのしもべとしての仕える姿に倣うことこそ、イエスの弟子としての生き方なのです。「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、皆に仕える者になりなさい。あなたがたの間で先頭に立ちたいと思う者は、皆のしもべになりなさい。」私たちもイエスと同じように、皆に仕える者となって、この世に与えられている使命を果たしていきましょう。

3. 深いあわれみ 29－34

イエスがエリコの町を出て、エルサレムに向かうと、大勢の群衆がついて行きました。30節 すると見よ。道端に座っていた目の見えない二人の人が、イエスが通られると聞いて、「主よ。ダビデの子よ。私たちをあわれんでください」と叫んだ。マルコ10:46ではこの盲人の一人はバルティマイという名前の人であったことがわかります。当時は盲人のための仕事なかったので、彼らは生きるために道端で物乞いをしていたのです。二人はイエスのうわさを聞いていました。そして、イエスが盲人の目を開く奇跡を行われたことも聞いていました。そのイエスが今、自分たちの前を通っておられるのです。二人は大声で「主よ。ダビデの子よ。私たちをあわれんでください」と叫びました。すると31節 群衆は彼らを黙らせようとたしなめたが、彼らはますます、「主よ、ダビデの子よ。私たちをあわれんでください」と叫んだ。

イエスは彼らの必死の叫び声を聞かれました。そして32節 イエスは立ち止まり、彼らを呼んで言われた。「わたしに何をしてほしいのですか」日本では以心伝心と言われ、言わなくてもわかるでしょうと思うかもしれませんが、聖書はイエスに対してはっきりと信仰告白することの大切さを教えています。この時も、イエスは二人の盲人に対して、自分たちの願いをはっきりと言い表すことを求められたのです。それに対して33節 彼らは言った。「主よ、目を開けていただきたいのです。」34節 イエスは深くあわれんで、彼らの目に触れられた。すると、すぐに彼らは見えるようになり、イエスについて行った。

マルコとルカの福音書を見ると、イエスは「あなたの信仰があなたを救いました」と言って、目を開かれます。イエスは彼らが、人々が黙らせようとしてもイエスに対して叫び続け、「主よ、目を開けていただきたいのです。」とはっきりとイエスに求めたことに彼らの信仰を見られ、その信仰に答えられたのです。マタイの福音書ではマルコやルカにはない「イエスは深くあわれんで、彼らの目に触れられた」と記して、イエスの深い憐れみを強調しています。イエスが皆に仕え、自分のいのちを与えられたのも、罪人の私たちに対する深いあわれみによったのです。そのイエスの深い憐れみによる救いをいただくためには、わたしたちも彼らのようにへりくだって、「主よ。あわれんでください。私をお救いください」とイエスへの信仰をはっきりと言い表すことなのです。そうすれば、主は私たちを深くあわれみ、私たちを十字架の贖いをもって救ってくださいます。主のあわれみは尽きないからです。

マタイ21章1節～11節 「エルサレム入城」

1. 主がお入り用なのです 1－3

今日の箇所からイエスの最後の一週間、受難週が始まります。今日の箇所は受難週が始まる日曜日にイエスが子ろばに乗ってエルサレムの城壁の中に入って行かれた出来事「エルサレム入城」が記されています。1～3 節 さて、一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山のふもとのベテパゲまで来たその時、イエスはこう言って、二人の弟子を遣わされた。「向こうの村へ行きなさい。そうすればすぐに、ろばが見つがれていて、一緒に子ろばがいるのに気がつくでしょう。それをほどこいて、わたしのところに連れて来なさい。もしだれかが何か言ったら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。すぐに渡してくれます。」まず、ここで覚えたいことは、イエスが向こうの村にいるろばのことや、『主がお入り用なのです』と言えば、ろばを渡してくれるということをあらかじめ知っておられたことです。これはイエスがすべてのことをご存じである神なので、できることなのです。「神にはどんなことでもできます」というみことばが、ここでもイエスにあって実現しているのです。実際、6-7 節を見ると、弟子たちは行って、イエスが命じられたとおりにし、ろばと子ろばを連れて来たのでした。

もう一つのことは、「主がお入り用なのです」というみことばに、ろばの持ち主が応答して、ろばを渡してくれたことです。マルコとルカの福音書を見ると、そのことが記されています。弟子たちがろばをほどこいていると、持ち主たちが「どうしてろばをほどくのか」と言いました。そこで弟子たちが「主がお入り用なのです」と言うと、彼らはろばを持っていくことを許してくれたのです。親ろばと子ろばがイエスのもとに持って行かれ、イエスは子ろばに乗ってエルサレムに入城されたのです。子ろばはイエスのエルサレム入城という大切な出来事のために用いられる光栄に預かりました。そして、それは持ち主が「主がお入り用なのです」というみことばに、快く応答したからなのです。

神は私たちにも、「主がお入り用なのです」と言われることがあります。その時私たちはどのように応答するでしょうか。「主がお入り用なのです」と神が言われるとき、神は決して私たちにとって不可能なことや無理なことを言われません。この時も、マルコの福音書を見ると「主がお入り用なのです」の後に、「すぐにまたここにお返しします」と言うように、イエスは言われました。ですから、親ろばも子ろばもイエスのエルサレム入城の後、また持ち主のもとに戻されたのです。しかもその時には子ろばにはイエスをお乗せしたというすばらしい経験付きで、また親ろばはその子ろばとともに歩いたという経験付きで戻ってきたのです。ですから、私たちも「主がお入り用なのです」との神からのチャレンジを受けた時には、断らずに、「主よ、お用いください」と言って、神に用いていただきましょう。私たちが主に用いていただく時、私たちは主に用いていただいたというすばらしい経験を、人生の中でいただくことができるのです。

すでに召された榎本保郎牧師は、自分のことを子ろばを意味する「ちいろば」と言って、イエスをお乗せし、イエスに従っていく自分でありたいと願われました。その人生の証しが「ちいろば」という本になりました。私たちも「主がお入り用なのです」というみことばに応答する者となり、イエスをお乗せし、イエスに従う子ろばのようになりましょう。

2. 子ろばに乗るイエス 4－7

では、なぜイエスは子ろばに乗ってエルサレムに入城されたのでしょうか。それは旧約聖書の預言が成就するためだったのです。4-5 節 このことが起こったのは、預言者を通して語られたことが成就するためであった。「娘シオンに言え。見よ、あなたの王があなたのところに来る。柔和な方で、ろばに乗って。荷ろばの子である、子ろばに乗って。」これはゼカリヤ 9:9 のみことばで、やがて来られる救い主は子ろばに乗って来られるという預言です。この預言がイエスのエルサレム入城において成就したのです。

けれどもなぜ救い主はろばに乗って来なければならなかったのでしょうか。一つには、救い主のへりくだりを表すためでした。子ろばに乗る王は、柔和な方であると預言されます。柔和とは心優しいという意味とともにへりくだったという意味があります。子ろばに乗る王は、へりくだったお方でした。そして、それがイエスにおいて成就したのです。イエスは子ろばに乗って、ご自分がへりくだったお方であることを表されたのです。そして、そのイエスのへりくだりは、この週の金曜日にすべての人のために十字架で死ぬまでへりくだることを意味していたのです。

もう一つのことは、イエスが子ろばに乗ることによって、ご自分が平和を成し遂げる救い主であることを表されたのです。ゼカリヤ 9:9 の預言には続きがあります。9:10「わたしは戦車をエフラ임から、軍馬をエルサレムから絶えさせる。戦いの弓も絶たれる。彼は諸国の民に平和を告げ、その支配は海から海へ、大河から地の果てに至る。」すなわち、やがて来られる救い主は、地上の戦いを止めさせる平和の王として来られるという預言です。イザヤも救い主は「平和の君」と呼ばれると預言しました。イエスの時代、王が都に凱旋する時には馬に乗りました。馬は軍馬であり、軍事力の象徴です。ローマの平和、パックス・ロマーナと呼ばれたイエスの時代は、ローマ帝国が軍事力によって世界を統一したのです。一方、ろばは平和の象徴でした。イエスがろばの子に乗って来られたのは、ご自分が平和の王、平和の君として来られたことを意味したのです。

しかも、イエスが与える平和とは、何よりも神との平和でした。イエスは、神に敵対している人間が、罪の中で滅びに向かっていることをあわれみ、罪の中から救うために、これから十字架に向かっていかれたのです。そして、十字架の死によって、私たちの罪を贖い、神との平和を成し遂げてくださいました。その結果、私たちがイエスの十字架の救いを信じるなら、すべての罪が赦され、神との平和をいただくことができます。そして、神との交わりが回復し、私達のたましいの親である神のもとに帰って、私たちの心は平安に満たされるのです。そして、そこから人との平和が築かれていくのです。その結果として、敵を愛する者とされ、争いが止まるのです。私たちはイエスのへりくだりを通して成し遂げられた神との平和の尊さを覚えて、主に心から感謝しましょう。

3. 賛美の叫び 8-11

イエスがエルサレムに入城される時、8 節で、非常に多くの群衆が、自分たちの上着を道に敷き、また木の枝も道に敷きました。これは、王をお迎えする時の歓迎と王への服従を表す行為でした。そして、群衆はこう言って叫びました。

9 節「ホサナ、ダビデの子に。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。ホサナ、いと高き所に。」ホサナは、元々はヘブル語で「お救いください」を意味する言葉でしたが、その後、賛美の叫びとなりました。ですから群衆はイエスを大声でほめたたえて、王として、救い主として迎えたのです。しかし、多くのエルサレムの住民はまだイエスがだれなのかを知らず、イエスの入城に対して驚き大騒ぎになって、「この人はだれなのか」と言いました。すると 11 節で群衆は「この人はガリラヤのナザレから出た預言者イエスだ」と言ったのです。たぶんこれは、群衆の中のガリラヤ出身の人たちの声だったでしょう。

イエスを迎えた群衆は、イエスのエルサレム入城の本当の意味を知りませんでした。彼らはイエスが救い主として、自分たちをローマの支配から解放するイスラエルの王となると期待して、イエスを賛美して迎えたのです。当時の人々が理解していた救い主とは、イスラエルを再び国として独立させる王となるお方でした。しかし、数日後にはイエスが自分たちが期待していたような王ではないことに気づきます。期待を裏切られた群衆は、祭司長たちの扇動によって、金曜日には「十字架に付けろ」と叫ぶようになるのです。イエスはそのこともご存じの上で、この日は群衆の賛美の叫びを受け入れられ、エルサレムに入って行かれました。

私たちはどうでしょうか。私たちは聖書を通して、そしてイエスを信じる信仰によって、イエスがエルサレムに入城された意味をすでに知っています。それは「多くの人のための贖いの代価として、私たち一人ひとりの贖いの代価として、自分のいのちを与えるため」でした。イエスは、十字架の死によって罪の贖いを成し遂げ、3 日目によみがえり、翌週の日曜日に再び弟子たちに現れたのです。そのイエスの死と復活によって、私たちはすべての罪が赦され、神との平和をいただきました。そしてその救いに感謝して、心からイエスを賛美し、ほめたたえることができます。残念ながら現在は新型コロナウイルス対策のために、全員で賛美の叫びをあげることができませんが、賛美の思いをもって心の中で

私たちの救い主、平和の君であるイエスをほめたたえましょう。そして、一人の時には賛美の声を上げましょう。今週一週間も、「主がお入り用なのです」との御声に応答し、主の御用に用いていただきましょう。

マタイ21章12節～27節 「わたしの家」

1. 宮きよめ 12－17節

12－17節は受難週の月曜日の出来事です。当時のエルサレムにはヘロデ大王が拡張工事をした大きな神殿が建っていました。この週は過越の祭りが祝われるため、各地から多くの人々が集まってきました。イエスもこの日神殿に入り、「宮きよめ」と呼ばれる出来事を行われたのです。12－13節それから、イエスは宮に入って、その中で売り買いしている者たちをみな追い出し、両替人の台や鳩を売る者たちの腰掛けを倒された。そして彼らに言われた。「『わたしの家は祈りの家と呼ばれる』と書いてある。それなのに、おまえたちはそれを『強盗の巣』にしている。」当時の神殿は一番外側に異邦人の庭があり、異邦人はそこまで入ることができました。その内側に婦人の庭がありユダヤ人女性が入ることができ、その内側にイスラエルの庭があり、ユダヤ人男性が入ることができました。それより内側は祭司以外に入ることができませんでした。イエスはこの時、異邦人の庭に入られました。そこには、神殿にきた人が神殿税を払うために、ローマのお金をイスラエルのお金に両替する両替所がありました。両替人たちは高い手数料を取って儲けていたのです。また神殿にささげるための鳩などの犠牲のいけにえが売られていました。商売人はこの売り上げで儲けていました。そして、これらの元締めが祭司だったのです。祭司は両替やいけにえの販売を通して私腹を肥やしていたのです。イエスはこれを見て、売り買いしている者たちをみな追い出し、両替人の台や鳩を売る者たちの腰掛けを倒されるという宮きよめを行われたのです。そして「『わたしの家は祈りの家と呼ばれる』と書いてある。それなのに、おまえたちはそれを『強盗の巣』にしている。」と言って、聖なる怒りを表されたのでした。

その後14節でイエスはご自分のもとに集まってきた目の見えない人や足の不自由な人たちを癒されました。さらに15節で、子どもたちが「ダビデの子にホサナ」と言ってイエスをほめたたえたのです。この出来事を見た祭司長や律法学者たちが腹を立て、16節でイエスに「子どもたちが何と言っているか、聞いていますか」と言いました。するとイエスは、「聞いています。『幼子たち、乳飲み子たちの口を通して、あなたは誉れを打ち立てられました』とあるのを、あなたがたは読んだことがないのですか。」と詩篇8:2のみことばを引用し、子どもたちの賛美を受け入れられたのです。この神殿での出来事を通して、教会とはどのような所なのかを教えられます。教会は本質的には建物ではなく、クリスチャンの集まりです。そして、当時は神殿という集まる場所があったように、今日はクリスチャンが集まる場所として教会堂が与えられています。この教会堂は「わたしの家」すなわち神の家です。教会堂は神のものであり、神ご自身が礼拝される場なのです。「わたしの家は祈りの家と呼ばれる」とのイザヤ56:7のみことばは、今日の教会堂にも当てはまります。ここで祈りがささげられ、神への礼拝がささげられます。また、隣人のための愛の働きが行われ、主を賛美します。この祈りの家である教会堂を、イエスが強盗の巣と言われたような個人的な欲を満たす場所にしてはいけなないのです。

さらに大切なことは、祈りの家である教会堂では、すべてことをイエスを信じる信仰によって行うことです。当時の神殿礼拝は荘厳なもので、祭司長や律法学者たちも形式的にはすばらしい礼拝をささげ、祈りや賛美をしていました。しかし、彼らはイエスを信じず、イエスの愛のみわざやイエスが賛美されることに腹を立て、イエスを拒んだのでした。私たちはそうであってはいけません。クリスチャン、キリスト者とは、イエスをキリスト、救い主と信じる者です。私たちはこの教会堂でイエスの御名によって祈り、イエスを通して父なる神を礼拝し、イエスの名によって良いわざを行い、イエスの御名を賛美します。私たちの教会に教会堂が与えられていることを感謝し、「わたしの家は祈りの家と呼ばれる」という場所として、教会堂を用いていきましょう。

2. 信仰による祈り 18－22節

18節からは受難週火曜日の出来事です。イエスは火曜日の朝早く宿泊先のベタニアからエルサレムに向かわれました。その途中空腹を覚えられたイエスは、一本のいちじくの木を見つけました。ところがその木は葉はありましたが、実がなかったのです。そこでイエスは、「今後いつまでも、おまえの実はならないように」と言われました。するとたちまち、いちじくの木が枯れたのです。もちろん、イエスはいちじくの実が食べられないので、腹を立てていちじくの木を枯らしたわけではありません。そうではなく、いちじくの木はイスラエルを象徴していたのです。イエスが救い主として来られた時、確かに外面的、形式的にはイスラエルは神を敬い、律法を守り、荘厳な神殿礼拝を行っていました。しかし、彼らはイエ

スを救い主と信じる信仰の実を結ばなかったのです。その結果、この週の金曜日にはイエスを十字架に付けてしまうのです。イエスはこのいちじくの木をイスラエルの霊的状态を表すものとして見られました。そして、ご自分に対する信仰の実を結ばないならば、やがて神のさばきによって滅んでしまうという警告を与えられたのです。

しかし、弟子たちはいちじくの木が枯れた出来事の霊的意味を知ることができず、むしろいちじくの木が枯れたことに驚き、「どうして、すぐにいちじくの木が枯れたのでしょうか」と言いました。それに対してイエスは21-22で答えられました。「まことに、あなたがたに言います。もし、あなたがたが信じて疑わないなら、いちじくの木に起こったことを起こせるだけでなく、この山に向かい、『立ち上がって、海に入れ』と言えば、その通りになります。あなたがたは信じて祈り求めるものは何でも受けることになります。」山とは、大きな問題や課題を表すユダヤの表現で、17章にも出てきました。人間的には山を海に動かすことは不可能なことです。しかし、信じて疑わずに祈れば、人間的には不可能と思われる問題も神が解決してくださると言って、弟子たちに祈りの励ましを与えられたのでした。

イエスは人間の救いについて、「それは人にはできないことですが、神にはどんなことでもできます」と教えられました。私自身も信仰を持った時のことを思い返すと、自分の力で信じ救われたのではなく、一方的な神のみわざであったことを覚えます。と同時に、その神のみわざの背後に、クリスチャンの祈りがあったとも覚えるのです。私の救いのために祈っていてくださった兄弟姉妹がいたのです。その結果、山が動き、救われたのです。皆さんもそうではないでしょうか。だから私たちも、山は動く信じて、人々の救いのために祈り続けましょう。

3. 神の権威 23-27節

イエスはこの日も神殿の異邦人の庭に入って、教えられました。すると、祭司長、長老たちがイエスもとに来て言いました。23節「何の権威によって、これらのことをしているのですか。だれがあなたにその権威を授けたのですか。」24節イエスは彼らに答えられた。「わたしも一言尋ねましょう。それにあなたがたが答えるなら、わたしも何の権威によってこれらのことをしているのか言いましょう。25節ヨハネのバプテスマはどこから来たものですか。天からですか、それとも人からですか。」神殿を管理しているのは祭司長や長老たちが属する最高法院でした。イエスは、彼らの許可なしに宮きよめをし、神殿で教えたので、彼らは何の権威によってこれらのことをしているのかと問いただしたのでした。しかし、イエスは逆に問い返したのでした。そのイエスの質問に対する返答に彼らは困りました。

25節「もし天からと言えば、それならなぜヨハネを信じなかったのかと言うだろう。」バプテスマのヨハネはイエスが救い主だと証言した人です。ですからヨハネが天から、即ち神の権威によって働いたと認めれば、イエスを救い主と認めることになります。しかし、それはできません。だからと言って人からとも言えません。26節「だがもし人から出たと言えば、群衆が怖い。彼らはみなヨハネを預言者だと思っているのだから。」彼らは群衆を敵に回したくなかったのです。27節そこで彼らはイエスに「わかりません」と答えた。イエスもまた、彼らにこう言われた。わたしも何の権威によってこれらのことをするのか、あなたがたに言いません。」

たとえ、イエスが天からの権威、神の権威によってこれらのことをしていると言ったとしても、彼らは信じることはなかったでしょう。彼らの心はイエスに対して堅く閉じていたのです。祭司長たちはいったい何の権威によって、神殿を管理していたのでしょうか。結局彼らは、神の名前を用いながら、神の権威ではなく、自分たちの権威によって宮を管理し、自分たちの権威を守るために、イエスと対決したのです。この出来事を通して、私たちは何の権威のもとで生きているのかを問われます。私の人生は私のもの、だから自分が自分の人生の権威者であり、それ以外のものには従わないという生き方が、人間としてのあるべき姿なのでしょうか。聖書はそうではないと教えています。伝道者 12:13 にはこうあります。「結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。」私たちの造り主であるまことの神を恐れ、神の権威に従って生きることが、人間のあるべき姿であると聖書は教えます。そして、神の権威に従う時、私たちは正しい道を歩むことができます。その道はイエスを主と信じる道であり、主イエスとともに歩む幸いな道なのです。

マタイ21章28節～46節「要(かなめ)の石イエス」

1. 義の道を信じる 28-32

今日の箇所は先週見た「何の権威によってこれらのことをしているのか」とイエスに質問した祭司長、長老達との会話の続きです。イエスは今日の箇所です。二つのたとえ話をもって、宗教指導者たちの罪を指摘されました。最初のたとえは、「兄と弟のたとえ」です。新改訳 2017 版と第 3 版までの訳を比べると、兄と弟が逆の内容になっています。これは 2017 版が最新のギリシャ語聖書から翻訳したからです。どちらの訳を使ったとしてもメッセージそのものには変わりありません。まず 2017 版で内容を読んで見ましょう。28「ところで、あなたがたはどう思いますか。ある人に息子が二人いた。その人は兄のところに来て、『子よ、今日、ぶどう園に行って働いてくれ』と言った。29 兄は『行きたくありません』と答えたが、後になって思い直し、出かけて行った。30 その人は弟のところに来て、同じように言った。弟は『行きます、お父さん』と答えたが、行かなかった。31 二人のうちのどちらが父の願ったとおりにしたでしょうか。」彼らは「兄です」と言った。イエスは彼らに言われた。『まことに、あなたがたに言います。取税人たちや遊女たちが、あなたがたより先に神の国に入ります。32 なぜなら、ヨハネがあなたがたのところに来て義の道を示したのに、あなたがたは信じず、取税人たちや遊女たちは信じたからです。あなたがたはそれを見ても、後で思い直して信じることをしませんでした。』

ヨハネが示した「義の道」とは、「救いの道」のことです。それは宗教指導者たちのように、行いによる義を求める道ではなく、信仰によって義と認められる救いの道のことです。すなわち、自分の罪を神の前に認めて悔い改め、イエスを救い主と信じて、すべての罪を赦していただき、神の前に義と認められることです。その人は、神の国に入ることができるのです。ある人は、聖書が教える救いの道を聞いた時、すぐに信じることができたでしょう。またある人は、最初は「信じません」と言っただけでも、後になって思い直し、信じたかもしれません。大切なことは、どんなプロセスを通ったとしても、最終的に信じることなのです。それとは反対に、最終的に信じなければ、イエスの救いを得ることができず、神の国に入ることができないのです。主は言われます。「信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」(ヨハネ 20:27) イエスを信じ、信仰義認の救いをいただき、天の御国に入る者となりましょう。

33 節からは「主人と農夫」とたえ話です。まず 33 節～39 節までを読んで見ましょう。33 もう一つのたとえを聞きなさい。ある家の主人がいた。彼はぶどう園を造って垣根を巡らし、その中に踏み場を造り、見張りやぐらを建て、それを農夫たちに貸して旅に出た。34 収穫の時が近づいたので、主人は自分の収穫を受取ろうとして、農夫たちのところにしもべたちを遣わした。35 ところが、農夫たちはそのしもべたちを捕らえて、一人を打ちたたき、一人を殺し、一人を石打ちにした。36 主人は、前よりも多くの、別のしもべたちを再び遣わしたが、農夫たちは彼らにも同じようにした。その後、主人は「私の息子なら敬ってくれるだろう」と言って、息子を彼らのところに遣わした。38 すると農夫たちは、その息子を見て、『あれは跡取りだ。さあ、あれを殺して、あれの相続財産を手に入れよう』と話し合った。そして彼を捕らえ、ぶどう園の外に放り出して殺してしまった。」

しょう。」彼らは、自分たちがその悪者どもとは考えず、自分たちが言った言葉がそのまま自分たちに返ってくるとも知らずに答えたのでした。

このたとえのとおり、イエスは3日後に彼らによって捕らえられ、エルサレムの城壁の外のゴルゴタの丘で、十字架に付けられて殺されました。父なる神はそのことを知りつつ、ご自身の愛するひとり子の神イエスをこの世にお送りくださったのです。イエスの死は当時の宗教指導者だけの責任ではありません。私たちの責任でもあるのです。なぜなら、すべての人は神の前に罪を犯し、神に敵対して歩んでいるからです。ですから農夫たちの姿は、私達の姿でもあります。神はそのようなご自分に敵対する者を愛してくださり、何度も預言者を送り、最後にはイエスを送ってくださったのです。そして、罪のために滅びる者であった私たちを、十字架の贖いによって救ってくださったのです。神の愛とイエスの救いに心から感謝しましょう。

3. 要の石イエス 42-46

イエスは宗教指導者たちの答えに対して、詩篇 118:22-23 の救い主の預言をもって語られ、悪者どもとは彼らのことだと伝えられました。42 節イエスは彼らに言われた。あなたがたは、聖書に次のようにあるのを読んだことがないのですか。『家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった。これは主がなさったこと。私たちの目には不思議なことだ。』家を建てる者たちとは、宗教指導者たちのことです。彼らは、イスラエルという神の民を信仰によって建て上げる使命が与えられているにも関わらず、イエスを拒み、捨てたのです。しかし、彼らが捨てて殺されたイエスはよみがえって、新しいイスラエルである教会の要の石となられたのです。まさにこれは主がなさったことであり、不思議ですばらしい救いの出来事です。

イエスは続けて言われました。43 節「ですから、わたしは言うておきます。神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ民に与えられます。」このとおり、神の国はイエスを拒んだ人たちから取り去られ、イエスを信じたクリスチャンに与えられました。44 節「また、この石の上に落ちる人は粉々に砕かれ、この石が人の上に落ちれば、その人を押しつぶします。」イエスは救い主としてこの世に來られました。そして、今も救い主として私たちを招いておられます。しかし、再び來られる時には、イエスを信じない者にとってはさばき主として來られるのです。だからこそ、私たちは今神を恐れ、罪を悔い改めて、イエスを私の救い主として、心にお迎えすることが大切なのです。

45 節 祭司長たちのパリサイ人たちはイエスのこれらのたとえを聞いたとき、自分たちについて話しておられることに気づいた。彼らはここで、自分たちが悪者どもとされていることに気づきました。本来ならば、ここで悔い改める必要があったのです。しかし、彼らはそうしませんでした。46 節そこでイエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。群衆はイエスを預言者と認めていたからである。しかし、3 日後には群衆を自分たちの側に付けて、イエスを殺してしまうのです。

「家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった。」イエスは今日、教会の要の石となっておられます。エペソ 2:20-22 でパウロはこう言います。「使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられていて、キリスト・イエスご自身がその要の石です。このキリストにあって、建物の全体が組み合わされて成長し、主にある聖なる宮となります。あなたがたも、このキリストにあって、ともに築き上げられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。」 私たちもイエスを救い主と信じた時から、要の石であるイエスの上に建つ教会の一部となりました。一人ひとりが教会の大切な一部分であり、御霊によって組み合わせられ、ともに築き上げられて成長していくことができます。成長の秘訣は、一人ひとりが要の石であるイエスに信仰によってしっかりとつながることです。同時に教会の交わりの中で、共に築き上げられることです。イエスはご自分が捨てられることによって救いを成し遂げ、よみがえって要の石となりました。この要の石であるイエスにしっかりとつながり、教会の交わりの中で、ともに築き上げら、豊かな信仰の実を結ぶ教会となりましょう。

マタイ22章1節～14節 「キリストの義の衣」

1. 招待した客 1-7

イエスは祭司長たちとパリサイ人たちに対して、21章ですでに2つのたとえで話されました。今日の箇所は3つ目のたとえである「披露宴のたとえ」です。2-3節「天の御国は、自分の息子のために、結婚の披露宴を催した王に例えることができます。王は披露宴に招待した客を呼びにしもべたちを遣わしたが、彼らは来ようとしなかった。」結婚の披露宴

は天の御国を表し、王は父なる神、王の息子はイエス、招待した客はユダヤ人を表しています。ユダヤ人は旧約時代から神の救いのご計画のために選ばれた民でした。そこで、イエスの救いはまずユダヤ人に伝えられました。ところが、宗教指導者をはじめ多くのユダヤ人は、イエスを受け入れませんでした。しかし、神は忍耐深く、ご自分の民であるユダヤ人を招き続けられました。それが4節の王の再度の招待です。4節「それで再び、次のように言って別のしもべたちを遣わした。『招待した客にこう言いなさい。「私は食事の用意をしました。私の雄牛や肥えた家畜を屠り、何もかも整いました。どうぞ披露宴においで下さい。」と。』

それに対して、人々はどうしたでしょうか。5-6節「ところが彼らは気にもかけず、ある者は自分の畑に、別の者は自分の商売に出て行き、残りの者たちは王のしもべたちを捕まえて侮辱し、殺してしまった。」ユダヤ人の多くは、神の招きを拒み、旧約時代には預言者を迫害し、救い主イエスが来られると、イエスを十字架に付けて殺し、さらには、イエスを宣べ伝えた弟子たちを迫害して殺してしまいます。その結果どうなったでしょうか。7節「王は怒って軍隊を送り、その人殺しどもを滅ぼして、彼らの町を焼き払った。」このことは、歴史の中で実際に起こりました。イエスの時代から40年後の紀元70年に、ローマ軍がイスラエルを占領し、エルサレムの町も神殿も破壊され、多くのユダヤ人が殺されました。また、生き残った者はローマ帝国中に逃げて、離散の民となったのです。イエスはこの時、このたとえを警告としてユダヤ人指導者に語られました。しかし、彼らはイエスのことばを聞くことはなく、このたとえ話の通りに、神の招待を拒否してしまったのです。

このたとえの前半は、歴史の中でユダヤ人に実際に起こりましたが、今日の私たちへの教えとしても受け取ることができます。神は忍耐深く、私たちがキリストの救いを受け入れて、天の御国に入るようにと招待しておられます。それなのに、もし私たちも神の招きに気にもかけず、自分の仕事や生活を優先していたらどうでしょうか。或いは、福音を伝えた人を迫害したらどうでしょうか。やがて、イエスが再び来られ、最後の審判が行われるとき、私たちは永遠の滅びに至ると、神はこのたとえを通して、警告しておられます。そして、すでに救いの準備が整っているのです。イエスを信じて、天の御国に入りなさいと愛をもって私たちを招き続けておられるのです。その神の招きに応じて、天の御国に入る者となりましょう。

2. 婚礼の礼服 8-13

8-13節はこのたとえの後半部分です。まず8-10節を見てみましょう。「それから、王はしもべたちに言った。『披露宴の用意はできているが、招待した人たちはふさわしくなかった。だから大通りに行って、出会った人をみな披露宴に招きなさい。しもべたちは通りに出て行って、良い人でも悪い人でも出会った人をみな集めたので、披露宴は客でいっぱいになった。』最初に招待したユダヤ人はキリストを拒み、天の御国にふさわしくなかったのも、福音は今度は異邦人にも宣べ伝えられるようになりました。「良い人でも悪い人でも」とは、すべての人のことです。自分は良い人間だと思っている人も、周りが良い人だと認めている人も、神の前にはみな罪人であり、キリストの救いが必要です。反対に、自分は悪い人なので、到底救われないと思っている人や、周りがあのような悪い人は救われなかったとしても、神はどんな人も救うことができます。神はすべての人を愛し、すべての人をキリストの救いの中に招いておられるのです。すべての人の中には異邦人だけでなくユダヤ人も含まれています。

さて、この譬えには続きがあります。11-13節「王が客たちを見ようとして入ってくると、そこに婚礼の礼服を着ていない人が一人いた。王はその人に言った『友よ。どうして婚礼の礼服を着ないで、ここに入ってきたのか。』しかし彼は黙っていた。そこで王は召使たちに言った。『この男の手足を縛って外の暗闇に放り出せ。その男はそこで泣いて歯ざしりすることになる。』婚礼の礼服は、出席者自らが準備するのではなく、王が出席者に与える礼服のことです。披露宴の出席者はみな王から与えられた礼服を着て披露宴会場に入りました。ところが一人だけ王が与える礼服を着るのを拒んで会場に入ってきたのです。そこで王はこの人を披露宴会場から放り出しました。このことは何を意味しているのでしょうか。披露宴が天の御国の意味ですから、天の御国に入るために必要な礼服とは、キリストの義の衣のことです。「キリストの義の衣を着る」とは、罪を悔い改めて、キリストを救い主と信じ、罪を赦されて、神の前に義と認められることです。ガラテヤ3:27では「キリストにつくバプテスマを受けたあなたがたはみな、キリストを着たのです」とあります。イエスを信じて罪が赦され、神の前に義と認められた人は、キリストの義の衣を着たのです。その人は、聖なる神のおられる天の御国に入ることができるのです。それ以外の方法で、天の御国に入ることはできないのです。

パリサイ人たちは自分たちの行いによる義を求めました。自分たちは聖書の教え、律法を守っているのに、神の前に正しいと認められている。だから天の御国に入ることができると考えて、キリストを拒みました。同じように、私たちもし、自分は良いことをいっぱいしたから、天国に行けると考え、神が私たちのために備えてくださったキリストの救いを拒むなら、天の御国に入ることにはできません。キリストの義の衣を着なければ、だれも神の前に出ることができないのです。神は、私たち自身で到底準備することができない、完全な義の衣を、イエスの十字架の贖いによって備えてくださいました。この神がそなえてくださったキリストの義の衣を着る者となりましょう。

3. 招かれる人と選ばれる人 14

14節はこのたとえの結論です。「招かれる人は多いが、選ばれる人は少ないのです。」「招かれる人は多い」とは、神はすべての人をキリストの救いに招いておられるということです。イエスは、「多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために」十字架で死んでくださいました。イエスの十字架は神がどれほど私たちを愛しておられるか、そして神が愛するすべての人をキリストの救いに招いておられるかを表しています。神に招かれていない人は誰もいません。神はすべての人を天の御国に招いておられるのです。ところが、選ばれる人は少ないとイエスは言われます。それはどのような意味でしょうか。ここでの選ばれる人とは、自分の罪を神の前に悔い改め、イエスを救い主と信じて、キリストの義の衣を着る人のことです。神はすべての人にキリストの義の衣を用意しておられます。私たちが自分の行いによって、完全な義の衣を準備するのではないのです。それは、罪人の私たちには不可能なことです。神が救いを備えてくださいました。私たちは感謝して、イエスを信じて、神の前に義と認めていただき、神の恵みによって、天の御国の一員となることができるのです。ところが、イエスを信じるか信じないかは、それぞれの自由意思に任されているので、ある人は信じるし、ある人は信じません。イエスを信じた人が、選ばれた人なのです。

ある人が、天国の門には、表と裏にそれぞれみことばが書いてあると言いました。表には、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」(使徒16:31)そして、イエスを信じて門をくぐり、天国に入ってから後ろを振り返るとこう書いてあります。「あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました。」(ヨハネ15:16)私たちは自分の自由意思でイエスを信じます。私もそうでした。しかし、クリスチャンになってから、イエスを信じた時のことを思い返すと、神が、私が信じることができるように導いてくださっていたことがわかりました。神様が選んでいてくださったので、信じることができたのです。ですから、救いは人間のわざではなく、一方的な神のみわざなのです。

「選ばれる人は少ない」からと言って、がっかりする必要はありません。イエスは「収穫は多い」とも、マタイ9:37で言われました。ただ「働き手が少ない」のです。「だから、収穫に主に、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださるよう祈りなさい。」と言われました。先に救われた人は、王の披露宴に人々を招き集める、しもべです。私たちは「あなたの救いのために何もかも整っています。あとは罪を悔い改めて、イエスを信じるだけです。イエスを信じて、キリストの義の衣を着て、天の御国にお入りください」と人々にお伝えするのです。そして、信じる人はキリストの義の衣を着て、天の御国に入られるのです。私たちもそうでした。今はソーシャルディスタンスを保つことが大切なため、教会も通常の伝道プログラムを行うことを控えています。けれども、神は今日も人々を招いておられます。そして、私たちをしもべとして用いようとしておられるのです。知恵を出しながら、人々を招く伝道の働きを継続していきましょう。

マタイ22章15節～33節 「神のものは神に」

1. 神のものは神に 15-22

15-22節はパリサイ人とヘロデ党の人たちが協力して、イエスをことばの罠にかけようとした出来事です。当時、この2つのグループは通常は対立している人たちでした。パリサイ人とはパリサイ派に属する人たちのことで、異邦人がユダヤ人から税金を取り立てることは神に逆らうことだと考え、ローマに税金を納めることに反対していました。一方、ヘロデ党とは、ヘロデ王家の再興を願う人たちのことで、そのためにローマに積極的に協力し、税金を納めることに賛成していました。この対立する2つのグループが、ともにイエスを訴えるために協力したのです。

彼らはイエスにこう言いました。16-17節「先生。私たちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれにも遠慮しない方だと知っております。あなたは人の顔色を見ないからです。ですから、どう思われるか、お聞かせください。カエサルに税金を納めることは律法にかなっているでしょうか。いないでしょうか。」この質問はイエスを訴えるための罠でした。もし、イエスが税金を納めることは律法にかなっていると言え、パリサイ人たちがイエスは神に逆らっていると訴え、ローマから独立したいと願っている多くの人たちの反感を買うことになります。一方、もし税金を納めることは律法にかなっていないとイエスと言え、ヘロデ党の人たちは、イエスはローマ皇帝カエサルに反逆していると訴えることができます。ですから、どちらの答えもイエスを訴えることができる質問なのです。

しかし、イエスは彼らの悪だくみを見抜かれ、彼らにとって想定外の答えをされたのです。18-22節 イエスは彼らの悪意を見抜いて言われた。「なぜわたしを試すのですか。偽善者たち。税として納めるお金を見せなさい。」そこで彼らはデナリ銀貨をイエスのもとに持って来た。イエスは「これはだれの肖像と銘ですか。」彼らは「カエサルのです」と言った。その時イエスは言われた。「それなら、カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返しなさい。」彼らはこれを聞いて驚嘆し、イエスを残して立ち去った。

イエスの時代のカエサル即ちローマ皇帝は、アウグストゥスの息子のティベリウスでした。そこで当時のデナリ銀貨にはティベリウスの肖像と「ティベリウス・カエサル 神君アウグストゥスの息子にして皇帝」という銘が刻まれていました。イエスはデナリ銀貨がカエサルの所有物であることを示し、「カエサルのものはカエサルに返しなさい」と教え、税金を納めることを勧めたのです。このイエスの教えを受けて、パウロもローマ13:7でこのように教えています。「すべての人に対して義務を果たしなさい。税金を納めるべき人には税金を納め、関税を納めるべき人には関税を納め、恐れるべき人を恐れ、敬うべき人を敬いなさい。」ですから、クリスチャンが地上の国の国民としての義務を果たし、納税することは神のみこころなのです。

しかし、イエスの答えはそれで終わらず続きがありました。それは「神のものは神に返しなさい」です。この世界とそこにあるすべての物は神によって造られたので、神のものなのです。その神のものを「神に返しなさい」とは、すべての物をもって神の栄光を現し、神に栄光を帰しなさいという意味です。特に人間は、神のかたちとして神によって造られ、生かされています。ですから、私たちには神のかたちとしての銘が刻まれているのです。ところが、すべての人は罪を犯し、神から離れ、神に逆らって生きる者となりました。神から離れた罪人は、自分が神のかたちに造られた、神の作品であることを知りません。そして、その行き着く所が永遠の滅びであることも知らないのです。そのような私たちを神はあわれみ、救うために、御子イエス・キリストを救い主として送ってくださったのです。イエスはこの日の出来事の3日後の金曜日には十字架に付けられて、私たちの罪を贖ってくださいました。そして日曜日によみがえられて救いを完成してくださったのです。

その結果、イエスを救い主と信じる者はすべての罪が赦され、再び神のもの、神の民としてくださるのです。私たちがイエスの救いをいただく時、自分がイエスの血によって贖われ、神のものとされたことを自覚します。そして、私たち自身を神に返す、すなわち、私たちの全存在とすべての行いを通して、神の栄光を現し、神に栄光を帰するという生き方を歩み始めるのです。さらに、天の国籍と地上の国籍の二重国籍を持つ者として、地上の国の国民としての責任を果たしつつ、神の国の民としての責任を果たしていく者とされます。また、クリスチャンにとっては天の国籍が地上の国籍よりも重要です。ですから、国家が神のみこころに反しない限りにおいて、クリスチャンは地上の国の義務を果たします。一方で、もし国家が神のみこころに反することを命じるならば、クリスチャンは「人に従うよりも神に従う」という選択をするのです。それが、「神のものは神に返す」ということなのです。すべてのことを神の栄光のためにする。それが「カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返す」ということです。イエスの救いによって神のものとされた私たち自身を神に返す、神に栄光を返す生き方を全うしましょう。

2. 死人の復活 23-33

パリサイ人とヘロデ党との問答の後、次にサドカイ人がやってきてイエスに質問しました。サドカイ人とはサドカイ派に属する人たちのことで、彼らは貴族階級の祭司でした。サドカイ人はモーセ五書(創世記から申命記までのモーセが書いた五つの書物)だけを信じていたので、そこに書いていない復活を信じていなかったのです。そこで彼らは、復活の教えが間違っていることをイエスに指摘するために、24節から話し始めました。「先生。モーセは「もしある人が、子がないまま死んだなら、その弟は兄の妻と結婚して、兄のために子孫を残さなければならない」と言いました。それは、彼らが信じる申命記25:5のみことばです。そして25節から一つの作り話を言いました。「ところで、私たちの間に7人の兄弟がいました。長男は結婚しましたが死にました。子がいなかったので、その妻を弟に残しました。次男も三男も、そして7人までも同じようにな

りました。そして最後に、その妻も死にました。では復活の際、彼女は7人のうちの誰の妻になるのでしょうか。彼らはみな、彼女を妻にしたのですが。」サドカイ人たちはこの質問で、復活の教えがいかにおかしいかを指摘し、イエスを困らせようとしたのです。

それに対してイエスは答えられました。29-30節「あなたがたは聖書も神の力も知らないのです、思い違いをしています。復活の時には人はめとることも嫁ぐこともなく、天の御使いたちのようです。」サドカイ人たちは、復活とは今のからだに復活するとだと思っていたのです。だから、復活の時には女性は7人の兄弟のうち誰の妻になるのかと問うたのです。しかしそれは彼らの思い違いでした。イエスは、復活のからだは今のからだではなく、神の力によって全く新しいからだを持つ者に、即ち、天の御使いたちのようになるのだと教えられたのです。ですから天国には結婚はありません。もしサドカイ人の架空の話が現実にも起こったとしても、彼女は誰の妻にもならないのです。彼女はキリストの花嫁なのです。このように天国では、地上の家族の関係が続くのではなく、みなキリストの花嫁となり、主にある兄弟姉妹となるのです。天国では、私たちは互いに認識することができますが、地上の関係よりもっと素晴らしい神の家族として生きるのです。パウロもⅠコリント15:44でこう言っています。「血肉のからだで蒔かれ、御霊に属するからだによみがえるのです。血肉のからだがあるのですから、御霊のからだもあるのです。」イエスはさらに続けて教えられました。31-32節「死人の復活については、神があなたがたにこう語られたのを読んだことがないのですか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。』神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神です。」「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」はサドカイ人が信じている出エジプト記3:6の神がモーセに語ったみことばです。アブラハム、イサク、ヤコブはモーセよりもはるか以前に死にました。しかしこのみことばは、アブラハム、イサク、ヤコブが天で今も生きていることを教えていると、イエスは言われたのです。すなわち、イエスが生まれる2千年前に生きたアブラハムたちも、信仰によってイエスと結ばれ、イエスが下さる永遠のいのちをいただいているのです。そして、永遠のいのちと復活は深くつながっているのです。

永遠のいのちを持つ者のたましいは、死の瞬間に天国に行くことができます。しかし、肉体は葬られ土に帰ります。なぜなら、アダムのからだが生土から造られたので、死んだら肉体は土に帰るのです。しかし、それで終わるのではないのです。神は人間を肉体とたましいの両方を持つ者として造られたので、神の救いは肉体とたましいの両方に与えられるのです。永遠のいのちを持つたましいは、死後すぐに天国に行きます。そして、イエスが再びこの世に来られる時、私達の朽ちたからだは復活して朽ちない栄光のからだに変えられるのです。そして、天国に引き上げられ、天にあるたましいと再び一つとなって救いが完成し、永遠の御国で生きる者とされるのです。パウロはこの復活の希望をⅡテサロニケ4:16-18で教えています。「すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会います。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。ですから、これらのことばをもって互いに励まし合いなさい。」

イエスによって永遠のいのちをいただいた者は、栄光の復活にも与ります。それが私たちの希望です。確かな復活の希望です。その時を待ち望み、「主よ、来てください」と祈りつつ、地上にあっては「神のものは神に返す」生き方を全うしましょう。

マタイ22章34節～46節「神と人を愛する人生」

1. 一番重要な戒め 34-40

イエスを訴えるために、いろいろな人が次々とイエスに質問しました。そして、今日の箇所はパリサイ人の質問です。まず34-36節を読みましょう。34節 パリサイ人たちはイエスがサドカイ人たちを黙らせたと聞いて、一緒に集まった。そして彼らのうちの一人、律法の専門家がイエスを試そうとして尋ねた。「先生、律法の中でどの戒めが一番重要ですか。」当時の律法学者たちは律法を細かく分けて、「しなくてはならない」と教える律法が248、「してはならない」と教える律法が365、合計613あると教えました。そして、どの律法がより重要かについて議論があったのです。彼らはイエスに「一番重要な戒めはどれか」と質問することによって、イエスの律法に関する知識を試そうとしたのです。

それに対するイエスの答えは、パリサイ人を圧倒するほどのすばらしいものでした。そして私たちにとっても、このイエスの答えは、聖書とは何かを知るためのすばらしい教えとなりました。そのイエスの答えを見てみましょう。37-40節 イエスは彼に言われた。『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい』これ

が重要な第一の戒めです。『あなな隣人を自分自身のように愛しなさい』という第二の戒めも、それと同じように重要です。この二つの戒めに律法と預言者の全体がかかっているのです。」

イエスは一番重要な戒めとして、申命記6:5の教えを挙げられました。「聞け、イスラエルよ。」で始まる申命記6:4からのみことばは、ユダヤ人にとっては一日に2度唱える大切なみことばでした。その中で「あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」と教えられているのです。ですからこのみことばは誰もが重要だと理解できる戒めでした。そしてパリサイ人はこのみことばを熱心に守っているとって、自分たちを正当化していたのです。しかし、イエスの答えはこれで終わりませんでした。第二の戒めとしてレビ記19:18の「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」を挙げられ、「第二の戒めも、それと同じように重要です」と言われたのです。当時、この隣人愛の戒めは、神を愛する戒めより重要視されていませんでした。しかしイエスは、この第二の戒めは第一の戒めと同じように重要だと言われ、さらに「この二つの戒めに律法と預言者の全体がかかっているのです」と言われました。

律法と預言者の全体とは、聖書全体の意味です。当時は旧約聖書しかありませんでしたが、私たちにとっては旧新約聖書全体が、この二つの戒めにかかっていると理解することができます。すなわち、聖書66巻をギュッと凝縮すれば、この二つの戒めとなる、あるいは聖書全体は、神を愛し人を愛することを教えているのです。ですから、イエスの答えは律法学者のように、律法の戒めの順位付けをするのではなく、どの戒めも神を愛し、隣人を愛するという目的のためにあるのだから、その目的を忘れて形式的に守っても本来の律法の意味から外れてしまうと教えられたのです。

聖書は大変分厚い書物ですから、すべてを覚えることは難しいことでしょう。けれども、今日の重要な第一と第二の戒めを覚えるなら、聖書理解を深めていくことができ、聖書の教えに生きることができます。「あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」この二つのみことばを今日、心にしっかりと蓄えましょう。

2. 神と人を愛する

第2の点では、この二つのみことばの意味を考えてみましょう。まず第一の戒め「あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」です。日本の宗教は「神を愛する」ことを教えていないのではないのでしょうか。例えば神社に行くと、「神様、あなたを愛します」と祈っている人は果たしているのでしょうか。多くの人は何が祀られているのかを知らず、様々な願い事を祈るということではないのでしょうか。しかし、聖書は第一の戒め、第一の教えが「神を愛しなさい」なのです。

では神を愛するとは具体的にどのようなことなのでしょう。このことを理解するためには、神がまず私たちを愛されたことを知る必要があります。私たちが神を愛するのは、神がまず私たちを愛してくださったことに対する応答なのです。

Ⅰヨハネ4:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。神はご自身のひとり子イエスを、私たちの罪のために十字架でささげてくださったほど、私たちを愛してくださいました。その神の愛を知り、イエスを信じて救いをいただく時、私たちは神を個人的に知り、私の神として神を愛する者に変えられるのです。私たちが、「神様、あなたを愛します」と祈る時、私たちがどんなに神から愛されているかを覚え、その神の愛の応答として、私たちもあなたを愛しますと祈るのです。

さらに神を愛するとは、主なる神を信じることです。神を信じるとは、どんな時も神と神のことばに信頼し、主なる神だけを信じて、他の神々は信じないことです。「心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして」とは私たちの全身全霊をもってということです。二股の信仰であってはいけません。私たちはクリスチャンになるまでは、習慣的に仏教や神道行事や先祖崇拝を行っていたかもしれません。しかし、イエスに救われ、神の子どもになると、天地の創造主であり、私たちを愛し救ってくださった主なる神だけを愛し信じるのです。

さらに神を愛するとは、神に仕えることです。救われた感謝と喜びをもって、神のために奉仕するのです。神への奉仕の第一が神を礼拝することです。英語のサービス(service)は奉仕という意味とともに礼拝という意味があります。ある人が初めてアメリカに行き、日曜の朝に教会の前を通ると「モーニングサービス9時～」と書いてあったので、アメリカでは教会でもコーヒーにトースト、ゆで卵を出すモーニングサービスをしているのかと思ったという話がありますが、英語のモーニングサービスとは朝の礼拝という意味だったのです。礼拝は神への第一の奉仕です。そして、礼拝から様々な奉仕に遣わされるのです。

そして、この奉仕のわざが隣人に対して行われることによって、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」という第二の戒めにつながっていくのです。Ⅰヨハネ4:21「神を愛する者は兄弟も愛するべきです。私たちはこの命令を神から受けています。」私たちを愛してくださった神は、隣人も愛しておられます。そのことを知るときに、私たちは隣人に無関心であってはいけないうこと、さらには隣人を愛することが神のみこころであることを知るのです。神は私たちが神を愛し、隣人を愛する者となるために救ってくださったのです。神の愛に心からの感謝をもって応答し、神と人を愛する人生を歩みましょう。

3. イエスは主 41－46

さて、イエスの答えに対して何も言えなくなったパリサイ人たちに対して、今度はイエスから質問されました。42節「あなたがたはキリストについてどう思いますか。彼はだれの子ですか。」彼らはイエスに言った。「ダビデの子です。」ダビデの子とはダビデの子孫という意味で、旧約聖書に救い主はダビデの子孫から生まれると預言されているのです。マタイ1章もまさにその預言の成就を記しています。イエスも「ホサナ、ダビデの子に」という賛美を受け入れられました。しかし、イエスは人としてはダビデの子ですが、それを知るだけでは不十分なのです。なぜならイエスは「神の子」でもあるからです。そこでイエスは43節からさらに言われました。43－46節 イエスは彼らに言われた。「それでは、どうしてダビデは御霊によってキリストを主と呼び、『主は、私の主に言われた。』「あなたは、わたしの右の座についていなさい。わたしがあなたの敵を足台とするまで。』」と言っているのですか。ダビデがキリストを主と呼んでいるのなら、どうしてキリストがダビデの子なのでしょう。」するとだれ一人、一言もイエスに答えられなかった。その日から、もうだれも、あえてイエスに質問しようとはしなかった。

44節は詩篇110:1の救い主の預言のみ言葉です。ダビデは自分の子孫から救い主が生まれるとの約束を神から頂いていました。そのダビデが御霊によってキリストを主と呼んでいたのです。「主は、私の主に言われた」の最初の「主」は父なる神の事です。そしてあとの「私の主」はキリスト、救い主の事です。ダビデは御霊によって、やがてダビデの子として生まれる救い主は主であると知っていたのです。救い主は人としてはダビデの子であるが、神の子、子なる神でもあるのです。そして、それがイエスご自身なのです。パリサイ人をはじめとする宗教指導者はイエスをダビデの子として認めずましてや神の子として認めませんでした。その結果、イエスが神を冒瀆していると訴え、十字架に付けたのです。

Ⅰコリント12:3には、「聖霊によるのでなければ、だれも『イエスは主です』ということとはできません」とあります。ダビデが聖霊によってキリストを主と呼んだように、私達も聖霊によるのでなければ、「イエスは主です」ということはできません。「イエスは主です」と告白することは、イエスは私の救い主、私の神ですと信じてることです。この信仰告白は、聖霊が私達にみことばの理解を与え、助けてくださる中で、心に信じて告白することができるのです。そして、その時から私達たちは神を愛する者に造り変えられ、同時に隣人を愛する使命を与えられて、聖霊の助けによって行う者とされるのです。今週も「イエスは主です」との信仰を心から言い表し、神と人を愛する人生へと遣わされていきましょう。

マタイ23章1節～12節 「みことばを行う人」

1. みことばを行う人 1－4

23章は、弟子たちに対するイエスの教えです。この中でイエスは律法学者、パリサイ人を非難しながら、弟子たちに正しい信仰の道を教えておられます。1－3節 その時、イエスは群衆と弟子たちに語られた。「律法学者たちやパリサイ人たちはモーセの座に着いています。ですから、彼らがあなたがたに言うことはすべて実行し、守りなさい。しかし、彼らの行いをまねてはいけません。彼らは言うだけで実行しないからです。」モーセの座に着くとは、聖書を教える立場にある人のこととす。律法学者やパリサイ人は、人々に対して、聖書を読み聞かせ、教えていました。イエスは、彼らが教える聖書のみことばは神のことばなので、すべて実行し守りなさいと教えられました。しかし、その後で「彼らの行いをまねてはいけません。彼らは言うだけで実行しないからです。」とも教えられました。彼らはみことばを教えているが、行っていないのです。

このことは、イエスの弟子たちがこれから聖書を教える立場に立つとき、律法学者やパリサイ人のようになってはいけないうことを教えています。みことばを教える人は、教えたことを自ら実行する人にならなければいけないのです。このこ

とは、今日教会で聖書を教える牧師に対して、特に重要な教えです。それは牧師である私自身が絶えず取り組むべき課題です。説教を準備し語る時、みことばはいつもまず自分の心に語られます。説教者に対して、神がそのみことばをもって語られるのです。その時、私自身、みことばどおりに生きているのかを問われ、その足りなさ、不十分さを何度も覚えます。ですから、牧師も神の前に悔い改めつつ、主の憐れみをいただいて、みことばを行う人になるという目標を絶えず抱いて、語っています。また、親が子どもにみことばを教える時も、親自身がみことばを行っているかを問われることでしょう。みことばを教える人は、みことばを行う人に成長することが大切なのです。

そしてこのことは、み言葉を聞く人にも当てはまります。マタイ7章でイエスは、み言葉を聞いて行う人を、岩の上に家を建てた人にとえ、その人はどんな人生の嵐が来ても倒れないと教えられました。一方、み言葉を聞いても行わない人は、砂の上に家を建てた人にとえて、人生の嵐が来ると倒れてしまうと教えられました。ですから、み言葉は語る人も聞く人も、みことばを実行することが大切なのです。ヤコブ1:22「みことばを行う人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者となつてはいけません。」ただ語るだけ、ただ聞くだけではいけないのです。みことばを行う人になりましょう。

さてイエスは4節でさらに言われました。4節「また彼らは、重くて負いきれない荷を束ねて人々の肩に載せるが、それを動かすのに自分是指一本貸そうともしません。」律法学者、パリサイ人が人々の肩に載せる「重くて負いきれない荷」とは、聖書が教えていない彼らが作った様々な規則です。彼らはこれらの規則を守ることによって、聖書の教えである律法を守ることができると教えたのです。しかし、これらの人間が作った教えは、人々にとって重荷となったのです。このことは、今日の教会においても反面教師として教えられます。教会は聖書のみという聖書信仰に立つことが必要であり、そこから外れれば正しい教会とは言えなくなるということです。もし、聖書以外のことを聖書と同等に教えるならば、それは間違った教えなのです。語るのも、聞くのも、行うのも神のみことばであるのが、聖書信仰であることを覚えましょう。そして、その神のこことばを今日の社会に生きる私たちにどのように適用するのかを謙虚に学び、実行するのが教会のあるべき姿であることを確認しましょう。

2. 神の栄光を現す人 5-10

この箇所でもイエスは、律法学者・パリサイ人の間違った行いを通して、イエスの弟子としてのあるべき姿を教えておられます。5節「彼らがしている行いはすべて人に見せるためです。彼らは聖句を入れる小箱を大きくしたり、衣の房を長くしたりするのです。」聖句を入れる小箱とは、革製の小箱で、その中にみことばを書いた紙切れが入っています。そのみことばには先週学んだ「心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くしてあなたの神、主を愛しなさい」も入っています。それを祈りの時に一つを腕に、もう一つを額につけるのです。(申命6:8)また祈りの時には四隅に房の付いた衣を着ました。ふさは神のこことばを思い出してそれを行うために付けられました。(民数15:37-41) 律法学者・パリサイ人はわざと小箱を大きくしたり、ふさを長くして、目立つようにし、人々の注目を集めようとしたのです。

6-7節「宴会では上座を、会堂では上席を好み、広場であいさつされること、人々から先生と呼ばれることが好きです。」結局、彼らは人々の注目を浴び、立派な人だと認められ、自分たちがほめられることを求めたのです。彼らは神の栄光を現すことを求めず、自分の栄光を現すことを求めたのです。22章のみことばを用いるなら、彼らは「神のものを神に返す」ことをせず、「神のものを自分に返す」生き方をしていたのです。しかし、このような生き方はイエスの弟子としてふさわしくありません。クリスチャンは、すべての栄光は神のものであることを覚え、「神のものは神に返す」生き方、「何をするにも、すべて神の栄光を現す」生き方をすることが大切なのです。

イエスは、彼らの間違った生き方を、弟子たちがまねることがないようにさらに教えられました。8-10節「しかし、あなたがたは先生と呼ばれてはいけません。あなたがたの教師はただ一人で、あなたがたはみな兄弟だからです。あなたがたは地上で、だれかを自分たちの父と呼んではいけません。あなたがたの父はただ一人、天におられる父だけです。また、師と呼ばれてはいけません。あなたがたの師はただ一人、キリストだけです。」このみことばはどのように理解すればよいでしょうか。文字通りに取れば、私たちはみことばを行っていないことになります。牧師は先生と呼ばれるし、先生と呼ばれる人は他にもたくさんいます。自分の父親を父と呼ばないとおかしいことになりますし、師と呼ばれる人も牧師だけでなく、教師、医師、看護師など、たくさんいます。このみことばの意味は先生、父、師と呼ばれることによって高慢になってはいけないということです。律法学者やパリサイ人は、人々から先生と呼ばれて高慢になっていたのです。それは神の栄光を現す生き方ではないのです。私たちはどのように呼ばれても、同じ兄弟姉妹であり、あがめられるべきお方は神だけであることを覚え、謙遜に歩んでいきましょう。

3. 皆に仕える人 11-12

11-12節は先ほどの高慢ではなく謙遜に歩むことが、イエスの弟子としての生き方であると教えています。11-12節「あなたがたのうちで一番偉い者は皆に仕える者になりなさい。だれでも、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされます。」これは天の御国における逆転の法則です。この世では一番偉い者は皆から仕えられる者ですが、天の御国では一番偉い者は皆に仕える者なのです。そして、イエスご自身がそのように生きられました。イエスはすでに20:28でこのことを教えられました。「人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのと、同じようにしなさい。」イエスの弟子は、神と人に仕える者です。私たちがイエスの贖いの代価によって救われた時から、神と人に仕える人生が始まったのです。皆に仕える者ですから、自分が一番底辺にいて皆を支える働きをするということです。そのようなしもべとしての生き方がクリスチャンとしてふさわしいのです。

また、天の御国では、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされます。」律法学者・パリサイ人のように自分を高くし、高慢になれば、天の御国では低い評価を受けます。逆に、自分を低くし謙遜になって、神と人に仕える人は、天の御国では高い評価を受けるのです。

アメリカの大統領として 1977 年から 4 年間務めたのがジミー・カーターでした。彼は現在 95 歳で、92 歳のロサリン夫人とともに健在です。カーター元大統領は福音的なクリスチャンで、長く教会学校で教え大統領になってもその奉仕を続けたそうです。そして大統領退任後、貧しい人のために家を建てる働きにボランティアとして参加しました。そして、95 歳の現在も、他のボランティアの助けを受けながら自ら金槌を持って夫人とともに家を建て続けています。そして集まったボランティアに聖書を教えイエスを信じる幸いを証ししています。他のボランティアは元大統領と一緒に家を建てることを誇らしく思います。カーター元大統領の生き方は、今も「皆に仕えるしもべ」としての良き模範となっているのです。ところで英語では、大統領として働くことを、大統領として仕える(serve as President)と表現します。この大統領として仕えるという表現にも、「一番偉い者は皆に仕える者になりなさい」というイエスの教えを覚えることができます。

私たちはだれが一番偉いのかと比べたり、競争する必要はありません。特に教会では私たちの教師、師はただ一人イエスだけ、私たちの父はただ一人、父なる神だけです。そして、イエスの血によって神の子どもとされ私たちは、みな兄弟姉妹なのです。私たちは主にある兄弟姉妹として、互いに仕え合い、ともに神に仕えます。そして、その奉仕の土台にみことばの実践があるのです。今週も、みことばを行う者となり、へりくだって皆に仕える者となって、自分の栄光のためではなく、ただ神の栄光のために歩みましょう。

マタイ23章13節～24節「偽善者への嘆き」

1. 偽善の福音 13-15

今日の箇所からイエスは 7 回「わざわいだ」と言って律法学者とパリサイ人の偽善を責められます。イエスは律法学者やパリサイ人が見せかけの善を行うことに終始していることを嘆いておられるのです。わざわいと反対の言葉は幸いです。マタイ 5 章の 8 つの幸いの教えと正反対の生き方をしている彼らの頑なな態度をイエスは嘆いておられるのです。

ところで 2017 版聖書では 14 節は脚注に入れられました。それは、聖書の様々な写本の研究によって、14 節はもともとの原典にはなかったという判断からです。ではまず 13 節を見てみましょう。「わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは人々の前で天の御国を閉ざしている。おまえたち自身も入らず、入ろうとしている人々も入らせない。」律法学者、パリサイ人が伝える教えは、偽物の福音でした。彼らは、「人は律法を行うことによって、神の前に義と認められる」という行いによる救いを説いたのです。そして、自分たちは律法を守っていると言って、自慢していたのです。その結果、「イエスを信じる信仰によって、神の前に義と認められる」という信仰による救いを拒み、イエスを救い主と信じなかったのです。この偽りの福音は彼ら自身が天の御国に入れないばかりか、入ろうとする人々も入らせないという悪影響を及ぼしたのです。

さらに彼らの悪影響は異邦人のユダヤ教改宗者にも及びました。15 節「わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。

おまえたちは一人の改宗者を得るのに海と陸を巡り歩く。そして改宗者ができる、その人を自分より倍も悪いゲヘナの子にするのだ。」当時ユダヤ人はローマ帝国中に住み、各地にユダヤ教の会堂がありました。そして、各地の異邦人に対する伝道も行われていたのです。律法学者、パリサイ人は、異邦人伝道のために海と陸を巡り歩いたのです。そして、異邦人がユダヤ教に改宗すると、改宗者はユダヤ人よりも熱心なユダヤ教徒となったのです。その結果、彼らはますますイエスから離れていき、ゲヘナの子、即ち永遠の滅びの子となって行ったのです。

このように律法学者、パリサイ人が教える偽りの福音は、自分たちが天の御国に入れないばかりか、それを信じる他の人も入れないようにしていたのです。このことは現代も通じることです。最近、教団を通して、異端の活動に対する注意喚起文が度々送られてきます。先日は統一教会の活動に対して、その前はクオンパ(救援派)と呼ばれる異端の活動に対する注意喚起がありました。それぞれが様々な名前の団体を通して働いているので、それとは知らず集会に誘われ、今は特にオンラインの集まりに参加してしまう危険性があるのです。統一教会は、文鮮明を再臨のキリストとし、彼の死後は彼の妻を2代目の再臨のキリストとしています。そして、救いは文鮮明と彼の妻を信じ、従うことによって得られるとします。クオンパは自分たちの教会に来て救いを悟らなければ救われないと教えます。彼らはともに熱心に伝道しますが、彼らが伝える福音は偽物です。今はネットを通して、様々な情報に触れることが可能ですが、そこには多くの偽善の福音があることも覚え、注意しなければなりません。偽善の福音に対して十分注意しましょう。

2. 偽善の誓い 16-22

16-22 節では律法学者、パリサイ人が行う偽善の誓いについてのイエスの嘆きです。誓いについては民数記 30:2 に次のようにあります。「男が主に誓願をするか、あるいは物断ちをしようと誓う場合には、自分のことばを破ってはならない。すべて自分の口から出た通りのことを実行しなければならない。」このように、誓いは大変重い行為であり、軽々しく行ってはならないのです。ところが、律法学者、パリサイ人は自分たちの神への熱心さや誠実さを示すために、誓いを度々行っていたようなのです。しかし、彼らは誓いを果たせない場合の抜け道も作っていたのです。16 節では「だれでも神殿にかけて誓うのであれば、何の義務もない。しかし、神殿の黄金にかけて誓うのであれば、果たす義務がある。」また 18 節では「だれでも祭壇にかけて誓うのであれば、何の義務もない。しかし、祭壇の上のささげ物にかけて誓うのであれば、果たす義務がある。」例えば、ある律法学者が神殿の前に立って誓うとしましょう。それを見ていた人たちが、「さすが信仰深い律法学者だ。特別な誓いをして神の前に敬虔に生きているのだ。」と思います。しかし、実際はその律法学者は神殿の黄金にかけて誓っていないので、誓いを果たさなくてもよいのです。彼の誓いは単なる人々の前でのパフォーマンスだったのです。

イエスは彼らの偽善を見抜いて言われました。17 節では「黄金と、その黄金を聖なるものにする神殿と、どちらが重要なのか。」また 19 節以降で言われます。「ささげ物と、そのささげ物を聖なるものとする祭壇と、どちらが重要なのか。祭壇にかけて誓う者は、祭壇とその上にあるすべての物にかけて誓っているのだ。また、神殿にかけて誓う者は、神殿とそこに住まわれる方にかけて誓っているのだ。天にかけて誓う者は、神の御座とそこに座しておられる方にかけて誓っているのだ。天にかけて誓う者は、神の御座とそこに座しておられる方にかけて誓っているのだ。」イエスは、彼らの考え方は間違っているし、神の前では彼らのへ理屈は通じないと言われました。そして、どこを向いて誓っても、誓いは神の前に誓うことだと教えられたのです。ですから、誓いは誠実に守らなければならないし、守れないような誓いはそもそもしてはいけないのです。彼らは聖書は良く知っていたかもしれないが、聖書が教える霊的真理を見ることができない「目の見えない案内人」だったのです。

私たちも彼らが陥った偽善に注意しなければなりません。箴言 29:25 には「人を恐れると罠にかかる。しかし、主に信頼する者は高い所にかくまわれる。」とあります。人の目を恐れたり、あるいは人から良く見られたいと願うと、人前のパフォーマンスをすることになります。聖書の「偽善者」という言葉は、もともと役者という意味があります。人前でお芝居をする人です。私たちも人の目を気にすると、人前でよく見られるためのお芝居、演技、パフォーマンスをするようになるのです。しかし、それでは偽善の罠にかかってしまうのです。一方、私たちが主に信頼し、人の目ではなく、主の目を意識し、主の前で誠実に生きようとすれば、主が偽善の罠から私たちを守ってくださるのです。それが主に信頼する者は高い所にかくまわれるということです。主に信頼し、偽善の罠からの主の守りをいただいて歩みましょう。

3. 偽善のささげ物 23-24

ここではイエスは、律法学者、パリサイ人が小さいことに熱心なのに、もっと大きな大切なことをおろそかにしている偽善を嘆いておられます。23 節「わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちはミント、イノンド、クミンの十分の一を納めているが、律法の中ではるかに重要なもの、正義とあわれみと誠実をおろそかにしている。十分の一もおろそかにしてはいけませんが、これこそしなければならないことだ。」旧約聖書には畑の収穫物や家畜の十分の一を神に献げることが教えられています。一方、律法学者、パリサイ人は律法が命じていないミント、イノンド、クミンという庭の草類の十分の一までささげることによって、律法を完全に守っていることを自慢しました。しかし、イエスは、律法の中ではるかに重要な、正義とあわれみと誠実をおろそかにしていると言って、彼らの生き方がまちがっていると指摘されたのです。彼らは 24 節にあるように「ブヨはこして除くの、らくだは飲み込んでいる」ような間違いを犯しているのです。正義、あわれみ、誠実は、旧約聖書に何度も出てくる言葉で、それだけ大切なものです。正義については、まず神ご自身が正義の神であり、正義を愛されるお方です。そして、私たちに対して正義を行うことを求められるのです。あわれみについても、神があわれみ深い神であり、私たちにもあわれみを求めておられます。誠実についても、真実な神に対する私たちの誠実な応答が教えられています。ホセア 10：12 には「あなたがたは正義の種を蒔き、誠実の実を刈り入れ、耕地を開拓せよ。」とあります。「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」も困っている人に対するあわれみの実践を教えています。これらの正義、あわれみ、誠実という聖書の重要な教えをないがしろにして、律法を事細かに守ろうとしても、それは本来の信仰でなく、単なる律法主義なのです。

このことは、私たちも気をつけなければなりません。イエスはここで「十分の一もおろそかにしてはいけませんが」と言っておられるので、今日の十分の一献金を否定しておられるわけではありません。私たちは感謝をもって主から与えられたものの十分の一をささげたいと思います。しかし、十分の一献金も規則にすると律法主義となってしまいます。律法主義になると、十分の一献金をしている人は正しく、していない人は間違っているとなってしまうのです。しかし、聖書はそうは教えていません。献金は私たちの神への感謝の応答であり、その感謝をイエスが言われたように十分の一献金としてささげます。できると時にはもっとささげても良いし、できない時には神に個人的に相談し、今できる献げ物を、感謝をもってささげてよいのです。これは礼拝出席においても、奉仕においても同じです。律法主義になれば、そこには自由な応答がなくなり、強いられて行うことになってしまうのです。しかし、礼拝も奉仕も強いられてではなく、神に救われた心からの感謝をもって行うところに、喜びの礼拝や奉仕になっていきます。

イエスは私たちを救うために、ご自身の尊い命を十字架でささげてくださいました。その神の愛とイエスの贖いに感謝して、私たちは自分自身を神にお献げし、神に仕えていきます。その信仰生活には偽善は必要ありません。どこまでも神に誠実に仕え、正義とあわれみを大切に生きていきましょう。

マタイ23章25節～39節 「イエスの翼の下に」

1. 心のきよい者 25-28

今日の箇所は、イエスの第 5 番目のわざわいのメッセージから始まります。25-26 節「わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは杯や皿の外側はきよめるが、内側は強欲と放縦で満ちている。目の見えないパリサイ人。まず、杯の内側をきよめよ。そうすれば、外側もきよくなる。」律法学者、パリサイ人は、罪に汚れることがないように、様々なきよめの儀式を行っていました。食事の前に手をきよめる儀式もそうですし、ここでの食器をきよめる儀式もありました。彼らはこれらのきよめの儀式を熱心に行うことによって、自分たちはきよいと考えたのです。しかし、イエスはどんなに外側をきよめたとしても、内側即ち心をきよめなければ、人はきよくならないと教えられたのです。27-28 節も外側をきよめ、内側をきよめないパリサイ人に対するイエスの非難です。当時、過越の祭りなどの前には、道ばたにある墓に巡礼者が触って、汚れることがないように、墓を白く塗りました。白く塗られた墓は、外側は美しいのですが、内側は死人の骨やあらゆる汚れでいっぱいでした。イエスはパリサイ人の状態がちょうど白く塗られた墓のようだと言われたのです。28 節「同じように、おまえたちも外側は人に正しく見えても、内側は偽善と不法でいっぱいだ。」

聖書は、人の心の中からあらゆる罪が出て来て、人を汚すと教えています。ですから、私たちがきよくなるためには、私たちの心がきよめられなければならないのです。では、どのようにしたら、私たちの心の内側の罪がきよめられるのでし

ようか。パリサイ人のように、人間の努力では私たちの心はきよくなりません。私たちの心がきよくなるためには、イエスの血によるきよめがどうしても必要なのです。イエスは私たちの罪を贖うために、私たちの身代わりに神のさばきを受けて十字架で死んでくださいました。そのことを信じて、イエスを「私の救い主」として心に受け入れる時に、イエスは私たちのすべての罪を赦してくださるのです。そして、その時から、私たちの心はイエスの十字架で流された血によって、日々きよめてくださるのです。その結果、私たちの内側からきよい者に変えられていくのです。Ⅰヨハネ1:7
「御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。」23章の「わざわいだ」の反対の言葉が、5章の「幸いです」のことばです。5:8では「心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るからです」とあります。イエスの血によって、罪が赦され心がきよめられた人は、信仰によって神を見、神と共に生きる幸いを経験することができるのです。イエスの血によって、私たちの罪をきよめていただき、心のきよい者となりましょう。

2. 義のための迫害 29－36

29-36節では、律法学者、パリサイ人が先祖と同じ罪を犯そうとしていることをイエスが指摘し、それを隠す偽善を非難しておられます。29-32節「わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは預言者たちの墓を建て、義人たちの記念碑を飾って、こう言う。『もし私たちが先祖の時代に生きていたら、彼らの仲間になって預言者たちの血を流すということはなかっただろう。』」こうして、自分たちが預言者を殺した者たちの子らであることを、自らに対して証言している。おまえたちは自分たちの先祖の罪を満たすがよい。」彼らは、もし自分たちが先祖の時代に生きていたら、預言者を殺すことはなかっただろうと言い、自分たちは先祖と同じ罪を犯さないと断言していました。しかし、実際はイエスを殺そうとしていたのです。この彼らの偽善をイエスは指摘し、おまえたちは先祖の罪の上にさらに罪を重ねようとしていると警告されたのです。

イエスのパリサイ人への非難は続きます。33節では、彼らが悔い改めないなら、ゲヘナの刑罰、即ち神の永遠のさばきは逃れられないと警告されます。34節のイエスが遣わす「預言者、知者、律法学者」とは、イエスの弟子のことです。イエスの昇天後、聖霊が下られると、イエスの弟子たちは福音を宣べ伝えるために、人々のところに遣わされます。すると、律法学者、パリサイ人は彼らを迫害し、捕らえて鞭打ち、殺し、十字架に付けるのです。そして、このイエスの言葉通りに、弟子たちは迫害されました。35節の「義人アベルの血」とは、カインによって殺されたアベルのことです。また「バラキヤの子ザカリヤの血」とは、Ⅱ歴代誌24:21にある祭司エホヤダの子ゼカリヤのことです。主のことばを伝えたゼカリヤは、ヨアシュ王によって殺されたのです。ヘブル語聖書では聖書の配置の順番が違い、歴代誌が旧約聖書の最後にあります。イエスは旧約聖書の最初から最後まで正しい人の血が流されてきたことを指摘し、36節で「これらの報いはすべて、この時代の上に降りかかる」と警告されたのです。正しい者を殺すことは何というわざわいでしょうか。一方、マタイ5:10では「義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちの者だからです」とあります。さらに5:11-12では「喜びなさい。大いに喜びなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのですから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々は同じように迫害したのです」とイエスは教えられました。日本ではクリスチアンの時代に大きな迫害がありました。感謝なことに今日日本では、そのような迫害はありません。しかし、クリスチャンになることを家族から反対されたり、クリスチャンであることのゆえに、冷たい目で見られたり批判されたりすることはあるかもしれません。しかし、イエスを信じることのゆえに受ける苦しみは幸いだといえ、イエスは言われます。そんな時は、悲しむのではなく喜びましょう。天の御国が与えられ、天の報いが約束されていることを覚えて、大いに喜びましょう。そして、イエスを証しする人生を、勇気をもって歩んでいきましょう。イエスがいつもともにいて、助けてくださいます。

3. エルサレムへの嘆き 37－39

イエスは、やがて来るエルサレムへの神のさばきを覚えて、エルサレムのために嘆かれました。37節「エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者よ。わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか。それなのに、おまえたちはそれを望まなかった。」イエスが23章で7回も「わざわいだ」と言ってパリサイ人を非難されたのは、彼らを愛しておられたからなのです。イエスは公生涯の中で、何度かエルサレムに来られました。その時、エルサレムの人々に悔い改めて、イエスの福音を信じ、神のもとに立ち返るようにと訴えられたのです。めんどりがひなを守るために翼の下に集めるように、イエスも人々を救うためにご自分の救いの翼の下に集めようとしたのです。ところが、彼らはイエスのもとに来ることを望まず、三日後にはイエスを十字架に付けてしまうのです。

38 節「見よ。おまえたちの家は、荒れ果てたまま見捨てられる。」おまえたちの家とはエルサレム神殿のことです。この時から約 40 年後の紀元 70 年に、エルサレムはローマ軍によって滅ぼされ、神殿も破壊されました。その後、今に至るまで神殿はありません。36 節でイエスが言われた「これらの報いはすべて、この時代の上に降りかかる」というイエスの言葉が、成就したのです。ユダヤ人はその後ローマ帝国中に、離散の民となって散らばっていきました。しかし、建物の神殿はなくなっても、イエスがよみがえられたことによって、イエスご自身が神殿となられたのです。神殿は神が臨在し、神とお会いできる場所でした。イエスはご自分が犠牲のいけにえとなり、永遠の大祭司となって、永遠の救いを成し遂げられました。そして、父なる神への生ける道となって、ご自分を信じるものを神のもとに導かれます。そして、イエスを信じる者には聖霊が与えられ、クリスチャンも聖霊の宮としての神殿とされました。そして、クリスチャンの集まりである教会も、キリストのからだとしての神殿となりました。

39 節「私はおまえたちに言う。今から後、『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』とおまえたちが言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはしない。」このみことばに2つの時を覚えることができます。一つはイエスの再臨の時です。イエスが再びこの世に来られる時、すべての人がイエスを主と認めるのです。しかし、この再臨の時にイエスを信じていないならば、イエスを救い主としてではなく、さばき主として迎えなければなりません。もう一つは今の恵みの時です。私たちが今、「祝福あれ、主の御名によって来られる方に」と言って、イエスを救い主として自分の心に迎え入れるなら、信仰の目をもってイエスを見る幸い、知る幸いを今、得ることができるのです。

イエスは今も、めんどりがひなを翼の下に集めるように、私たちをご自分の救いのもとに招いてくださっています。ですから、当時の律法学者、パリサイ人のようにではなく、イエスのもとに行き、イエスを救い主として受け入れましょう。そうすれば、私たちはイエスの血によって心の内側からきよめられます。そして、すべての罪が赦されて、神の前に義と認められて、救われます。そして、その時からイエスを見、イエスとともに歩む幸いを経験することができます。さらに聖化の恵みを受け、クリスチャンとして成長し、よりきよい者へと徐々に、しかし確実に変えられていくのです。クリスチャン生活の中にはイエスのために、苦しみを経験することもあるでしょう。しかし、その人は幸いなのです。なぜなら、天の御国はその人のものであり、天の報いは大きいのです。だから、クリスチャンはいつも喜んで生きることができるのです。さらに、イエスの翼の下で守られ、養われ、愛されて生きることができるのです。今週もイエスの翼の下にある幸いを覚え、感謝と喜びをもって歩んでいきましょう。

マタイ24章1節～14節 「時のしるし」

1. 終末のしるし 1－14

24 章から 25 章は終末、即ちこの世の終わりについてのイエスの教えです。今日の箇所では、イエスは終末のしるしと終末における心構えを教えられました。第 1 の点では終末のしるしを、第 2 の点で終末における心構えを見ていきましょう。24:1 でイエスがエルサレム神殿を出て行かれると、弟子たちがイエスに宮の建物を指し示しました。それは一つにはその神殿のすばらしさを伝えるため、もう一つは 23:38 で「お前たちの家は、荒れ果てたまま見捨てられる」と言われたことが、気になっていたためです。するとイエスは 2 節で言われました。「あなたがたはこれらの物すべてを見ているのですか。まことに、あなたがたに言います。ここで、どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることは決してありません。」弟子たちはこれを聞いて、イエスが言われるようなこの荘厳な神殿が破壊される時が来るのであれば、それはこの世が終わる時に違いないと思いました。そこで、神殿の向かい側にあるオリーブ山まで来た時に、弟子たちはイエス言いました。3 節「お話しください。いつ、そのようなことが起きるのですか。あなたが来られ、世が終わるときのしるしは、どのようなものですか。」

それに対して、イエスは 4 節以降で8つの終末のしるしを教えられた。①偽キリストの出現:5 節「わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『私こそキリストだ』といって、多くの人を惑わします。」統一教会では文鮮明を再臨のキリストと信じ、彼の死後は彼の妻を再臨のキリストと信じています。歴史の中でも、度々自らをキリストと名乗る偽キリストが現れています。②戦争や戦争のうわさ:6-7a「また、戦争や戦争のうわさを聞くことになりましたが、気をつけて、うろたえないようにしなさい。そういうことは必ずおこりますが、まだ終わりではありません。民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり」

20 世紀には 2 回の世界大戦が起こりました。今も世界の各地で戦争やテロが起こっています。人間の歴史は戦いの連続です。しかし、戦争が起こったとしても、それでこの世が終わるのではないのです。③飢饉と地震:7b「あちこちで飢饉と地震が起こります。」今も世界では 1 年間で 1000 万人が飢えのために亡くなっています。一方で、日本では食品ロスの問題があり、多くの食べ物が食べられることなく廃棄処分になってしまうという矛盾があります。東日本大震災から 9 年半が経ちましたが、今もあの地震を感覚的に覚えています。被災地の復興は今も続いています。ルカ 21:11 には飢饉と地震に加えて、疫病が起こるとあります。今まさに私たちが疫病の新型コロナを経験しています。

8 節でイエスは言われました「しかし、これらはすべて産みの苦しみの始まりなのです」。陣痛が来るともうすぐ出産が始まることがわかります。しかし陣痛が来たからと言ってすぐに出産とはなりません。出産まではある程度の時間があるのです。同じように、イエスが今日の箇所で語られている終末のしるしが起きたからと言って、すぐにキリストが再臨し、この世が終わるのではないのです。これらのしるしは歴史の中で繰り返し起こりながら、やがて終末を迎えるのです。

④迫害:9 節「その時、人々はあなたがたを苦しみに合わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。」イエスの弟子たちも伝道と同時に迫害に会いました。そして、島流しになったヨハネ以外は殉教しました。日本でもキリシタン時代には激しい迫害が起こり、多くの人が殉教しました。今も、世界では各地でクリスチャンに対する迫害があります。⑤つまずきと裏切り:10 節「その時多くの人がつまずき、互いに裏切り、憎み合います。」迫害に屈して、クリスチャンも信仰につまずき、権力者にだれがクリスチャンかを密告し、憎み合うことが起こります。迫害下のキリシタン時代にもこのようなことが起こりました。⑥偽預言者の出現:11 節「また、偽預言者が大勢現れて、多くの人を惑わします。」偽預言者とは、聖書を正しく教えず、自ら神からの啓示を受けたと言って、偽の福音を教える人のことです。今は新使徒運動という運動があります。これは今日、神は新たな使徒を任命し、それらの使徒によって新しい教えを神が教えておられるというものです。しかし、このような運動は聖書から逸脱しています。ネットにも様々な異端の教えがありますので、惑わされないように気をつけなければなりません。

⑦不法がはびこり、愛が冷える:12 節「不法がはびこるので、多くの人の愛が冷えます。」人はますます自己中心になり、悪が増し、不法がはびこり、その結果、多くの人の愛が冷えていきます。⑧世界宣教:14 節「御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます。」迫害が起き、様々な困難が生じても、福音宣教は止まることなく継続し、世界宣教が進んで行くのです。特に、20 世紀には世界宣教が進み、まだ福音が伝わっていなかった民族にも福音が伝えられてきました。しかし、まだ一度も福音を聞いたことのない民族が今もありますし、自分たちの言葉の聖書を持っていない民族もいて、伝道と聖書翻訳の働きが続いています。2000 年前にイエスが来られた時から、終わりの時代が始まっています。私たちもイエスが言われた終末のしるしを今の時代に経験しています。そして、これから後も今よりも困難な出来事を経験するかもしれません。では、私たちはこのような終末のしるしを経験する時、どのような心構えをすればよいのでしょうか。第 2 の点でそのことを見ていきたいと思います。

2. 終末における心構え

イエスは終末のしるしを教えるとともに、そのしるしを経験する時にどのような心構えを持てばよいかも教えてくださいました。イエスが教えられた 3 つのことを確認したいと思います。

①気をつけなさい。4 節「人に惑わされないように気をつけなさい。」偽キリストや偽預言者が人々を惑わすので、人に惑わされないように、気をつけなければならないのです。偽物の福音に惑わされないためには、本物の福音をよく知る必要があります。様々な終末のしるしが起こっても、すぐに終わりが来るのではないことを知って気をつけていれば、うろたえる必要はありません。また偽物の教えを教える異端の現状や彼らの伝道方法を知ること、惑わされないために必要なことです。また聖書を正しく教える教会につながっていることも大切です。この世のことでも、あの手この手で人をだまそうとする詐欺がなくなることがありません。同様に、信仰の世界においても、偽物の福音を教える人々がいつの時代もあるし、今後さらに増えていくことでしょう。ですから、イエスが教えられたように、気をつけて惑わされないようにしなければなりません。

②耐え忍びなさい。13 節「しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます。」イエスは 8 節で、終末のしるしは産みの苦しみの始まりだと教えられました。出産の前の陣痛は徐々に強まり、そして時満ちてついに赤ちゃんが生まれます。そこまで妊婦は忍耐して痛みを耐え、出産すると喜びにあふれます。同じように、終末のしるしである様々な苦しみを耐え忍ぶならば、やがてイエスが再び来られ、新しい天と地に私たちが迎えられて、救いが完成するのです。その喜びの時を覚

えて、最後まで耐え忍ぶことが求められるのです。ローマ 5:3-4 には、「苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出す」とあります。苦難は希望につながっていることを覚えるなら、私たちは最後まで忍耐することができるのです。

③福音宣教 14 節「御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます。」マタイ 28:19 で、よみがえられたイエスは弟子たちに、「あなたがたは、あらゆる国の人々を弟子としなさい」と言って、全世界に福音を宣べ伝えて、イエスの弟子とするようにと教えられました。すべての人を愛する神は、世界中のすべての人が悔い改め、イエスを信じて救われることを願っておられます。イエスはそのために、すべての人の罪を負い、身代わりに神のさばきを十字架で受けて、救いを成し遂げてくださいました。そしてイエスは、ご自分が成し遂げられた救いの福音を弟子たちに託して、天に上られました。イエスが弟子たちに託された福音は、今も教会に託されており、教会はこのイエスの福音を全世界の人々に伝える使命が与えられているのです。

世界では今も、30 億以上の人たちが人生の中で一度も福音を聞く機会がない状況にあると考えられています。それらの人たちは、キリスト教の伝道が禁止されているイスラム教や共産主義の国に住む人、また人里離れた少数民族の人たちが含まれています。日本でも教会は各地にあっても、今も多くの人々が伝統宗教の習慣に従って生きているため、福音に対して心を閉ざしています。私たちも以前は同じように福音に対して心を閉ざしていました。けれども、そんな私たちが神をあわれんでくださり、クリスチャンを通して福音を伝えてくださったのです。その結果、私たちもイエスを信じて救われました。イエスは救われた一人ひとりに対して、そして救われた者の集まりである教会に対して、「この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされる」と言って、私たちを福音宣教に遣わしておられるのです。そして、イエスが全世界への福音宣教が完了したと認められる時、イエスご自身が再びこの世に来られ、それから終わりが来るのです。その時がいつかは私たちにはわかりません。ですから、イエスの再臨の日や終末の日を何年何月何日と予言する偽預言者の教えに惑わされないように、気をつけなければなりません。

全世界の人々が、キリストの救いを必要としています。私たちはそのことを覚え、世界宣教のために祈りつつ、私たちにゆだねられているこの地域の人々に、私たちの家族や友人に福音を証ししていきましょう。

マタイ24章15節～28節 「信仰によって生きる」

1. 荒らす忌まわしいもの 15－28

今日の箇所も引き続き、終末における時のしるしと終末における心構えをイエスが教えられました。まず 15 節を見てみましょう。「それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす忌まわしいもの』が聖なる所に立っているのを見たら、一読者はよく理解せよ」

以前ダニエル書の講解説教をした時に、「荒らす忌まわしいもの」について学びました。ダニエル書 9 章、11 章、12 章に『荒らす忌まわしいもの』が聖なる所に立つという預言があります。ダニエルは、やがて「荒らす忌まわしいもの」が現れて、神に敵対し、神殿を汚すという預言を神から受けました。聖書の預言はちょうど山が何重にも重なって見えるように、将来のことが何重にも重なって預言されています。ダニエルの預言もそのようになっています。

まずダニエルの預言は、ダニエルの時代から約 400 年後の BC167 年に成就しました。アレキサンドロス大王の死後、彼の帝国は 4 つに分裂し、その中の一番大きな国がセレウコス朝シリアでした。そして、セレウコス朝のアンティオコス・エピファネスという王が BC167 年エルサレムに攻めてきて、エルサレムを占領したのです。その時彼は、ゼウス神の祭壇をエルサレム神殿の中に建て、ユダヤ人にとって汚れた動物である豚をささげて、神殿を汚したのです。これが第 1 回目の預言の成就でした。

そして、2 回目の預言の成就がイエスの時代から約 40 年後の紀元 70 年に成就することになります。ですから、イエスはここではまず、40 年後の預言の成就について語っておられます。ダニエルの預言どおり、紀元 70 年にローマ軍がエルサレムを攻め、神殿を徹底的に破壊し、エルサレムは陥落しました。その時、多くのユダヤ人はエルサレムの城壁内にいれば安全だと考え、たくさんの人が集まりました。しかし、ローマ軍は城壁を取り囲み、兵糧攻めにしたため、城壁内にいる人の多くが飢えで苦しみ死んだのです。そして、最後にはローマ軍によって滅ぼされてしまいました。

た。歴史家ヨセフスによると、この戦いで 110 万人が死に、そのほとんどはユダヤ人であったとのこと。さらに 9 万 7 千人のユダヤ人が捕虜となりました。まさに 21 節にある「そのときには世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな苦難があるからです」という大きな苦難が起きたのです。しかもこの時、偽預言者も現れ、エルサレムで神の救いを待つようにと教え、その教えを信じた人たちは滅ぼされてしまいました。

一方、クリスチャンたちは 24 章のイエスの言葉に従って、ヨルダン川を渡り、ペレヤ地方に逃れて助かったのです。16-18 節「ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。屋上にいる人は、家にある物を取り出そうとして下に降りてはいけません。畑にいる人は上着を取りに戻ってはいけません。」彼らは、イエスの教えから、この出来事が神のさばきであることを知り、イエスが言われたとおり、急いでヨルダン川を渡り、ペレヤの山地に向かって助かったのです。

しかし、この「『荒らす忌まわしいもの』が聖なる所に立っているのを見たら」というダニエルの預言は、これですべて成就したわけではありません。この預言はさらに終末時代の出来事を指し示しているのです。ですから、私たちは「一読者はよく理解せよ」とマタイが書いているように、すでに成就した出来事を理解するとともに、これから起こることとしても理解する必要があります。では終末の時代に現れる「荒らす忌まわしいもの」とは、いったい何を指しているのでしょうか。それは終末時代に現れる「反キリスト」と呼ばれる神に敵対する人物です。

ヨハネの手紙ではその人物を「反キリスト」と呼び、Ⅱテサロニケ 2:3 では「不法の人」「滅びの子」と呼んでいます。また黙示録 13 章では「獣」と呼ばれています。この反キリストが終末の患難時代に現れると、偽預言者とともに働き、しるしと不思議を行って人々を惑わし、自分こそ神であると宣言し、神を冒瀆します。そして、人々に自分を礼拝することを求め、礼拝しないクリスチャンを迫害し、ある者は殉教します。そのような時代がイエスの再臨の前に来ることを聖書は、そしてイエスは預言しておられるのです。私たちは、そのような苦難に対して、そしてそこに至るまでの終末の様々な苦難に対して、どのように対処すればよいでしょうか。第 2 の点でそのことを見たいと思います。

2. 終末における心構え

黙示録 13:10 には、反キリスト(獣)、偽預言者(別の獣)、そして悪魔(竜)が働く時には、「聖徒たちの忍耐と信仰が必要である」と記されています。忍耐については、先週学んだ 24:13 の「最後まで耐え忍ぶ者は救われます」のみことばから学びました。今日は忍耐とともに必要な信仰について 3 つのことを学びたいと思います。

①みことばへの信仰

ローマ軍がエルサレムを攻めてきた時、ユダヤにいるクリスチャンはイエスの言葉に従って、ヨルダン川を越え、ペレヤ地方の山に逃げて、いのちが救われました。彼らはイエスが教えられた通り、神のさばきが来たことを冷静に悟り、イエスの教えに従って、エルサレムに未練を残さず逃げたのです。ヨルダン川東岸にペラ遺跡がありますが、そこにクリスチャンが避難して住んだと言われています。一方、イエスを信じないユダヤ人は、エルサレムに神の救いが来ると信じてエルサレムにとどまった結果、多くの人が飢えとローマ軍の攻撃によって殺されてしまいました。

このことは私たちも、終末時代において、神のことばを信じ、みことばに従うことの大切さを教えています。みことばは私たちに平時の生き方を教えるとともに、非常時の生き方も教えています。日ごとに聖書を読み、神のことばに養われているなら、非常時にもどのように歩めばよいのかを、聖霊なる神がみことばを通して教えてください。今日の箇所では、祈りについても教えられています。20 節「あなたがたの逃げるのが冬や安息日にならないように祈いなさい。」私たちはどんな時にも主に信頼し、どんなことでも主の助けを祈ることができるのです。聖書は生ける神のことばです。神への信仰は、神の一つ一つのことばに信頼することによって表されます。「主と主のことばに頼るは楽し」と賛美にもあります。神に信頼し、みことばに信頼し、みことばに従って歩んでいきましょう。

②惑わされない信仰

先週も 4 節の「人に惑わされないように気をつけなさい」というみことばから学びました。今日の箇所にも、キリストの再臨についての偽キリストと偽預言者による惑わしに気をつけるようにとイエスは教えられました。23-26 節「その時、だれかが『見よ、ここにキリストがいる』とか『そこにいる』とか言っても、信じてはいけません。偽キリストたち、偽預言者たちが現れて、できれば選ばれた者たちをさえ惑わそうと、大きなしるしや不思議を行います。いいですか。わたしは前もって話しました。ですから、たとえだれかが『見よ、キリストは荒野にいる』と言っても、出て行ってはいけません。『見よ、奥の部屋にいる』と言っても、信じてはいけません。」今も昔も再臨のキリストを預言したり、自らをキリスト、救い主と名乗る人たちがいますが、彼らを信じてはいけません。なぜなら、キリストが再臨される時、一部の人だけでなく、すべ

ての人にわかるように再臨されるからです。27 節「人の子の到来は、稲妻が東から出て西にひらめくと同じようにして実現するのです。」イエスは、世界中の人が同時にわかるような形で再臨されるのです。28 節は当時のことわざです。「死体のあるところには、ハゲタカが集まります。」ハゲタカは空からでも地上の死体がはっきり見えて集まります。同様に、私たちも天から来られるイエスの再臨を地上のどこにいてもはっきりとわかるのです。聖書をよく知っていれば、偽キリスト、偽預言者の教えに惑わされることはありません。今日も様々な異端の教えがあり、ネットを通してだれでも簡単にアクセスできるので、だまされないように注意し、惑わされない信仰をもって歩みましょう。

③希望を持つ信仰

今日の箇所でも希望について教えられています。22 節「もし、その日数が少なくされないなら一人も救われないう。しかし選ばれた者たちのために、その日数は少なくされます。」終末における苦難は世の終わりが近づいて、ますます激しくなるでしょう。しかしその苦難の時は永遠に続くのではないのです。産みの苦しみには、出産の希望があり、赤ちゃんが誕生すると苦しみは終わり、喜びに満ちあふれます。終末の苦難も同じです。イエスは選ばれた人たちのために、その日数を少なくしてくださると約束してくださいました。忍耐と信仰をもって、主に信頼して歩むなら、苦難の時は終わり、イエスが再臨され、その時生きているクリスチャンは天に引き上げられイエスとお会いする喜びに満たされるのです。またその時すでに死んでいるクリスチャンは朽ちたからだが朽ちない栄光のからだによみがえり、天に引き上げられ、すでに天にある魂と再び一つとなって新しい神の国で永遠に神とイエスとともに生きる喜びが訪れるのです。

このことは平時における試練にも当てはまります。I コリント 10:13「あなたがたが経験した試練はみな、人の知らないものではありません。神は真実な方です。あなたがたを耐えられない試練にあわせることはなさいません。むしろ耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えていてくださいます。」試練の先には脱出の道という希望が備えられているのです。そのことを知る時、私たちは信仰によって忍耐することができ、希望をもって生きることができるのです。私たちはいつも主と主の言葉に頼り、惑わされることなく、主にある希望をしっかりと持って歩みましょう。試練とともに脱出の道があること、この世の終わりの患難にも脱出の道があり、それが主の再臨の時であることを覚えましょう。そして「主よ、来てください」と祈りつつ、信仰と忍耐と希望をもって歩んでいきましょう。

マタイ24章29節～35節「キリストの再臨」

1. キリストの再臨 29－31

今日の箇所は、24 章でイエスが語られた世が終わる時のしるしの続きです。イエスは 24 章の前半で、終末のしるしを教えられました。それらは、①偽キリストの出現 ②戦争や戦争のうわさ ③飢饉と地震 ④迫害 ⑤つまずきと裏切り ⑥偽預言者の出現 ⑦不法がはびこり、愛が冷える ⑧世界宣教 ⑨荒らす忌まわしいものの出現 などです。しかし、そうした苦難のしるしが起きたからと言って、すぐにキリストが再臨され、この世が終わるのではないのです。これらのしるしは、産みの苦しみの始まりであり、歴史の中で度々起こりながら、終末に近づいていくのです。

一方、今日の箇所ではイエスは、いよいよ自分が再臨され、この世が終わる直前に起こることを話されました。それが 29 節です。「そうした苦難の日々の後、ただちに太陽は暗くなり、月は光を放たなくなり、星は天から落ち、天のもろもろの力は揺り動かされます。」イエスが再びこの世に来られる前に、天体が今までにないような異常な動きをします。そして、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天のもろもろの力は揺り動かされます。黙示録6:12－13にも同じ終末のしるしが記されています。「太陽は毛織りの荒布のように黒くなり、月の全面が血のようになった。そして天の星が地上に落ちた。」以前、日食を見た時、昼なのに急に空が暗くなりました。けれども日食は定期的に起こることです。しかし、世の終わりの時には、今までだれも経験したことのない、異常な天体の動きが起こるのです。

そしてその時に、イエスが再臨されるのです。30 節「そのとき、人の子のしるしが天に現れます。そのとき、地のすべての部族は胸をたたいて悲しみ、人の子が天の雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見るのです。」使徒 1:11 でよみがえられたイエスが天に上って行くのを弟子たちが見ていた時に、御使いがこう言いました。「ガリラヤの人たち。どうして天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります。」また、イエスの時代より 600 年前に生きたダニエル

も、ダニエル 7:13 で「見よ。人の子のような方が天の雲とともに来られた」と預言しています。さらに 14 節では「この方に、主権と栄誉と国が与えられ、諸民族、諸国民、諸言語の者たちは皆、この方に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」とあります。ダニエルが幻で見た人の子とはイエスのことであり、イエスにすべての主権が与えられ、イエスは新しい神の国の王となられお方なのです。

天変地異が起こった後イエスは天の雲のうちに再臨されます。そのとき「地のすべての部族は胸をたたいて悲しむ」とあります。黙示録 1:7 にもこうあります。「見よ。その方は雲とともに来られる。すべての目が彼を見る。彼を突き刺して者達さえも。地のすべての部族は彼のゆえに胸をたたいて悲しむ。しかし、アーメン。」なぜ、イエスが再臨されると人々は胸をたたいて激しく悲しむのでしょうか。それはイエスが人々の罪をさばく、さばき主として来られるからです。人々は自分の罪が神の前に全て明らかにされ神のさばきの座に出なければならない時が来た事を悟り悲しむのです。

一方イエスを救い主と信じ、十字架の贖いによって罪を赦された者にとってはイエスを救い主としてお迎えすることができます。31 節「人の子は大きなラッパの響きとともに御使いたちを遣わします。すると御使いたちは天の果てから果てまで四方から人の子が選んだ者たちを集めます。」人の子が選んだ者たちとはイエスを救い主と信じ、罪を赦していただき、神の子どもとされた人たちのことです。ラッパの響きが鳴ると、御使いたちが救われたすべての人たちを集め、天に引き上げ、永遠の天の御国に迎えてくださるのです。I テサロニケ 4:16-17 にはこのことがさらに詳しく記されています。「すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」イエスが再臨されるとき、すでに死んで葬られた救いの民がよみがえります。次にその時に生きている救いの民が、よみがえった人たちと一緒に引き上げられ、空中でイエスとお会いし、天の御国に入れられるのです。そして、私たちの救いが完成するのです。

数年前、徳島県の大塚国際美術館に行った時に、システーナ礼拝堂の原寸大のレプリカに入りました。礼拝堂の前面にはミケランジェロの最後の審判が、そして天井には一面、天地創造の壁画が描かれています。最後の審判の中心にはイエス・キリストが描かれ、イエスの右側には、イエスを信じて罪をゆるされ救われた人々が、天に引き上げられる様子が描かれています。一方、イエスの左側にはイエスを信じず自分の罪のためにさばかれ、ゲヘナ、地獄に落ちる人たちが描かれています。美術館のツアーガイドの人が絵を説明した後、こう言われました。「皆さんは、この絵の右側にいたいですか。それとも左側にいたいですか。」それを聞いていた人はだれも答えなかったのですが、さながら、信仰決心の招きのようでした。私たちはどうでしょうか。キリストの右側にいたいですか。それとも左側にいたいですか。右側にいる人は、イエスを信じて罪を赦していただいた人たちです。その人たちにとってイエスの再臨は、救い主とお会いする時であり、天に引き上げられ、救いが完成する喜びの時となります。一方、左側にいる人は、イエスを信じず、そのため自分の罪のために、さばき主イエスによってさばかれ、永遠の滅びに至る人たちです。その人たちは、イエスを見ると胸をたたいて悲しむことになるのです。イエスは今日も私たちをご自身の救いのもとに招いておられます。ですから、信じない者にならないで、信じる者となり、イエスをあなたの個人的な救い主として、心にお迎えしましょう。

2. みことばの確かさ 32-35

イエスは 32-33 節でいちじくのたとえを通して、イエスの再臨が近づく時を知るようにと教えられました。32-33 節「いちじくの木から教訓を学びなさい。枝が柔らかくなって葉が出て来ると、夏が近いことがわかります。同じように、これらのことをすべて見たら、あなたがたは人の子が戸口まで近づいていることを知りなさい。」イスラエルでは、いちじく栽培が盛んです。春になると葉が出てきます。そうすると、やがて実りの夏が近いことがわかります。同様に、イエスが 24 章で語られたすべてのことが起これば、イエスがもう間もなく再臨されることを知ることができるのです。

さらにイエスは、34-35 節で言われました。34-35 節「まことに、あなたがたに言います。これらのことがすべて起こるまでは、この時代が過ぎ去ることは決してありません。天地は消え去ります。しかし、わたしのことばは決して消え去ることがありません。」神は創世記 1 章で天地を創造し、この世の歴史が始まりました。しかし、この世界が永遠に続くのではなく、始まりがあれば終わりと教えています。そしてその終わりの時がイエスの再臨によって起こるのです。黙示録 21:1 には最後の審判が終わると今の天地が過ぎ去り、新しい天と新しい地が現れることが預言されています。「また私は、新しい天と新しい地を見た。以前の天と以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。」以前の天と以前の地とは現在の宇宙や世界です。それらは神がそこまでと言われたら終わるのです。しかし、24 章でイエスが言われた終わり

の時のしるしがすべて起こるまでは、終わることがないことも覚える必要があります。なぜなら、偽預言者が偽りの再臨や終末の預言をするからです。一方、この世の終わりは、新しい世界が始まる時でもあるのです。それが新しい天と新しい地の始まりです。それは天国であり、神もイエスもそこにおられ、救われた者がキリストの花嫁として招かれ、永遠に神とともに住む救いの完成の時です。この世のものはやがて消え去ります。しかしその後、新しい神の国が永遠に続くのです。そして、そのことを約束する神のことばも永遠に残るのです。「わたしのことばは決して消え去ることがありません。」イザヤ 40:8 には「草はしおれ、花は散る。しかし、私たちの神のことばは永遠に立つ。」とあります。

今年は、今まで経験したことのない新型コロナウイルスの感染拡大で、世界中の人が今も対応に追われています。私たちの教会も例外ではなく、今もコロナ対応が続いており、通常の教会生活を送れない状況があります。この世の生活は、地球規模の出来事も、個人的な出来事でもいつ何が起こるかわかりません。しかし、そうだからと言って私たちは不安になる必要はありません。私たちには何があろうとも、決して変わることなく、消え去ることのない神のことばが与えられているのです。「わたしのことばは決して消え去ることがありません。」「私たちの神のことばは永遠に立つ。」

神のことば、イエスのことばである聖書は、何があっても代わることがない、私たちの信仰と人生の揺るがない土台です。確かに聖書の日本語訳は 2017 版では随分ことばが変わりましたが、聖書の原典は永遠に変わりません。みことばの約束は確かであり、みことばを信じて生きるならば、何があっても揺るがない心の支えを得ることができます。神のことばを信じて生きることが、神に信頼して生きることであり、イエスのすばらしい救いの中で生きることです。そして、みことばを信じて生きる時、私たちはこの世にあっては、主の支えと助けと十分な恵みをいただいて、パウロのように「私が弱いときにこそ、私は強い」と言うことができるのです。(Ⅱコリント 12:10)そして、やがて私たちの地上での生活が終わり、さらにこの世が過ぎ去っても、永遠に続く新天新地の天国で生きる祝福にあずかるのです。

聖書の最後の黙示録 22:20-21 にはこうあります。「これらのことを証しする方が言われる。『しかし、わたしはすぐに来る』アーメン。主イエスよ、来てください。主イエスの恵みが、すべての者とともにありますように。」イエスを信じる者にとって主の再臨は救いの完成の時です。ですから私たちは「主イエスよ、来てください」と祈り主の再臨を待ち望みましょう。そして、この世にあっては、いつも主イエスの恵みをいただき、主に強められて、主の証人として歩んでいきましょう。

マタイ 24 章 36 節～51 節 主を待ち望む者

1. 目を覚ます 36-42

今日の箇所もイエスの再臨の教えの続きです。イエスは今日の箇所でも三つの例えを通して、ご自分を待ち望む者の心構えを教えられました。まず 36 節で再臨の日がいつなのかは誰も知らないことを教えられました。

「ただしその日、その時がいつなのかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っています。」イエスの再臨の日は父なる神だけが知っておられるのです。ですから、イエスの再臨の日や終末の日を預言する人がいれば、その人は偽預言者であり、そのグループは異端であることが分かります。

次にイエスはノアの洪水のたとえをもって、どのような心構えでイエスの再臨を待ち望むべきかを教えられました。イエスの再臨はノアの洪水が起きた時と似ているのです。37-39 節「人の子の到来はノアの日と同じように実現するのです。洪水前の日々はノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていました。洪水が来て、すべての人をさらってしまうまで、彼らにはわかりませんでした。人の子の到来もそのように実現するのです。」

神は、地上の人々の悪が増え続けるのを見て心痛められ、洪水によって人間を滅ぼそうとされました。しかし神は、ご自分を信じるノアと彼の家族を救うために、大きな箱舟を作るように命じられました。ノアと彼の家族は何十年もかけて箱舟を造りました。その間、他の人々は建造される箱舟を見ても、洪水によって神が人々をさばかれることなど信じなかったのです。しかし、箱舟が完成し、地の動物とノアの家族が中に入ると、突然大雨が降り、大洪水が起きました。その結果、箱舟の外にいる人はみんな死んでしまったのです。40-41 節では、二人のうち一人は取られ、一人は残されるとあります。それは、イエスが再臨される時、イエスの救いの中に入っている者は天国に引き上げられるが、それ以外の人々は残されて、神のさばきを受けることを教えています。

イエスは 42 節でこのたとえの結論を言われます。「ですから、目を覚ましていなさい。あなたがたの主が来られるのがいつなのか、あなたがたは知らないのですから。」私たちは聖書から、イエスが再び来られること

を知り、今、霊の目を覚まさなければならないのです。では、霊の目を覚ますとは、具体的にどういうことでしょうか。それはまず、私達の心を開いて、自分の造り主なる神を信じ、今まで神を無視し自分勝手に生きてきた罪を悔い改めることです。次に、イエスが私のために十字架で身代わりに神のさばきを受けてくださったことを信じ、イエスを「私の救い主」と信じることです。その時、私達の霊の目が開かれ、イエス救いの中に入れられ、ノアのように神とともに歩む人生が始まるのです。再臨のイエスを迎える最大の備えは、2千年前に最初に来られた初臨のイエスを自分の救い主と信じることなのです。

少し前に教会学校のお話でノアの洪水と箱舟を子どもたちと学んだ時に、箱舟の歌と一緒に歌いました。最後の歌詞はこうです。「イエス様信じて、箱舟に入ろう。神様の子どもになろう。みんなで天国へ行こう。天国へ。」私たちにとっての救いの箱舟は、救い主イエスです。イエスは十字架で私たちの罪を負い、身代わりに神のさばきを受けて死なれました。そして三日目によみがえられ、今も生ける救い主としてご自分を信じる者を、十字架の救いの中に入れてくださいます。皆さんは今日、イエスの十字架の救いの中に入っているでしょうか。或いはまだイエスの救いの外にいますでしょうか。イエスは今日もご自分を信じて、救いの中に入りなさいと私たちを招いておられます。イエスを信じて、イエスの救いの中に入る時、私たちの霊の目が開かれます。そしてイエスの再臨の時に、私たちは確実に天国に行くことができるのです。目を覚ましていなさいと言われるイエスの言葉に応答し、一人ひとりがイエスの救いの中に入りましょう。

2. 用心する 43-44

43-44 節は泥棒のたとえです。43-44「次のことは知っておきなさい。泥棒が夜の何時に来るかを知らなければ、家の主人は目を覚ましておきなさい。自分の家に穴を開けられることはないでしょう。ですから、あなたがたも用心していなさい。人の子は思いがけないときに来るのです。」このたとえでは、イエスの再臨が、泥棒が来るときに例えられています。家の主人が、泥棒が来る時間を知っていれば、泥棒に入られないように目を覚まし用心して待っているでしょう。しかし、泥棒は来ないだろうと油断していると、思いがけない時に泥棒が来て、入られてしまいます。イエスも思いがけないときに来られるので、用心するようにと教えられました。では具体的にイエスの再臨に備えて用心するとは、どのようにすればよいのでしょうか。新改訳では泥棒のたとえなので「用心する」と訳していますが、この言葉のもともとの意味は「用意する」「準備する」です。心備えをしておきなさいということです。ではどのような心備えをすればよいのでしょうか。それはまず第一の点で見たように、イエスを信じて、イエスの救いの中に入ることです。そして、次に救われた者がすることとして、イエスの再臨を意識し、イエスを待ち望んで生きることです。主の再臨を忘れてしまうクリスチャンとなってははいけません。私たちはイエスの初臨については良く知っているでしょう。いつもイエスの十字架の死と復活を確認し、ここに私たちの救いがあることを覚えます。ではイエスの再臨についてはどうでしょうか。いつも心に留めて、イエスを待ち望んでおきなさい。

私たちがイエスの初臨と再臨の両方を覚えるために、教会暦にはアドベント・待降節があります。今年は11月の第5主日から始まります。アドベントとは「来る」という意味の言葉です。この期間はクリスマスを待ち望む期間ですが、その時、私たちはイエスの2つの来臨を覚えます。1つはイエスがすでに来たという初臨の出来事です。もう一つはイエスが間もなく来るという再臨の出来事です。アドベントの期間を過ごしながら、私たちは神の御子が肉体と取ってこの世に来られたイエスの初臨に感謝し、同時に、やがて天から再び来られるイエスの再臨を待ち望むのです。もう一つ、私たちが日々の生活の中でできることは、日ごとの中でイエスの再臨を覚えて待ち望むことです。私は朝の祈りの時に、主の祈りを祈りつつ、その祈りを発展させて祈っています。「御国が来ますように」という祈りの中で、「主が再び来られることを待ち望みます」と祈っています。このように祈ると、主の再臨を忘れることなく、心備えをすることができるのではないのでしょうか。イエスをお迎えする心の準備を日々していきましょう。

3. 忠実で賢いしもべとなる 45-51

三つ目のイエスを待ち望む者がなすべきことは、忠実で賢いしもべとなることです。45-51 節では、忠実で賢いしもべと悪いしもべが対比して語られ、忠実で賢いしもべとなるようにと教えられています。まず忠実で賢いしもべについて45-47 節を見ましょう。「ですから、主人によってその家のしもべたちの上に任命され、食事時に彼らに食事を与える、忠実で賢いしもべとはいったい誰でしょう。主人が帰ってきた時に、そのようにしているのを見てもらえるしもべは幸いです。まことに、あなたがたに言います。主人はその人に自分の全財産を任せようになります。」このたとえでは、主人はイエスであり、上に立つしもべは私たちのことです。忠実なしもべの賢さとは、主人が帰ってこられることを知り、いつも備えていたことです。その結果、彼は主人から任せられている仕事を毎日忠実に果たすことができました。イエスは、私たちにも忠実な賢いしもべとなることを願っておられます。そのためには私たちもイエスの再臨があることを知って心備えをし、主か

ら任せられている働きを日々忠実に行う者となることです。イエスはそのような人に、天国で大きな報いを与えると約束しておられるのです。

一方、悪いしもべはどうでしょうか。48-51 節「しかし彼が悪いしもべで、『主人の帰りは遅くなる』を心の中で思い、仲間のしもべたちをたたき始め、酒飲みたちの食べたり飲んだりしているなら、そのしもべの主人は、予期していない日、思いがけない時に帰って来て、彼を厳しく罰し、偽善者たちと同じ報いを与えます。しもべはそこで泣いて歯ぎしりするのです。」悪いしもべは「主人の帰りは遅くなる」と考え、結局は主人が帰ってくることも忘れてしまうのです。その結果、主人から任された仕事を怠り、自分勝手な生活をし、不忠実な悪いしもべとなったのです。主人は帰ってきた時に、このしもべを厳しく罰しました。イエスは私たちがこのような悪いしもべとなってしまうといけないと教え、そのような人は、やがて神のさばきを受けると警告されたのです。悪いしもべとならないためには、神の前に自分の罪を悔い改め、イエスを自分の救い主と信じて、イエスの救いの中に入ることです。そして、イエスに忠実に従う賢いしもべとしての歩みを始めることです。

私たちはだれもイエスの再臨の日を知りませんし、自分の人生がいつ終わるのかも知れません。そんな私たちが、どのように生きることが主の前に忠実な賢い生き方なのでしょう。それは、特別なことをすることではなく、毎日主から与えられている務めを忠実に行うことです。宗教改革者のルターはこう言いました。「たとえ明日世界が滅びることを知ったとしても、私は今日りんごの木を植える。」即ち、明日何があろうとも今日なすべきことを行うということです。パークレーという聖書学者も、「イエス・キリストが来られる時、我々が励んでいるべき務めとは、日ごとの務めである」と言っています。イエスは言われました。「ですから、明日のことまで心配しなくてもよいのです。明日のことは明日が心配します。苦労はその日その日に十分あります。」マタイ 6:34 ですから、主が来られるその時まで、また私たちが主のもとに行くその時まで、主が私たちに与えられた日ごとの務めを忠実に果たす賢いしもべとして歩いていきましょう。

マタイ25章1節～13節「十人の娘」

1. 天の御国

25 章は、24 章のキリストの再臨に備えるための教えが、引き続いたとえを通して語られています。1-2 節「そこで、天の御国は、それぞれともしびを持って花婿を迎えに出る、十人の娘に例えることができます。そのうちの 5 人は愚かで、5 人は賢かった。」このたとえ話では、花婿はやがて再臨されるイエス・キリストを指し、10 人の娘はすべての人を指しています。そして、天の御国は、キリストの再臨後に完成する新天新地の天国を指しています。そして、天の御国のすばらしさを、婚礼の祝宴で表しているのです。当時のユダヤでは、結婚式を行って夫婦となった男女は、実際の結婚生活が始まるまで 1 年間待たなければなりませんでした。そして、1 年後に婚礼の祝宴を開いた後、結婚生活が始まるのです。ですから、婚礼の祝宴は結婚した夫婦にとっての待ちに待った喜びの時となるのです。祝宴は通常、花婿が花嫁の家に行って花嫁を迎えます。花嫁は友人たちに付き添われ、花婿の家に行き、そこで祝宴が開かれます。しかし、このたとえ話では花嫁の家で祝宴が開かれたようです。

聖書はキリストの再臨によって完成する天国とは、どのような所と言っているのでしょうか。黙示録21章と22章にはヨハネが幻の中で見た新しい天と新しい地がどのような所かを記しています。21:2-4「見よ。神の幕屋が人々とともにある。神は人々とともに住み人々は神の民となる。神ご自身が彼らの神として、共におられる。神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってください。もはや死もなく悲しみも、叫び声も、苦しみもない。以前のものが過ぎ去ったからである。」天国は、私たちの救いが完成し、神の子どもとして、父なる神と子なる神イエスと聖霊なる神との親しい交わりの中で、永遠に神とともに生きるところです。天国では罪は全くなり、その結果、この世にある死も悲しみも苦しみもありません。神の聖さと正義と愛に満ちあふれ、私たちは神のみ前で喜びに満たされ、いつも感謝を持って神を礼拝し、兄弟姉妹との交わりを楽しみます。その素晴らしさは実際に行ってみないとわかりませんが天国は私たちの想像以上にすばらしいことでしょう。しかし、この素晴らしい天の御国に、十人の娘のうち5人の賢い娘しか入れず、愚かな娘の5人は入れなかったというのです。この二つのグループの違いは一体何なのでしょう。第2の点でそのことを見てみましょう。

2. 信仰の油

賢い娘たちと愚かな娘たちの違いは、3-4 節を見るとわかります。「愚かな娘たちは、ともしびは持っていたが、油を持ってきていなかった。賢い娘たちは自分のともしびと一緒に、入れ物を油に入れて持っていた。」両者ともともしびは

持っていましたが、違いは、賢い娘たちは油を持っていたのに、愚かな娘たちは油を持っていなかったということです。たとえの続きを読んで見ましょう。5－12 節「花婿が来るのが遅くなったので、娘たちは皆眠くなって寝入ってしまった。ところが夜中になって『さあ、花嫁だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声がした。そこで娘たちは皆起きて、自分のともしびを整えた。愚かな娘たちは賢い娘たちに言った、『私たちのともしびが消えそうなので、あなたがたの油を分けてください。』しかし、賢い娘たちは答えた、『いいえ、分けてあげるにはとても足りません。それより、店に行って自分の分を買ってください。』そこで娘たちが買いに行くと、その間に花婿が来た。用意ができていた娘たちは彼と一緒に婚礼の祝宴に入り、戸が閉められた。その後で残りの娘たちも来て、『ご主人様、ご主人様開けてください』と言った。しかし、主人は答えた、『まことに、あなたがたに言います。私はあなたがたを知りません。』」

賢い娘たちが持っていた、天国に入るために必要な油とはいったい何のことでしょう。それはイエスを信じる信仰ではないのでしょうか。イエスが来られるまで、両者ともともしびを持っていたので、明かりをともしていたのです。これは、イエスへの信仰を持っているか否かに関わらず、この世にあっては両者ともある程度輝く生活をする事ができるので、両者の違いがあまりわからないことを表しているのではないのでしょうか。ノンクリスチャンの人でも、世の中の人々に貢献するすばらしい生活をしている人がたくさんいます。信仰がなくても、輝いた人生を送っている人もいます。もちろん、クリスチャンも世の光として輝く人生を送りますが、世の人々はそのことに気づかない場合も多くあるのではないのでしょうか。しかし、イエスが再臨された時にはイエスを信じているか否かが天国に入る分かれ目になるのです。

イエスを信じている人は、イエスの十字架の贖いによってすべての罪が赦され、神の子どもとされ、永遠のいのちと天の国籍を与えられているので、いつでも天国に行ける準備ができています。一方、イエスを信じていない人は、すべての人は神の前では罪人なので、どんなにすばらしい人であっても、イエスが再臨される時には、自分の罪に対する申し開きを神の前にしなければなりません。そして、イエスが下さる罪の赦しがなければ、自分の罪のために神のさばきを受けなければならず、天国に入ることができないのです。しかも、信仰は他の人から分けてもらうことはできず、それぞれ自分で信じなければならないのです。賢い娘たちが愚かな娘たちに、自分の油を分けてあげることができないと言ったのは、冷たいと思うかもしれませんが、それは信仰のおすそ分けはできないことを表わしているのです。信仰は、一人ひとりが自分の意思で、イエスを私の救い主と信じる必要があるのです。

さらに、イエスが再臨された時に信仰を持とうとしても、もう遅いのです。愚かな娘たちが花婿到着後、店に油を買いに行き、戻ってきた時にはもう戸が閉じられていて、中に入れなかったことは、このことを表わしています。信仰はイエスが再臨される前に持っていなければ天国には入れません。また自分が死ぬ前に信仰を持たなければ天国に入れません。死んでからでは遅いのです。ある人は、それでは死ぬ直前に信じますと思うかもしれませんが、しかし、私たちは自分がいつ死ぬかわかりません。ですから、自分の計算どおり死ぬ直前に信じますなどというのはナンセンスなのです。イエスの再臨についても同様で、いつ来られるかわかりません。天国に行くために必要な信仰は先送りせず、今、自分の意思で信じる事が大切なのです。

3. 目を覚ましていなさい

13 節はこのたとえの結論です。「ですから、目を覚ましていなさい。その日、その時をあなたがたは知らないのですから。」目を覚ましていなさいというイエスの教えは、すでに 24 章でも見ました。イエスの再臨に備えて目を覚ましているとは、どのようなことでしょうか。今日の十人の娘のたとえで教えられることは、信仰という油を持っているということです。すべての人は、神によって神のかたちに造られたので、神から離れた罪人であったとしても、この世で輝くことができるためのともしびは与えられています。すべての人は神から与えられた能力を生かして、いろんなことができ、家庭でも社会でもそれなりの有意義で輝く人生を過ごすことができるでしょう。しかし、それだけでは何かが欠けているのです。それは、創造者なる神から離れて生きる人間の魂の底に感じる空しさです。

伝道者の書の最初の言葉は「空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空」です。伝道者とはソロモン王のことであり、彼は最高の知恵を得、莫大な富を持ち、歴史的な事業を行い、あらゆる快樂を味わい、この世的には輝いた人生を歩みましたが、しかし、彼の心の空しさはこの世の成功では満たされなかったのです。そして、自分の人生を振り返りながら、造り主なる神を信じ、神に信頼して生きることが、人生の空しさから解放され、真に意味のある人生を歩む鍵であると教えたのです。伝道者の書の最後の言葉はこうです。「結局のところ、もうすべてが聞かされている。神を恐れよ、神

の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。神は、善であれ悪であれ、あらゆる隠れた事について、すべてのわざをさばかれるからである。」

イエスを自分の個人的な救い主と信じ、心にイエスをお迎えする時、私たちは空しさから解放されます。英語の聖書では「空」は meaningless と訳されています。意味がない、無意味ということです。神から離れていると何のために生きているのかわからず、自分の人生に究極的な意味を見出せないのです。しかし、イエスを信じて神のもとに帰ると、神が私たちに与えて下さっている人生の意味を見出すことができ、meaningless が meaning 意味がある人生に代わるのです。そして、私たちの心のともしび皿に日々聖霊の油が注がれて、神の助けをいただきながら、神が自分に与えられた意味ある人生を歩むことが出します。ですから、信仰を持つということは、イエスが来られるまでその価値が隠されているではありません。イエスを信じたその瞬間から信仰が与える救いのすばらしさを経験し、世の光として輝いて生きることができるのです。

そして、最終的にイエスが再び来られる時に、信仰のすばらしさが最大限表されるのです。伝道者は言いました。「神は、善であれ悪であれ、あらゆる隠れた事について、すべてのわざをさばかれるからである。」イエスが再びこの世に来られる時が、神が私たちのすべてのわざをさばかれる時です。この神のさばきに合格し、無事天国に行くためには、イエスの十字架の赦しをいただく以外にありません。イエスは本来私たち自身が受けるべき私たちの罪に対する神のさばきを、私たちに代わって十字架で受けてくださったのです。ですから私たちが、イエスが私の罪のために十字架で死んでくださったと信じるならば、さばきの日にイエスがこの人のすべての罪は赦されていますと証言してくださるのです。その結果、私たちは喜びの婚礼に祝宴である天国に入ることができるのです。

皆さんはその準備ができているでしょうか。イエスが来られる日は誰も知りません。ですから、今イエスを信じ、霊の目をはっきりと開いて、イエスをお迎えする備えをしましょう。また、すでにイエスを自分の救い主と信じている人は、イエスの再臨を忘れることなく日々覚え、主がいつ来られても良いように、信仰のともしびを整え、今年のみことばのとおり、「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい」という生き方をしていきましょう。そして、主が与えてくださった意味のある人生を輝いて生きていきましょう。

良い忠実なしもべ」マタイ 25 章 14 節～30 節

1. イエスへの信頼

今日の箇所は「タラントのたとえ」です。引き続きイエスの再臨に対する私たちの心備えが教えられています。このたとえでは、旅に出る主人はイエスを表わし、主人から財産を預けられた3人のしもべは、私たちを含めたすべての人を表わしています。5タラント預かったしもべと2タラント預かったしもべは、それを元手に商売し、さらに5タラントと2タラントを儲けました。一方、1タラント預かったしもべは、それを土の中に隠しておきました。かなりの時間が経って主人が帰ってくると、主人はそれぞれのしもべと清算をし、5タラントと2タラントを預けたしもべの働きを知って喜びました。一方、1タラント預けたしもべの行いを知った主人は、しもべを叱って外の暗闇に追い出しました。

第1の点では、なぜ2人のしもべは主人から預かったお金を用いて忠実に働くことができたのに、もう一人のしもべは働かなかったのかという理由を考えたいと思います。1タラントは6000デナリに値します。1デナリは当時の1日の賃金です。ですから1年で300日働くとすると、1タラントは20年分の賃金にあたり、1デナリ1万円とすれば6000万円です。2タラントは40年分の賃金で1億2千万円、5タラントは100年分の賃金で3億円にあたります。1タラント預かった人も20年分の賃金という大きな金額を預けられたのです。ですから、彼は他の2人よりも少ないと考えたかもしれませんが、その理由だけで彼が働かなかったということではないのです。理由はもっと根本的な所にありました。ではその理由は何でしょうか。それはそれぞれのしもべが主人を信頼し、主人のために働きたいと願っていたかどうかということです。

5タラントと2タラントを預かったしもべは、主人を信頼し、主人を愛し、主人のために喜んで働きたいと思っていた人たちです。ですから、お金を預かるとすぐに行動に移し、それを元手に商売をし、主人が戻ってきたころには、お金は2倍になっていたのです。そして、主人に対して喜び勇んで報告しました。20「ご主人様。私に5タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。私はほかに5タラントをもうけました。」22「ご主人様。私に2タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。ほかに2タラントをもうけました。」

一方、1 タラント預かったしもべは、主人を信頼せず、主人は厳しく悪い人だと考えていました。ですから商売をし、元手を減らしてしまえば、大変なことになると考えて働かなかったのです。彼は預かった1 タラントをそのまま地面に穴を掘って隠しました。そして、主人が返ってきた時に、地面から1 タラントを掘り出して主人のところに持って行き、こう言ったのです。24-25「ご主人様。あなた様は蒔かなかったところから刈り取り、散らさなかったところからかき集める厳しい方だとわかっていました。それで私は怖くなり、出て行って、あなた様の1 タラントを地の中に隠しておきました。ご覧ください。これがあなた様のものです。」

このことは、私たちとイエスの関係はどうなのかを問うています。イエスは私たちを救うためにいのちをささげて、十字架で罪の贖いを成し遂げてくださいました。そのことを私たちが知り、イエスを自分の救い主と信じるならば、私たちはイエスに信頼し、イエスを愛し、イエスのために喜んで生きる者に変えられます。イエスが私たちに預けられたタラントとは、私たちに与えられている様々な能力や才能や賜物です。それらのタラントの量や種類は皆それぞれ違います。しかし、自分には何もないという人はいないし、みな多くのものを預かっているのです。ですから、人と比べる必要はなく、イエスから預かっているタラントを持って、イエスのために喜んで用いることができるのです。それが、イエスの愛と恵みに応えるクリスチャンの生き方なのです。イエスを信じている人は、喜んでイエスのために生きようとするのです。

一方、イエスを自分の救い主と信じていない人はどうでしょうか。その人は、イエスが自分のためにどんなに大きな犠牲を払って救おうとしておられるかが分からないので、イエスは厳しいお方とを感じるかもしれません。あるいはイエスは自分には関係ないと思うでしょう。また、自分が持っている様々な能力も才能もイエスからの預かり物とは考えず、自分のものと考えるので、それを用いてイエスのために働こうともしません。ですから、私たちとイエスの関係が、私たちの生き方を決定していくのです。あなたはどうでしょうか。イエスの深い愛に触れるなら、人はイエスのために喜んで生きていきたいと願うのです。イエスは厳しく悪い主人では決してありません。そうではなく、私たちのためにいのちを捨ててくださった愛と恵みに満ちた救い主なのです。イエスに信頼し、イエスのために喜んで生きる一人ひとりとなりましょう。2. イエスの喜び

第2の点では、3人のしもべに対する主人の反応を見てみましょう。5 タラントと2 タラント預かった2人のしもべは、それぞれもう5 タラントと2 タラントをもうけました。それに対して主人は、21 節と23 節で全く同じ言葉で2人をほめ、2人の働きを喜んだのです。「よくやった。良い忠実なしもべだ。お前はわずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。」この世の考えでは、主人にとっては利益が大切なので、より多く儲けたしもべをより多くほめるのではないかと思います。例えば会社では、営業利益を一番挙げた社員が特別にほめられると言った具合です。しかし、天の御国では評価基準が異なるのです。どれだけ成果をあげたかではなく、どれだけ主のために忠実に生きたかが評価基準なのです。

ですから、もし1 タラント預かったしもべが、それを用いて1 タラント儲けたら、主人は同じようにこのしもべをほめたことでしょう。しかし、1 タラント預かったしもべはそれを用いず、土の中に埋めてしまいました。主人はこのしもべに何と言ったのでしょうか。26-27 節「悪い、怠け者のしもべだ。私が蒔かなかった所から刈り取り、散らさなかった所からかき集めるとわかっていたというのか。それなら、おまえは私の金を銀行に預けておくべきだった。そうすれば、私が帰ってきた時、私の物を利息とともに返してもらえたのに。」主人はこのしもべを、悪い怠け者のしもべだと言って叱りました。しもべの悪さとは、主人に対する間違った悪い理解をしていたことです。その結果、主人のために働こうとせず、怠けたのです。主人はここで銀行に預けておくべきだったと言っていますが、主人は利息分だけでも得たかったと言っているのではなく、しもべは言い訳ばかりして何の努力もしなかったと言っているのです。

主人は続けて言いました。28-29 節「だから、そのタラントを彼から取り上げ、10 タラント持っている者に与えよ。だれでも持っている者は与えられてもっと豊かになり、持っていないものは持っている物までも取り上げられるのだ。」私たちが神から預かっている才能や賜物というタラントは、神のために使えば使うほどさらに増えていくのです。どんな才能も使わなかったら、宝の持ち腐れとなるのです。もし、しもべが1 タラントを主人のために忠実に用いていたならば、決して減ることはなく、もう1 タラント儲けることができたのです。主人の最後の言葉が30 節です。「この役に立たないしもべは外の暗闇に追い出せ。そこで泣いて歯ざりするのだ。」彼の主人との関係が、彼の生き方と彼の結末に現れ、彼は天の御国に入れなかったのです。

イエスが再び来られる時、イエスは私達の人生を評価されます。その時イエスは、私たちの人生を見て喜んでくださるのでしょうか。イエスの評価基準は、何ができたかではなく、イエスに信頼し、主の愛に応えて、忠実に主のために生きたかどうかです。「主人の喜びをともに喜んでくれ」と言われるような良い忠実なしもべとして生きていきましょう。

3. 天国の祝福

第3の点は、天国の祝福の大きさを見てみましょう。主人は2人のしもべに対して、「お前はわずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう」と言いました。1タラントも2タラントも5タラントも私たちにとっては多くの物であり、決してわずかな物ではありません。しかし、これは天国でいただく多くの祝福と比べれば、わずかな物なのです。この世にあっては、イエスから預かったタラントを用いて働くことには、苦労や困難も伴うでしょう。一生懸命、神のために奉仕しても、だれからも評価されず、ほめられることもないことがあるでしょう。しかしイエスは見ておられるのです。どんな小さな働きでもご自分のために、神の栄光のために行う働きを、イエスはいつも喜んで見てくださいます。そして、やがてイエスが再臨される時、ご自分のために労苦した一人ひとりに対して、同じ言葉をもってほめてくださいます。そして、天国での計り知れない祝福の報いをもって、私たちを迎えてくださるのです。ですから、主が来られるその時まで、また私たちが主のもとに行くその時まで、主の愛に応え、主から預かっているタラントを用いて、喜んで主のために忠実に生きていきましょう。そして、「よくやった。良い忠実なしもべだ。お前はわずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。」と言われるイエスの御声を聞く者となりましょう。

マタイ25章31節～46節「最も小さい者たち」

1. 最後の審判

今日の箇所は、イエスの再臨に備える教えの最後の箇所です。イエスは24章と25章の2章に渡って、終末とご自身の再臨、そしてそれに続く神のさばきについて教えられました。様々なたとえを通して、再臨と神のさばきに備えるようにとイエスが教えられたことを覚える時、この教えが私たちにとって永遠を選択するための大切な教えであることを覚えます。まず31-33節を見てみましょう。「人の子は、その栄光を帯びてすべての御使いたちを伴って来る時、その栄光の座に着きます。そして、すべての国の人々が御前に集められます。人の子は、羊飼いが羊をやぎからより分けるように彼らをより分け、羊を自分の右に、やぎを左に置きます。」イエスは主の主、王の王としての栄光の姿で再臨されます。そして、イエスが栄光の座に着かれる時、すでに死んだ人も、その時生きている人もすべての人が集められて、神のさばきを受けるのです。これが最後の審判であり、イエスが着かれる栄光の座はさばきの座でもあるのです。

イエスの時代、羊とやぎは一緒に放牧されていました。そして、必要に応じて羊飼いは羊とやぎを分けました。このたとえでは、羊とはイエスの救いにあずかっている人たちであり、やぎとはイエスの救いにあずかっていない人たちです。そして、イエスは人々を右と左に分けた後、それぞれに声を掛けられます。34節「それから王は右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝された人たち。世界の基が据えられた時から、あなたがたのために備えられていた御国を受け継ぎなさい。』」イエスは、右側にいる人たちは父なる神に祝された人たちなので、天国に入りなさいと言われたのです。一方、左の人にはどう言われたのでしょうか。41節「それから、王は左にいる者たちにも言います。『のろわれた者ども。わたしから離れ、悪魔とその使いのために用意された永遠の火に入れ。』」左にいる人たちは、のろわれた者、すなわち神の祝福である救いを受けていないので、天国には入れず、神のさばきを受ける場所であるゲヘナに入れと言われたのです。そして最後に46節でイエスは言われます。「こうして、この者たちは永遠の刑罰に入り、正しい人たちは永遠のいのちに入るのです。」いったい何が、すべての人を羊とやぎに分け、永遠の場所を決める基準なのでしょうか。このことは私たちの死後に行く永遠の場所を決める大切なことですので、注意深くこのあと見ていきたいと思います。

2. 信仰と愛のわざ

イエスは、右にいる人と左にいる人に、それぞれ分けられた理由を言われました。まず35-40節で右にいる人たちに言われました。『あなたがたはわたしが空腹であったときに食べ物を与え、渴いていた時に飲ませ、旅人であった時に宿を貸し、わたしが裸の時に服を着せ、病気をした時に見舞い、牢にいた時に訪ねてくれたからです。』すると、その正しい人たちは答えます。『主よ。いつ私たちはあなたが空腹なのを見て食べさせ、渴いているのを見て飲ませて差し上げたでしょうか。いつ、旅人であるのを見て宿を貸し、裸なのを見て着せて差し上げたでしょうか。いつ私たちは、あなたが病気をしたり牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。』すると、王は彼らに答えます。『まことに、あなたがたに言います。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです。』

この箇所だけを見ると、右にいる人が行った愛のわざが天国に入る理由なのかという問いが浮かびます。逆に言えば、左にいる人は愛のわざを行わなかった結果、天国に入れなかったのかという疑問です。左にいる人に言われたイエスの言葉も見てみましょう。42-45 節『おまえたちはわたしが空腹であった時に食べ物を与えず、渴いていた時に飲ませず、わたしが旅人であった時に宿を貸さず、裸の時に服を着せず、病気の時や牢にいた時に訪ねてくれなかった。』すると、彼らも答えます。『主よ。いつ私たちは、あなたが空腹であったり、渴いていた、旅人であったり、裸であったり、病気をしていたり、牢におられたりするのを見て、お世話をしなかったのでしょうか。』すると、王は彼らに答えます。『まことに、おまえたちに言う。お前たちがこの最も小さい者にしなかったのは、わたしにしなかったのだ。』では、人は良い行いによって天国に行けると、この箇所は本当に教えているのでしょうか。この問いに対する答えの鍵はイエスの右にいる人たちが「正しい人たち」と呼ばれていることにあります。37 節「すると、その正しい人たちは答えます。」46 節「正しい人たちは永遠のいのちに入るのです。」聖書が教える正しい人とは、良い行いをする人のことではありません。すべての人は、神の前に罪を犯した結果、すべての人は罪人であり、悪い人なのです。そのような私たち罪人は、どんなに良いことを行ったとしても、正しい人になることはありません。人は行いによっては義と認められない、これが聖書の教えです。では、人が神の前に義と認められ、正しい人と神に認めていただくためには、どうしたらよいのでしょうか。それはイエスを信じる信仰によって、義と認められる以外にないのです。「人は行いによっては義と認められず、イエスを信じる信仰によってすべての罪が赦されて、神の前に義と認められる。」これが聖書の根本的な教えです。イエスが私たちの罪を十字架で贖ってくださったので、イエスを信じる時、私たちのすべての罪が赦され、帳消しにされます。その結果、神の前に罪のない者、すなわち正しい人として認められるのです。

そして、信仰によって救われた者は、救いの実としての良いわざを行う者にされるのです。エペソ 2:10「実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました。」ですから、イエスの右にいる人たちは、イエスを信じ、罪を赦され義と認められたので正しい人とされ、救いの実としての愛のわざを行ったのです。一方、左の人はイエスを信じなかったので、救いの実としての愛のわざを結ぶことができなかったのです。人はイエスを信じる信仰によって救われ、イエスが喜ばれる愛のわざの実を結び、最後には天国に入るという永遠の祝福にあずかることができる。これが信仰と愛のわざの関係であり、永遠の祝福に至る救いの道なのです。

3. 最も小さい者たち

このイエスの教えの中で、もう一つ浮かぶ問いは、イエスが言われる最も小さい者たちとはだれのことかということです。右にいる人たちは、最も小さい者たちの一人にしたことが、イエスにしたことだとは知りませんでした。この問いに対する答えには2つの解釈があります。一つは信者、未信者を問わず、すべての弱い立場の人という理解です。トルストイの「靴屋のマルチン」の小説はこの理解に立っていると言えるでしょう。マルチンがある日3度、困っている人々を助けたことが、実はイエスにしたことだったと後でわかるというお話です。その物語の最後に今日の 35-40 節が記されています。また、マザー・テレサが、死にゆく人たちに愛の手を差し伸べた尊い働きをした時も、同じ理解をしました。彼女は「私が弱っている人のお世話をする時、イエスのお世話をしています」と言いました。

一方、もう一つの解釈は最も小さい者達とはイエスを信じる信者のことであるという限定的な理解です。なぜかと言うとマタイの福音書では「わたしの兄弟たち」や「小さい者たち」という表現はご自分を信じる者に対して使われているからです。「最も小さい者たち」はその前の「これらのわたしの兄弟たち」に属している人たちです。では「わたしの兄弟たち」とは誰でしょうか。マタイ 12:50 にはこうあります。「だれでも天におられるわたしの父のみこころを行うならその人こそわたしの兄弟、姉妹、母なのです。」ですから、わたしの兄弟たちとは父なる神のみこころを行うイエスを信じる人たちのことです。またマタイ 10:42 にはこうあります。「わたしの弟子だからということで、この小さい者たちの一人に一杯の冷たい水でも飲ませる人は、決して報いを失うことはありません。」小さい者たちとはイエスの弟子のことです。ですからこの箇所での「最も小さい者たち」とはイエスを信じる者のことだと理解するのがよりふさわしい解釈だと言えるでしょう。

もちろん、このことをもって、聖書はクリスチャンは同じ信者だけに愛のわざを行うようにと教えているということではありません。「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」との教えは、信者、未信者を問わず、すべての隣人を愛するようという教えです。そうであれば、なおさら、クリスチャンは同じ主にある兄弟姉妹を愛すべきではないかと教えているのです。イエスはご自分を信じる者としてしっかりと結ばれ、つながれています。またパウロが「キリストが私のうちに生きておられる」と言ったように、イエスはご自分を信じ

る者の内に住んでおられるのです。ですから、クリスチャンが同じ主にある兄弟姉妹を助ける時、その行為はイエスご自身に行っていることになるのです。

イエスは 24 章で終末時代の困難を教えられました。初代教会は迫害を受け、その困難にすぐに直面しました。その時、初代教会は互いに助け合い、支え合ったのです。そして、その愛のわざは教会を超えて、未信者へと広がり、その愛のわざを通して神の愛に触れた人々がイエスを信じ、教会は成長していきました。神の家族が互いに助け合うことは、救いの実そのものです。イエスを信じる者に与えられる救いのすばらしさが、「これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです」と言われるイエスの言葉につながるのです。主にある者の互いの愛が、イエスへの愛につながり、さらにすべての隣人への愛に広がっていくことを覚えて、信仰の実践としての愛のわざに励む者となりましょう。そして、再び来られる主イエス・キリストを待ち望みましょう。

マタイ 26 章 1 節～16 節 「この人の記念として」

1. 過越の子羊 1-5

今日の 26 章からイエスの受難の出来事が始まります。今日の箇所では、イエスを殺そうと企む二つの人間の罪の出来事の間に、イエスへの愛と献身の美しい出来事が入っています。一つずつその出来事を見てみましょう。1 節「イエスはこれらのことばをすべて語り終えると、弟子たちに言われた。」これらの言葉とは、24 章 25 章の終末と再臨とさばきについてのイエスの教えです。この教えを以てイエスの地上における言葉による伝道はすべて終わりました。そしてイエスはいよいよ十字架に向かわれます。2 節「あなたがたも知っているとおおり、二日たつと過越の祭りになります。そして、人の子は十字架に付けられるために引き渡されます。」これは 4 回目のイエスの受難の予告です。イエスは二日たつと始まる過越の祭りに十字架に付けられると予告されました。それは神の救いの計画の中にあることでした。過越の祭りとは、昔、エジプトで奴隷となっていたイスラエルの民がエジプトを脱出したことを覚える祭りです。その時、神はエジプトに最後の災いとして、人間から動物に至るすべての長子を滅ぼすと告げられました。しかしイスラエルの民には、羊を屠り、その血を家の二本の門柱を鴨居に塗れば、神はその血を見てその家を過ぎ越し、災いは起こらないと言われました。神が命じられたとおりにしたイスラエルの民の中では一人の長子も死にませんでした。しかし、羊の血を塗らなかったエジプトではすべての長子が死にました。その結果、ファラオはイスラエルの民に出て行けと命じ、ついにエジプトを脱出することができたのです。この過越の羊はやがて来られる救い主を表わしていました。パウロは「私たちの過越の子羊キリストは、すでに屠られたのです」と言い、イエスが過越の子羊としてその血を流し、救いを成し遂げてくださったと教えました。(I コリント 5:7) 過越の子羊イエスが十字架で流された血は、私たちのすべての罪を取り除く救いを成し遂げました。その結果、信仰によってイエスの血が心に塗られた人には、神のさばきは過ぎ越されるのです。

一方、3-5 節を見ると、別の時にイエスを殺そうとたくらむ宗教指導者たちがいたことが分かります。3-5 節「そのころ、祭司長たちや民の長老たちはカヤパという大祭司の邸宅に集まり、イエスをだまして捕らえ、殺そうと相談した。彼らは『祭りの間はやめておこう。民の間に騒ぎが起こるといけない』と話していた。」大祭司カヤパのもとに集まった祭司長たちや民の長老たちは、イスラエルの政治と宗教を司る最高法院のメンバーでした。彼らは最高法院の非公式の集まりを事前に持ったのです。イエスをだまして捕らえようとしたのは、イエスを公に訴えて死刑にする理由を見いだせなかったからです。彼らは、律法を教えながら、律法に反することを行って、イエスを葬ろうと企みました。しかし彼らは、過越の祭りの時にイエスを捕らえて殺すと民の間に騒ぎが起こり、暴動になれば、自分たちがローマから責任を問われると思い、祭りの間はやめようと話し合ったのです。しかし、後で見るようにユダの裏切りによって、イエスが予告されたとおおり、イエスは過越の祭りに十字架に付けられたのです。

この出来事に人間の罪深さと、その罪から人を救おうとするイエスの愛と決意を覚えさせます。さらに、神の救いのご計画は人間のどんな罪の策略も止めることができず、確かに成し遂げられていったことも覚えることができます。イエスは私たちのすべての罪を負い、十字架で過越の子羊として屠られ、その血を流してくださいました。ですから、信仰によってイエスを「私の救い主」と信じるならば、私たちの心にイエスの血が塗られ、その血によって私たちの罪がきよめられ、その結果、神のさばきは過ぎ越されるという救いをいただくことができるのです。「御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。」(I ヨハネ 1:7) 主イエスの十字架の救いを信じ、神のさばきが過ぎ越された救いの恵みに心から感謝しましょう。

2. イエスに注がれた香油 6-13

第2の点では人間の罪の策略の最中に輝く、一人の女性のイエスへの愛と献身の姿を見ていきます。6-7節「さて、イエスがベタニアで、ツアラアトに冒された人シモンのおられると、ある女の人が、非常に高価な香油の入った小さな壺を持って、みもとにやって来た。そして、食卓に着いておられたイエスの頭に香油を注いだ。」ベタニアはエルサレムのすぐ近くの町で、イエスはエルサレムに來ると、よくベタニアに滞在されました。ツアラアトとは旧約聖書に記されている病で、その病になると宗教的に汚れた者とされました。シモンは、イエスによってすでに癒されましたが、主の癒しを覚えるためにツアラアトに冒された人と言われたと考えられます。イエスが食卓に着くと、ある女の人が非常に高価な香油をイエスの頭に注ぎました。ヨハネの福音書を見ると、この女はマルタとマリアとラザロの兄弟の中のマリアであったことが分かります。さらにこの香油はナルドの香油で1リトラ、約300グラムであり、300デナリの価値があったことも分かります。1デナリは1日の賃金ですから、300デナリは1年分の賃金にあたり、1デナリ1万円とすると300万円です。それはマリアの家にとっては貴重な宝物であり、その宝をすべてイエスにささげたのです。香油はイエスの頭から全身に流れたでしょう。

それを見ていた弟子たちはどうしたのでしょうか。8-9節「弟子たちはこれを見て、憤慨して言った。『何のためにこんな無駄なことをするのか。この香油なら高く売れて、貧しい人たちに施しができたのに。』」こう言ってマリアの行いを非難したのです。それに対してイエスは言われました。10-13節「イエスはこれを知って彼らに言われた。『なぜこの人を困らせるのですか。わたしに良いことをしてくれました。貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいます。しかし、わたしはいつも一緒にいるわけではありません。この人はこの香油をわたしのからだに注いで、わたしを埋葬する備えをしてくれたのです。まことに、あなたがたに言います。世界中どこでも、この福音が宣べ伝えられるところでは、この人がしたこともこの人の記念として語られます。』」

イエスは、マリアは「わたしに良いことをしてくれた」と言って、高く評価されました。しかも「この人はこの香油をわたしのからだに注いで、わたしを埋葬する備えをしてくれた」と言われ、十字架の死への備えをしてくれたと言われました。それゆえに、「福音が宣べ伝えられるところどこでも、この人がしたことも、この人の記念として語られます」と言われたのです。弟子たちが言った、貧しい人への施しはいつでもできるのです。しかし、イエスの十字架の死への備えはこの時しかできないことであり、マリアはこの時しかできないことを、できる限りの方法でしてくれたと言われたのです。マリアの行為は十字架を前にしたイエスの心を慰め励ます、尊い行為となったのです。

マリアはイエスのみことばをよく聞く人でした。ですから、この時、イエスがまもなく十字架に付けられることに気づいたのではないのでしょうか。そして今自分ができる精一杯のささげ物を以て、イエスをもてなしたのではないのでしょうか。伝道者の書3:1には「天の下すべての営みに時がある」とあります。マリアは信仰によって、時を悟りました。そして、その時にマリアができる精一杯のイエスへの愛と献身を表わしました。私たちはどうでしょうか。私たちも信仰の目を開いて、マリアのようにみことばをよく聞き、祈っていくならば、いつでもできることと、今しかできないことをわきまえて、その時々イエスへの愛と献身を表すことができるのではないのでしょうか。そして私たちがイエスへの愛と献身を表わす行いをするなら、イエスは私たちにも「わたしに良いことをしてくれた」と言って、喜んで受け入れてくださるのです。

3. ユダの裏切り 14-16

マリアのイエスへのすばらしい行いの直後、再び人間の暗い罪の行いがなされます。それがイスカリオテのユダの裏切りです。14-16節「そのとき、12人の一人でイスカリオテのユダという者が、祭司長たちのところに行き、こう言った。『私に何をくれますか。この私が彼をあなたがたに引き渡ししましょう。』すると、彼は銀貨30枚を彼に支払った。その時から、ユダはイエスを引き渡す機会を狙っていた。」一体なぜ、ユダはイエスを裏切ったのでしょうか。聖書には詳しい理由は記されていませんが、幾つかの理由を考えることができます。一つは、イエスはユダが求めていた救い主とは違っていただけと考えられます。ユダは多くの人と同じように、救い主とはイスラエルをローマから解放する力ある王と理解していたのではないのでしょうか。そのイエスについて行けば、自分もイスラエルで出世できると考えていたかもしれません。しかし、イエスは自分が願っていたような救い主ではなく、逆に十字架に付けられると言われ、失望したのではないのでしょうか。

またヨハネの福音書では、ユダがマリアの行為に憤慨して、どうしてこの香油を売って貧しい人たちに施さなかったのかと言ったと記されています。しかし、イエスはユダの意見を受け入れなかったため、ユダはこれ以上イエスについていけないと思ったかもしれません。さらにヨハネの福音書には、ユダは貧しい人のことを心に掛けていたのではなく、彼が盗人で金入れを預かりながら、そこに入っているものを盗んでいたと記しています。ユダは富の誘惑に負けたのです。ですから、祭司長たちのところに行き開口一番に「私に何をくれ

ますか」と言ったのです。イエスの命と引き換えに得た銀貨 30 枚とは奴隷の値段です。(出エジプト 21:32) 銀貨一枚 1 シェケルは 4 デナリの価値で、銀貨 30 枚は 120 デナリ、マリアがイエスに注いだ香油の 4 割の価値です。ユダはそのお金と引き換えにイエスを引き渡す約束をしたのです。そしてユダの裏切りによって、当初の祭司長たちの計画とは裏腹に、イエスが過越の祭りに十字架に付けられることが成就しました。

私たちにとってイエスはどのようなお方でしょうか。もし私たちが、地上における自分の成功や自分の願いを満たすご利益信仰をイエスに求めるなら、私たちもイエスに失望するでしょう。しかしイエスこそ、どんなこの世のご利益よりすばらしい罪の赦しと永遠のいのちと神の子どもとしての特権を与えてくださる救い主として信じていくならば、私たちもマリアのようにイエスを愛し、イエスのために自分自身を献げるイエスの弟子となることでしょう。マリアの信仰に倣い、私たちを救うためにいのちをささげてくださったイエスを愛し、自分自身をイエスに献げるイエスの弟子となりましょう。

マタイ 26 章 17 節～29 節 「最後の晩餐」

1. イエスは主 17-25

レオナルド・ダビンチの最後の晩餐の絵は大変有名です。その絵のテーマが今日の聖書箇所です。最後の晩餐はイエスが十字架にかけられる前夜、弟子たちと取られた過越の食事のことで、17-25 節は、過越の食事の準備とイスラリオテのユダの裏切りについて記しています。17-19 節を見てみましょう。「さて、種なしパンの祭りの最初の日に、弟子たちがイエスのところに来て言った。『過越の食事をなさるのに、どこに用意をしましょうか。』イエスは言われた。『都に入り、これこれの人のところに行って言いなさい。[わたしの時が近づいた。あなたのところで弟子たちと一緒に過越を祝いたい、と先生が言っております。]』弟子たちはイエスが命じられたとおりにして、過越の用意をした。」

種なしパンの祭りとは、イスラエル人がエジプトを脱出する際に時間がなかったため、パン種を入れない種なしパンを食べたことを覚える祭りで、過越の祭りと重なって行われました。ですから、過越の食事には種なしパンを食べました。イエスは過越の食事を取る場所を、直前まで弟子たちに教えられませんでした。それはイエスを裏切るユダがその場所を知ると、祭司長たちに密告し、過越の食事の途中でイエスが捕えらえる可能性があったためです。しかし、この過越の食事はイエスにとっては第 2 の点で学ぶ聖餐式を制定する大切な食事だったので、だれからも邪魔されたくなかったのです。弟子たちはイエスが命じられた通りその人のところに行くと、席が整えられた部屋に案内してくれ、そこで過越の食事の用意をしました。

そして、イエスと弟子たちが過越の食事をしている時、イエスは弟子たちの度肝を抜く発言をされたのです。20-22 節「夕方になって、イエスは 12 人と一緒に食卓に着かれた。皆が食事をしている時、イエスは言われた。『まことに、あなたがたに言います。あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ります。』弟子たちは大変悲しんで一人ひとりイエスに『主よ、まさか私ではないでしょう』と言い始めた。」イエスの言葉に弟子たちは大変悲しみ、もしかしたら自分のことを言っておられるのかと不安になり、一人ひとり『主よ、まさか私ではないでしょう』と尋ねたのです。それに対してイエスはさらに言われました。23-24 節「イエスは答えられた。『わたしと一緒に手を鉢に浸した者がわたしを裏切ります。人の子は、自分について書かれているとおりに去って行きます。しかし、人の子を裏切るその人はわざわいです。そういう人は、生まれて来なければよかったのです。』」

イエスは神のご計画通り、私たちの罪のために贖いの代価としてご自身を十字架でささげて死なれます。しかし、そうだからと言ってイエスを裏切る者の責任が免除されることはないのです。「そういう人は、生まれて来なければよかったのです」はとても厳しい言葉であり、私たちが他の人に決して言うてはいけない言葉です。しかし、イエスはなぜそのような厳しい言葉を言われたのでしょうか。イエスはユダが裏切ることを知りながら、弟子たちの前でユダを名指しして語られませんでした。それはユダが悔い改めることを願われたからです。ここでもイエスを裏切ることがどんなに大きな罪かをユダに示すために、最大限厳しい言葉を使って、悔い改めを迫られたのです。しかし、そのイエスの重たい言葉もユダの心を変えることはできませんでした。ユダはしらばっくれて 25 節で言いました。「すると、イエスを裏切ろうとしていたユダが「先生、まさかわたしではないでしょう」と言った。イエスは彼に「いや、そうだ」と言われた。」

ユダも他の 11 人の弟子たちと同じように「まさか私ではないでしょう」と言って、自らの裏切りの罪を隠したのです。しかし、イエスはユダに「いや、そうだ」と言われました。その時、他の弟子たちはその意味が

分らなかったようです。その後、ユダは食事の席を立てて祭司長たちのところに向かいました。ユダの言葉と他の 11 人の言葉はほとんど同じですが、一か所違います。それは、他の 11 人がイエスに対して「主よ」と言ったのに対して、ユダは「先生」と言ったのです。ここに他の 11 人とユダのイエスに対する信仰の違いを見ることができます。11 人の弟子たちはイエスを主と信じていたのです。「イエスは主」とは、イエスは神の御子キリストであり、私は主イエスを信じるしもべですという信仰告白です。I コリント 12:3 に「聖霊によるのでなければ、だれも「イエスは主です」と言うことはできません」とあるように、「イエスは主」とは、救われた者が告白する信仰です。一方、ユダは最後までイエスを主と信じませんでした。ユダが言った「先生」という言葉は、脚注を見ると原語は「ラビ」と言う言葉です。ラビとはユダヤ教の教師のことです。ユダにとってイエスはいろいろな教えを教える一人のラビであって、主ではなかったのです。そして、一人のラビ、先生であるイエスの教えと生き方に、もうついて行けないと考えて、イエスを裏切ったのです。イエスは主か、それとも先生か、それが 11 人の弟子たちとユダの根本的な違いだったのです。この出来事は、私たちにも「あなたにとってイエスはだれですか。先生ですか、それとも主ですか」という問いを投げかけています。イエスが先生なら、私たちは自分が学びたいことはイエスから学び、納得のいかないこと、従いたくないことは受け入れないという生き方をするでしょう。そうであれば、結局イエスは主ですという信仰にはたどり着けないことになります。私たちはそうではなく、イエスは主ですという信仰を持ち、イエスに生涯従っていくイエスの弟子となりましょう。教会福音讃美歌 387 番の 1 番は「弟子となしたまえ、わが主よわが主よ」と歌われ、4 番は「ユダにはなるまじ、わが主よわが主よ」と歌われます。私たちは「イエスは主」と信じ、「心の底より弟子となしたまえわが主よ、わが主よ」と賛美しつつ歩みましょう。

2. 最初の聖餐式 26-29

ユダが去った後、イエスは最後の晩餐の中で、最初の聖餐式を執り行われ、教会が世々守るべき聖礼典の一つである聖餐を制定されました。26 節「また、一同が食事をしている時、イエスはパンを取り、神をほめたたえてこれを裂き、弟子たちに与えて言われた。『取って食べなさい。これはわたしのからだです。』」イエスが裂いて弟子たちに与えたパンは、十字架で裂かれるイエスのからだを表わしました。続けて 27-28 節「また杯を取り、感謝の祈りをささげた後、こう言って彼らにお与えになった。『みな、この杯から飲みなさい。これは多くの人のために、罪の赦しのために流される、わたしの契約の血です。』」杯に入っていたぶどう酒は、イエスが十字架で流される血を表わしました。イエスの血は多くの人の罪の赦しのために流されるのです。

古い契約である旧約では、罪の赦しのために動物のささげ物の血が流されました。それは、ささげられる動物が、罪を犯した人の罪を代わりに負い、身代わりに神のさばきを受けることによって、罪が赦されるからでした。しかし、動物の血による罪の赦しは完全なものではなく、やがて完全な罪の赦しを与える救い主が来られることを預言していたのです。その旧約の預言の成就が救い主イエス・キリストなのです。罪のない神の御子イエスは、私たちの罪を負い、身代わりに神のさばきを受けて十字架で死んでくださいました。そして、イエスを救い主と信じるなら、すべての罪が赦され、神のさばきが過ぎ越され、永遠のいのちを受けるという新しい契約を完成させてくださったのです。ヘブル 9:13-15 にはこうあります。「雄やぎと雄牛の血や、若い雌牛の灰を汚れた人々に振りかけると、それが聖なるものとする働きをして、からだを聖いものにするなら、まして、キリストが傷のないご自分を、とこしえの御霊によってお献げになったその血は、どれだけ私たちの良心をきよめて死んだ行いから離れさせ、生ける神に仕える者にすることでしょうか。キリストは新しい契約の仲介者です。」私たちは聖餐式でパンを食べ、ぶどう液を飲むたびに、イエスが十字架で私の身代わりに神のさばきを受け、体が裂かれ、血が流されることによって、私の罪が赦されたことを覚えます。そして、死んでよみがえられた主イエスとの深い霊的交わりをいただく祝福にあずかるのです。

29 節でイエスはさらに言われました。「わたしはあなたがたに言います。今から後、わたしの父の御国であな^{のち}がたと新しく飲むその日まで、わたしがぶどうの実からできた物を飲むことは決してありません。」イエスにとって、この聖餐式は地上での最初で最後となりました。しかし、やがて天の御国であな^{のち}がたと新しく飲むその日が来ると約束してくださったのです。ですから聖餐式は、イエスの十字架の贖いによって罪赦された恵みを覚えるとともに、やがて天の御国でイエスと喜びの食事をともにする時が来ることを覚えるのです。そしてイエスの再臨と天の御国の完成を待ち望むのです。

聖歌 425 番の「罪重荷を除くは」はイエスの血の力を歌っています。「罪重荷を除くは、血の力、主の血は、悪魔のわざをこぼつ（壊す）、奇しき力なり、力ある主イエスの血、受けよ、受けよ、力ある主イエスの血、受けよ、今受けよ」イエスが十字架で流された血は、私たちの罪を赦しきよめ、罪の重荷を取り除くためでした。その血を受けるとは、イエスは私のために十字架で死んでくださった救い主と信じることです。その

時、力ある主イエスの血を受けて、私たちのすべての罪が赦され、きよめられるのです。その信仰を持つ時、「イエスは主です」との信仰を告白し、イエスの弟子となったしるしとして洗礼を受け、それから地上での信仰生活の生涯、聖餐に与りながら天の御国でのイエスとの喜びの祝宴を待ち望むのです。

すでに力ある主イエスの血を受けた人は、「イエスの血はすべての罪から私たちをきよめてくださいます」との約束を日々確認し、そして聖餐式のたびに確認して、主の救いに感謝して歩みましょう。まだ力ある主イエスの血を受けていない人は、「力ある主イエスの血、受けよ、今受けよ」をあるように、十字架で流されたイエスの血は私のためでしたと今信じて、イエスの血による罪の赦しを受けましょう。そして、イエスは私の主ですとの信仰を告白して洗礼を受け、ともに聖餐にあずかる者となりましょう。

マタイの福音書 26章30節～46節 「ゲッセマネの祈り」

1. つまずきの予告 30～35

今日からクリスマス待ち望むアドベント・待降節に入りました。今年は新型コロナの影響で例年のようなクリスマス行事を持つことはできませんが、アドベントの期間、キリストの降誕を祝うクリスマスとともに、再び来られるキリストを待ち望みたいと思います。今日の箇所は、過越の食事を終えたイエスと弟子たちが、オリーブ山に向かうところから始まります。30節「そして、彼らは賛美の歌を歌ってからオリーブ山へ出かけた。」オリーブ山は、エルサレム神殿の東側にあるキデロンの谷を隔てた向こう側にあります。オリーブの木がたくさん植えてあったためオリーブ山と呼ばれました。そして、そこで弟子たちにとって衝撃的なことを話されたのです。31節「そのとき、イエスは弟子たちに言われた。『あなたがたはみな、今夜わたしにつまずきます。くわしは羊飼いを打つ。すると、羊の群れは散らされる』と書いてあるからです。』」

「今夜わたしにつまずく」とはもう間もなくイエスを見捨てて逃げていくということです。これに対して、ペテロがすぐに反論しました。33節「すると、ペテロがイエスに答えた。『たとえ皆があなたにつまずいても、私は決してつまずきません。』」ペテロはイエスを置いて逃げるなど考えられず、たとえ他の弟子が逃げたとしても、自分は絶対逃げませんと伝えたのです。それに対してイエスは言われました。34節「イエスは彼に言われた。『まことに、あなたに言います。あなたは今夜鶏が鳴く前に3度わたしを知らないと言います。』」一度ならつい口が滑ったと言い訳できるかもしれませんが三度イエスを知らないというのは、自分の確固たる意志で言うことです。それに対してペテロはさらに反論しました。35節「ペテロは言った。『たとえ、あなたと一緒に死ななければならないとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません。』」弟子たちは皆同じように言った。」ペテロも他の弟子たちも、命に代えてもイエスを裏切らないと言ったのです。しかし、結果はどうだったのでしょうか。この後イエスが捕らえられ、弟子たちは蜘蛛の子を散らすようにイエスを見捨てて逃げました。そしてペテロは鶏が鳴く前に3度イエスを知らないと言ってイエスにつまずきました。

この出来事は、人間とは何と弱く罪深い者であるかを教えています。自分の願いとは全く違う罪を簡単に犯してしまうのが、私たち人間であるということです。もし、自分は絶対にイエスにつまずかないし、裏切ることはないと思う人がいれば、それはペテロや弟子たちと同じだということです。パウロもこう言っています。「私はしたいと願う善を行わないで、したくない悪を行っています。私が自分でしたくないことをしているなら、それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住んでいる罪です。」(ローマ 7:19-20) イエスを信じる者であっても罪を犯してしまう現実があるのです。しかし、そのような弱く罪深い私たちを救うためにイエスは十字架にかかってくださったのです。イエスは私たちが救われる前の罪のためだけでなく、救われた後に犯した罪のためにも十字架で死んでくださったのです。

イエスは弟子たちがつまずくことを予告されるとともに、彼らの信仰が回復する希望があるというヒントを32節で与えておられます。「しかしわたしは、よみがえった後、あなたがたより先にガリラヤへ行きます。」ガリラヤは、弟子たちがイエスとお会いし、弟子となる召命を受け、イエスとともに伝道した信仰の原点です。イエスはよみがえられた後、ガリラヤで弟子たちと会われるのです。彼らはそこで信仰を完全に回復させ、主の弟子として新たに任命され、大宣教命令を与えられて、世界宣教に遣わされて行くのです。

神は私たちにも、私たちにとってのガリラヤを備えてくださっています。それは私たちの信仰の原点である十字架の救いです。私たちが罪を犯し、失敗し、自分の罪深さや弱さに打ちのめされるようなことがあっても、十字架のもとに帰る時、ここに赦しがあり、主との交わりの回復があり、再び立ち上がる力が与えられるのです。十字架で死に、よみがえられた主がそこで私たちに会って下さるのです。ですから、私たちは決し

て失望する必要はありません。主の十字架はいつも私たちにとっての信仰の原点であり、帰るべき場所なのです。

2. ゲッセマネの祈り 36-46

その後、イエスは弟子たちとオリーブ山のふもとにあるゲッセマネの園に行かれ、ペテロとヤコブとヨハネを連れて祈りの場に行かれました。そこでイエスは十字架を前にして悲しみもだえながら祈られました。36-39節「それから、イエスは弟子たちと一緒にゲッセマネと言う場所に来て、彼らに『わたしがあそこに行って祈っている間、ここに座っていなさい』と言われた。そして、ペテロとゼベダイの子2人を一緒に連れて行かれたが、イエスは悲しみもだえ始められた。そのとき、イエスは彼らに言われた。『わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここにいて、わたしと一緒に目を覚ましていなさい。』それからイエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈られた。『わが父よ。できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしが望むようにではなく、あなたが望まれるままに、なさってください。』」

イエスはなぜ十字架を前にして、死ぬほど悲しみもだえて祈られたのでしょうか。それは、イエスにとって十字架は耐え難い苦しみだったからです。イエスが言われたこの杯とは、神の怒りとさばきの杯です。イエスは肉体的な苦しみとともに、だれも経験したことがない霊的な苦しみを受けられるのです。罪のないお方が、すべての人の罪を代わりに負い、神の怒りとさばきを受けて、父なる神から見捨てられるのです。その結果、今まで持っていた父と子の永遠の交わりが失われ、イエスは死んでよみに下るのです。それはイエスにとって耐えがたい苦しみでした。そこで「できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」と自分の素直な願いを祈られたのです。しかし、それでイエスの祈りは終わらず、続けて祈られました。「しかし、わたしが望むようにではなく、あなたが望まれるままに、なさってください。」「あなたが望まれるままに」それがイエスの祈りの土台であり、イエスの究極的な願いでした。

イエスの2回目の祈りはこうです。42節「イエスは再び2度目に離れて行って、『わが父よ。わたしが飲まなければこの杯が過ぎ去らないのであれば、あなたのみこころがなりますように』と祈られた。」そして3度目も同じように祈られました。44節「イエスは、彼らを残して再び離れて行き、もう一度同じ言葉で3度目の祈りをされた。」イエスはこの3回の祈りによって霊的に勝利され、父なる神のみこころに従い、十字架に向かって行かれたのです。45-46節「それから、イエスは弟子たちのところに来て言われた。『まだ眠っているのですか。見なさい。時が来ました。人の子は罪人たちの手に渡されます。立ちなさい。さあ、行こう。見なさい。わたしを裏切る者が近くに来ています。』」「立ちなさい。さあ、行こう。」イエスは眠っていた弟子たちを起こし、自ら先頭に立って十字架に向かって行かれました。

イエスのゲッセマネの祈りは苦しみの祈りであり、父のみこころに従う勝利に導かれる祈りでした。私たちはイエスの苦しみが、私たちを救うための苦しみであったことを覚えましょう。イエスがこれほど苦しみ抜かれたのは、私たちを愛し、私たちを罪の中から救い出し、父なる神のみもとに導くためだったことを覚えて、心から感謝しましょう。そして、十字架の苦しみは私のためでしたと告白し、イエスの十字架を誇りとして生きていきましょう。

3. 祈りの必要性 40-41

イエスが祈られる時、ペテロとヤコブとヨハネに「ここにいて、わたしと一緒に目を覚ましていなさい」と言って、祈りの支えを願われました。ところが、彼らは目を開けて祈ることができず、眠ってしまったのです。イエスの1回目の祈りの後も、2回目の祈りの後も、3回目の祈りの後も彼らは眠ってしまいました。なぜそうなったのでしょうか。イエスの1回目の祈りの後に言われたイエスのことばを見てみましょう。40-41節「それから、イエスは弟子たちのところに戻って来て、彼らが眠っているのを見、ペテロに言われた。『あなたがたはこのように、1時間でも、わたしとともに目を覚ましていられなかったのですか。誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていなさい。霊は燃えていても肉は弱いのです。』」

ペテロたちの霊は燃えていました。「私は決してつまずきません。いのちを掛けて、あなたを知らないなどと言いません。」と霊に燃えて言いました。ところが、肉体の弱さのため、イエスが決死の思いで祈っている間、目を開けて祈ることができませんでした。なぜそうなったのでしょうか。それは彼らがイエスが間もなく捕らえられ、十字架に付けられることを悟っていなかったからではないでしょうか。ペテロが「たとえ、あなたと一緒に死ななければならぬとしても」と言っても、それは仮定の話であって、イエスが死ぬことを悟らず、受け入れることもしなかったのです。イエスの十字架の死の予告を何度聞いても、悟ることができなかったのです。ですから、彼らはイエスのゲッセマネの祈りがどれほど大切な祈りかも知ることができず、眠ってしまったのです。その結果、弟子たちはイエスの十字架に対する霊的な備えをすることができず、イエスが捕らえられると、つまずき逃げ去り、イエスを知らないと言ったのです。

この弟子達の姿は、私たちの姿でもあります。私たちも神のことばを悟らずに生きていれば、祈るべき時に祈らず、神の助けを受けない結果、誘惑に陥り、罪を犯してしまいます。そうならないようにするためには、まず、みことばをもって日々語られる神に聞くことです。そしてみことばを通して教えられる神の望みと神のみこころを知ることです。

そして、自分の力に頼らず、聖霊の助けと力を求めて祈ることです。イエスのように自分の願いを祈るとともに、「私が望むようにではなく、あなたが望まれるままになさってください。あなたのみこころがなりますように」と祈ることです。そうすれば、主は私たちに誘惑と試練に打ち勝つ力を与えてくださいます。そして、恐れずイエスと一緒に、主のみこころがなることを願って前進していくことができます。今週もゲッセマネの祈りを模範として、目を覚まして祈りながらイエスとともに歩みましょう。

マタイ 26 章 47 節～56 節「イエスの逮捕」

1. ユダの裏切り 47～50

イエスはゲッセマネの園で、十字架を前にして、父なる神に自分の苦しみを訴えながら、神のみこころに従う祈りをされました。そして3回の祈りによって、イエスは霊的勝利を得られ、眠っていた弟子たちに対して、「立ちなさい。さあ行こう。見なさい。私を裏切る者が近くに来ています」と言われました。今日はその続きです。47 節「イエスがまだ話しておられるうちに、見よ、12 人の 1 人のユダがやって来た。祭司長たちや民の長老たちから差し向けられ、剣や棒を手にした大勢の群衆も一緒であった。」ユダとともに来た群衆には、祭司長たち、宮の守衛長たち、長老たち、そしてローマ兵がいたことが、他の福音書に記されています。

48-49 節「イエスを裏切ろうとしていた者は彼らと合図を決め、『私が口づけするのが、その人だ。その人を捕まえるのだ』と言っておいた。それで彼はすぐにイエスに近づき、『先生、こんばんは』と言って口づけした。」祭司長たちにとって捕らえるべき相手はただ一人イエスでした。そこで、ユダは自分が口づけする人が、イエスだとあらかじめ合図を決めて、イエスに近づき口づけしたのです。口づけの挨拶は、尊敬と愛情を表わす挨拶でした。しかし、ユダにはイエスに対する尊敬も愛情ももはやありませんでした。ユダがイエスを先生と呼びましたが、先生とは、ユダや教師に対する呼び方で、原語ではラビです。最後の晩餐の時も、他の弟子はイエスを主と呼んだのに対し、ユダだけは先生と呼びました。ユダにとっては、イエスは愛する主ではなかったのです。ですからイエスに対する口づけは偽善的な行為であり、ユダは良心の呵責もなく、イエスを捕らえる合図として、口づけしたのです。ユダの心は全く悪魔に支配されていました。

それに対してイエスはユダに何と言われたのでしょうか。50 節「イエスは彼に『友よ、あなたがしようとしていることをしなさい』と言われた。そのとき人々は近寄り、イエスに手をかけて捕らえた。」イエスは、自分を裏切るユダに対してなお「友よ」と愛をもって呼ばれたのです。イエスは悪魔に心を支配されているユダをあわれみ、あなたはわたしの友だと言われたのです。そして「あなたがしようとしていることをしなさい」と言われました。この文章の訳はむずかしく、前の訳では「何のために来たのですか」でしたが、2017 版では最近の他の聖書の訳に倣い、「あなたがしようとしていることをしなさい」と訳されました。その意味は、イエスはユダの裏切りをすでにご存じであり、それを行いなさいと言われたのです。すなわち、イエスは逃げ遅れて捕らえられたのではなく、自分を捕らえる者の手の中に自ら入って行かれたということです。イエスの逮捕の主導権は捕らえる者にあつたのではなく、捕らえられるイエスにあつたのです。

イエスは、自分を裏切るユダをあわれみつつ、ご自分をユダと自分を捕らえるためにやって来た群衆の手にゆだねられました。それは、神に敵対するすべての人の罪を負い、十字架で罪の贖いを成し遂げるためでした。イエスはゲッセマネの園で、

42 節で「わが父よ。わたしが飲まなければこの杯が過ぎ去らないのであれば、あなたのみこころがなりますように」と祈られました。そして、ご自分を全く父なる神にゆだね、神に信頼して、人類の救いを成し遂げるために、十字架に向かって行かれたのです。「あなたがしようとしていることをしなさい」というユダへの言葉は、イエスが父なる神に従う決意を実行に移されたことを表わしています。イエスの祈りは単に祈りで終わるのではなく、祈りで始まったのです。みこころを祈り、みこころに従われたのがイエスです。私たちもこのイエスの祈りと実践を教えられます。私たちが「あなたのみこころがなりますように」と祈る時、その祈りで終わるのではなく、その祈りからみこころを行う実践が始まることを覚えましょう。そして、主のみこころを行う者としてこの一年祈りつつ歩みましょう。

2. ペテロの間違い 51-54

イエスが捕らえられた時の一人の弟子の行動が51節に記されています。「すると、イエスと一緒にいた者たちの一人が、見よ、手を伸ばして剣を抜き、大祭司のしもべに切りかかり、その耳を切り落としました。」ヨハネの福音書を見ると、この弟子はペテロであり、耳を切り落とされた人はマルコスという名の人であったことが分かります。ペテロは勇敢にもイエスを逃がそうとして、剣を抜いて向かって行ったのです。しかし、ペテロの考えも行動も間違っていました。ペテロはイエスが捕らえられてはいけないと考えました。しかし、イエスが捕えられることこそ神のみこころだったのです。また、ペテロはイエスを逃がすために、剣で大祭司のしもべに切りかかりました。剣で戦うことが、イエスの弟子としての正しい行動と思ったのです。しかし、そのペテロの行動も間違っていました。52-54節「その時、イエスは彼に言われた。『剣をもとに収めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。それとも、わたしが父にお願いして、12軍団よりも多くの御使いを、今すぐわたしの配下に置いていただくことが、できないと思うのですか。しかし、それでは、こうならなければならないと書いてある聖書が、どのようにして成就するのでしょうか。』」イエスのために剣で戦うことは間違っているのです。旧約聖書には、神の民イスラエルが神のみこころとして、剣を持って戦ったことが多く記されています。しかし、神の救いがイエスにあって成就した新約時代では、神の民である教会が、信仰のために剣を持って戦うことは間違っています。使徒の働きで、迫害にあったクリスチャンが武器を持って戦うことはありませんでした。新約聖書は、信仰者の戦いは霊的戦いであり、私たちの持つべき剣は、御霊の剣である神のことばであることが、エペソ6章に記されています。ここでもイエスはペテロに対して「剣をもとに収めなさい」と言って、剣を用いることをいさめられました。そしてルカの福音書を見ると、イエスは負傷したマルコスの耳を癒され、ペテロがこのことで訴えられないようにされました。

確かにローマ13章には、国の為政者が社会の悪を抑制するために剣を持つことが許されていることが記されています。ですから、新約聖書が剣、即ち武器の使用を全否定しているわけではありません。国家は神のしもべとして、法律に基づいて正しく抑制的に剣を使う責任があります。一方で、国や権力者が神から与えられている権威を超えて、間違った剣の用い方をすると、国民を迫害したり、あるいは他国と戦争をすることになります。そうすると「剣を取る者はみな剣で滅びます」とイエスが言われたように、憎しみはさらなる憎しみを産み、剣を取る両者が体と心に深い傷を負うことになります。現代の武器は核兵器を筆頭に破壊力がすさまじく、それを使うと民族も国もそして人類も本当に滅んでしまいます。様々な問題は剣ではなく、忍耐深く話し合いで解決すべきです。「文は武よりも強し」のことわざは、イエスの教えに通じます。私たちは神のことばという御霊の剣を持ち、平和をつくる者として歩んでいきましょう。

3. 不当な逮捕 55-56

イエスの言葉は、最初にユダに、次にペテロに、そして最後に群衆に向かって語られました。55-56節「また、その時群衆に言われた。『まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってわたしを捕らえに来たのですか。わたしは毎日、宮で座って教えていたのに、あなたがたはわたしを捕らえませんでした。しかし、このすべてのことが起こったのは、預言者たちの書が成就するためです。』その時、弟子たちはみなイエスを見捨てて逃げてしまった。」もし、祭司長たちがイエスを捕らえる正当な理由があるのなら、昼間イエスが宮で教えていた時に捕らえることができたのです。しかし、イエスを捕らえる正当な理由がなかったため、祭司長たちは、民衆が騒ぎを起さない夜に、まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って力づくでイエスを捕らえに来ました。イエスはそのような彼らに対し、ご自分の逮捕は不当であることを訴えられたのです。

しかし、その不当な逮捕も、救い主が人類の救いを成し遂げるためには必要なことでした。マタイの福音書は、イエスの生涯の最初から最後まで、旧約聖書の救い主の預言がイエスにあって成就したことを教えています。1:22では、イエスの誕生において、「このすべての出来事は、主が預言者を通して語られたことが成就するためであった」とあります。そして、いよいよイエスが十字架に付けられるために逮捕された時も、「しかし、このすべてのことが起こったのは、預言者たちの書が成就するためです」とイエスご自身が言われました。ここに旧約聖書と新約聖書が別物ではなく、しっかりとつながっていることが分かります。旧約聖書は救い主の預言の部分であり、新約聖書は救い主の預言がイエスにあってすべて成就したことを証言しているのです。そのことによって、イエスが神が約束された救い主であり、すべての罪人のための救いを成し遂げてくださったことを知るのです。

旧約の預言は、イエスの弟子たちの逃亡においても成就しました。イエスが31節で「あなたがたはみな、今夜わたしにつまずきます」と予告した後で、ゼカリヤ13:7を引用し、「わたしは羊飼いを打つ。すると、羊の群れは散らされる」と言われました。そしてそのとおり、弟子たちはみなイエスを見捨てて逃げてしまったのです。イエスは、弟子たちの弱さも罪深さもあらかじめご存じでした。そのうえで弟子たちを選び、イエスの

復活後、彼らの信仰を回復させ、全世界に福音を伝えるイエスの弟子として派遣されたのです。私たちも弟子たちと同じです。私たちも弱く、罪深く、つまずきやすく、イエスの弟子として決してふさわしい者ではありません。神はそのような私たちのことをすべてご存じの上で、私たちを救い、神の子ども、イエスの弟子としてくださったのです。ですから、救いはただ神の恵みであり、私たちに誇れるものは一つもありません。イエスが私たちのためにいのちを捨ててくださったことを感謝しイエスのためにこの一年も歩んでいきましょう。

マタイ 26 章 57 節～68 節 「神の子キリスト」

1. イエスの沈黙 57-63a 真夜中のゲッセマネの園で、群衆によって捕らえられたイエスは、大祭司カヤパの家に連れて行かれました。そして、そこでイエスに対する不正な裁判が行われたのです。57-60a 節「人々はイエスを捕らえると、大祭司カヤパのところに連れて行った。そこには律法学者たち、長老たちが集まっていた。ペテロは、遠くからイエスの後について、大祭司の家の中庭まで行った。そして中に入り、成り行きを見ようと下役たちと一緒に座った。さて、祭司長たちと最高法院全体は、イエスを死刑にするためにイエスに不利な偽証を得ようとした。多くの偽証人が出て来たが、証拠は得られなかった。」大祭司カヤパの家には、イエスに対する裁判を行うために、すでにユダヤの宗教と政治を司る最高法院のメンバーが集まっていました。本来は、最高法院は日中しか開くことができません。しかし、彼らはできるだけ早くイエスを死刑にするために、真夜中に事前の裁判を行い、その結果を翌朝の正式な裁判で決定したのです。ゲッセマネの園から逃げたペテロは、勇気を振り絞ってカヤパの家の中庭までやって来ました。来週はその後のペテロに起こった出来事を見たいと思います。

さて、この裁判は 59 節にあるように、最初からイエスを死刑にするための不正な裁判でした。そのためにイエスに不利な偽証、偽りの証言を得ようとしたのです。最高法院のメンバーの大祭司、祭司長、律法学者、長老たちは、律法を教える立場にあり、律法に従うことの大切さを自ら示す人たちです。ですから裁判も律法に基づいて行わなければなりません。ところが、彼らは律法によって禁じられている偽証を得ようとしてしました。彼らは不正な手を使ってでもイエスを死刑にしたかったのです。ところが、多くの偽証人が証言したにも関わらず、彼らの意図に反して、なかなか証拠を得ることができませんでした。証言は 2 人以上の証人が一致することによって、受け入れられるからです。しかし、最後に 2 人の偽証人の証言が一致したのです。

60b-63a 節「しかし、最後に二人の者が進み出て、こう言った。『この人は、くわしは神の神殿を壊して、それを三日で建て直すことができる』と言いました。』そこで大祭司が立ち上がり、イエスに言った。『何も答えないのか。この人たちがお前に不利な証言をしているのは、どういうことか。』しかし、イエスは黙っておられた。」最後の 2 人の一致した証言も、実はイエスが言われたことを正しく証言していません。ヨハネ 2:19 にイエスが言われたことが記されています。「この神殿を壊してみなさい。わたしは、三日でそれをよみがえらせる。」イエスは自分が神殿を壊すとは言われなかったのに、証人たちは、イエスが神殿を壊して三日で建て直すと言ったと証言したのです。しかもイエスはご自分のからだという神殿について語られたのでした。即ち、イエスはご自分のからだという神殿を人々が壊しても、三日目によみがえると、ご自分の死と復活について語られたのでした。しかし、証人たちはそのことを理解せず、間違った証言をしたのです。

この 2 人の証言は大祭司にとっては都合の良いものでした。なぜなら、神殿は神が臨在される場所なので、神殿を壊すと言うことは神に対する冒瀆であり、死刑に値するからです。さらには、ローマ帝国の平和を脅かす罪としてローマに訴えることもできます。ところが、イエスはこの証言に対しても黙って何も弁明されませんでした。もし、私たちが死刑になるような偽証で訴えられたらどうするでしょうか。私たちは全力でその証言は偽りであり、自分はそのようなことをしていないし、言っていないと弁明するのではないのでしょうか。ではなぜイエスは黙って何も弁明されなかったのでしょうか。それは、イエスは死刑を逃れようとはされなかったからです。イエスは十字架ですべての人の救いを成し遂げるために、不正な裁判に身をゆだね、自分を救うための弁明を一切行われなかったのです。それはイザヤ 53:7 の救い主の預言の成就でもありました。「彼は痛めつけられ、苦しんだ。だが、口を開かない。ほふり場に引かれていく羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。」私たちはこのイエスの沈黙に、私たち罪人を救うためのイエスの決意を見ることができます。それはゲッセマネの園での祈りの勝利に基づくものです。「わが父よ。わたしが飲まなければこの杯が過ぎ去らないのであれば、あなたのみこころがなりますように。」イエスは父のみこころに従い十字架の苦しみのかみ杯を飲むことを受け入れられたので、自ら抵抗することなく捕らえられ、そして裁判の

場でも自分を救うための弁明を一切されなかったのです。イエスは、罪人の私たちを愛し私たちを救うために沈黙してくださったのです。このイエスの大きな愛と犠牲を覚えてイエスに心からの感謝をささげましょう。

2. 神の子キリスト 63b-64 沈黙するイエスに対して、大祭司はイエスに核心に迫る質問をしました。そしてイエスはこの時、沈黙を破って答えられました。63b-64 節「そこで大祭司はイエスに言った。『私は生ける神によっておまえに命じる。おまえは神の子キリストなのか、答えよ。』」イエスは彼に言われた。『あなたが言ったとおりです。しかし、わたしはあなたがたに言います。あなたがたは今から後に、人の子が力ある方の右の座に着き、そして天の雲とともに来るのを見ることになります。』「おまえは神の子キリストなのか」この問いかけは、マタイ 16:16 のペテロの信仰告白を思い起こさせます。その時イエスが弟子たちに「あなたがたはわたしを誰だと言いますか」と聞きました。するとペテロが「あなたは生ける神の子キリストです」と答えたのです。イエスはペテロに対し「あなたは幸いです。このことをあなたに明らかにしたのは、血肉ではなく、天におられるわたしの父です」と言われました。そのペテロもその信仰が大きくゆすぶられ、つまりいてしまいます。しかし、ペテロはイエスへの信仰を最後まで守り通しました。

一方、カヤパはイエスが神の子キリストとは信じません。むしろ、イエスを神への冒瀆罪で死刑に定めるために、とっておきの質問をしたのです。それに対してイエスはついに沈黙を破って「あなたが言ったとおりです」と答えました。イエスは自分を救うための弁明は一切されませんでした。ご自分のことを証しするために口を開かれたのです。そして、ご自分が神の子キリストであるとは正確にどのような意味かを話されました。イエスは、当時の人々が考えていたような政治的にユダヤをローマから独立させる救い主ではなく、父なる神の右の座に着き、やがて全世界をさばくために来られる主であると言われたのです。

「あなたがたは今から後に、人の子が力ある方の右の座に着き、そして天の雲とともに来るのを見ることになります」とは、詩篇 110 篇とダニエル 7 章に預言されている救い主がイエスご自身であるということです。今は、イエスはさばかれる側ですが、やがてイエスが雲とともに再臨される時には、イエスはさばき主としてこの世に来られるのです。イエスの再臨の時、私たちはイエスをどのようなお方としてお迎えするでしょうか。救い主としてでしょうか。それともさばき主としてでしょうか。それは、私たちがイエスを神の子キリストと信じるかどうかにかかっているのです。そのことを次に見ていきましょう。

3. 信仰か不信仰か 65-68 大祭司カヤパはイエスを神の子キリストとは信じず、イエスは神を冒瀆したと決めつけました。そして最高法院からイエスに対する死刑判決を引き出しました。65-66 節「すると、大祭司は自分の衣を引き裂いて言った。『この男は神を冒瀆した。なぜこれ以上、証人が必要か。なんと、あなたがたは今、神を冒瀆することばを聞いたのだ。どう思うか。』」すると彼らは『彼は死に値する』と答えた。」そこから、イエスに対する暴行が始まったのです。神を冒瀆し、死刑に定められた者は辱められ、殴られて当然と思ったのでしょうか。67-68 節「これから彼らはイエスの顔に唾をかけ、拳で殴った。また、ある者たちはイエスを平手で打って、『当ててみろ、キリスト。おまえを打ったのはだれだ』と言った。」ここから十字架に至るまでのイエスの受難が始まりました。イザヤ 53:3 にはこうあります。「彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。」イエスは私たちの神に敵対する罪を赦すために、十字架の苦しみを担われたのです。イエスを神の子キリストと信じないならば、ユダヤ人はイエスの証言は神への冒瀆とみなし、異邦人はイエスを大嘘つきと言うでしょう。しかし、私たちには不信仰とは違うもう一つの選択があるのです。それはイエスが神の子キリストであると信じる信仰です。私たちは今日の裁判でのイエスの姿を通して、イエスがまことの神の子キリストであると信じるに足る理由を知ることができます。それは一つには、自分にとってどんな不利な偽りの証言がなされても、黙っておられたイエスの姿です。イエスは一つも弁明することなく、自らを救おうとはされず、私たちの罪を贖うために十字架に向かって行かれたのです。二つ目は、イエスの証言によって、イエスが本当に神の子キリストであると信じることができます。「おまえは神の子キリストなのか、答えよ」というカヤパの挑発に対し、「あなたが言ったとおりです」と答えれば、死刑に定められることを知りながら、はっきりと「あなたが言ったとおりです」と証言されたのです。これはイエスのいのちをかけての真実な証言です。三つ目は、ご自分への蔑みと暴行に対してイエスがじっと耐えておられる姿にも、イエスが本当に神の子キリストだと信じることができます。イエスはこの時も罪人の罪を全部負ってくださっていたのです。

もし、私たちがイエスを信じないならば、イエスが雲とともに再びこの世に来られる時、私たちはイエスをさばき主として迎えない限りなりません。けれども、もし私たちがイエスを信じるならば、イエスが再臨される時、私たちは喜びと感謝を持ってイエスを救い主としてお迎えすることができるのです。信仰か不信仰か、あなたはイエスに対する 2 つの道のどちらを選ぶでしょうか。信じない者にならないで、信じる者になりましょう。そして、十字架の苦しみは私のためでしたと告白し、救いを成し遂げて今は父なる神の右に座しておら

れるイエスを、自分の救い主として心の王座にお迎えしましょう。そして、イエスは神の子キリストですという信仰を誇りとし、イエスの証し人として生きていきましょう。そうするならば、やがて再び来られるイエスを心からの感謝と喜びをもって、私の救い主としてお迎えすることができます。今週も神の子キリストであるイエスに信頼し、イエスとともに歩んでいきましょう。

マタイ 26 章 69 節～75 節 「ペテロの挫折」

1. ペテロの挫折 私たちは人生の中で様々な挫折を経験します。失敗をした時、願いどおりにいかなかった時、思わぬ試練にあった時など、挫折する原因は様々です。今日はペテロの挫折から学びたいと願います。彼はどのような挫折したのでしょうか。その原因は何だったのでしょうか。そしてどのようにして挫折から立ち直ることができたのかを見てみましょう。

まずペテロはどのような挫折をしたのかを第1の点で見てください。ペテロは、ゲッセマネの園でイエスが捕らえられた時、他の弟子たちとともにイエスを見捨てて逃げてしまいました。しかしペテロはその後、これではいけないと思ったのでしょうか。58 節で、遠くからイエスの後について行き、イエスの裁判の成り行きを見ようと大祭司カヤパの家の中庭に入って行ったのです。それは敵陣の中に入っていくことであり、ペテロは勇気を振り絞って気づかれぬように中に入って行きました。ところが、そこでイエスを3回否定するという大きな挫折を経験したのです。

69-70 節「ペテロは外の中庭に座っていた。すると召使いの女が一人近づいて来て言った。『あなたもガリラヤ人イエスと一緒にいましたね。』ペテロは皆の前で否定し『何を言っているのか、私には分からない』と言った。」他の福音書を見るとペテロは中庭でたかれた火に当たり、他の人たちと一緒に座っていました。すると一人の召使いの女がペテロに近づき、「あなたもガリラヤ人イエスと一緒にいましたね。」と言ったのです。驚いたペテロは自分がイエスの弟子だと気づかれたのかと思い、捕まってしまうのではないかと恐れを抱き、とっさに皆の前で否定したのです。そして「何を言っているのか、私には分からない」ととぼけたのです。

ペテロはこれはやばいと思ったのか、いつでも逃げ出せるように入り口まで移動しました。71-72 節「そして入り口まで出て行くと、別の召使いの女が彼を見て、そこにいる人たちに言った。『この人はナザレ人イエスと一緒にいました。』ペテロは誓って『そんな人は知らない』と再び否定した。」ペテロの2回目の否定は、誓いをもって強く否定したのです。しかし、ペテロの否定はこれで終わりではありませんでした。73-74 節「しばらくすると、立っていた人たちがペテロに近寄って来て言った。『確かに、あなたもあの人たちの仲間だ。ことばのなまりで分かる。』するとペテロは、嘘ならのろわれてもよいと誓い始め、『そんな人は知らない』と言った。すると、すぐに鶏が鳴いた。」ペテロの3回目の否定は、嘘なら呪われてもよいと言う最大限の誓いを立てて、強く強くイエスを知らないと言ったのです。するとすぐに鶏が鳴き、イエスのことばを思い出したのです。75 節「ペテロは、『鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言います』と言われたイエスのことばを思い出した。そして、外に出て行って激しく泣いた。」ペテロはイエスのことばを思い出し、自分がどんなに大きな失敗をしてしまったかを知り、外に出て行って激しく泣いたのです。これがペテロのイエスを3回否定した彼の人生の中での最大の挫折でした。第2の点では、ではなぜペテロはこのような失敗をしたのかという失敗の原因を見たいと思います。そしてその原因を知る時に、私たちは同じような失敗をしないために必要なことを知ることができます。

2. 挫折の原因 ペテロの挫折の原因の一つ目は、自信過剰にありました。イエスは 26:31 で「あなたがたはみな、今夜わたしに躓きます」と言われました。その時ペテロは「たとえ皆があなたにつまずいても、私は決してつまずきません」と答えました。するとイエスは「あなたは今夜、鶏が鳴く前に3度わたしを知らないと言います」と言われたのです。しかし、ペテロはイエスのことばを受け入れず、「たとえ、あなたと一緒に死ななければならないとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません」と自信を持って言ったのです。しかし、このペテロの自信が失敗の元となりました。ペテロは自分の弱さに気づいていなかったのです。ペテロは、自分はイエスが言われるような弱い人間ではない。一番弟子として、命を懸けてイエスに従い続ける自信があると思っていました。しかし、この自分の力で、自分の努力で何とかするというペテロの自信は、イエスに頼り、イエスに助けを求める信仰から自らを引き離すことになったのです。ペテロの自信は召使いの一人の女の一言で、もろくもガタガタとくずれてしまいました。

私たちも自分の才能や能力や意志の強さや今までの努力などから、自分の力を過剰評価し、自信過剰になると、思わぬところで落とし穴に落ちてしまうことになります。他の人がどうであれ、自分だけは大丈夫だと思

うのであれば、それはすでに自信過剰の罠に陥っているのです。自分は弱い罪深い人間であると知るところから、神に頼る信仰が生まれます。そして、だれも神に頼る必要のないほどの強い人はいないのです。ペテロはこの挫折を通して、自分の弱さを徹底的に知らされ、そして主に寄り頼む人に変えられていくのです。

二つ目のペテロの挫折の原因は、悪魔の策略に陥ったことです。ルカ 22:31 を見るとイエスは事前にペテロにこう言われました。「シモン、シモン。見なさい。サタンがあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って、聞き届けられました。」神は時にはサタンを用いて私たちを試されることがあります。旧約聖書のヨブ記には、神はサタンにヨブを試みることを許されたことが記されています。その結果、ヨブは大変な試練に会いました。そして、イエスが捕らえられる時も、神はサタンに弟子たちを試みることを許されたのです。なぜ神がそのようにされたのかは神だけがご存じです。私たちが知ることは、神は私たちが信仰者として成長するために、時にはサタンを用いて私たちに試練を与えられるということです。イエスはペテロにあらかじめサタンがあなたがたをふるいにかけると言われました。しかし、ペテロはそのイエスの忠告を無視して、自分は大丈夫と思い、霊的に無防備で大祭司の庭に入って行ったのです。イエスはゲッセマネの園の祈りで霊的に勝利され、十字架に向かっていかれました。しかし、ペテロはゲッセマネの園で眠りこけ、祈ることもなく、自分の力で何とかなると考えて、悪魔の策略の中に無防備で入って行ったのです。その結果は、悪魔の策略の思うつぼに陥り、誓いをもってイエスを知らないとして強く否定する大きな罪を犯してしまったのです。

私たちも自分の力で悪魔に勝つことなどできません。必ず負けてしまいます。ペテロは自分の経験を通して、I ペテロ 5:8-9 で言っています。「身を慎み、目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っています。堅く信仰に立って、この悪魔に対抗しなさい。」霊の目を開き、悪魔の攻撃があることを意識し、堅く信仰に立つことによって、初めて悪魔に対抗することができるのです。またエペソ 6 章には、悪魔に打ち勝つための神の武具として、信仰、救い、神のことば、そして祈りを身に着けるようにと教えています。私たちは自分の力に頼るのではなく、いつも主に頼り、霊の目を覚まし、神の武具を身に着けて、悪魔の策略に陥らないようにしましょう。

3. 挫折からの立ち直り ペテロは大きな挫折を味わいました。その挫折からどのようにして立ち直ることができるのでしょうか。そのヒントはペテロがイエスのことばを思い出したことにあります。3 度目にペテロがイエスを否定したその時、夜明けが近づき、鶏がコケコッコーと鳴きました。その時ペテロは「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言います」と言われたイエスのことばを思い出したのです。イエスのことばを思い出した時、ペテロの霊の目が開かれました。

そして、自分が犯したイエスを否定し、イエスを裏切るという大きな罪に気づき、外に出て行って激しく泣いたのです。しかし、ペテロは他の弟子たちから離れて行くことはありませんでした。来週見ますイエスを裏切ったユダのように絶望することはありませんでした。それはなぜでしょうか。それはペテロの心にイエスのことばが迫ってきたからです。

「あんなにイエスが自分の弱さを指摘しておられたのに、自分はイエスのことばを無視し、自分は大丈夫だと思ってしまった。そして結果はイエスが言われたとおりになってしまった。」ペテロは挫折して初めて、自分の弱さ、愚かさ罪深さを徹底的に知りました。と同時に、イエスは何でもお見通しだったことを改めて知のです。そして、その後もイエスのことばを思い出したのではないのでしょうか。ルカ 22:32 ではイエスはペテロにあらかじめこうも言っておられたのです。「しかし、わたしはあなたのために、あなたの信仰がなくならないように祈りました。ですから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」ペテロの信仰は今や風前の灯でした。しかし、イエスはペテロの信仰がなくならないように祈ってくださっていたのです。ペテロは挫折した暗い思いではあったでしょうが、とにかく弟子たちのもとに戻ったのです。それはペテロの悔い改めの行為でした。ペテロは罪の暗闇にとどまらず、立ち上がって弟子たちのもとに戻ったのです。

その後、ペテロはどうなったのでしょうか。3 日目の日曜日になり、女たちがイエスの復活の知らせを弟子たちに伝えた時、弟子たちはこの話はたわごとと思って信じませんでした。しかし、ペテロは立ち上がって、走って墓に行き、イエスの復活を信じたのです。その後、よみがえられたイエスはペテロをはじめ弟子たちに現れてくださいました。そして、ガリラヤでイエスをお会いした時、イエスはペテロに 3 度「あなたはわたしを愛しますか」と問われました。ペテロも 3 度「私があなたを愛することはあなたにご存じです」と答えると、イエスは 3 度「わたしの羊を飼いなさい」と言って、ペテロを教会の指導者として任命されたのです。ペテロはどんなにうれしかったのでしょうか。イエスに罪を赦され、イエスのために生きることができる幸いを心から覚えたことでしょう。

このペテロの挫折の出来事は 4 つの福音書すべてに記されています。それはペテロが自らの失敗を人々に話したので、福音書の記者はそれを記録したのです。ペテロはこの挫折を通して自分がどんなに弱く罪深い人間

であるかを知りました。そして、このような罪深い者をイエスは赦し、受入れ、使徒として用いてくださっていることを証しましたのです。Ⅰペテロ 2:24-25 でペテロはこう言っています。「キリストは自ら、十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるため。その打ち傷のゆえに、あなたがたは癒された。あなたがたは羊のようにさまよっていた。しかし今や、自分のたましいの牧者であり、監督者である方のもとに帰った。」迷える羊であったペテロの罪をイエスは十字架でその身に負い、罪の贖いを成し遂げてくださいました。ペテロはイエスのもとに帰った時に、罪が赦され、心の傷が癒され、イエスのために生きる者とされました。私たちもどんな挫折を経験しても、イエスのもとの戻るならイエスの赦しと癒しと新しい力をいただいて、立ち直ることができます。私たちの弱さをご存じのイエスのもとにいつでも戻り、イエスに頼り、イエスのために生きる者となりましょう。

マタイ 27 章 1 節～10 節 「後悔か悔い改めか」

1. 最後の日 1-2

1-2 「さて夜が明けると、祭司長たちと民の長老たちは全員で、イエスを死刑にするために協議した。そしてイエスを縛って連れ出し、総督ピラトに引き渡した。」27 章は夜明けから始まります。いよいよイエスの地上での最後の日が始まりました。エルサレムの春の夜明けは朝 6 時頃です。すぐにユダヤとローマの裁判が開かれ、イエスは朝 9 時に十字架に付けられ、午後 3 時に息を引き取られます。イエスが十字架での死を迎える朝一番の出来事が今日の箇所です。夜が明けると、ユダヤの最高法院が正式に開かれました。そして、真夜中の非公式の裁判で決定されたイエスに対する死刑判決を正式に決定したのです。但し、当時のユダヤはローマ帝国の支配下にあったため、ローマの正式な裁判を経なければ死刑判決を出すことができませんでした。さらにローマの裁判では、ユダヤの宗教的な冒瀆罪は死刑とはなりません。夜の最高法院の非公式な裁判では、イエスの死刑の罪状は神への冒瀆罪でした。そこで、彼らはイエスを死刑にするためにローマに訴える罪状を協議したのです。ルカ 23:2 では最高法院はピラトにこのように訴えています。「この者は我が民を惑わし、カエサルに税金を納めることを禁じ、自分は王キリストだと言っていることが分かりました。」即ち最高法院はイエスを、ユダヤ人を惑わす扇動罪、納税を禁じる納税拒否罪、自分を王と言う反乱罪で訴えることにしました。

そしてイエスを縛って連れ出し、総督ピラトに引き渡しました。ここで初めてピラトが出てきます。使徒信条で「ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受け」と言われるユダヤを治めるローマの地方総督のピラトです。このピラトがローマ帝国の裁判でイエスをさばくことになったのです。そして、残念なことにユダヤ人の圧力に負けて、不正な裁判を行い、イエスに死刑判決を下したのです。そのことは来週見ていきます。第 1 の点で見たいことは、イエスを死刑にするための人間の悪の力のすさまじさと、それに対する無抵抗のイエスの姿です。イエスは最高法院で裁判を受けた後、縛られて、総督ピラトに引き渡されました。この世の権力の限りを尽くして、イエスを死刑にしようとする罪人の姿と、それを受け入れ、罪人の罪を贖うために、自ら十字架に向かうイエスの毅然とした姿が対比されています。一見イエスが罪人の力に敗北したように見えます。しかし実際は、イエスは十字架で罪に対する勝利を得、私たちが罪の暗闇から救い出すために、総督ピラトに引き渡されていったのです。ここに、イエスの苦しみを通して現された罪人に対する神の愛を見ることができます。十字架のイエスこそ、私たちの愛する救い主であることを覚えて、心から主に感謝しましょう。

2. ユダの後悔 3-5

3-5 節はイエスを裏切ったイスカリオテ・ユダの後悔とユダの死について記されています。3-5 節「そのころ、イエスを売ったユダはイエスが死刑に定められたのを知って後悔し、銀貨 30 枚を祭司長たちと長老たちに返して、言った。『私は無実の人の血を売って罪を犯しました。』しかし、彼らは言った。『我々の知ったことか。自分で始末することだ。』そこで、彼は銀貨を神殿に投げ込んで立ち去った。そして出て行って首をつった。」ユダは最高法院がイエスを死刑に定めたことを知って、初めて良心の呵責を覚え、自分がイエスを裏切り、イエスを祭司長たちに売り渡したことを後悔しました。そして彼は祭司長たちと長老たちのところに銀貨 30 枚を返しに行き、彼らに「私は無実の人の血を売って罪を犯しました」と言ったのです。ユダは銀貨を返すことで、自分の罪の償いを少しでもしたいと思ったのでしょうか。しかし、祭司長たちの答えは非情なものでした。彼らは自分たちのもとに来たユダに「我々の知ったことか。自分で始末することだ」と言って銀貨を受取りませんでした。絶望したユダは、銀貨を神殿に投げ込むことによって、まず銀貨を自分で始末しました。さらに出て行って首をつり、自分のいのちを自分で始末してしまったのです。

このユダの最後の悲しい結末から私たちは何を学ぶことができるでしょうか。この出来事は、先週見たイエスを3度否定したペテロの出来事のすぐ後にあり、マタイはこの2人を比較して書いています。この2人の弟子には、イエスを裏切ったという共通点があります。しかし、異なる点もあります。一つには、ペテロの裏切りは計画的ではなく、周りの圧力に負けて、自己保身のためにイエスを裏切ったのです。それに対してユダは、計画的にしかもお金をもらってイエスを裏切ったことです。もう一つのことは、ペテロはイエスを裏切り、外に出て激しく泣きましたが、やがて信仰を回復させ、イエスの使徒として生涯用いられました。それに対してユダは、自分に失望し、外に出て行って首をつって死んでしまったのです。この違いはどのような理由から起きたのでしょうか。それは、ペテロは自分の罪を悔いただけでなく、悔い改めてイエスの赦しをいただきました。それに対して、ユダは自分の罪を後悔しましたが、悔い改めてイエスの赦しをいただこうとはしなかったことです。このことをもう少し詳しく見ていきましょう。

まずユダです。彼は3節でイエスを売ったことを後悔しました。この後悔と言う言葉は、罪を悔いて悲しむことですが、それ以上の意味はありません。ユダは自分の罪を後悔しましたが、悔い改めなかったです。悔い改めとは原語では方向転換と言う意味です。悔い改めは罪を後悔するだけでなく、方向転換して神のもとに行き、自分の罪を告白し、そしてイエスの赦しをいただくことです。ユダはそれをしませんでした。彼は後悔し、祭司長たちのところに行きましたが、祭司長たちはイエスを死刑に定めた張本人であり、彼ら自身が罪を犯しているので、罪の赦しなどユダに与えることはできません。ユダは祭司長のところではなく、イエスのもとに行くべきだったのです。しかし、この時点で実際にイエスのもとに行くことはできません。ではどうしたらよかったのでしょうか。ユダがこの時できることは、自分の罪を神に告白し、弟子たちのもとに帰ることでした。そうすれば、3日目に復活のイエスとお会いすることができ、イエスの赦しをいただくことができたのです。しかし、ユダにはそのような信仰はありませんでした。

ユダはイエスを無実の人と言いましたが、イエスを神の子キリストと信じる信仰がなかったのです。そこで、イエスの救いを求めることをせず、自分で自分の問題を始末する道を選び、最悪の結果となったのです。

一方、ペテロはどうだったのでしょうか。ペテロも自分の罪を後悔して激しく泣きました。しかし、ペテロはそれで終わらず、悔い改めたのです。その悔い改めの方向転換は、弟子たちのものに戻ったことから始まりしました。ペテロは弟子たちのもとに戻り、弟子たちの交わりにとどまって、罪を悔い改めました。その結果、3日目に復活のイエスとお会いすることができ、イエスの赦しをいただくことができました。さらにガリラヤでイエスから教会を牧会するようにとの再召命をいただき、生涯イエスのために生きる者とされたのです。聖書は、私たちがユダではなく、ペテロのようになることを、即ち後悔で終わるのではなく、悔い改める人になるようにと教えているのです。罪を悔い改める人には、豊かなイエスの赦しがだれにでもあるのです。Ⅱコリント7:10にはこうあります。「神のみこころに沿った悲しみは、後悔のない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。」悔い改めこそ、神のみこころに沿った悲しみです。罪を悔い改め、主イエスを信じで罪の赦しいただく者となりましょう。

3. 預言の成就 6-10

6-8節はユダが神殿に投げ込んだ銀貨を、祭司長たちはどのようにしたかが記されています。「祭司長たちは銀貨を取って、言った。『これは血の代価だから、神殿の金庫に入れることは許されない。』そこで彼らは相談し、その金で陶器師の畑を買って、異国人のための墓地にした。このため、その畑は今日まで血の畑と呼ばれている。」祭司長たちは、ユダが神殿に投げ込んだ金は血の代価だと言いました。それはイエスを捕らえるためにユダに支払われたお金であり、イエスのいのちの代わりに支払われたものです。祭司長たちはその金は汚れた金であるため、神殿の金庫に入れることは許されないと言い、代わりに、陶器師の畑を買って異国人の墓地にしたのです。そして、そのことが旧約の預言の成就となったのです。

9-10節「その時、預言者エレミヤを通して語られたことが成就した。『彼らは銀貨30枚を取った。イスラエルの子らに値積もりされた人の値である。主が私に命じられたように、彼らはその金を払って陶器師の畑を買い取った。』」この預言は実はゼカリヤとエレミヤの預言が一緒になっています。聖書の書き方として、二つの預言を一緒に書く時は、より有名な預言者の名前が記されます。その結果、マタイはエレミヤの預言と言っているのです。エレミヤは神から叔父の畑を買うように命じられて買いました。またゼカリヤは、神から羊を飼うように命じられ、羊の所有者から賃金として銀30シェケル、即ち銀貨30枚を受取ります。それは奴隷1人の代価でした。そして、ゼカリヤは神に命じられ、その金を陶器師に投げ与えたのです。マタイは、このエレミヤとゼカリヤに起こった二つの出来事は、祭司長たちが、ユダが神殿に投げ込んだ銀貨30枚で陶器師の畑を買うことを預言しており、預言が成就したと記したのです。

マタイは旧約聖書の救い主の預言は、すべてイエスにあって成就したことを記しています。このことから、イエスがまことの救い主であり、イエスが十字架で成し遂げられた救いが、神が旧約において約束された救いの成就であることが分かるのです。イエスは、一方では罪深い人間の悪の力によって捕らえられ、不正な裁判にかけられ、死刑判決を受けて、十字架で死なれます。しかし、その背後には神の確かな救いのご計画があり、それが一つ一つの出来事の中で成就していったのです。イエスはそのことを知っておられたので、不正な裁判に身をゆだね、十字架で私たちの救いを成し遂げてくださったのです。

イエスの十字架の救いは、神の救いのご計画の確かな成就です。ですから、だれでも、どんな罪でも、その罪を悔い改め、方向転換してイエスのもとに行くならば、イエスは十字架で成し遂げられた罪の贖いによって、私たちのすべての罪を赦してくださるのです。パウロは、「ユダヤ人にもギリシア人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰を証ししてきたのです」と言いました。使徒 20:21 神の前に自分の罪を悔い改め、主イエスを信じる者には、すばらしい罪の赦しと永遠のいのちの救いがあります。ですから、私たちはユダのように自分で自分の罪を何とかしようとするのではなく、ペテロのように、神の前に罪を悔い改め、主イエスを信じ、豊かな赦しをいただきましょう。そしてイエスのために生涯生きる者となりましょう。主は喜んで、私たちをご自身の栄光のために用いてくださいます。

マタイ 27 章 11 節～26 節 「イエスの裁判」

1. イエスの裁判 11-26 第 1 の点では、ピラトのもとで行われたイエスの裁判を 11-26 節の箇所から見ていきましょう。今日の箇所は、27:2 からの続きです。最高法院でイエスを死刑にすることを決めた後、祭司長たちはイエスを縛って、ユダヤを治めるローマの地方総督ピラトのもとに引き渡しました。ローマの支配下にあるユダヤ人は、自分たちで死刑判決を下すことは許されておらず、イエスを死刑にするためにはローマ帝国の裁判に訴えなければならなかったのです。11 節「さて、イエスは総督の前に立たれた。総督はイエスに尋ねた。『あなたはユダヤ人の王なのか。』」イエスは言われた。『あなたがそう言っています。』」最高法院では、イエスを神への冒瀆罪で死刑に決めました。しかしローマの裁判では、ユダヤの宗教的理由で死刑にすることはありませんでした。そこで最高法院のメンバーは、イエスが自分はユダヤ人の王だと言って民を扇動する、ローマに対する政治犯だと訴えたのです。「あなたはユダヤ人の王なのか」と尋ねるピラトに対して、イエスは「あなたがそう言っています」と答えます。このイエスの答えは、肯定と否定の両面があります。イエスは確かにユダヤ人の王ですが、ピラトが考えるような地上の王ではなく、霊的な神の国の王であるということです。

12-14 節「しかし、祭司長たちや長老たちが訴えている間は、何もお答えにならなかった。その時、ピラトはイエスに言った。『あんなにも、あなたに不利な証言をしているのが聞こえないのか。』それでもイエスは、どのような訴えに対しても一言もお答えにならなかった。それには総督も非常に驚いた。」イエスは最高法院での裁判と同じように、自分に不利な証言に対しては沈黙を通しました。ピラトはこのイエスの態度に非常に驚きました。なぜなら、今までの裁判では被告人はみな自分を救うために、懸命に訴えたからです。ピラトはイエスの態度や祭司長たちの証言を通して、祭司長たちはねたみからイエスを引き渡したことを知りました。ヨハネの福音書を見ると、ピラトは「私はあの人に何の罪も認めない」と言っています。そして一つの提案をしたのです。それが、祭りのたびに行われる恩赦です。

15-19 節「ところで、総督は祭りのたびに、群衆のため彼らが望む囚人を一人釈放することになっていた。そのころ、バラバ・イエスという、名の知れた囚人が捕らえられていた。それで、人々が集まった時、ピラトは言った。『おまえたちはだれを釈放してほしいのか。バラバ・イエスか、それともキリストと呼ばれるイエスか。』」ピラトは、彼らがねたみからイエスを引き渡したのを知っていたのである。ピラトが裁判の席についている時に、彼の妻が彼のもとに人を遣わして言った。『あの正しい人と関わらないでください。あの人のことで、私は今日、夢で大変苦しい目にあいましたから。』ルカの福音書を見ると、バラバ・イエスは暴動と人殺しで捕らえられた囚人です。バラバとは父の息子と言う意味で、イエスは当時珍しくない名前でした。ピラトは、群衆はバラバよりもキリスト・イエスを慕っていると思いました。そこで恩赦によって、イエスを釈放しようと思ったのです。さらに、妻からの伝言もあり、何とかしてイエスを釈放しようとはしました。しかし状況は全く違った方向に向かいました。

20-23 節「しかし祭司長たちと長老たちは、バラバの釈放を要求してイエスは殺すよう、群衆を説得した。総督は彼らに言った。『おまえたちは二人のうちどちらを釈放してほしいのか。』」彼らは言った。『バラバだ。』

ピラトは彼らに言った。『では、キリストと呼ばれているイエスを私はどのようにしようか。』彼らはみな言った。『十字架に付けろ。』ピラトは言った。『あの人がどんな悪いことをしたのか。』しかし、彼らはますます激しく叫び続けた。『十字架に付けろ。』群衆は祭司長たちの説得により、バラバを釈放し、イエスを十字架に付けろと要求しました。そして、「イエスを十字架に付けろ」と激しく叫び続けたのです。ピラトはこのままでは暴動になると思い、ついに判決を下しました。

24-26 節「ピラトは、語ることが何の役にも立たず、かえって暴動になりそうなのを見て、水を取り、群衆の目の前で手を洗って言った。『この人の血について私に責任がない。おまえたちで始末するがよい。』すると、民はみな答えた。『その人の血は私たちや私たちの子供らの上に。』そこでピラトは彼らのためにバラバを釈放し、イエスはむちで打ってから、十字架に付けるために引き渡した。」もし、ユダヤで暴動が起これば、ピラトはローマから責任を問われ、自分の首が危なくなります。そこで彼は自己保身に動き、妥協して群衆の望みを聞きました。そしてバラバを釈放し、イエスを十字架に付ける決定を下したのです。ピラトは水で手を洗い、この判決は自分には責任がないことを示しました。すると民は「その人の血は私たちや私たちの子供らの上に」と言って、自分たちと自分たちの子どもがその責任を負うと答えたのです。イエスはその後むち打たれ、十字架に付けられるため引き渡されました。

2. 人間の罪 第2の点では人間の罪について見ていきましょう。今日の箇所では、イエスを十字架に付けるために3つのグループの人たちがいたことが分かります。まずは最高法院のメンバーである祭司長や長老たちです。彼らはイエスへのねたみからイエスを殺そうとし、ピラトに訴えました。彼らは人々がイエスについて行くことをねたみ、このままでは自分たちの宗教指導者としての立場が危ないと考えました。そこで自分たちの立場を守るために、イエスを殺そうとしたのです。二つ目のグループは群衆です。群衆の中には、その週の日曜日にイエスがエルサレムに入城される際に、ダビデの子にホサナと言ってイエスを歓迎した人もいたことでしょう。しかし祭司長たちの説得により、十字架に付けろと叫び続け、その声が通ってイエスは十字架に付けられたのです。彼らはピラトの願いと祭司長たちの願いを天秤にかけました。そして、自分たちを支配するローマ総督の願いをかなえるよりも、自分たちの宗教指導者である祭司長たちに従う方が得だと考えたのです。また群衆は、みんなと一緒に同じ行動をとることに安心感を覚え、無責任な行動をしたのです。

そして三つ目の人は総督ピラトです。ピラトはイエスの裁判の裁判官であり、どんなに水で手を洗って自分には責任がないと言っても、それで責任がなくなるわけではありません。使徒信条ができて以来、約1800年に渡って世界中の教会が「ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受け」と告白することからも、彼がイエスの裁判の責任者であることが分かります。ピラトはイエスが無罪であることを知りました。そしてイエスを釈放しようとした。しかし彼は正義の判決を下すことをせず、ユダヤ人と対立することを恐れ、自己保身に走ってイエスを十字架に付ける判決を下したのです。

私たちは今日の箇所を読んで、これらの人たちは何と悪い人たちかと思うかもしれません。確かに悪い人たちです。しかし、それで終わってはいけません。聖書は、イエスを十字架に付けた人たちの罪をすべての人が持っていると教えているのです。もし、私たちが彼らの立場にいたらどうしたでしょうか。私たちは祭司長たちのように人をねたむことがないでしょうか。人に対して悪意を持ったり、怒ったりすることはないでしょうか。また群衆のように、みんなと同じであることに安心感を覚え、間違ったことをすることはないでしょうか。またピラトのように、正しいことを最後まで貫くことをせず、妥協して、自己保身に走ることはないでしょうか。もし、私たちが彼らの立場にいたなら、私たちも同じような行動をとっていたかもしれないのです。彼らの罪を見ることによって、私たちは自分の罪を知ることができるのです。ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受けられたイエスは、実は私たちすべての人の罪のために苦しみを受けてくださったのです。イエスの十字架は、神に敵対する人間の罪がどれほど大きいかを私たちに示しています。そして、私たち自身では決して償うことのできない大きな罪を贖うために、イエスは十字架で死んでくださったのです。私たちは今日の箇所を通して、自分の罪を覚え、その罪を赦すために、裁判にかけられ、十字架に向かってくださったイエスのことを覚えましょう。そして自分の罪を悔い改めて、救い主イエスを信じましょう。

3. キリストの救い 今日の箇所では、全く予期せぬ釈放を得たのが、バラバ・イエスでした。ある注解者は、この日、三本の十字架の真ん中に付けられる囚人がバラバだったのではないかと述べています。ところがその日の朝、イエスの裁判が入り、自分は釈放され、罪のないイエスが十字架に付けられたのです。バラバはこの出来事にどう思ったのでしょうか。バラバがその後どうなったかはわかりません。しかし、彼はただラッキーと思って、その後何も思わずに生活したのではないと思います。彼は、自分はなぜ釈放され、代わりにイエスが十字架に付けられたのか、イエスとはいったい誰なのか、その後のイエスの弟子たちの伝道を通して、イエスの死と復活の意味を聞いたのではないかと思います。

このバラバの釈放は、キリストの救いを象徴する出来事です。バラバ・イエスが釈放されるために、キリスト・イエスが十字架に付けられました。罪のない者が罪ある者となってさばかれ、罪ある者が罪なしとされて赦されたのです。これがキリストの救いです。イエスは私たちのすべての罪を負い、私たちの身代わりに神のさばきを受けて、十字架で死んでくださいました。その結果、イエスを救い主と信じる者の罪が赦されて、救われるのです。バラバがその後、イエスの十字架の死をどのように受け止めたかは、私たちにはわかりません。しかし、私たちは自分がイエスの十字架をどのように受け止めるのかについては、自分のこととして知ることができます。

私たちもイエスを十字架に付けた人たちと同じ罪を持っています。そのことが分ると、イエスを十字架に付けた3つのグループの人たちの中に、私自身の姿を見ることができます。彼らは私と何の関係もない悪い人ではなく、私の姿そのものなのです。そのことが分かる時に、私がイエスを十字架に付けた張本人であり、イエスはその私の罪のために死んでくださったと知ることができるのです。そして、自分の罪を悔い改めて、イエスを私の救い主だと信じ、罪と滅びの中から救われることができるのです。罪のないイエスが罪ある者とされて神にさばかれた結果、罪人の私がイエスを信じる信仰によって救われる、これが十字架の救いです。イエスの身代わりの死によって、私たちは救われるのです。そして、この救いはイエスを信じる信仰によってのみ、いただくことができるのです。聖歌 424 の「ただ信ぜよ」ではこう歌われます。「十字架にかかりたる 救い主を見よや こはなが犯したる罪のため ただ信ぜよ ただ信ぜよ 信ずる者はたれも みな救われん」私たちが犯した罪のために、十字架にかかってくださった救い主イエスを見て、ただ信じるだけで、だれもが救われます。この主イエスの救いを、イエスを信じていただきましょう。そして、すでにイエスを信じて救われた者は、このすばらしい救いを日々感謝し、「十字架にかかりたる救い主を見よや」とイエスをほめたたえ、イエスに救われた喜びを証しする生涯を送りましょう。

マタイ 27 章 27 節～38 節 「イエスの十字架」

1. イエスへのからかい 27-31 イエスは総督ピラトによって、十字架刑の判決を受けました。そしてイエスはむち打たれてから、十字架に付けられるためにローマ兵に引き渡されました。今日はその後イエスが十字架に付けられるまでの箇所を見ていきます。27 節「それから、総督の兵士たちはイエスを総督官邸の中に連れて行き、イエスの周りに全部隊を集めた。」兵士たちはイエスを総督官邸に連れて行きました。イエスの周りに集まった全部隊には 200 名の兵士がいました。そして、兵士たちはイエスをそこでからかいました。28-31 節「そしてイエスが着ていた物を脱がせて、緋色のマントを着せた。それから彼らは茨で冠を編んでイエスの頭に置き、右手に葦の棒を持たせた。そしてイエスの前にひざまずき、『ユダヤ人の王様、万歳』と言って、からかった。またイエスに唾をかけ、葦の棒を取り上げて頭をたたいた。こうしてイエスをからかってから、マントを脱がせて元の衣を着せ、十字架に付けるために連れ出した。」兵士たちは、イエスをユダヤ人の王としてからかいました。まず服を脱がせ、王が着るマントに似せて、兵士たちが着る緋色のマントを着せました。次に茨で冠を編み、王冠に似せてかぶせました。イスラエルの茨は大変鋭いとげがあり、イエスの頭からは血が流れました。さらに王の笏に似せて右手に葦の棒を持たせました。そして、イエスの前にひざまずき、「ユダヤ人の王様、万歳」と言って、からかったのです。さらにイエスに唾をかけ、葦の棒を取り上げて頭をたたきました。兵士たちはイエスを十分からかった後、マントを脱がせ元の衣を着せて、ゴルゴタの丘に向けてイエスを連れ出しました。

兵士たちにかからわれた間、イエスは何も言わず、じっと耐えておられました。先ほど 126 番を賛美しました。1 番の歌詞はこうです。「血潮したたる主のみかしら、とげに刺されし主のみかしら。悩みと恥にやつれし主の 痛ましきさま だれのためぞ。」なぜイエスはこのような十字架の苦しみを受けなければならなかったのでしょうか。誰のためにこの苦しみを受けられたのでしょうか。2 番はこう歌います。「主の苦しみはわがためなり。われこそ罪に死すべきなり。かかるわが身に代わりまし主のあわれみはいととうとし。」イエスの苦しみは私のためでした。私の代わりにイエスが十字架で死んでくださったのです。そのことが分かり、そのことを信じる時、主のあわれみ、主の愛がどんなに尊いものかを知ることができます。今日も「主の苦しみはわがためなり」と賛美して、主のあわれみの尊さに心からの感謝をささげましょう。

2. 背負わされた十字架 32

32 節「兵士たちが出て行くと、シモンという名のクレネ人に出会った。彼らはこの人にイエスの十字架を無理やり背負わせた。」現在、イエスが歩いたとされる当時の総督官邸の場所からゴルゴタの場所に建つ聖墳墓

教会までの約1キロがドロローサ、悲しみの道となっています。エルサレムを訪れる人たちは今もその道を歩いてイエスの十字架を覚えます。イエスは十字架を背負い、ゴルゴタに向かって歩き始めました。けれども、イエスは前日の真夜中から裁判のためにあちこち連れ回され、むちを打たれて弱り果てていたため、途中で倒れて起き上がれなくなってしまいました。すると、兵士たちは道ばたで見学していたシモンという名のクレネ人を見つけ、彼にイエスの十字架を無理やり背負わせたのです。クレネは現在の北アフリカ、リビアにある町でした。彼は過越の祭のために、はるばるエルサレムにやって来たのです。シモンは、たまたまイエスのゴルゴタへの行進に出くわしたのではないのでしょうか。そして、自分の目の前でイエスが倒れてしまったのです。

ローマ兵の命令は、当時は絶対でした。そこで彼は無理やりイエスの十字架を代わりに背負わされ、ゴルゴタまで一緒に歩くことになりました。シモンはどんな気持ちで十字架を背負って歩いたのでしょうか。何で自分が死刑囚の重い十字架を背負わされ、恥ずかしい思いをして、ゴルゴタまで行かなければならないのか。もう少し後ろで見ていたらこんなことにならなかったのに。運が悪かったのだ。それにしてもイエスとはいったいどんな悪いことをしたのか。そんなことを考えながら、イエスの様子をうかがいながら、イエスとともに重い十字架を背負い歩いたことでしょう。そして、ついにゴルゴタの丘に着き、シモンは十字架をローマ兵に渡し、その十字架にイエスが付けられたのです。シモンはイエスの十字架刑を目の前で見ました。

その後、シモンはどうなったのでしょうか。聖書には詳しいことは何も書いていません。けれども、マルコ15:21にはクレネ人シモンは、アレクサンドロとルフォスの父であると記されています。そして、ルフォスについては、ローマ16:13で「主にあって選ばれた人ルフォスによろしく」とパウロが挨拶を送っています。ということは、イエスの十字架を背負ったクレネ人シモンの息子たちは初代教会でよく知られていた人物であることが分かります。シモンはイエスの十字架を無理やり背負わされました。その時は、何とついていないのかと、十字架を背負わされたことを恨みこそすれ、喜ぶことは決してなかったでしょう。

けれども、イエスの十字架に立ち会い、イエスの姿とことばを間近で聞き、その後、イエスの弟子たちによる福音を聞いた時、自分が代わりに背負った十字架に付けられたイエスが救い主だと信じたのではないのでしょうか。そして、そのことを家族に証しし、家族もイエスを信じ、二人の息子も初代教会で活躍したと考えることができるでしょう。シモンはイエスの十字架を代わりに背負いましたが、イエスはシモンの罪を代わりに背負って十字架に付けられたのです。シモンはそのことを知った時、あの時の苦しみが大きな喜びに代わり、あの時の恥が大きな栄誉ある出来事に代わったことでしょう。彼は、自分はイエスの十字架を背負う栄光にあずかることができたことを証ししたのではないのでしょうか。

このシモンの出来事から、私たちは自分の十字架を背負うことの意味を教えられます。イエスはマタイ16:24で言われました。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負ってわたしに従ってきなさい。」自分の十字架とはイエスのために受ける苦しみのことと言います。それは信仰のゆえの苦しみです。さらに私たちの人生のすべてが神の栄光のためであることを考えると、神の栄光を現すための人生の中で経験するすべての苦しみも広い意味での自分の十字架ではないのでしょうか。イエスを信じて歩む人生の中には、試練もあり、病もあり、様々な患難があります。そして多くの場合、それらは自分から望んで受けるのではなく、シモンのように無理やり神から背負わされるようなものです。しかし、その時イエスは「自分を捨て、自分の十字架を負ってわたしに従ってきなさい」と言われるのです。そして私たちが自分の十字架を負ってイエスに従っていくなら、その経験を通してでなければ知ることができない神の恵みの祝福を受けるのです。シモンはそうでした。そして、神は私たちにも同じようにしてくださいます。ですから、神から自分の十字架をいただく時には、その十字架を負ってイエスに従い、イエスから離れることなく、どこまでもイエスについて行きましょう。

3. 十字架のイエス 33-38

33-35節「ゴルゴタと呼ばれている場所、すなわち『どくろの場所』に来ると、彼らはイエスに、苦みを混ぜたぶどう酒を飲ませようとした。イエスはそれをなめただけで飲もうとはされなかった。彼らはイエスを十字架につけてから、くじを引いてその衣を分けた。」私たちはカルバリの十字架と賛美しますが、カルバリはゴルゴタのラテン語で意味はともに「どくろ」です。それは死刑場に付けられた名前です。兵士たちはイエスを十字架に釘づける前に、痛みを和らげる没薬を混ぜたぶどう酒を飲ませようとしていました。しかしイエスはすべての苦しみを受けたために、なめただけで飲もうとはされませんでした。兵士たちはイエスを十字架に付け、イエスが着ていた衣をくじ引きで分けました。そのことによって詩篇22:18の「彼らは私の衣服を分け合い、私の衣をくじ引きにします」の救い主の預言が成就しました。

36-38節「それから腰を下ろし、そこでイエスを見張っていた。彼らは、『これはユダヤ人の王イエスである』と書かれた罪状書きをイエスの頭の上に掲げた。そのとき、イエスと一緒に二人の強盗が、一人は右に、

一人は左に、十字架に付けられていた。」十字架の上には罪状書きが付けられます。イエスの十字架には「これはユダヤ人の王イエスである」と書かれた罪状書きが掲げられました。三本の十字架の左右には二人の強盗が付けられ、真ん中にはイエスが付けられました。イエスが真ん中に付けられたのは、一番重い罪を犯した人とされたからです。イエスは罪人として十字架に付けられました。こうしてイザヤ 53:12 の「彼が自分のいのちを死に明け渡し、背いた者たちとともに数えられたからである」のみことばが成就しました。

ヨハネの福音書を見るとイエスの罪状書きはヘブル語、ラテン語、ギリシャ語で書かれたとあります。当時はヘブル語はユダヤ人のことば、ラテン語はローマ人の言葉、ギリシャ語はローマ帝国の共通語でした。すなわち、道を通るすべての人がイエスの罪状書きを読むことができたのです。またヨハネの福音書では、祭司長たちが「ユダヤ人の王と書かないで、この者はユダヤ人の王と自称したと書いてください」と言いました。しかし、ピラトはその申し出を拒み、「私が書いたものは、書いたままにしておけ」と言いました。今日、ユダヤ人の中にはイエスを救い主と信じるメシアニック・ジューと呼ばれる人たちが増えて来ています。けれどもなおほとんどのユダヤ人はイエスを救い主とは認めません。イエスをユダヤ人の王であり、全世界の王の王であることを信じるのが難しいのです。パウロは I コリント 1:23 で、十字架につけられたキリストはユダヤ人にとってはつまずきと言っています。そのことは今日も代わりません。

では異邦人にとってはどうでしょうか。パウロは十字架に付けられたキリストは、異邦人にとっては愚かなことだと言っています。そして、この異邦人の態度も今日も変わらないのではないのでしょうか。十字架のペンダントは、単なるアクセサリーであり、そこには私たちの罪のために身代わりに死んでくださったイエスの救いが抜けています。しかし、いばらの冠をかぶり、十字架に磔にされたイエスこそ、ユダヤ人にとっても異邦人にとっても王の王、主の主である救い主なのです。イエスはこの十字架の上で私達の罪を贖い、救いを成し遂げてくださいました。ですから、パウロは言います。「しかし、私たちは十字架に付けられたキリストを宣べ伝えます。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かなことですが、ユダヤ人であってもギリシア人であっても、召された者たちにとっては、神の力、神の知恵であるキリストです。」ですから、私たちも十字架のキリストを信じて救われた喜びをもって、十字架のキリストを宣べ伝えましょう。そして、一人でも多くの人々が十字架の福音によって救われ、神の栄光を現す人生へと導かれることを祈りましょう。

マタイ 27 章 39 節～50 節 「イエスの死」

1. ののしりと嘲り 39-44 今日箇所は、イエスが十字架に付けられた午前 9 時から、イエスが死なれた午後 3 時までの間に起こった出来事が記されています。まず、十字架に付けられたイエスに対して人々がののしり、あざけりました。ののしりとあざけりは 3 つのグループの人々が行いました。まず通りすがりの人々によるののしりです。39-40 節「通りすがりの人たちは、頭を振りながらイエスをののしった。『神殿を壊して 3 日で建てる人よ、もしお前が神の子なら自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。』」この日は過越の祭りの日なので、多くの人々がエルサレムに集まっていました。そこでゴルゴタの丘に近い道を歩く多くの人が足を止め、頭を振ってイエスを馬鹿にし、イエスをののしったのです。その中には、朝方ピラトの裁判で「十字架に付けろ」と叫び続けた群衆もいたでしょう。「神殿を壊して 3 日で建てる人よ」とは裁判の中での偽証の言葉でした。彼らは、「神殿を壊して 3 日で建てる人よ、もしお前が神の子なら自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。」と言ってイエスをののしりました。

次のグループは、イエスを十字架に付けた張本人である最高法院のメンバーです。41-43 節「同じように祭司長たちも、律法学者たち、長老たちと一緒にイエスをあざけって言った。『彼は他人を救ったが、自分は救えない。彼はイスラエルの王だ。今、十字架から降りてもらおう。そうすれば信じよう。彼は神に頼り頼んでい。神のお気に入りなら、今、救い出してもらえ。〈わたしは神の子だ〉と言っているのだから。』」彼らは、自分たちはイエスに勝ったという勝利の雄たけびのように、イエスを馬鹿にしてあざけりました。そして 3 つ目のグループと一緒に十字架に付けられた 2 人の強盗です。44 節「イエスと一緒に十字架に着けられた強盗たちも、同じようにイエスをののしった。」ルカの福音書を見ると、強盗のうちの一人はこの後十字架上のイエスを隣で見て、最後にイエスを信じてパラダイス、天国に行きました。

これらの人々のあざけりによって、詩篇 22:6-8 のみことばが成就しました。そこにはこうあります。「しかし、私は虫けらです。人間ではありません。人のそしりの的、民のさげすみの的。わたしを見る者は皆、私をあざけります。口をとがらせ、頭を振ります。『主に身をまかせよ。助け出してもらえばよい。主に救い出してもらえ。彼のお気に入りなのだから。』」

イエスをののしりあざける人々の言葉の中心は、「十字架から降りて来い」です。「十字架から降りて、自分を救えば信じよう。」とののしったのです。もちろんイエスは、神の子としての全能の力によって、十字架から降りることもできたでしょう。しかし、もしイエスが十字架から降りてきたら、人類の救いは成し遂げられないのです。そこでイエスは、人々のあざけりの的となり続けて、十字架の苦しみを耐えられたのです。それは、私たちの救いのためでした。先ほど賛美した 123 番はこう歌われます。「十字架の上の神の子羊、あざけりの声ひたすら忍び、わが罪のために命も捨てて、おお、わが主あわれみたまえ」私の罪のために命を捨てるため、十字架から降りず、あざけりの声をひたすら耐え忍んでくださったイエスこそ、私たちの救い主であることを覚え、イエスに心からの感謝をささげましょう。

2. イエスの苦しみ 45-49 イエスの十字架上での苦しみは朝 9 時から午後 3 時までの 6 時間続きます。そして後半の 3 時間は暗闇がエルサレムをおおったのです。45 節「さて、12 時から午後 3 時まで闇が全地をおおった。」このことによって、アモス 8:9 のみことばが成就します。「その日には、一神である主のことは一わたしは真昼に太陽を沈ませ、白昼に地を暗くする。」この暗闇は一つには神のさばきを表します。昔、神がエジプトをさばかれた時、エジプト全土が暗闇となりました。同じように、イエスが十字架に付けられることによって、人類の霊的暗闇である罪に対する神のさばきが行われたのです。もう一つは父なる神の悲しみを表しています。アモス 8:10 には続けてこうあります。「あなたがたの祭りを喪に変え、あなたがたの歌をすべて哀歌に変える。すべての腰にあら布をまとわせ、頭を剃らせる。その時をひとり子を失ったときの喪のように、その終わりを苦渋の日のようにする。」父なる神にとって、愛する子なる神イエスを十字架に付けてさばくことは、耐えがたい苦しみであり悲しみでした。「その時を、ひとり子を失ったときの喪のように、その終わりを苦渋の日のようにする。」それは父なる神ご自身が経験してくださったことでした。

ペンテコステの日に聖霊が下り、ペテロがエルサレムで人々に「神が今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架に付けたのです。」と語りました。すると人々はこれを聞いて心を刺され、「兄弟たち私たちはどうしたらよいのでしょうか」と言いました。彼らは神の御子イエスを十字架に付けた自分たちの犯した罪に気づき、悲しみ悔いたのです。彼らにとってもペンテコステの祭りは、ペテロの説教で喪の日に代わりしました。しかしペテロの勧めに従って、罪を悔い改め、イエスを救い主と信じてバプテスマを受けた時、罪が赦された喜びに満たされ、喪の日は再び喜びの日となったのです。

さて暗闇が続く 3 時ごろ、イエスが大声で叫ばれました。46 節「3 時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』これは『わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか』という意味である。」エリ、エリ、レマ、サバクタニはヘブル語で「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味です。それを聞いた人たちが、エリをエリヤと聞き間違えました。47-49 節「そこに立っていた人たちの何人かが、これを聞いて言った。『この人はエリヤを呼んでいる。』そのうちの一人がすぐに駆け寄り、海綿を取ってそれに酸いぶどう酒を含ませ、葦の棒に付けてイエスに飲ませようとした。ほかの者たちは『待て。エリヤが救いに来るか見てみよう』と言った。」イエスに酸いぶどう酒を飲ませようとしたことで、詩篇 69:21「私が渴いた時には酢を飲ませました」のみことばが成就しました。そして、イエスが「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれたことによって、詩篇 22:1 の救い主の苦しみの叫びの預言が成就したのです。このみことばを読む人の中には、イエスは十字架の苦しみをあらかじめ知っておられたのに、なぜ最後に弱音を吐いたのだらうかと思うかもしれません。確かにイエスは十字架の苦しみを知り、ゲッセマネの園で「わが父よ、できることならこの杯をわたしから過ぎ去らせてください」と祈られました。しかし最後には、「あなたのみこころがなりますように」と祈って、霊的勝利を得て十字架に向かっていかれたのです。けれどもイエスにとって十字架の苦しみは本当につらいものでした。そして最大の苦しみは、神のさばきを受けて、父なる神から完全に見捨てられ、父と子の永遠の交わりが断絶してしまったことなのです。イエスはそれまで父なる神のことを「わが父」と呼んでおられました。しかし、ここでは父とは呼ばず神と呼んで、さばき主なる神に対して自分はさばかれる罪人であることを語っておられるのです。それでも「わが神」と言って神への信頼を叫ばれました。

ガラテヤ 3:13 にはこうあります。「キリストは、ご自分が私たちのためにのろわれた者となることで、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。『木にかけられた者はみな、のろわれている』と書いてあるからです。」イエスは私たちのために神ののろいを受け、さばきの中で苦しみ叫ばれました。それは私たちを律法ののろいである罪と滅びの中から救うためでした。このイエスの叫びを通して、私たちはイエスが確かに十字架上で私たちの罪の贖いを成し遂げてくださったことを知ることができます。私の罪を、あなたの罪を赦すために、イエスは十字架で苦しまれたことを覚えましょう。

3. イエスの死 50

50 節「しかし、イエスは再び大声で叫んで霊を渡された。」イエスは息を引き取る前に大声で叫ばれました。4 福音書を見るとイエスは十字架上で 7 つの言葉を語られました。そして、息を引き取る前に語られた言葉が 2 つあります。1 つはヨハネ 19:30 です。「イエスは酸いぶどう酒を受けると、『完了した』と言われた。そして、頭を垂れて霊をお渡しになった。」「完了した」とは、イエスは十字架ですべての人のための罪の贖いを成し遂げてくださったということです。十字架で私たちの身代わりに神のさばきを受けてくださったので、私たちの罪の贖いが完成したのです。その結果、私たちは自分の罪を悔い改め、イエスを救い主と信じるだけで、私たちの罪は完全に贖われ、すべての罪が赦されるのです。Ⅱコリント 5:21 にはこうあります。「神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方において神の義となるためです。」神は、罪を知らないイエスを私たちのために罪とされ、私たちの代わりにイエスをさばかれました。その結果、私たちがイエスを信じる時に、神の前に義と認められて救われるのです。

イエスが息を引き取る前に語られたもう一つの言葉がルカ 23:46 です。「イエスは大声で叫ばれた。『父よ、わたしの霊をあなたの御手にゆだねます。』」こう言って息を引き取られた。」イエスが救いの完成というご自分の使命をすべて果たされた時、再び「父よ」と大声で叫ばれました。そして続けて「わたしの霊をあなたの御手にゆだねます」と叫んで息を引き取られたのです。イエスは地上での生涯、いつも父なる神に信頼し父なる神にすべてをゆだねて歩んでこられました。そして、最後にご自身の霊をゆだねて、地上での生涯を終えられたのです。父なる神は、イエスの霊を受け入れ、三日目に死人の中からよみがえらせてくださったのです。

イエスの十字架の救いをいただく時に、私たちもイエスと同じようにすることができます。イエスに救われると、私たちは神の子どもとされて、神にいつも信頼して生きることができます。そして、私たちに与えられている能力や賜物を用い、私たちが行うすべてのことを神にゆだねて、神の栄光のために生きていきます。そして、人生の最後に自分では何もできなくなった時にも、私たちの霊を受け入れ、天国に入れてくださり、やがて肉体も復活させてくださる神に自分の霊をゆだね、神に自分の霊を渡すことができるのです。私たちは今日、十字架で「完了した」と言われたイエスのことばの確かさを覚えて、神の救いに心から感謝しましょう。そして、自分の霊を神にお渡しするその時まで、主を賛美し、日々主にゆだねながら、主の栄光のために励みましょう。

マタイ 27 章 51 節～56 節 「新しい生ける道」

1. 新しい生ける道 51a 今日箇所はイエスが十字架で息を引き取られた時に起こった出来事が 4 つ記されています。それらの 4 つの出来事を順番に見ていきましょう。51a 節「すると見よ、神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。」神殿の幕とは、エルサレム神殿の中の聖所と至聖所を隔てる幕のことです。至聖所は神が臨在される場所で、そこには十戒が記された板が入っている契約の箱が置かれていました。契約の箱にかぶせる蓋は宥めの蓋と呼ばれます。大祭司は年に 1 回だけ至聖所に入ることが許されました。大祭司が至聖所に入る時には、まず自分の罪を贖うために犠牲のいけにえをささげなければなりません。その後、動物の血を携えて至聖所に入り、宥めの蓋の上と前に血を注いで、民の罪の贖いをするのです。このように旧約時代は、聖なる神と罪人の人間の間には両者を隔てる幕があり、大祭司であっても年に 1 回だけ、罪の贖いをするために入ることが許されていました。

しかし、イエスが十字架でご自分の尊い血によって、完全な罪の贖いを成し遂げてくださった時、神殿の幕が裂けました。しかも上から下まで真っ二つに裂けたとあります。すなわち、幕が裂けたのは、下から上へという人間のわざではなく、上から下という神ご自身のわざであり、しかも真っ二つに裂けたことによって、聖所と至聖所を隔てる物がなくなったということです。このことは、イエスの十字架の贖いによって、神と人とを隔てていた幕が永遠に取り去られたことを現わしています。

ヘブル 10:19-20 にはこの出来事の意味を次のように教えています。「こういうわけで、兄弟たち。私たちはイエスの血によって大胆に聖所に入ることができます。イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのために、この新しい生ける道を開いてくださいました。」イエスは神と人との仲介者として、ご自分の肉体という垂れ幕を十字架でささげ、聖なる神の前でご自身の尊い血を流して、完全な罪の贖いを成し遂げてくださいました。そして今までなかった神への新しい生ける道を開いてくださったのです。イエスは 3 日目によみがえり、イエスご自身が新しい生ける道となってくださいました。その結果、私たちはイエスを通して大胆にまことの聖所である神のみ前に行き、神との親しい交わりの中に生きることが許されるのです。

イエスの十字架の贖いによって、もはや動物のいけにえをささげる必要も人間の大祭司による罪の贖いの儀式も聖所と至聖所を隔てる幕も必要なくなりました。イエスの死によって旧約の儀式は必要なくなり、イエスを信じる者が救われるという新約の恵みの時代が始まったのです。私たちもイエスの死によって開かれた新しい生ける道であるイエスを信じて大胆に神のもとに帰り神との親しい交わりの中に生きる者となりましょう。

2. 死に対する勝利 5 1b-5 3

51b-53 節「地が揺れ動き、岩が裂け、墓が開いて、眠りにについていた多くの聖なる人々のからだが生き返った。彼らはイエスの復活の後で、墓から出て来て聖なる都に入り、多くの人に現れた。」イエスが十字架で死なれた時、神はエルサレムに大きな地震を起こし、町の下の方の岩盤がいたる所で裂けました。さらに、墓が開いて、眠りにについていた多くの聖徒たちのからだが生き返りました。そして彼らは、イエスの復活の後で、墓から出て来てエルサレムの町に入り、多くの人に現れました。イエスは、死んで4日になるラザロを墓の中からよみがえらせましたが、イエスの死後、さらに多くの聖徒たちが墓の中からよみがえったのです。

この出来事は、イエスが十字架の死によって、人間の罪と死に対して勝利されたことを現わしています。ローマ 6:23 には「罪の報酬は死です。しかし神の賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです」とあります。最初の人アダムが罪を犯して以来、人間は罪の報酬として死ぬべき者となりました。しかし、イエスが十字架で罪の贖いを完全に成し遂げてくださったので、死に対しても勝利して下さったのです。イエスを信じる時、私たちは永遠のいのちをいただき、私たちのたましいは、肉体が死んだ後も、神との永遠の交わりに生きることができます。さらに私達の朽ちたからだもイエスの再臨の時に、栄光のからだによみがえり、死に対する完全な勝利を得ることができます。イエスの死によって墓が開き、イエスの復活後、生き返った聖徒たちが墓から出て来て人々と会ったことは、死の勝利と復活の希望が確かであることを私たちに教えるための神のみわざでした。I コリント 15:20 には「しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました」とあります。これらの聖徒たちは初穂としてよみがえられたイエスに従って、十字架と復活によって成し遂げられた救いのみわざを証したのです。私たちもイエスにあって、やがて墓の中からよみがえる時が来ることを覚え、死に対する勝利が与えられていることを確信して、感謝をもって日々歩んでいきましょう。

3. 神の子イエス 5 4 イエスが十字架で死なれた時の三つ目の出来事が54 節です。「百人隊長と一緒にイエスを見張っていた者たちは、地震やいろいろな出来事を見て、非常に恐れて言った。『この方は本当に神の子であった。』」百人隊長は、イエスの十字架刑の責任者でした。またイエスを見張っていた者たちとは、イエスを十字架に付け、イエスの衣をくじ引きで分けた後、イエスを見張っていたローマ兵です。彼らはイエスが死ぬまでの6 時間、ゴルゴタにいてイエスを見、イエスが十字架で語られたことばを聞いていました。また12 時から3 時まで闇が全地をおおい、イエスが息を引き取ると地震が起き、墓が開くなどの出来事を見て、非常に恐れました。それは今までに経験したことのない十字架刑だったのです。そして、「この方は本当に神の子であった」と告白したのでした。この告白はマルコとルカの福音書を見ると百人隊長によるものであることが分かります。

百人隊長は今までも多くの十字架刑に立ち会いました。そして、囚人たちの死に行く姿を見てきました。しかし、イエスの十字架は今までは全く違っていました。ののしられてもののしり返さず、自分を十字架に付ける者のために神に祈り、囚人の一人はイエスを信じて、パラダイスに入る約束を得ました。そして最後に大声で神に叫び、「完了した」「父よ。わたしの霊をあなたの御手にゆだねます」と言って息を引き取られました。百人隊長は異邦人であり、聖書の知識もなく、イエスの話を聞いたこともなかったでしょう。しかし、イエスの十字架の姿と様々な出来事を見て、恐れを抱くとともに、イエスが神の子であるという思いを抱き、「この方は本当に神の子であった」と告白したのでした。

ユダヤ人はイエスをののしるために、イエスが神の子なら十字架から降りて来いと言いました。一方、百人隊長は十字架上のイエスの姿を見、様々な出来事を経験して、「この方は本当に神の子であった」と言いました。「本当に」と言って、百人隊長は限られた理解の中ではあっても、心から告白したことがわかります。そして、聖書は私たちに対しても、十字架のイエスを見て、あなたはイエスを誰だと言いますかと問いかけているのです。百人隊長はイエスが死んだので、「この方は本当に神の子であった」と過去形で告白しました。しかし、イエスは3 日目によみがえり、今も天で生きておられます。ですから、私たちはイエスを「この方は本当に神の子です」と十字架と復活を信仰の目で見、告白しましょう。この信仰告白によって、私たちは罪の赦しと永遠のいのちという確かな救いをいただくことができるのです。

4. 女の弟子たち 5 5-5 6

55-56 節「また、そこには大勢の女たちがいて、遠くから見ていた。ガリラヤからイエスについてきて仕えていた人たちである。その中にはマグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベダイの子たちの母がいた。」ヨハネの福音書を見ると、12 弟子のうちヨハネもいたことが分かりますが、それ以外の男の弟子たちは逃げてしまい、ゴルゴタにはいませんでした。しかし、イエスのガリラヤ伝道の時から、イエスに付き従っていた女の人たちがゴルゴタに来て、遠くからイエスが息を引き取るまで見ていたのです。ルカ 8:3 を見ると、これらの女たちは、自分の財産をもってイエスと 12 弟子たちに仕えていました。彼女たちはイエスを愛し、イエスを神の子キリストと信じて、イエスに従ってきました。そして、イエスと一緒にガリラヤからエルサレムに来て、イエスの十字架のもとにとどまり、最後までイエスとともにいたのです。

イエスの時代は、女性の地位が著しく低い男尊女卑の時代でした。けれども、イエスの弟子たちは女性も男性とともにイエスに仕えました。使徒 1:14 には「彼らはみな、女たちとイエスの母マリア、及びイエスの兄弟たちとともに、いつも心を一つにして祈っていた」とあり、イエスの昇天後も、女の弟子たちは男の弟子たちの一緒にいて祈り続けていました。そして、ペンテコステの日に聖霊が下り、教会が誕生すると、女性も男性とともに奉仕をします。

パウロはガラテヤ 3:28 でこう言っています。「ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。」このみことばは、当時の社会の中では考えられないことでした。しかし、教会の中では、人種や身分階級や男女の違いによる差別はなく、みな主にある兄弟姉妹であり、だれもが同じように主に仕えることができるのです。それは、神がすべての人を、男も女も同じように神のかたちとして創造されたからです。それゆえ、神の前ではすべての人は平等であり、いのちと人格の尊厳があるのです。イエスが来られたことによって、教会は神が造られた人間の原点に立ち返ることができたのです。確かに教会にも、それぞれの賜物や能力による役割の違いはありますが、みな同じように神に仕えることができるのです。

十字架のイエスのもとにとどまり続けた女たちは、ただイエスを愛し、イエスの十字架を悲しみ、最後までイエスとともに居たいと願って、ゴルゴタに居続けました。彼女たちが十字架のイエスとともに居続けることは、尊いイエスへの奉仕となりました。その彼女たちの信仰の姿が、男の弟子たちを励まし、やがてともに復活の証人となって、教会の働きを協力しながら進めていくのです。私たちはこれらの女性の姿に励まされ、私たちもイエスの十字架から離れることなく、十字架の救いの信仰にとどまり続けましょう。十字架の死によって、イエスは救いを成し遂げられました。十字架こそ私たちの救い、私たちのいのちです。そして、十字架の主は復活の主であり、私たちを神のもとに導く新しい生ける道です。そのことを覚え、十字架にしっかりとどまり続け、十字架の福音を宣べ伝えていきましょう。

マタイ 27 章 57 節～66 節 「イエスの葬り」

1. イエスの葬り 57-60 イエスは朝 9 時に十字架に付けられ、午後 3 時に死なれました。翌日は安息日なので、その日の日没までに遺体を葬らなければなりません。逾越の祭の頃の日没は 6 時過ぎですので、後 3 時間ほどしかありません。死刑囚の遺体の取り扱いには 2 つの方法がありました。一つは罪人の墓に入られます。そこは入口に石の蓋を置かないため、遺体が獣に食べられてしまうことがあったようです。もう一つはエルサレムのゴミ焼却場となっているヒノムの谷で焼かれてしまいます。ヒノムの谷はゲヘナと呼ばれ、絶えず燃えているため、ゲヘナは地獄を現わす言葉となりました。イエスの遺体も何もしなければこのように扱われてしまいます。

その時立ち上がったのがアリマタヤ出身のヨセフでした。57 節「夕方になり、アリマタヤ出身で金持ちのヨセフという名の人が来た。彼自身もイエスの弟子になっていた。」ヨセフは最高法院の議員でしたが、イエスを心の中で信じていました。ですからルカ 23:51 を見ると、「神の国を待ち望んでいた彼は、議員たちの計画や行動には同意していなかった」とあります。しかし、彼は今まで自分がイエスの弟子であることを公にしていなかったのです。ヨセフもイエスの十字架を見ていたのではないのでしょうか。そしてイエスが死んだことを知った時、イエスの遺体がひどい扱いを受けてはならないと思いました。しかし、イエスの弟子たちはその場にいませんし、女の弟子たちはどうすることもできません。ヨセフはその時、総督ピラトに許可を得てイエスの遺体を引き取り、丁寧に墓に葬ることができるのは自分しかないという心の迫りを受けたのです。イエスの遺体を葬ることは、自分がイエスの弟子であることを公にすることです。そうすれば、議員の資格も取り

上げられ、会堂からも追放され、村八分になるかもしれません。しかし、ヨセフはそれでもかまわないと考え、ピラトのもとに行きました。

58 節「この人がピラトのもとに行き、イエスのからだの下げ渡しを願い出た。そこでピラトは渡すように命じた。」マルコ 15:43 では「ヨセフは勇気を出してピラトのところに行き」とあります。エステル記に、モルデカイがエステルにユダヤ人を救うために王のところに行くようにと伝えた時、「あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、このような時のためかもしれない。」と言いました。エステルはそれに応じて王のところに行きました。アリマタヤのヨセフも同じような心の迫りを神から受けたのです。「今、イエスのからだの下げ渡しを願いにピラトのもとに行けるのは、議員である自分しかいない。今までイエスの弟子であることは隠していたが、私がイエスの弟子となったのは、もしかすると、このような時のためかもしれない。」ヨセフは、勇気を出してピラトのもとに行き、ピラトはイエスのからだの下げ渡しの許可を与えたのでした。当時、死刑囚の遺体を通常の墓に葬る許可を与えることは、死後に恩赦を与えるという意味がありました。ピラトは祭司長たちへの抵抗をこのような形で示したのでした。

59-60 節「ヨセフはからだを受け取ると、きれいな亜麻布に包み、岩を掘って造った自分の新しい墓に納めた。そして墓の入口に大きな石を転がしておいて、立ち去った。」ヨセフはエルサレムに自分のために造った新しい墓を持っていました。ヨセフは自分の墓にイエスの遺体を運び、きれいな亜麻布で包みました。ヨハネ 19 章を見ると、以前夜にイエスのもとに来たニコデモが没薬と香料を持ってやって来ました。ニコデモも議員であり、心の中ですでにイエスを信じていたのです。ニコデモにとってもイエスを葬ることによって、公にイエスの弟子であることを表しました。彼らは香料と一緒にイエスのからだを亜麻布に包み、ヨセフの墓に葬りました。こうしてイザヤ 53:9 の「彼の墓は悪者どもとともに、富む者とともに、その死の時に設けられた」というみことばが成就しました。そして、イエスは 3 日目の日曜日の朝、このヨセフの墓からよみがえられるのです。

ヨセフの行為を通して、私たちも自分はイエスのために何ができるだろうかと考えたいと思います。神はイエスの葬りのためにアリマタヤのヨセフを用いて、イエスの遺体は丁寧に墓に葬られました。そして、それがイエスの復活の準備となったのです。そしてヨセフは神からのチャレンジに答え、勇気を出してピラトのもとに行き、信仰を公に告白してイエスのからだを自分の墓に葬りました。時にはヨセフのように、私たちも特別な時に特別な方法でイエスに仕えることもあるでしょう。一方、普段はもっと普通のことでイエスに仕えることでしょう。しかし、いつでも主からのチャレンジを受ければ、勇気を出して喜んで主のために仕えましょう。そのために私たちも犠牲を払わなければならないかもしれません。しかし、イエスの犠牲を覚えれば、私たちの犠牲は些細なものです。イエスのために自分にできることを喜んで行う者となりましょう。

2. イエスの死と葬り 61 使徒信条では「死んで葬られ」と告白し、キリストの死と葬りがセットになって告白します。また I コリント 15:3、4 でパウロが最も大切なこととして伝えたことの中に、「キリストは、聖書に書いてあるとおり、私たちの罪のために死なれたこと、また葬られたこと」とあり、やはりキリストの死と葬りをセットとして伝えています。これは、葬りは死を証明するものだからです。イエスが墓に葬られたことによって、イエスが確かに死なれたことが証明されたのです。そして、イエスの葬りの証人となったのが、ガリラヤから来た二人の女の弟子でした。61 節「マグダラのマリアともう一人のマリアはそこにいて、墓の方を向いて座っていた。」二人は 56 節でイエスの十字架を見ていた女たちの中にいました。マグダラのマリアは、イエスから七つの悪霊を追い出していただいた女です。(ルカ 8:2) そしてもう一人のマリアは、ヤコブとヨセフの母マリアでした。彼女たちはヨセフとニコデモがイエスのからだを墓に葬った出来事を見ていたイエスの死と葬りの証人となったのです。そして、この二人の女性が日曜日の朝、イエスの墓に行き、最初のイエスの復活の証人となるのです。二人のマリアがイエスの死と葬りと復活の証人となったことは、霊的には、すべてのクリスチャンも経験します。

私たちは、聖書を通してイエスの死と葬りと復活を信じて、救われました。すると私たちはキリストとともに古い自分に死んで葬られ、キリストとともに新しい人によみがえらるという経験をします。その霊的出来事を、バプテスマ、洗礼を通して確認します。ローマ 6:4「私たちはキリストの死にあずかるバプテスマによってキリストとともに葬られたのです。それは、ちょうどキリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、新しいいのちに歩むためです。」私たちもイエスを信じて、キリストとともに古い自分に死んで葬られ、キリストとともに新しいいのちに歩み始めました。私たちもイエスの死と葬りと復活の証人として、イエスの救いを証ししていきましょう。

3. 封印された墓の番 62-66

62-66 節「明くる日、すなわち、備えの日の翌日、祭司長たちとパリサイ人たちはピラトのところに集まって、こう言った。『閣下。人を惑わすあの男がまだ生きていた時、〈わたしは3日後によみがえる〉』と言っていたのを、私たちは思い出しました。ですから、3日目まで墓の番をするように命じてください。そうでないと弟子たちが来て、彼を盗み出し、〈死人の中からよみがえった〉と民に言うかもしれません。そうすると、この惑わしの方が、前の惑わしよりもひどいものになります。』ピラトは彼らに言った。『番兵を出してやろう。行って、できるだけしっかりと番をするがよい。』そこで彼らは行って番兵たちとともに石に封印をし、墓の番をした。」 明くる日の備えの日の翌日とは、安息日のことです。祭司長たちは、イエスに安息日を破ったと非難しておきながら、自分たちが安息日を破ってピラトのもとに行きました。彼らはピラトに、イエスの弟子たちがイエスのからだを盗み出し、イエスがよみがえったと言いつらして人々を惑わしてはいけないので、墓に番兵を出してほしいと願いました。エルサレムの町に騒ぎが起こることを願わないピラトは、祭司長たちの願いを聞き、番兵を出しました。そして、番兵はイエスの墓を封印し、弟子たちがイエスのからだを盗まないように守ったのです。実際はイエスの弟子たちはイエスのからだを取りに来る勇氣はなかったので、番兵を出す必要もなかったのです。

しかし、番兵が厳重にイエスの墓の番をしたことは、イエスの弟子たちがイエスのからだを盗まなかったことを証明することになりました。さらに、それでもイエスのからだは墓からなくなったことによって、イエスが復活したことを証明することにもなったのです。封印も番兵もイエスを墓の中に閉じ込めることはできませんでした。神はイエスを墓の中からよみがえらされたのです。

さて、この出来事で興味深いのは、祭司長たちがイエスは3日後によみがえると言っていたことを思い出しているのに対して、イエスの弟子たちはイエスの復活の約束を全く思い出していないことです。実際、日曜日に女たちが、イエスがよみがえられたことを弟子たちに伝えたと、弟子たちは最初信じなかったのです。このことは、私たちがみことばとどのように向き合っているのかを考えさせられます。「論語読みの論語知らず」ということわざがありますが、クリスチャンは「聖書読みの聖書知らず」という落とし穴に陥る危険性があります。聖書のことばを知っていても、もし私たちがいろんな出来事に遭遇する時に、聖書のことばをすっかり忘れ、自分の考えで物事を進めていくのであれば、みことばに生きているわけではありません。みことばに生きるとは、みことばを知っているだけでなく、みことばに従って生きていくことです。聖書が教える原則に従い、神の栄光を現すこと、神のみこころが何かを具体的な状況の中で考えて、聖書の教えを実際生活の中に適用していくこと、イエスならどうされるだろうかとみことばを通して考え、ベストを尽くすことです。

そのようにするためにはどうしたらよいのでしょうか。それは「絶えず祈りなさい」と聖書にあるように、どんな時にも祈ることです。祈らずに事を行うと、私たちは途端にみことばから離れて、自分の考えを優先してしまいます。しかし祈る時、聖霊がみことばの真理を私たちの心に思い起こさせてくださり、神のみこころに沿った決断や行動をすることができるよう助けてくださいます。ヨハネ 14:26「しかし助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」イエスの弟子たちも聖霊が下られた時に、みことばを思い起こし、みことばに生きる人に変えられました。私たちも祈りを通して聖霊の助けをいただき、みことばに生きる者となりましょう。そしてイエスの死と葬りと復活の証人として、遣わされていきましょう。

マタイ 28 章 1 節～10 節 「イエスの復活」

1. 週の初めの日 1 いよいよマタイの福音書の最後の章の 28 章に入ります。マタイの福音書の講解説教は今日を含めてあと 3 回となります。先週はイエスの葬りを見ました。イエスが葬られた墓はイエスの死を証明する場所でした。けれども、今日の箇所では明らかになったことは、イエスの墓はイエスの復活を証明する場所ともなったということです。まず 1 節を見てみましょう。「さて、安息日が終わって週の初めの日の明け方、マグダラのマリアともう一人のマリアが墓を見に行った。」イエスは安息日の前日の金曜日に死んで墓に葬られました。そして、土曜日の安息日が過ぎ、週の初めの日の日曜日の早朝にマグダラのマリアともう一人のマリアが墓を見に行きました。この二人の女性はイエスの墓の近くに来て、イエスの葬りを見ていました。なぜ、日曜日の早朝に来たかということ、マルコの福音書を見るとイエスのからだに香油を塗るためでした。彼女たちはまだイエスの復活を知りません。ですから、彼女たちは死んだイエスと会いに来たのです。

今日も多くの人が、イエスが歴史上の人物だと知っていても、復活を知らずまた信じないので、2000 年前に死んだ人としてしか理解していません。以前も話しましたが、私が中学生の時、歴史の時間でキリスト教の誕生と

いう単位がありました。その時、社会の先生が、キリストの復活は本当にあったのではなく、イエスの弟子たちが心の中で信じただけだと言われたのに、妙に納得したことを覚えています。私もその時、死んだ人が生き返るはずはないと思ったのです。しかし、やがて教会に行き、聖書を直接読んでわかったことは、キリストの復活は本当にあった出来事だということです。イエスの弟子たちは、イエスが十字架に付けられた後、自分たちも捕まるのではないかと恐れて部屋に隠れていました。その弟子たちが、復活のイエスに会ったので彼らは変えられ、やがてイエスの復活の証人となって、命がけで福音を伝えることができたのです。

そして、週の初めの日の日曜日が、復活のイエスを礼拝する日となったのです。それまではユダヤ人にとっての礼拝の日は安息日の土曜日でした。しかし、イエスが日曜日に復活され、イエスの救いが完成したので、教会は日曜日を礼拝の日と定め、日曜日を主の日と呼んで、2000 年間礼拝を守ってきたのです。日曜日の主日礼拝は、ユダヤ人も異邦人もイエスを信じるすべての人が参加する礼拝となりました。教会の主日礼拝の原点を遡ると、今日のイエスの復活の出来事に戻るのです。私たちが日曜日に礼拝をささげることによって、全世界の人々に、十字架で救いを成し遂げたイエスはよみがえられたことを証しているのです。礼拝という視点から 1 節の「安息日が終わって週の初めの日の明け方」という言葉を見ると、そこには旧約から新約に移り変わる象徴的な意味があることを覚えます。すなわち、イエスの復活によって、旧約の安息日規定は終わり、安息日礼拝が終わったのです。そして新約の週の初めの日の礼拝が始まったのです。私たちは地上での生涯、日曜日に主を礼拝し、イエスの復活を証ししていきましょう。

2. 復活の知らせ 2-7 マルコの福音書を見ると、女たちは道々、だれが墓の入り口にある大きな石を転がしてくれるだろうかと話し合いながら、墓に向かいました。しかし、心配は無用でした。なぜなら御使いが石を転がしてくれたからです。2-4 節「すると見よ、大きな地震が起こった。主の使いが天から降りて来て石をわきに転がし、その上に座ったからである。その姿は稲妻のようで、衣は雪のように白かった。その恐ろしさに番兵たちは震え上がり、死人のようになった。」天から降りて来た御使いは、墓の入り口の大きな石を大きな地震によってわきに転がし、その上に座りました。それはあたかも、イエスの復活によって死は勝利に飲まれたことを現わすポーズのようです。御使いの姿は神の栄光と聖さを現わしていました。その御使いの姿を見て番兵たちは、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになりました。

一方、御使いはマリアたちに言いました。5-7 節「御使いは女たちに言った。『あなたがたは、恐れることはありません。十字架に付けられたイエスを探しているのは分かっています。ここにはおられません。前から言っておられたとおり、よみがえられたのです。さあ、納められていた場所を見なさい。そして、急いで行って弟子たちに伝えなさい。〈イエスは死人の中からよみがえられました。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれます。そこでお会いできます〉と。いいですか、私は確かにあなたがたに伝えました。』」御使いは女たちには、番兵のように恐れなくてもよいと伝えました。そして、「あなたがたは十字架に付けられ、死んで葬られたイエスを探しているのは分かっている。けれども、もはや墓の中にはおられません、なぜなら、前から言っておられたとおり、イエスはよみがえられたのです。」と言いました。イエスのご自分の死を予告された時には、必ずよみがえることも弟子たちに前もって伝えておられました。そのことは男の弟子だけでなく、マリアたちも聞いていたことでしょう。しかし、イエスが十字架で壮絶な最後を迎えて死なれた時、その悲しみのゆえに、だれもイエスの復活のことを思い出すことができませんでした。墓に来たマリアたちもそうでした。しかし、イエスは前から言っておられたとおり、よみがえられましたと御使いは告げました。さらに御使いは、「さあ、納められていた場所を見なさい」と言いました。彼女たちは実際に墓の中に入りイエスのからだがないことを知ったでしょう。イエスはすでによみがえり、墓の中にはイエスのからだを包んでいた亜麻布と頭を包んでいた布だけが置いてあったのです。イエスは御使いが石を取り除けた時に、墓の入り口から出て行ったわけではありません。イエスの復活のからだは、鍵をかけている部屋にも入ることができる物質の影響を受けないからだでした。ですから復活したイエスは、墓に閉じ込められることなく外に出て行かれたのです。

さらに御使いはイエスが死人の中からよみがえられたことを伝えるようにと女たちに言いました。ここで覚えてほしいことは、6 節後半と 7 節前半のことばです。「さあ、納められていた場所を見なさい。そして、急いで行って弟子たちに伝えなさい。」原語では「さあ」は「来て」という言葉です。ここでは、「来て見なさい」と「行って伝えなさい」がついになっています。それは私たちにも当てはまります。復活の証人になるためには、まず「来て見る」ことが必要です。もちろん、私たちはマリアたちのようにイエスの墓に来て見ることはできません。そうではなく、私たちは聖書によってイエスの復活のみことばを読み、イエスの復活を信じるのです。十字架で私たちの罪を贖ってくださったイエスは、よみがえられて今も生きておられる私の救い主だと信じるのです。そしてイエスの救いを心にいただく時、私たちはイエスの復活の証人として、マリアたちと同

じように「行って伝える」者となるのです。今日も聖書を通して、イエスが死人の中からよみがえられたことを「来て見て」、そしてイエスの復活の喜びを「行って伝える」者となりましょう。

3. イエスの復活 8-10 女たちは御使いから言われたとおり、行って伝える者となりました。そして、弟子たちのところに行く途中、よみがえられたイエスとお会いしたのです。8-9 節「彼女たちは恐ろしくはあったが大いに喜んで、急いで墓から立ち去り、弟子たちに知らせようと走って行った。すると見よ、イエスが『おはよう』と言って彼女たちの前に現れた。彼女たちは近寄ってその足を抱き、イエスを拝した。」彼女たちは、栄光と聖さに満ちた御使いと会った恐ろしさと、イエスがよみがえったことを知った喜びの両方を胸に抱きながら、弟子たちのもとに走って行きました。その途中によみがえられたイエスが現れて「おはよう」とあいさつされたのです。「おはよう」という普段どおりのイエスの言葉は、女たちを安心させたのではないのでしょうか。それはまさしくイエスでした。しかし、そのイエスは死から復活されたイエスです。彼女たちは復活されたイエスとお会いし、イエスは本当に神の子であることをはっきりと知りました。そこで、彼女たちはイエスの足を抱き、イエスを礼拝したのです。

10 節「イエスは言われた。『恐れることはありません。行って、わたしの兄弟たちに、ガリラヤに行くように言いなさい。そこでわたしに会えます。』」イエスも御使いが言ったのと同じことを言われました。違いは、イエスは弟子たちのことを「わたしの兄弟たち」と言われたことです。弟子たちは、イエスが捕らえられと逃げたしまい、みなイエスを裏切ってしまったのです。そして、今は一つの家に集まり、自分たちも捕らえられるのではないかと恐れていたのです。しかし、イエスはそのような弟子たちを「わたしの兄弟たち」と親しく語られました。イエスは弟子たちをすでに赦し、ご自分の愛する兄弟として受け入れておられるのです。そして、そのことをガリラヤではっきりと示されます。

御使いもイエスも、「ガリラヤで弟子たちはイエスに会える」と言いました。実際は、この後まずエルサレムでイエスは弟子たちによみがえられた姿を現され、弟子たちと会われました。ではなぜ、ガリラヤで会えると言われたのでしょうか。それは、ガリラヤこそイエスの弟子たちの信仰の原点だからです。彼らはガリラヤでイエスとお会いし、イエスの弟子として任命されて、3年間伝道を共にしました。そして、イエスが天に戻られてからは、弟子たちはイエスの復活の証人となって、伝道していくのです。しかし、そのためには弟子たちは、イエスの赦しを再確認し、イエスを信じる信仰に堅く立ち、伝道の使命をイエスからいただく必要がありました。それには信仰の原点であるガリラヤがふさわしかったのです。弟子たちはガリラヤで18-20 節の大宣教命令を受け、ガリラヤから世界宣教に遣わされていくのです。

私たちも時々、自分の信仰の原点に立ち返ることが大切です。私たちは長く信仰生活を続けていくと、クリスチャンであることが当たり前のように思ってしまうことがあります。その結果、信仰が生ぬるくなってしまうことがあります。そんな時は、自分がどのようにして救われたのかを思い出してみることが必要です。イザヤ 51:1 に「あなたがたが切り出された岩、掘り出された穴に目を留めよ」とあります。私たちは、自分にとっての切り出された岩、掘り出された穴である救いの原点に目を留め、いつもそこを忘れることなく、救われたことを感謝して信仰生活を送ることが大切です。

私たちもイエスとお会いした時のことを忘れることなく、その日があったので今の自分があり、その日から日曜日に主を礼拝する新しい人生が始まったことを覚えましょう。そして、これからも週の初めの日の日曜日の礼拝を、感謝をもってささげましょう。そして、イエスの復活を「来て見た」者として、人々のところに「行って伝える」者として遣わされましょう。

マタイ 28 章 11 節～15 節 「復活の真実」

1. 復活を隠す人々 11-14 今日の箇所は、イエスの復活を隠すために何が起こったかについて記されています。まず番兵たちから知らせを受けた祭司長たちが何をしたのかを見ていきましょう。11-14 節「彼女たちが行き着かないうちに、番兵たちが何人か都に戻って、起こったことをすべて祭司長たちに報告した。そこで祭司長たちは長老たちとともに集まって協議し、兵士たちに多額の金を与えて、こう言った。『〈弟子たちが夜やって来て、われわれが眠っている間にイエスを盗んで行った〉』と言いなさい。もしこのことが総督の耳に入っても、私たちがうまく説得して、あなたがたには心配をかけないようにするから。』」番兵たちは、大きな地震が起こり、御使いが天から降りて来て墓をふさぐ大きな石を転がし、その上に座った出来事を見ました。そして、イエスがよみがえり、墓の中にはいないと言う御使いの言葉を聞いたのです。栄光に輝く御使いの姿を見て番兵たちは恐れ、死人のようになってしばらく動けませんでした。やがて、御使いからイエスの復

活を告げられた女たちが弟子たちのところに走っていくと、番兵たちもこれは大変なことになったと思い、何人かが祭司長たちのもとに走って行き、イエスの復活の出来事を知らせました。なぜ番兵たちは総督ピラトの元でなく祭司長たちのところに行ったのでしょうか。それは、見張りを怠った罪で、総督によって番兵たちが死刑になるかもしれないからです。実際、使徒 12 章でペテロを牢屋から逃してしまった番兵たちは、死刑になってしまいました。そこで、まず祭司長たちに知らせたのです。

この知らせを受けた祭司長たちも、イエスの復活の出来事を聞いて、大変驚きました。そして長老たちと集まって対応を協議しました。その結果、イエスの復活の出来事を隠すために、番兵たちに偽証させることにしました。彼らは番兵たちに多額の金を与えて、「弟子たちが夜やって来て、われわれが眠っている間にイエスを盗んで行った」と言うようにと告げました。そして、「もしこのことが総督ピラトの耳に入っても、私たちがうまく説得して、あなたがたには心配をかけないようにするから」と言って、番兵たちを安心させました。番兵たちは、この祭司長たちの申し出を受け入れて、弟子たちがイエスを盗んで行ったとエルサレムの人々に伝えたのでした。

ではなぜ、祭司長たちはイエスの復活を隠そうとしたのでしょうか。それは自分たちの宗教指導者としての地位を守るためでした。イエスを十字架刑にした張本人は祭司長たちでした。彼らは民衆がイエスを慕う姿を見てねたみました。そして、もし自分たちを非難するイエスがイスラエルの指導者になれば、自分たちの宗教指導者としての地位が危うくなると考えました。そこで、イエスを殺す計画を立て、群衆を扇動してイエスを十字架に付け、イエスは死にました。さらに、イエスの墓を番兵に守らせ、これで大丈夫と思って安心しました。ところが、イエスが復活したという知らせが人々に伝われば、民衆はイエスが神の子だと信じるかもしれません。そうすると、イエスを十字架に付けた罪を問われて、自分たちの地位が危うくなってしまいます。そこで自分たちを守るために、イエスの復活の真実を隠そうとしたのです。そのために番兵たちに偽証をさせました。彼らは宗教指導者であり、律法の教師でした。その彼らが、自分たちを守るために「偽りの証言をしてはならない」という十戒の教えを破りました。そして、その後もずっとイエスの復活を否定し続けるのです。弟子たちがイエスの復活を宣傳伝え始めると、イエスのことを語ってはならないと言って、弟子たちを迫害しました。祭司長たちは、イエスに対して心を開くことをせず、心を頑なにしました。私たちは彼らの姿を見て、そのようになってはいけないことを教えられます。

私たちも以前は祭司長たちと同じように、神に対して心頑なな者でした。神に背を向け、自己中心に自分勝手に生きてきました。しかし、それが神に対する罪であることを知り、さらにイエスが私の罪のために十字架で死んでくださったことを知った時に、「イエス様ごめんなさい、イエス様ありがとう」と言って、心を開いてイエスを救い主として受け入れることができました。そして、罪の赦しと永遠のいのちの救いをいただいた時に、イエスはよみがえられて今も生きておられる救い主であることを実感しました。そして、日々イエスと交わり、イエスとともに生きる者とされたのです。使徒 6:9 で、エルサレムで弟子の数が非常に増えて行った時、「祭司長たちが大勢、次々と信仰に入った」とあります。最高法院のメンバーである祭司長たちは頑なにイエスの復活を否定しましたが、一般の祭司長たちがイエスを信じて救われました。この出来事に、救いはただ神の恵みのみわざであり、「それは人にはできないことですが、神にはどんなことでもできます」というイエスのみことばが真実であることを覚えます。イエスは今日もすべての人をご自分のもとに招いておられます。ですから、「イエス様、どうぞ私の心にお入りください」と言って、心を開いてイエスを自分の救い主としてお迎えしましょう。その時、復活のイエスが私たちの心に入ってくださり、イエスとともに生きる人生が始まるのです。

2. 偽りの証人 15a 次に番兵たちの姿を見てみましょう。15 節前半「そこで、彼らは金をもらって、言われたとおりにした。」番兵たちは自分たちのいのちを守るために、祭司長たちの提案を受け入れ、お金をもらって、偽証することを選びました。もし、彼らが偽証せず、真実を伝える者となったなら、彼らはイエスの復活の証人となったのです。しかし総督ピラトに、天使が降りて来て、墓の中は空になり、イエスが復活したと報告しても、信じてもらえないでしょう。むしろイエスを逃した罪で死刑になってしまうかもしれない考えると、真実を言えなかったのです。結局、彼らは祭司長たちに言われたとおり、「弟子たちが夜やって来て、われわれが眠っている間にイエスを盗んで行った」と言い広めたのでした。彼らはそれで自分たちのいのちを守り、お金も得ることができ、問題が解決したと思ったかもしれませんが、しかし、その結果、彼らはイエスの復活の証人とはならず、イエスの復活を否定する偽りの証人になってしまいました。

私たちが番兵の立場だったらどうでしょうか。だれでも自分のいのちが大切です。また、この世の地位や人間関係や持ち物も大切でしょう。今日の日本では、信仰ゆえにいのちを失うことはないでしょうが、今まで大切にしていたものを失うことはあるかもしれません。そこで、それらのものを守るために、イエスを信じない

選択をする誘惑もあります。しかし、イエスを信じなければ、この世のものよりもっと大切な永遠のいのちを得ることはできません。神に自分の心配をゆだねて、イエスを信じるならば、私たちが失うと思っていた以上の祝福を、神は必ず私たちに与えてくださいます。

イエスの弟子たちはローマの番兵とは正反対の人生を歩みました。彼らは復活のイエスとお会いし、さらにペンテコステの日に聖霊に満たされた時、イエスの復活の証人となって、十字架に付けられたイエスはよみがえられたと伝えたのです。そして、そのために迫害を受け、島流しになったヨハネ以外の弟子たちは、みな殉教しました。イエスの弟子たちは、この世のいのちよりもすばらしい永遠のいのちを知ったので、どうしても人々に知ってほしかったのです。そして彼らの真実な証言によって、多くの人々が救われました。やがて教会が全世界に建てられ、今も救われる人が起こされ続けているのです。番兵たちの偽りの証言には何の良い実も実りませんでした。一方、困難があっても弟子たちが伝えた真実の証言には多くの救いの実が実りました。私たちもイエスの復活の証人となって、イエスの救いのすばらしさを証しし続けましょう。

3. 復活の真実 15b マタイはこの番兵たちの偽りの証言が、その後どのような影響を与えたかを伝えています。15 節後半「それで、この話は今日までユダヤ人の間に広まっている。」マタイの福音書が書かれたのは60年代です。ですから、イエスの復活後30年経っても、イエスの弟子たちが墓からイエスのからだを盗んで行ったのであり、イエスは復活しなかったという話が、ユダヤ人の間に広まっていたのです。今日フェイクニュースという言葉をよく聞きます。インターネットを通して嘘の情報があつという間に世界中に広まってしまうのです。そして、それが社会に影響を及ぼすようになりました。嘘の情報もそれが本当であると何度も言い続けられれば、本当だと受け止める人が多く出てきます。ですから、私たちは世の中の情報が真実かどうかをよく調べなければなりません。

当時は、人から人へと何十年も、イエスのからだは弟子たちによって盗まれたと伝えられ、ユダヤ人の間にそれが本当だと受け止められていたのです。ですから、弟子たちがイエスの復活は真実であると伝えても、なかなか受け入れてはもらえませんでした。それはユダヤ人だけでなく、異邦人伝道においても同じです。パウロがアテネ伝道をしている時に、イエスの復活を伝えたと、ある人たちはあざ笑い、他の人たちはもう一度聞くことにしようと口先だけ言って帰って行きました。イエスの復活は、人間の常識や理性では理解することができない、神の特別な奇跡だからです。しかし、それでも復活のイエスと会った弟子たちは、十字架で私たちの罪のために死なれたイエスは、三日目によみがえられたまことの救い主ですと伝え続けたのです。その結果、十字架と復活の主を信じた人たちがローマ帝国中に増え広がり、各地に教会が建てられました。パウロは、「キリストがよみがえらなかったとしたら、私たちの宣教は空しく、あなたがたの信仰もむなしいものとなります」と言い、「しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました」と言って、キリストの復活が真実であると証言しています。I コリント 15:14, 20 イエスは、「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。」と言われました。ヨハネ 11:25 そしてそのとおり、イエスはよみがえられ、私たちに永遠のいのちと復活の確かな希望を与えてくださいました。私たちはイエスに出会うまでは、自分の死に対する確かな解決を持っていませんでした。死んだらどうなるのかということを、学校で学ぶことはできませんし、誰も教えてくれません。誰もわからないからです。しかし、イエスは死んでよみがえることによって、死に対する確かな解決を示してくださいました。イエスを信じる時、私たちはいつ死んでも天国、パラダイスに行くことができます。そして、私たちの朽ちたからだもイエスが再臨する時によみがえり、新しい神の御国に行くことができます。死に対する解決を持つ時、人は生きることに対する解決も得ることができます。私たちは何のために生きるのでしょうか。イエスを信じる時、私たちが造り、生かし、救ってくださった神の栄光を現すためであることが分かります。パウロは「生きるにしても死ぬにしても、私の身によってキリストがあがめられることです。私にとって生きることはキリスト、死ぬことは益です」と言いました。ピリピ 1:20-21 イエスの復活は真実です。ですから、私たちも生きることはキリスト、死ぬことは益ですとの信仰をもって、私たちの身によってキリストがあがめられる生涯を歩みましょう。

マタイ 28章 16節～20節 「大宣教命令」

1. すべての権威を持つ主 16-18 今日は受難週の礼拝です。また、今日は市原平安教会の兄弟姉妹と同じ説教を聞く最後の礼拝です。そこでキリストの受難を覚えつつ、今までともに学んできましたマタイの福音書の講解説教の最終回のみことばを聞きたいと願います。イエスは私たちの罪を贖うために、十字架で身代わりに神のさばきを受けて死なれました。そしてその日のうちに墓に葬られ、翌日の安息日が過ぎ、週

の初めの日の日曜日の朝によみがえられました。そして、よみがえられたイエスはエルサレムで 2 週に渡って弟子たちに現れ、ご自分が生きておられることを示されました。その後、弟子たちはイエスが言われたようにガリラヤに行きました。今日の箇所はその時の出来事です。16-17 節「さて、11 人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示された山に登った。そしてイエスに会って礼拝した。ただし、疑う者たちもいた。」復活のイエスは、ガリラヤの山で 11 人の弟子たちと会われました。そして弟子たちはイエスを礼拝しました。けれども「疑う者たちもいた」と但し書きがあります。この場に及んでまだ疑うのかと思うかもしれません。この但し書きがなければ、もっとすっきりとマタイの福音書を読み終えることができるのになあと思うかもしれません。この箇所には 2 つの解釈があります。一つは疑った者は 11 人の弟子たち以外の人だという理解です。I コリント 15:6 では「キリストは 500 人以上の兄弟たちに同時に現れました」とありますが、それはこの時の出来事ではないかと考えるのです。今までも、初めて復活のイエスと会った時には、イエスだと気づかない人たちがいました。ですから、初めてよみがえられたイエスと会った人たちの中で、疑う人がいたと理解します。もう一つの解釈は、11 人の中である人たちが疑ったという理解です。11 人の弟子たちは、最低でもトマスは 1 回、他の 10 人は 2 回エルサレムで復活のイエスと会っています。それでも、ガリラヤで会ったイエスを、何人かの弟子はイエスだとすぐにわからずに疑ったと理解します。

いずれの解釈であっても、この出来事は完全な信仰者はいないことを教えているのではないのでしょうか。500 人の内、初めて復活のイエスに会った人たちの中で疑う者たちがいたのであれば、イエスの復活は、イエスの弟子であっても、すぐには受け入れられない出来事であったことがわかります。また 11 人の弟子たちの中で疑う者たちがいたのであれば、彼らは疑いつつ確かめる過程を経て、確かに復活のイエスだと確信していったということです。しかし、そのような信仰の弱い弟子たちに対してイエスはみことばをもって語られました。

18 節「イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。『わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。』」復活のイエスは、ご自分が全世界と全宇宙を支配する主権者であると言われました。このみことばによって、弟子たちの疑いをご自身への信仰へと導かれたのです。イエスは地上での働きの中でも神の権威をもって働かれました。神の権威をもってみことばを教え、病を癒し、悪霊を追い出し、嵐を静め、罪を赦し、死人を生き返らせました。一方で、イエスは人間としての制限も持っておられました。しかし、よみがえられたイエスは、地上での人間としての制限はなくなり、子なる神としてすべての権威を持って世界を支配されるのです。エペソ 1:20、21 にはこうあります。「この大能の力を神はキリストのうちに働かせてキリストを死者の中からよみがえらせ、天上でご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、能力、主権の上に、また今の世だけでなく、次に来る世においても、となえられるすべての名の上に置かれました。」この権威をもって、イエスは次に大宣教命令を弟子たちに与えられるのです。

私たちの信仰も決して完全なものではありません。私たちは一度信じたら、二度と疑わない完ぺきな信仰を持ちたいと願います。ところが実際は、信じているのに疑うことはないのでしょうか。神の存在は信じている。けれども、様々な困難な出来事を経験すると、神のみこころを疑ってしまう。「神様なぜですか。どうしてですか。あなたのみ旨が分かりません」と疑いの思いを持ってしまうことがある。これが、私たちの弱い信仰ではないのでしょうか。そのような信仰の弱い私たちに対して、イエスは「わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。」と今日も語っておられるのです。ですから、どんな時にもすべての権威を持っておられるイエスに信頼して行けば大丈夫だと信じて、信仰の道に進みましょう。

2. 大宣教命令 19-20a

19-20 節前半は、大宣教命令と言われる箇所です。弟子たちはこのイエスの命令に応答して、全世界に福音を宣べ伝えていきました。そして、この大宣教命令を私たちも私たちの教会もイエスから受けて、福音宣教に遣わされているのです。この箇所は 3 つに分けることができますので、一つずつ見ていきましょう。まず 19 節前半「ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ。」イエスの宣教命令の中心は「弟子とせよ」です。イエスの弟子とは、イエスの十字架の贖いを信じて受け入れ、イエスを自分の救い主と信じて、生涯イエスに従っていく人です。そして、あらゆる国の人々の中でイエスの弟子となる人を起こすように、そのためにあらゆる国に出て行きなさいと命じられたのです。

イエスの救いの福音は、もはやユダヤ人だけでとどめておくのではなく、異邦人にも宣べ伝えるのです。そのために全世界に出て行くのです。それは途方もない大きなビジョンです。しかし、ペンテコステの日に聖霊を受けた弟子たちは、イエスが言われたように福音を、エルサレムからユダヤとサマリヤの全土、ローマ帝国中に宣べ伝えて行きました。そして、各地に教会が建てられ、激しい迫害にもめげず、宣教は進められ、2000 年後の今日、世界中に福音が伝えられています。しかし、この伝道の働きはイエスが再び来られるまで続けられます。私たちも教会で集まり、みことばの励ましを受けて、地域に出て行きます。そしてイエスの福音を証

しし、イエスの弟子となる人たちが起こされるように働きます。これが教会に与えられている宣教の使命です。コロナ感染の中で、出て行くことの難しさもありますが、機会があるたびに福音を証しする教会であり、信徒であり続けましょう。

二つ目は 19 節後半です。「父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け」バプテスマはイエスの弟子となったことのしるしです。「名において」は直訳では「名の中に」です。バプテスマ受けることによって、父、子、聖霊の三位一体の神の交わりの中に入れられ、しっかりと神と結ばれ、神の子どもとなったことを確認するのです。イエスの葬りの箇所でも見ましたが、私たちはバプテスマによって、信じた時にキリストの死と葬りと復活にあずかったという霊的出来事を確認します。ローマ 6:4「私たちはキリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、ちょうどキリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、新しいいのちに歩むためです。」イエスを信じ、イエスに従って生きていく決心をした人は、バプテスマを受けて、イエスの弟子としての一步を踏み出します。さらにバプテスマは教会論的に考えれば、あらゆる国に教会を建てるというイエスの命令でもあります。バプテスマを受けると私たちは地域教会の教会員となります。そして、地域教会で奉仕と伝道を行い、さらに他の地域に伝道がなされ、教会が建てられていくのです。

三つ目は 20 節前半です。「わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。」バプテスマを受けた人は、イエスの弟子としての一步を踏み出し、そこからクリスチャンとして成長していきます。そして、信仰が成長するために、聖書を学び、みことばを覚え、みことばに従って生きていくことが必要です。そのために教会には信徒に聖書を教える聖書教育の使命が与えられているのです。信仰の成長のためには、私たちが聖書を教会と家の両方で学ぶことが必要です。自宅で個人的に学ぶだけならば、聖書を私的解釈する落とし穴に陥る危険性があります。パウロはエペソの長老たちへの決別説教で、使徒 20:27 で「私は神のご計画のすべてを、余すところなくあなたがたに知らせたからです。」と言い、イエスが言われたように、イエスの教えのすべてを守るようにと教えました。さらに 20:32 で言いました。「今私は、あなたがたを神とその恵みのみことばにゆだねます。みことばは、あなたがたを成長させ、聖なるものとされたすべての人々とともに、あなたがたに御国を受け継がせることができるのです。」信仰の成長のためはみことばの養いが日々が必要です。教会に与えられている聖書教育の使命を果たしながら、私たちも毎週教会でみことばに養われ、日々家庭でみことばに養われて行きましょう。

3. インマヌエルの約束 20b いよいよ、マタイの福音書の最後の言葉が 20 節後半です。「見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」マタイ 1 章のイエスの誕生の知らせの中で、救い主はインマヌエルと呼ばれると知らされました。インマヌエルとは「神が私たちとともにおられる」という意味です。イエスは神が人となられたお方なので、イエスが地上での生涯を歩まれた時、「神が私たちとともにおられる」ことが実現しました。イエスの弟子たちも 3 年間イエスとともに過ごす中で、神が私たちとともにおられるという経験をしていました。しかし、イエスはこの後天に上り、地上ではもはやイエスを見ることはできません。しかし、天に戻られてもイエスは、いつも弟子たちとともにおられると約束されたのです。大宣教命令は、イエスがすべての権威を持っておられることと、イエスがいつもともにおられることの二つの約束で挟まれています。サンドイッチのパンの部分がイエスの約束であり、中身が大宣教命令なのです。それゆえ、弟子たちはすべての権威を持っておられるイエスによって派遣され、イエスがともにおられるという約束に励まされて、福音を伝えていくのです。伝道には様々な困難がありますが、それでもどんな状況もイエスが権威をもって支配しておられることを知ると励まされます。またどんな時にもイエスがともにおられることを知ると、力が湧いてきます。

「いつも」は直訳では「すべての日々に」です。昨日も今日も明日も毎日毎日、イエスはともにいてくださるのです。クリスチャンにとって、イエスがともにおられない日々はありません。主がともにおられるから、私たちはいつも主にあって喜び、前向きに、主の栄光を現すために前進していくことができます。今週から 4 月に入り、進級、進学、就職など新しい歩みが始まる人もおられます。新しい歩みをする教会もあります。新しく行く所にもイエスは一緒にいてくださいます。ですから、恐れずイエスとともに歩んでいきましょう。今週の受難週、私たちは十字架の主を見上げ、ここに私の救いがあることを覚えて感謝しましょう。さらにイエスの十字架にすべての人の救いがあることを覚え、よみがえられたイエスが与えてくださった大宣教命令を果たしていきましょう。そして、来週の主の復活を祝うイースターを待ち望みましょう。